平成７年度

第二期「信大YOU遊サタデー」の実践

―体験的学習の指導による実践的力量の形成―

（平成７年５月27日・９月９日・10月14日・10月28日）

信州大学附属図書館
0770667905

信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

ＹＯＵ遊サタデーシンボルマークの由来

１９９４年から始まった信大ＹＯＵ遊サタデー。この独自のシンボルとなる印鑑を作りたいと考え、ＹＯＵ遊サタデーの参加証印としても使えるデザインを考えた。

石膏板に版面のデザインを彫り、ロウで版面原型をとり、前もって作っておいた土台と合わせロウ型原型を作った後石膏で埋没して鋳型をとり、銅を流し込んで本作品を作った。

印鑑の版面には、子どもを肩車する学生と楽しげな子どもたちをイメージしてマーク化した人物と信大の校章にも用いられている高山植物のこまくさを配し、その中に１９９４年から始まったことを意味する「ＳＩＮＣＥ　１９９４」、そしてその周りに「信州大学教育学部　ＹＯＵ遊サタデー」の文字を配した。印鑑の土台には悠々と尾ひれを跳ね上げ泳ぐ魚をイメージした彫刻を取り入れた。

ＹＯＵ遊サタデーの発展を末永く見つめていって欲しいと思う。

印鑑制作者

木村　　仁　助教授

山崎　重幸　美術専攻　４年

まえがき

漆戸　邦夫（附属教育実践研究指導センター長）

学校教育現場には、いじめ、不登校、学業不振、学習障害などの、教育相談に関わる大きな問題が山積している。近い将来教師になり、これらの問題と真剣に取り組んでいかねばならない学生にとっては、教科を担任できる実践的指導力に増して、人間を担任できる実践的指導力をどのようにして身につけ磨き上げるかが重要な課題である。

一方、学校外教育現場では、地域や家庭で、子どもが多様な直接体験を積み重ねる機会が減少していることや、望ましい人間形成を図る教育機能が低下していることなどが指摘されている。そのような環境の中で、学校は週５日制時代を迎え、子どもたちは学校外において様々な過ごし方をしており、その実態が注目されている。それとともに、地域社会における教育活動を企画・支援できる人材の養成・確保などが強く望まれ、このような能力を持った教員の養成も必要とされる。

このように教師の資質に対する社会的期待や要望は厳しく限りないものであるが、その資質向上に向けた一つの実践例が、平成６年９月に始まった「信大ＹＯＵ遊サタデー」である。教育実習を終えた学生が、学校週５日制で休みになった土曜日に子どもたちを大学のキャンパスに迎えて、物つくりなど「学び」と「遊び」の体験学習講座を開くものである。学生たちは、子どもたちとの真剣な関わりを通して、人と人との触れ合いの難しさや喜びの原点を学び、自らの実践的力量の向上を目指している。毎回行われている反省会では、学生から子ども理解、人間理解の貴重な経験が語られ、生きた教育実践の場となっていることが確認される。また、学校外教育活動指導者の養成にもなっている。

本冊子は平成７年度「信大ＹＯＵ遊サタデー」の成果報告書である。平成８年度の実行委員会も既に発足し準備に入っている。さらなる大きな成果が期待される。

なお、本活動は、単位やアルバイトとは無関係であるので、若者たちの教育に対する素朴な情熱だけがエネルギー源となって行われている。このボランティア的教育活動に大きなご理解を頂き、学生を励まし勇気づけて下さった、小川秋實信州大学学長の開会式におけるご挨拶、並びに、共催者となり財政的に大きなバックアップをして頂いた、小林春男（財）長野県テクノハイランド開発機構理事長のメッセージを本報告書に掲載させて頂き、感謝と御礼とさせて頂きたいと思う。

来賓のごあいさつ

信州大学学長　　小川　秋實

みなさん、こんにちは。「こんにちは！」

今日は、ＹＯＵ遊サタデーで皆さんと一緒にお勉強するお兄さん、お姉さん方は、今、お話があったように、この信州大学で学び、やがて学校の先生になろうとして、一生懸命に勉強している方々です。そして、今日のＹＯＵ遊サタデーのために、一生懸命、どうやったらよいか、考えて、そして、準備をしてきてくださいました。これは、さっきお話があったように、大学で勉強していることとは別に、こうやって皆さんと一緒に勉強したいと考えて、はりきって準備してこられたんです。

だから、勉強する内容は、学校と全く違って、きっと、皆さんが楽しくなるような内容だろうと思います。こんな、ＹＯＵ遊サタデーというような、勉強する機会は、日本のどこでもやっていないんだそうです。信州大学でしかやっていないそうですから、皆さんはとても運がいいですね（笑い）。私はとても運がいいんじゃないかと思うんです。

さて、こうして熱心に学生さんがやって下さるので、この学生さんたちは、１年後、２年後、あるいは３年後に立派な先生となって、また、皆さんを教えて下さるだろうと思っています。大変うれしいことでありますし、こういうようなことをどんどんやっていただきたいと、こう思います。

今日の勉強は、どちらかというとお遊びみたいなことかも知れません。この黒板に掲げてあります難しい漢字、この字、読めますか。読める人？「ハーイ！」そうです。「あそぶ」ですね。今日は遊ぶ勉強をしようということですから、大いに遊んで下さい。お兄さんやお姉さんの言うことをよく聞いて下さい。それから、学年の違う人も一緒になって遊ぶので、お友達も増えると思います。今日、これから、楽しく勉強すると、きっといつまでも、そのことを覚えているだろうと思います。

また。次のＹＯＵ遊サタデーにも是非来たいと、そういうふうに思うと思います。ですから、今日は楽しく勉強して下さい。ではこれで、あいさつを終わります。

平成７年１０月２８日（土）

共催者メッセージ

(財)長野県テクノハイランド開発機構
理事長　小林 春男

本日は、信大ＹＯＵ遊サタデーに多くの皆様が参加され、このように盛大に開催できますこと大変嬉しく存じます。

このＹＯＵ遊サタデーは、今回で７回目を迎えられますが、この間教育学部の先生及び学生さんが一体となって企画・運営され、子どもたちに“ものづくりの心、夢”を与えられ、素晴らしい成果をあげておられることに心から敬意を表します。

私共の開発機構は、「技術・ものづくり」に関する調査研究、大学と企業との交流、更には人材育成事業を実施しながら、素晴らしい企業・産業の振興を行うために作られた財団であります。今までにも多くの事業を展開し、地域の人々からかなりの評価をいただいておりますが、今回もその目的に沿った事業でありますので共催させていただきました。

本日は、多彩なメニューを揃え、楽しい一日にしようとキャプテン、スタッフの学生さんが頑張っておられますので、参加された皆さんも楽しく学び、いろいろなことを感じて下さい。きっと、これからの生活の中で生きてくると思います。

最後に、実りある一日でありますことを祈念して、ごあいさつに代えさせていただきます。

平成７年１０月２８日（土）

目　次

◇まえがき　附属教育実践研究指導センター長　漆戸邦夫 ---------- 1
信州大学学長　小川秋實 ---------- 2
（財）長野県テクノハイランド開発機構理事長　小林春男 ---------- 3
◇目次 ---------- 4
◇写真－講座風景－ ---------- 6

1．第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の歩み ---------- １０
（１）「信大ＹＯＵ遊サタデー」の概要　センター専任教官　土井　進 --- １１
（２）「信大ＹＯＵ遊サタデー」の目ざすもの　実行委員長　渡辺一博 --- ２５
（３）人と人とのつながりでできたこと－実行委員会報告－　副実行委員長　片桐　宏 --- ３２
（４）さらなる前進のために　事務局　田中清一 --- ３８

2．出会いと挑戦の記録－第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実践－ ---------- ４１

＜もの作り講座＞
（１）宇宙生物“スライム”をつくろう　林　康成・今井健文（理科３） ---------- ４２
（２）オリジナルキーホルダーをつくろう　田中　忍（理科４） ---------- ４７
（３）小麦粉ねんど　坂本真哉（理科４） ---------- ５１
（４）竹とんぼづくり　吉沢正彦（社会４） ---------- ５５
（５）しめなわをつくろう　吉沢正彦（社会４） ---------- ５６
（６）やさしい木工教室（本立てづくり）　片桐　宏（技術４） ---------- ５９
（７）紙ってすごい　（ブローチ作り）　橋詰並子（英語４） ---------- ６５
（８）ペーパーグライダーをとばそう　丹羽則之（技術４） ---------- ６８
（９）フェルトで作ろう　アニマルマスコット　河南さおり（家庭４） ---------- ７１
（10）紙ひもでかごをつくろう　北村　史（社会４） ---------- ７５
（11）アルミのネームプレートを作ろう　山崎重幸（美術４） ---------- ７６
（12）草木染のハンカチづくり　池田安美（家庭４） ---------- ７９
（13）自然と遊ぼう　笹舟づくり　新井清規（理科４） ---------- ８２
（14）お手玉を作って遊ぼう　泉　貴子（音楽３） ---------- ８７
（15）はりがね工房　小倉　敬（大学院２） ---------- ９０
（16）オリジナルキャンドルづくり　佐野徳子（幼教４） ---------- ９３

＜交流体験講座＞
（17）教育学部ってどんなところ　宮澤弘至（大学院２） ---------- ９４
（18）おしゃべり教育学　林　向達（大学院１） ---------- １００
（19）外国人と世界の遊びで楽しもう　渡辺一博（英語４） ---------- １０６
（20）たのしい英語クラブ　渡辺一博（英語４） ---------- １１２
（21）お父さん講座①　土井　進 教官（センター） ---------- １１７
（22）お父さん講座②　藤沢謙一郎 教官（保体） ---------- １２０
（23）インターネット入門　東原義訓 教官（センター） ---------- １２１
（24）「学校週五日制」フォーラム　角田正和（社会４） ---------- １２４
（25）社会科を１０倍楽しくする方法　山名博夫（大学院２）・小林真樹（社会４） ---------- １２８
（26）刃物の研ぎ方教室　吉沢嘉寿（吉沢学校） ---------- １３２

＜表現講座＞

(27) ギターをやろうジャーン　野本　毅（英語４）---------- １３４
(28) 演劇しましょ　－グリム童話－　奥原克水（国語４）---------- １３７
(29) みんなで楽しい紙しばいを作ろうぜ！　奥原克水（国語４）---------- １４０
(30) かこう・書こう・描こう　塩苅有紀（国語３）---------- １４２
(31) 新スターへの道　小谷将紀（社会４）---------- １４５
(32) 秋のどんぐりアート　坂井雅子・雨宮なるみ（幼教４）---------- １４８
(33) リズムで楽しく遊ぼう　佐藤　啓・中村　薫（音楽４）---------- １５０
(34) イラスト講座　山崎重幸（美術４）---------- １５３
(35) 額縁作品をつくろう　渡辺一博（英語４）---------- １５５

＜料理講座＞

(36) アイスクリームを作ろう　下沢栄子（家庭４）---------- １５７
(37) おやつパラダイス（クッキー）　井上晴美・小野雅子（家庭４）---------- １６０
(38) おやつパラダイス（スイートポテト）　加納文香（家庭３）---------- １６３
(39) そば作り名人になろう　池田貴信（大学院１）---------- １６６

＜実験講座＞

(40) 不思議な化学実験をやってみよう　漆戸邦夫 教官（理科）---------- １６９
(41) 金属の組織を見てみよう　浅輪光男 教官（技術）・小林大至（技術４）--- １７１
(42) マウンテンバイクを整備しよう　松永泰幸（数学４）---------- １７３

＜運動講座＞

(43) 磁石で探検しよう（宝探し）　丹羽則之（技術４）---------- １７７
(44) 大なわとび　浦山洋美（体育４）---------- １８０
(45) トランポリン　金森晴彦（体育４）---------- １８３
(46) アニマルダンス　萩原まゆみ（音楽４）---------- １８６
(47) 親子でバドミントン　小坂　和（社会４）---------- １８９

３.「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実像に迫る　－アンケート調査・感想文・投稿から－ ---------- １９２
（１）参加者から見た「ＹＯＵ遊サタデー」　角田正和（社会４）---------- １９３
（２）キャプテン・スタッフの目から見た「ＹＯＵ遊サタデー」　奥原克水（国語４）---------- ２０７
（３）「ＹＯＵ遊サタデー」に見る学生の教材観・教育実習観　土井　進 教官（センター）--- ２１５
（４）子ども達の見た「ＹＯＵ遊サタデー」　参加してくれた子ども達 ---------- ２１８
（５）ＹＯＵ遊サタデーを想う　林　向達（大学院１）---------- ２２１

４.資料（第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の記録）---------- ２２６
（１）マスコミ報道記録 ---------- ２２７
（２）スタッフマニュアル ---------- ２４１
（３）インターネット　ホームページ ---------- ２４６
（４）出張「ＹＯＵ遊サタデー」依頼書 ---------- ２４７

◇あとがき　センター専任教官　土井　進 ---------- ２４８
◇編集後記

ゆうゆう PHOTO

第7回 受け付け風景

第4回 開会式風景

第6回「秋のどんぐりアート」

第7回「スライムをつくろう」

第6回「お父さん、あなたの能力を地域で役立てませんか」

第7回「小麦粉ねんど」

第7回「刃物研ぎ方教室」

第6回「不思議な化学実験をやってみよう」

第4回「演劇しましょ」

出張「YOU遊サタデー」

おむすび隊

第7回「YOU遊サタデーin 松本キャンパス

1．第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の歩み

「信大ＹＯＵ遊サタデー」の概要

土井　進（実践センター専任教官）

１．学生の自主的・自発的な教育実践

－カリキュラム外の応用教育実習としての意義－

「信大ＹＯＵ遊サタデー」は、本学部において平成５年度から始まった「教育実習事前・事後指導」に源を発する。この授業を受け「教育実習」を終えた学生たちの間から「もっと子どもたちに関わる実践の場」が欲しいという声が高まり、平成６年６月６日に「信大ＹＯＵ遊サタデー」実行委員会が誕生した。本学部での「教育実習」は、長野市と松本市にある附属学校園で、３年次に６週間実施されている。ＹＯＵ遊サタデーは、この正規のカリキュラム外に応用教育実習としての意義を込めて実施されているものである。

この取り組みは、教育の道に志を立てて本学部に入学してきた学生たちの人生選択にも応え得る貴重な教育実践研究の場となっているので、私はこの取り組みを引き継ぎ、発展させる第２期の人材群が現れ出てくれることを堅く信じて待った。学生を募るには、ＹＯＵ遊サタデーを授業科目として学部カリキュラムに位置づけるのが一番簡単な方法である。実際にＹＯＵ遊サタデーに取り組み、多大な努力をしている学生の姿を見ると、わずかでも単位として認定し、力量形成への努力を学部として認めてやりたいという気持ちに駆られる。しかし、ＹＯＵ遊サタデーを担っている学生たちは授業科目化、単位化を望まない。学生たちは、自主的・自発的な判断に基づいて実践するところに自らの力量形成が図られるのであり、ＹＯＵ遊サタデーの趣旨もそこに実現されると考えているからである。このような尊い志を抱いた学生たちによって、平成７年１月１０日に第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」実行委員会が発足した。

２．学生の取り組みの様子

（１）名前を覚える－一人ひとりを大切に－

「また来たい」と言ってもらえるような楽しい講座となる基本は、学生が参加する子どもたち一人ひとりの名前を覚える努力から始まる。そこで、受付名簿への名前の記入、名札の作成、傷害保険料・教材費・材料費の領収書への名前の記入、修了証への毛筆による名前の記入等の実務作業に丁寧に取り組むようにしている。

また、学生はＹＯＵ遊サタデーは子どもの参加があって初めて成立するという事実に直面することによって、子どもが教育活動の主役であることを実感としてとらえる。この厳粛な事実に立って、学生たちは集ってきた子どもたちを正門に立って笑顔で迎え、そして、閉会式が終わったら正門まで出向いて、子どもたちを見送る。

（２）無事故－０（ゼロ）災害言語－

参加した子どもたちどうしも初対面であり、学生ももちろん子どもとは初対面である。この出会いを喜びの場として創造していくためには、言葉かけが重要になってくる。不安な気持ちでいる子どもたちに、安心を与える明瞭で魅力ある言葉をかけてやりたい。そのような言葉を、私たちは０（ゼロ）災害言語と呼んでいる。鋭敏な子どもの心に傷を残さないように、そして、子どもの目線に合わせた姿勢をとるようにと戒めている。

また、阪神大震災のボランティア活動に参加した学生の提案により、ＹＯＵ遊サタデーにおいても今年度からキャプテン、スタッフの学生は全員黄色い腕章をつけることにした。

これによって子どもを預かった責任を深く自覚し、無事故を強く意識化しているのである。

（3）先生としてではなく、お兄さん、お姉さんとして

教育実習においては、「先生」として子どもたちの前に立つが、ＹＯＵ遊サタデーでは「キャプテン」「アシスタントスタッフ」という名称で、いわばお兄さん、お姉さんとしての立場で子どもと関わっていこうとしている。学生が自らの体験を教材化し、個性を発揮しながら、心の垣根を払って子どもと関わることによって、人間的力量が形成されるものと考えているのである。したがって、第二期から「指導案」という表現をやめて「遊学プラン」とし、これを３次案まで練る過程で、所属研究室の指導教官の指導協力を仰いでいる。自ら学びつつ、子どもに関わろうとしているのである。

３．学校五日制時代の地域社会への大学開放

１回のＹＯＵ遊サタデーには300名ほどの参加者がある。これだけ多くの参加者を扱わなければならないので、安全面と経費面から考慮して、実施会場はこれまで教育学部キャンパス内だけに限定してきた。第７回目に初めて松本キャンパスに赴いて実施したのであるが、共通教育センターの第２講義棟を使用してみて気付いたことは、調理室、木工室、被服室、化学実験室等の部屋が無く、講座内容も限定されざるを得なかった。その点教育学部キャンパスには全教科に対応できる部屋がある。この施設をこれからの学校五日制時代の生涯学習の場として提供することの意義は極めて大きいと考える。また、学生キャプテンの中に教官や地域社会人のキャプテンも迎えることによって、教師教育がより一層充実したものになるのではないかと考えている。

４．実践センターの経費による運営

ＹＯＵ遊サタデーへの参加費は無料である。但し、教材費と傷害保険料を合わせた100円と材料費のかかる講座では実費（100～500円程度）を徴収している。この他の教材作成に係る経費は、実践センターの「公開教育実習費」と教育実践研究指導分野の「研究費」によって賄っている。今年度実施した４回のＹＯＵ遊サタデーにかかった総経費は、211,813円でその主な購入品目は次の通りである。

名札、更紙、画用紙、板目表紙、模造紙、賞状用紙、色画用紙、フイルム、乾電池、食用色素、フロッピーディスク、プラスティックコップ、液状のり、小麦粉、薄力粉、アルバム、ペイントマーカー、雑印、強力接着剤、磁石、ＴＰフイルム、フイルム現像、郵便料、腕章、８ミリビデオテープ、ビデオカセットテープ（VHS）、電気釜など。

５．「信大ＹＯＵ遊サタデー」の概要を示す資料

次ページ以降にＹＯＵ遊サタデーの概要を示す資料を掲げた。まず、平成７年度「信大ＹＯＵ遊サタデー」実施要項であるが、趣旨は昨年度と変わっていない。次ぎに、これまでに実施した７回分の実施日時、学年別参加者数と指導に当たった学生数を一覧表にしたものを掲げた。これを見ると小学校５年生の参加が最も多く、中学生の参加が最も少ないことがわかる。また、今年度から学部教官や地域社会人がキャプテンとして参加して下さるようになったことも読みとっていただけるであろう。次ぎに、これまでに開設された全講座名を分類したものを掲げた。どのように分類するのが良いかは今後の課題である。

最後にキャプテン・スタッフ組織を各回ごとに掲げさせていただいた。ＹＯＵ遊サタデーは、学生どうしの心と心の深い絆の上に実現されているのであって、学生時代の尊い友情の記念碑として、その名をここに留めさせていただきたいと考えた。

平成７年度　「信大ＹＯＵ遊サタデー」実施要項

－学生が指導する体験的学習－

信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
信大ＹＯＵ遊サタデー実行委員会

１．趣旨

① 信州大学教育学部の学生がもっている教育力を地域社会に開き、貢献することによって本学部と地域社会とのつながりを深める。

② 本学部には全校種、全教科に対応できる学生が学んでいる。その力量、持ち味を発揮し、子どもたちを大学に迎えて公開授業を行うことによって、教師となるための実践的指導力の向上を図る。

③ 学生時代でなければできないようなユニークなアイディアによる“学び”や“遊び”の体験的学習の場を設定し、これからの学校五日制時代の教育について考える。

２．実施月日

第１回	５月２７日（第４土曜日）	午前８時５０分～午後３時４０分	
第２回	９月　９日（第２土曜日）	〃	〃
第３回	１０月１４日（第２土曜日）	〃	〃
第４回	１０月２８日（第４土曜日）	午後１時～４時	

３．実施会場

第１～３回は、信州大学教育学部キャンパス（長野市西長野６－ロ）
第４回は、信州大学松本キャンパス（松本市旭３－１－１）

４．指導講師

この企画では体験的学習の指導にあたる学生をキャプテンと呼び、キャプテンを助けながらティーム・ティーチングを行う学生をスタッフと呼んでいる。キャプテンは教育実習を修了した３年次生以上の学生がつとめ、スタッフには意欲のある１、２年生も参加できる。

今年度の実行委員長は、渡辺一博（英語専攻４年）、副実行委員長は片桐宏（技術専攻４年）である。

５．参加費

無料。但し、材料費の実費を徴収するものもある。教材作成に係る経費は、センターの教材作成経費から支出する。

６．責任体制

この企画は附属教育実践研究指導センンーの責任において実施する。具体的には教育実践研究指導分野の土井進教官が指導の任にあたる。学生が行う体験的学習の内容については、学生が所属する研究室の指導教官に指導案を見ていただくなど、学部教官の協力を得て実施する。　（問い合わせ先：TEL/FAX　026－237－6127）

1．「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実施日時

第１回、平成６年　９月１０日（第２土曜日）　８：５０～１５：４０（長野ｷｬﾝﾊﾟｽ）
第２回、平成６年１０月　８日（第２土曜日）　８：５０～１５：４０（　〃　）
第３回、平成６年１１月１２日（第２土曜日）　９：１０～１５：２０（　〃　）
第４回、平成７年　５月２７日（第４土曜日）　９：００～１５：３０（　〃　）
第５回、平成７年　９月　９日（第２土曜日）　９：００～１２：００（　〃　）
第６回、平成７年１０月１４日（第２土曜日）　９：００～１５：３０（　〃　）
第７回、平成７年１０月２８日（第４土曜日）１２：３０～１６：００（松本ｷｬﾝﾊﾟｽ）

2．学年別参加者数と指導に当たった学生数

	第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回	合　計
幼稚園	2	5	4	19	10	28	23	91
小学校１年	7	35	35	39	21	36	22	195
２年	6	44	47	33	23	34	27	214
３年	6	32	27	53	19	37	12	186
４年	22	42	74	30	17	20	11	216
５年	8	27	38	82	23	38	19	235
６年	4	20	16	17	6	9	3	75
中学生	0	4	0	7	5	13	1	30
高校生	0	1	20	10	0	37	2	70
一般成人	2	3	13	10	17	55	3	103
合　計	57	213	274	300	141	307	123	1415
学　生	26	51	75	72	78	100	65	467
(ｷｬﾌﾟﾃﾝ)	(11)	(20)	(16)	(14)	(12)	(24)	(18)	(115)
(ｽﾀｯﾌ)	(15)	(31)	(59)	(58)	(66)	(76)	(47)	(352)
学部教官	0	0	0	1	2	5	1	6
地域社会人	0	0	0	6	0	4	1	11
開設講座数	9	15	17	18	11	22	15	107

3．開設された講座名

〈ものづくり講座〉

(1)宇宙生物“スライム”をつくろう
(2)小麦粉ねんど・わりばし鉄砲
(3)やさしい木工教室（本立てづくり）
(4)お弁当箱の袋づくり
(5)自分のハンコを作ろうか
(6)消しゴムをつくろう
(7)ポストカードづくり
(8)クリスマスカード作り
(9)はりがね工房
(10)和紙のブローチづくり
(11)竹とんぼづくり
(12)フェルトで作ろうアニマルマスコット
(15)紙ひもでかごをつくろう
(16)アルミ缶を使ったネームプレート作り
(17)草木染めのハンカチづくり
(18)自然と遊ぼう笹舟作り
(19)オリジナルキャンドルづくり
(20)オリジナルキーホルダーをつくろう
(21)ペーパーグライダーをとばそう

〈交流体験講座〉

(22)たのしいえいごクラブ
(23)けん玉で遊ぼう
(24)教育学部ってどんなところ

(25)外国人と世界の遊びで楽しもう
(26)アメリカ人との楽しい英会話
(27)おしゃべり教育学
(28)お父さん、地域で講座を開きませんか
(29)インターネット入門
(30)学校五日制フォーラム
　ー学校・地域社会・家庭の役割ー
(31)お父さん、あなたの能力を
　　地域で役立てませんか
(32)刃物研ぎ方教室
　ー地域で役立ちますー
(33)社会科を１０倍楽しくする方法

〈表現講座〉

(34)壁画教室
(35)みんなで書道をやろうか
(36)パソコンで遊ぼう
(37)楽しく上手に写真を撮ろう
(38)演劇しましょ
(39)ギターをやろうジャーン
(40)みんなで楽しい紙しばいを作ろう
(41)自分の音楽をつくろう
(42)かこう・書こう・描こう
(43)新スターへの道
(44) 秋のどんぐりアート
(45)リズムで楽しく遊ぼう
(46)ビデオカメラに挑戦
(47)水彩色鉛筆の楽しいイラスト講座
(48)額縁作品をつくろう

〈料理講座〉

(49)おいしい月見だんごをつくろう
(50)レアチーズケーキづくり
(51)クッキーづくり
(52)アイスクリームを作ろう
(53)そば作り名人になろう
(54)スイートポテトをつくろう

＜実験講座＞

(55)自転車大分解
(56)不思議な化学実験をやってみよう
(57)金属の組織を見てみよう
(58)マウンテンバイクを整備しよう

＜運動講座＞

(59)ソフトボール天国
(60)大縄とび
(61)トランポリン
(62)磁石で探検しよう
(63)親子でバドミントン
(64)アニマルダンス

第４回信大ＹＯＵ遊サタデー

【実施日時】平成７年５月２７日（第４土曜日）　８：３０～１５：３０
〈受付〉８：３０～８：５０　〈開会式〉９：００～９：２０図書館２階
〈午前の講座〉９：３０～１１：３０〈午後の講座〉１３：００～１５：００
〈閉会式・成果の発表〉１５：１０～１５：３０

【参加者数・キャプテン・スタッフ組織】

No	講　座	人数	キャプテン	アシスタントスタッフ
1	小麦粉ねんど	１７	坂本真哉（理４）	吉田亘志（障４）　野本聡（理３） 横井里美・井出湖清(幼４)岡田和泉(音2)
2	おやつ（ｸｯｷｰ）	２４	井上清美（家４） 小野雅子（家４）	加納文香（家３）内藤小有里（家３） 小林理英（家３）山崎千佳（家４） 下沢栄子（家４）橘佳乃子（家４）
3	本立て	１０	片桐　宏（技４）	南場志保（技３）塚田淳・坂本貴彦・ 池田章・油科健太郎・加藤英樹・佐々木務 ・岸本千恵（技４）・安松大介（技３）
4	竹とんぼ（１）	２２	吉澤正彦（社４）	北村　史・小坂　和・外波山結子（社４） 坂井一夫・西澤繁樹(社４)市村忠寛(英3) 村山かすみ・中村薫（音４）
5	ｸﾞﾘﾑ童話	１２	奥原克水（国４）	杉山健一（国４）坂井雅子（幼４）
6	ｷｰﾎﾙﾀﾞｰ	２０	田中　忍（理４）	竹川紀幸（美４）池田安美（家４）　大谷 美穂（理４）高橋貴子(理3)松山恵子(障4)
7	ブローチ	２０	橋詰並子（英４）	寺田慶子(英3)井添純一郎(英4)　松村由美 （教４）河南さおり（家４）岩村彩(心４)
8	世界の遊び	６５	渡辺一博（英４）	丹羽則之(技4)下平順(院2)吉越優子(幼3) 窪田美保（社４）荒川真一（国３） ソドボロ（留学生）松永泰幸（数４）
9	大縄とび	２３	浦山洋美（体４） 金森晴彦（体４）	村田瑞恵（体３）野本毅（英４） 柳沢久美・荻原まゆ美（音３）
10	竹とんぼ（２）	２４	吉澤正彦（社４）	北村　史・小坂　和(社4)大谷美穂(理４) 坂井一夫・西澤繁樹(社４)岡田和泉(音2)
11	磁石	１０	丹羽則之（技４）	中村典史（社２）荒川真一（国３）
12	ギター	５	野本　毅（英４）	野本　聡(理3)村山かすみ・中村薫(音4)
13	教育学部	１１	宮澤弘至（院２）	渡辺一博（英４）田中清一（社４） 坂井雅子・井出湖清（幼４）下平順(院２)
14	ﾄﾗﾝﾎﾟﾘﾝ	１６	金森晴彦（体４） 浦山洋美（体４）	柳沢久美・荻原まゆ美(音3)窪田美保(社4) 村田瑞恵(体4)小野雅子(家4)加納文香(家3
15	スライム	２１	坂本真哉（理４） 田中　忍（理４）	池田安美（家４）高橋貴子（理３） 美斉津礼奈（数２）吉越優子（幼３）
16	本立て	続き	片桐宏（技４）	南場志保（技３）塚田淳・坂本貴彦・ 池田章・油科健太郎・加藤英樹・佐々木務 ・岸本千恵（技４）・安松大介（技３）
17	ｸﾞﾘﾑ童話	続き	奥原克水（国４）	杉山健一（国４）坂井雅子（幼４）

18	ブローチ	続き	橋詰並子（英４）	寺田慶子（英３） 井添純一郎（英４） 河南さおり(家4)岩村彩(心4)松村由美(教4

【学年別参加者数】

幼稚園	１９名	
小学生１年	３９名	参加者
２年	３３名	合計　３００名
３年	５３名	
４年	３０名	
５年	８２名	学生　７２名
６年	１７名	（キャプテン１４名
中学生	７名	スタッフ　５８名）
高校生	１０名	
一般成人	１０名	

〈本部スタッフ〉

午　前（８：００～９：２０）		午　後（１２：３０～１３：００）	
スタッフ長	佐藤恵里(家4)	スタッフ長	佐藤恵里(家4)
副 スタッフ長	角田正和（社４） 北村史・(社4)	副 スタッフ長	渡辺一博(英4)松永泰幸(数4) 田中清一・北村史（社４）
受付係 ８人	○ 角田正和（社４） 河南さおり（家４） 内藤小有里（家３） 小林理英・加納文香(家3) 窪田美保（社４） 岩村　彩（心４） 坂井雅子（幼４） 井出湖清（幼４） 外波山結子（社４）	受付係 ５人	○ 田中清一（社４） 美斉津礼奈（数２） 河南さおり（家４） 内藤小有里（家３） 小林理英・加納文香(家3) 窪田美保（社４）
開閉会式係 １０人	○ 片桐宏（技４） 南場志保・安松大介(技３） 坂本貴彦・塚田淳・池田章 佐々木務　・油科健太郎・ 加藤英樹・岸本千恵(技４）	開閉会式係 １０人	○ 片桐宏（技４） 南場志保・安松大介（技３） 坂本貴彦・塚田淳・池田章・ 佐々木務　・油科健太郎・ 加藤英樹・岸本千恵（技４）
駐車・誘導係 ６人	○ 小坂和（社４） 坂井一夫（社４）西澤繁樹 （社４）野本毅（英４）	駐車・誘導係 ３人	○小坂和（社４） 坂井一夫（社４） 西澤繁樹（社４）
写真記録係	○ 山崎重幸（美４） 林　向達（院１）	写真記録係	○ 山崎重幸（美４） 林　向達（院１）
接待係	○ 井上清美（家４） 橘佳乃子（家４）	接待係 反省会係	○井上清美（家４） 下沢栄子（家４） 橘佳乃子（家４） 山崎千佳（家４）
前日設営係	○ 渡辺一博（全体）小坂和（テント）小倉敬（看板）片桐宏(図書館）		

第５回信大ＹＯＵ遊サタデー

【実施日時】　平成７年９月９日（第２土曜日）　８：３０～１５：３０
〈受付〉８：３０～８：５０　〈開会式〉９：００～９：２０　図書館２階
〈午前の講座〉９：３０～１１：３０　〈午後の講座〉１３：００～１５：００
〈閉会式・成果の発表〉１１：４０～１２：００　図書館２階
★アニマルマスコットの閉会式は、１５：１０～１５：２０　Ｓ２０１室

【参加者数・キャプテン・スタッフ組織】

No	講　座	人数	キャプテン	アシスタント・スタッフ
1	竹とんぼ作り	3	吉澤正彦（社４）	西澤繁樹・小坂和・坂井一夫(社4) 村山かすみ・中村薫・佐藤啓(音4) 岸本千恵(技4)秋元芳世子(美3)
2	おしゃべり教育学	１０	林向達（院１）	美斉津礼奈（数２）、小林真樹（社４）
3	ﾍﾟｰﾊﾟｰｸﾞﾗｲﾀﾞｰ	２２	丹羽則之（技４）	荻原まゆ美（音３）高橋貴子（理３） 千葉綾子・宮沢元（理２）中村典史(社2)
4	紙しばい	１１	奥原克水（国４）	杉山健一（国４）泉貴子（音３） 関谷菜穂子（社４）
5	アニマルﾏｽｺｯﾄ	１１	河南さおり(家4)	橘佳乃子・藤沢優香・柳沢ゆり恵 池田安美・小野雅子・河合久美（家４） 堀内文恵・笠原あや（家３）
6	たのしい英語	１８	渡辺一博（英４）	野本毅（英４）窪田美保（社４）野本聡 福士慈（心３）柳沢久美（音３）　（理３）
7	かこう 書こう 描こう	２２	塩苅有紀（国４）	松橋博行・西澤慶子・板倉文子（国４） 倉島慈・高野明子・佐藤雅子・雨宮志保 村田道代（国３）木内理映子・清水由美 細井康子・赤羽恵子・池上永利子・大蔵麗
8	アイスクリーム	１１	下沢栄子（家４） 井上清美（家４）	小林理恵・内藤小有里・加納文香（家３） 市村忠寛（英３）
9	お父さん地域で	5	土井進（助教授） 小倉敬（院２）	新井清規（理４）松永泰幸（数４）
10	そば作り	6	池田貴信（院１）	嶋田裕子・斉藤かおる（家３）
11	スライム	２２	林康成（理３）	田中忍（理４）浜口みさと（理３） 利根川智子（数３）安喰和之（理２）

参加者　１４１名
学　生　　７８名（キャプテン１２名、ｽﾀｯﾌ６６名）

【学年別参加者数】

幼稚園	１０名	合計 １４１名
小学生１年	２１名	
２年	２３名	
３年	１９名	
４年	１７名	
５年	２３名	
６年	６名	
中学生	５名	
高校生	０名	
一般成人	１７名	

【本部スタッフ】

スタッフ長	田中清一(社4)
副ｽﾀｯﾌ長	○坂本真哉(理4) 外波山結子(社4)、藤田智子(社4)
受付係 １４人	○北村史(社4) 中村薫(音4)、村山かすみ(音4) 秋元芳世子(美3)、柳沢久美(音3) 倉島慈(国3)、高橋貴子(理3) 千葉綾子(理2)、泉貴子(音3) 佐藤啓(音4)、荻原まゆ美(音3) 雨宮志保(国3)、窪田美保(社4) 福士慈(心3)
誘導係 ７人 (車輌)	○野本毅(英4) 松橋博行(国4)、市村忠寛(英3) 丹羽則之(技4)、中村典史(社2) 宮沢元(理2)、松永泰幸(数4)
駐車係 ６人 (車輌)	○小坂和(社4) 新井清規(理4)、坂井一夫(社4)　野本聡 小林真樹(社4)、西澤繁樹(社４)　(理３)
写真記録係	○山崎重幸(美4) 橋詰並子(英4)
接待係 反省会係	○井上清美(家4) 下沢栄子(家4)、加納文香(家3) 内藤小有理(家3)、小林理恵(家3)
開閉会式係 (図書館２階への案内も含む)	○田中忍(理4) 奥原克水(国4)、杉山健一(国4) 橘佳乃子(家4)、藤沢優香(家4) 柳沢ゆり恵(家4)、池田安美(家4) 小野雅子(家4)
前日設営係	○渡辺一博(英4)片桐宏（技４）角田正和 全キャプテン　(社4)

第６回信大ＹＯＵ遊サタデー

【実施日時】　平成７年１０月１４日（第２土曜日）　８：３０～１５：３０
〈受付〉８：３０～８：５０　　〈開会式〉９：００～９：２０　図書館２階
【参加者数・キャプテン・スタッフ組織】
〈午前の講座　９：３０～１１：３０〉

No	講　座	人数	キャプテン	アシスタントスタッフ
1	お手玉を作って遊	5	泉　貴子（音３）	加藤恭子・二木麻江（家３） 橋爪文（音３）
2	新スターへの道	9	小谷将紀（社４）	小泉規彦・町田頼彦・前田直志(工学部4) 仲摩佳和（経済学部４）
3	紙ひもでかご	１１	北村　史（社４）	藤田智子・外波山結子・杉本英嗣・小坂和吉澤正彦(社4)、大谷美穂(理4)、芦田恵・清水あかね(数3) 澤田良子(院1)松山恵子
4	ｱﾙﾐﾌﾟﾚｰﾄ作り	１２	山崎重幸（美４）	中井美喜子・高木麗（美３） 田中忍（理４）
5	紙しばい	6	奥原克水（国４）	中島真由美（幼３）、荒川真一（国３） 杉山健一（国４）
6	楽しい英語クラブ	１７	渡辺一博（英４）	野本毅・橋詰並子（英４）
7	草木で染めてみよう	１３	池田安美（理４）	井上清美・橘佳乃子・山崎千佳・小野雅子 河南さおり・柳沢ゆり恵・大西かおり（家４）
8	秋のどんぐりｱｰﾄ	２１	坂井雅子（幼４） 雨宮なるみ(幼４)	横井里美・井出湖清（幼４）坂本真哉(理4 岸本千恵・丹羽則之（技４）宮本裕美（幼４）浜口みさと・丸山和利（理３）
9	おやつﾊﾟﾗﾀﾞｲｽ	２１	加納文香（家３）	堀内文恵・嶋田裕子・小林理恵・内藤小有里・斉藤かおる（家３）吉越優子（幼３）
10	ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ	6	東原義訓(助教授)	小林真樹（社４）、市村忠寛（英３） 野本聡（理３）
11	地域で講座を	2	藤澤謙一郎(教授)	北間裕祥(体３)、金森晴彦(体４)
12	金属の組織を見てみよう	1	浅輪光男(教授) 宮本由己雄(上田千曲) 小林大士（技４）	片桐宏・池田章（技４）
13	スライム（１）	２８	林　康成（理３）	今井健文・辻井大作・高橋貴子（理３） 宮沢元・安喰和之・千葉綾子（理２）
14	リズムで遊ぼう	5	佐藤　啓（音４） 中村　薫（音４）	飯田佳代・村山かすみ（音４）

15	笹舟作り	１０	新井清規（理４）	中村典史（社２）、今井雅倫（理４） 北川原貴子（元幼稚園教諭）

〈午前の閉会式・成果の発表〉１１：４０～１２：００　　図書館２階

〈午後の講座　１３：００～１５：００〉

16	しめ縄をつくろう	１０	吉澤正彦（社４）	杉本英嗣・西澤繁樹・北村史・外波山結子（社４）橋詰並子（英４）
2	新スターへの道	続き	小谷将紀（社４）	小泉規彦・町田頼彦・前田直志(工学部4) 仲摩佳和（経済学部４）
4	ｱﾙﾐﾌﾟﾚｰﾄ作り	続き	山崎重幸（美４）	中井美喜子・高木麗（美３） 田中忍（理４）
17	ﾍﾟｰﾊﾟｰｸﾞﾗｲﾀﾞｰ	２１	丹羽則之（技４）	奥原克水（国４）、坂井一夫（社４） 野本毅（英４）
18	教育学部	1	宮澤弘至（院２）	美斎津礼奈（数２）
19	アニマルダンス	8	荻原まゆみ(音３) 柳沢久美（音３）	小林美由紀（音３）、長沼隆之・池田司（英２）、関谷菜穂子（社４）
20	不思議な化学実験	３５	漆戸邦夫（教授） 石井・田中・坂野（院１）	宮沢元・安喰和之・桃澤啓・長谷川直紀 千葉綾子（理２）
21	学校５日制ﾌｫｰﾗﾑ	５０	角田正和（社４） 土井進（助教授）	飯田佳代・村山かすみ（音４） 小林真樹・田中清一（社４）
12	金属の組織を見てみよう	続き	浅輪光男(教授) 宮本由己雄(上田千曲) 小林大士（技４）	片桐宏・池田章（技４）
22	スライム（２）	１５	林　康成（理３）	今井健文・辻井大作・高橋貴子（理３）

〈午後の閉会式・成果の発表〉１５：１０～１５：３０　　図書館２階

参加者　３０７名

学　生　１００名（キャプテン２４名、スタッフ７６名）

【学年別参加者数】

幼稚園	----------	２８名
小学生１年	----------	３６名
２年	----------	３４名
３年	----------	３７名
４年	----------	２０名
５年	----------	３８名
６年	----------	９名
中学生	----------	１３名
高校生	----------	３７名
一般成人	----------	５５名

合計　３０７名

【本部スタッフ】

午　前（8：20～9：00）		午　後（12：30～13：00）	
スタッフ長	田中清一（社4）	スタッフ長	坂本真哉（理4）
副 スタッフ長	井上清美（家4） 角田正和（社4） 美斎津礼奈（数2）	副 スタッフ長	下沢栄子（家4） 加納文香（家3） 市村忠寛（英3）
受付係	○井上清美（家4） 泉貴子・加藤恭子・関谷菜穂子・北村史・大谷美穂・中井美喜子・高木麗・中島真由美・橋詰並子・橘佳乃子・山崎千佳・雨宮なるみ横井里美・嶋田裕子・小林理恵・浦山洋美・岸本千恵浜口みさと・高橋貴子・飯田佳代・村山かすみ	受付係	○下沢栄子（家4） 藤田智子・橋詰並子・中井美喜子・高木麗・美斎津礼奈小林美由紀・白澤澄子・飯田佳代・村山かすみ・浜口みさと・利根川智子・岸本千恵
開会式場係	○田中忍・野本毅 橋爪文・藤田智子・外波山結子・竹川紀幸・吉越優子小野雅子・井出湖清・内藤小有里・小林真樹・宮沢元	閉会式場係	○田中忍（理4）
駐車・誘導係	○小坂和 野本聡・坂井一夫・杉本英嗣・市村忠寛・北間裕祥・金森晴彦・安喰和之・中村典史・西澤繁樹・今井健文辻井大作・	駐車・誘導係	○小坂和 野本聡・坂井一夫・杉本英嗣・市村忠寛・北間裕祥・金森晴彦・安喰和之・中村典史・西澤繁樹・今井健文辻井大作・
写真記録係	○林向達（院1）	写真記録係	○片桐宏（技4）
接待係	○加納文香・堀内文恵 斉藤かおる	反省会係	○加納文香・堀内文恵 嶋田裕子・小林理恵 斉藤かおる・内藤小有里
前日設営係	○片桐宏（技4）、塩苅有紀（国3）、小倉敬（院2）ほか		

第７回信大ＹＯＵ遊サタデーｉｎ松本

【実施日時】　平成７年１０月２８日（第４土曜日）１２：３０～１６：００
〈受付〉１２：３０～１２：５０　〈開会式〉１３：００～１３：２０　６１番教室

【参加者数・キャプテン・スタッフ組織】
〈講座〉１３：３０～１５：３０

No	講　座	人数	キャプテン	アシスタントスタッフ
1	しめなわ	2	吉澤正彦（社４）	白石明子（理学部１）、坂井一夫（社４）
2	新スターへの道	3	小谷将紀（社４）	仲摩佳和（経済学部４年） 小泉規彦（工学部４年）
3	小麦粉ねんど	２４	坂本真哉（理４）	数井壽彦(人文学部４)、小林麻衣子(国３) 飯田佳代（音４）、村山かすみ（音４） 藤田智子（社４）
4	宝探し	9	丹羽則之（技４）	中村典史（社２）、中村薫(音４)
5	紙しばい	1	奥原克水（国４）	村下正美（社４）
6	楽しい英語クラブ	4	渡辺一博（英４）	小林理英（家３）、渡辺加代子（英２） 矢澤由紀子（英３）、野本毅（英４）
7	教育学部	1	宮澤弘至（院２）	小松秀樹（教４）
8	ｵﾘｼﾞﾅﾙｷｰﾎﾙﾀﾞｰ	２３	田中　忍（理４）	清水あかね(数3)、山口直行(高森中) 堀内文恵(家3)田島志保(音1)
9	アニマルダンス	5	荻原まゆみ(音３) 柳沢久美（音３）	長沼隆之・池田司(英２)、関谷菜穂子(社４)
10	親子でﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ	6	角田正和（社４） 小坂　和（社４）	金井弘子・澤田奈奈(音１) 杉本英嗣・北村史（社４）
11	イラスト講座	9	山崎重幸（美４）	岩村彩（心４）、堀太一郎（英２）
12	ﾏｳﾝﾃﾝﾊﾞｲｸ調整	1	松永泰幸（数４）	
13	刃物研ぎ方教室	3	吉澤嘉寿 （何でも手作り吉澤学校主宰） 土井　進(助教授)	斎藤かおる（家３）
14	ギター	0	野本　毅（英４）	〈休講〉
15	社会科を楽しく	2	山名博夫（院２） 小林真樹（社４）	藤沢貴子（社１） 小泉豊土・菊池圭介（社３）
16	スライムを作ろう	３０	今井健文（理３）	金井貴之・丸山和利・野本聡（理３） 宮沢元・安喰和之・千葉綾子（理２） 塩野はる美（農学部１年）

【本部スタッフ】

午　後（１２：３０～１３：００）	
スタッフ長	片桐　宏（技４）
副 スタッフ長	田中清一（社４） 加納文香（家３） 阿部利恵（教１）
受付係	○加納文香（家３） １．しめ縄　藤田智子 ２．新スター　阿部利恵 ３．小麦粉　小林麻衣子 ４．宝探し　中村　薫 ５．紙芝居　村下正美 ６．英語ｸﾗﾌﾞ　小林理英 ７．教育学部　小林理英 ８．ｷｰﾎﾙﾀﾞｰ　清水あかね ９．ｱﾆﾏﾙﾀﾞﾝｽ　関谷菜穂子 10．ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ　北村　史 11．イラスト　岩村　彩 12．ﾏｳﾝﾃﾝﾊﾞｲｸ　斎藤かおる 13．刃物研ぎ　斎藤かおる 14．ギター　飯田佳代 15．社会科　飯田佳代 16．スライム　村山かすみ
開会式・閉会式係	○田中忍（理４） 金井貴之、丸山和利、宮沢元安喰和之、野本聡、村山かすみ杉本英嗣、長沼隆之、小松秀樹渡辺加代子、池田司、堀内文恵堀太一郎、矢澤由紀子
誘導・案内係	○千葉綾子(理2)中村典史(社2)田島志保、金井弘子、澤田奈奈、白石明子、阿部利恵、藤沢貴子、中島亮太、塩野はる美（松本１年生）
写真記録係	○林向達（院１）
反省会係	○小林理英（家３） 堀内文恵・斉藤かおる
前日設営係	○渡辺一博(英4)阿部利恵(1) 市川明貴（理１）

【学年別参加者数】

幼稚園	２３名
小学生１年	２２名
２年	２７名
３年	１２名
４年	１１名
５年	１９名
６年	３名
中学生	１名
高校生	２名
一般成人	３名
合計	１２３名
学生	６５名 （キャプテン１８名 スタッフ　４７名）

〈午後の閉会式・成果の発表〉１５：４０～１６：００　　６１番教室

「信大ＹＯＵ遊サタデー」の目ざすもの

実行委員長　渡辺一博（英語専攻　４年）

はじめに

様々な方面から数々のご厚意と関心を寄せていただき、長野県内ではその存在をだいぶ知られるようになってきました。参加者の口込みで伝わっている場合も多いようです。開催するたびに大変喜んでいただき、「今度は～をしてほしい」とか「また今度も来たい」といった子どもの声や、「いつも楽しみにしています」、「子どもが二、三日『ＹＯＵ遊サタデー』の話しをしてやみませんでした」などの保護者の声もいただいています。また、一般の地域社会だけでなく、長野県教育界や文部省の間にも好評を得ているようです。ある進学情報誌のための取材にみえた記者の方の話では、今教育に熱心に取り組んでいる大学はどこかと文部省に問い合わせたところ、それなら信州大学教育学部に行くとよいでしょうと紹介を受けたそうです。

私たちは「信大ＹＯＵ遊サタデー」を通して貴重な経験と多くの大切なものを得てきました。有意義な学生生活の１ページを、私たちの教育にかける熱意の証としてここに綴らせていただきたいと思います。

１．第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の基本理念

第一に「楽しく」ということです。キャプテン（講座の責任者）、アシスタント（キャプテンの補助、ティームティーチャー）が子どもたちと触れ合い、喜びを得ることができるのはもちろんのことですが、何よりも大切なことは参加してくれた人々が「また来たい！」と思うくらい楽しく、心に何かを得て帰れるようにすることです。したがって、講座の内容は必ずしも自分の専門教科にとらわれる必要はなく、自分の得意とする分野での力量を発揮することもできます。実際、遊びそのものやキャプテンの特技や趣味がそのまま講座になっているものも多いです。安全性に問題なく、高額な予算がかからなければ、まずどんな講座も開講できると思ってよいでしょう。遊びや特技、趣味を生かしたものとしては、例えば、ギター、世界の遊び、宝探し、小物作りなどがありましたし、専門性を生かしたものとしては、書道（習字ではない）や演劇（国語科）、英語遊び（英語科）、スライム（理科）、木工（技術科）などが例としてあげられます。専門性を生かしているとはいっても、やはり参加者が真剣に取組み、楽しみ、心にお土産を持っていけるような活動であったことは言うまでもありません。

しかし、学生側がただ参加者と一緒に楽しんでいればよいのかという疑問は当初からあり、やはりどうせやるからには学生も何かを得ていこうという考えが次第に強くなってきました。第二の基本理念として、「学生も学ぶ」があげられます。子どもたちと会えるだけでいい、という気持ちは素晴らしいものであると思いますが、将来教壇に立ったときにより魅力的な教師であれるようにこの貴重な機会を有効にいかしていこうということです。講座を企画し、準備し、子どもたちと接し、補助し、見て取り、その場に合わせた対応を図るといったプロセスは、教育者としての目、力量を養う絶好のチャンスであると思われます。これほどの大規模な、質の高い取組みが行われているのはおそらく全国でも本学部だけであろうと思われます。この又とない機会を学生自らの資質の向上に役立てて欲しいとの願いで、実践センターも快く応援してくださっているわけです。そういったことも考えて、私たちは自ら学び、高められるような、学生にとっても有意義な取組みとしていきたいものです。

ここで上述の二者の関係を明らかにしておきたいのですが、前者は絶対条件であり、後者は必要条件です。つまり、第一の目的が最優先されます。それと同時に教育的視点もできる限り

忘れてほしくないのです。ただし、教育的視点からの取組みに固執し過ぎて、第一の目的を失うようなことがあってはならないのです。「楽しさ」という絶対的なベースの上に、教育者となるべき私たち学生にとって必要な視点をおいていただきたいと思います。実際にその条件を満たしながら、「信大ＹＯＵ遊サタデー」で得た資料を卒業論文研究に生かしている学生もいます。

２．「信大ＹＯＵ遊サタデー」の意義

「信大ＹＯＵ遊サタデー」が本学部で行われるに当たっては大きく４つの意義があるものと思われます。

①触れ合いの場
②教育者としての実践と力量形成の場
③地域社会に開かれた学部づくり
④学校週５日制時代への橋渡し

（１）触れ合いの場

６週間の長いような短いような教育実習が終わると、ほっとすると同時に何か空しさを感じた学生は数多いと思われます。「あの子たちと離れたくない」、「また会いたい」という切なる思いが胸にこみあげ、大切な授業を休んででも運動会や文化祭に飛んでいく学生も沢山います。たとえ、自分のクラスの子どもたちでなくとも、とにかく小学生や中学生と共に時間を過ごす機会を待ち望む学生もかなりいるはずです。ところが、実際には教採に合格して大学を卒業し、実習から実に１年半を過ぎるまでそのような機会は与えられません。「信大ＹＯＵ遊サタデー」はそんな私たち学生の夢をかなえてくれるわけです。しかもキャプテンになれば、いわゆる「担任」として自分の思うようにクラスをもつことができ、学校でも塾でも味わえない自分たちだけの世界を作り上げることができるのです。子供たちに会うとき、学生たちの目はキラ星のごとくに生き生きと輝いています。こういった機会は教育学部生としての生活に刺激と活力を与え、教員への望みをさらに強くしてくれるに違いありません。

また参加してくれた子供たちや一般成人の方々も多くの影響を得ていくに違いないのです。若い学生のバイタリティー溢れる行動力とハツラツとした笑顔、熱意にみちた温かい指導、そして優しさは共に時間を過ごした人々の心をとらえます。「ＹＯＵ遊サタデー」のことをずっと忘れずにいてくれる子どもたちがきっといるのです。そして、その子たちが大きくなったとき、また別の子ども達に「ＹＯＵ遊サタデー」で得たものを伝えていってくれるかもしれません。私たちは、子どもたちにとってはよき「おにいさん」、「おねえさん」、一般成人にとっては未来の教育界を背負って立つ頼もしい若人なのです。「今の学生はダメだね～」なんて言葉はもうおさらばです。本学部生はやる気や情熱がなかったわけではなかったのです。ただ自分の持っているものを分かち合う機会を与えられていなかっただけなのです。そうでなければ開始以来のべ４００名以上にものぼる学生が自分自身の多くの時間や労力を費やして、お金にもならない、単位にもならない「信大ＹＯＵ遊サタデー」に自ら意欲的に取り組んでいる姿をいったいどう説明することができるでしょう。みんな子どもたちとの触れ合いを求めているのです。そして、それを心からの喜びとしているのです。

（２）教育者としての実践と力量形成の場

自分で発案し、企画し、細かいところまで練り上げて遊学プラン（指導案のようなもの）を作成し、教材も準備する。また、効果的な活動形態を模索したり、アシスタントスタッフとのティームティーチングのあり方を検討し、予備実験や試作をして実際の子どもたちのつまずきや時間の配分を確認する。そうして本番に臨むがそれでも予期せぬハプニングが起こったときには、あの手この手を尽くして何とかそれを乗り越える。「信大ＹＯＵ遊サタデー」はその日初めて会った子どもたちと２時間（もしくは４時間）の一発勝負で子どもたちに納得のいくものを提供しなくてはなりません。失敗は許されません。「次」はないのです。

子どもと接する楽しさの中にも適度な緊迫感があります。こうした一連のプロセスが、学生当人が意識していようといまいと、教員としての力量を高めていることは間違いないのです。「信大ＹＯＵ遊サタデー」でしていることはほとんどが趣味や遊びの部類といってよいでしょう。だからといって、今日の教育の現場とは無関係であるとは決して言えません。子どもたちの間では、遊び相手や遊びの質が大きく変わり、手先を使って器用に道具を操ったり、物を作ったりということはどんどん忘れられているように思えます。ということはそこでは遊びを通して人間関係や技術を学ぶといったことは稀薄になってきているわけです。学校という現場ではそれはどれだけ考慮される価値のあることなのか、考慮されているとしても現今の鮨詰め状態のカリキュラムの中でどれだけ行動にまで移され得るのかということを考えると少々頭の痛い話しではありますが、しかし現実に学校の中にそれはあるのです。例えば、体育、音楽、図画工作などの技能教科、クラブ活動、学校行事や特別活動のなかに「信大ＹＯＵ遊サタデー」は形を変えて潜んでいるとは言えないでしょうか。また、後に触れますが外部に出向いての「ＹＯＵ遊サタデー」を実施してみて分かったことは、ＰＴＡの分科会や文化祭の生徒会活動の一環として物作りなどの体験活動をしている学校があり、学校から講師を依頼された地域の方々に混じって、実に教員自らも「キャプテン」をしていたということです。こういった取組みは「ＹＯＵ遊サタデー」そのものと言っても過言ではありません。現場に立ったとき、各教科を教える以外に何の教えるものもない教師より、ギター一本でも弾ける教師の方がそれだけ子どもたちの個性や可能性の幅を広げてあげられると思うのです。子どもたちの関心や特技は十人十色ですが、多少なりとも何かは持っていることでしょう。教員自身が専門性のみならず、幅の広い知識と興味、特技を持っていることによって、子どもとの接点が増え、子どもたちの才能を引き出し、普段目立たない子にも活躍の場を与えることができるのではないでしょうか。

（３）地域社会に開かれた学部づくり

これまで、私たちの教育学部は地域社会からは隔離された空間であるという認識を持っていた学生も少なくないかもしれません。そのことで学生にとって直接生活上不都合を感じるといったようなことはあまりないと思いますが、実際には私たちは目に見えるところでも、見えないところでも地域の方々に支えられています。信大生だというだけでひいきにしてくださる人もいます。一方、報酬は得ていますが地域産業の働き手として、また家庭教師や塾などの講師として地域に関わっています。中には無償で地域のボランティア活動や福祉活動に貢献されている学生もいることでしょう。こういった持ちつ持たれつの関係は、大学内にも見られてよいのではないでしょうか。本学部がもっと地域に開放され、教育面での交流が可能になれば、地域の教育の活性化や教育面での地域社会への貢献にも繋がるわけです。また逆に地域の方々から学生が教わることも多くあるはずです。こうした「地域に開かれた教育学部」を実現するにはまず学生自らが動かなくてはなりません。しかし、もっと大切なのは教官との二人三脚で行

くことです。学生の力だけでできることには限界があるからです。本学部にはそれぞれの教科の専門機器や設備があり、経験と知識豊かな多くの教官がいます。この知識、技術、人材の宝庫とも言える総合施設はもっといろんな方面で活用されてよいのではないでしょうか。「信大ＹＯＵ遊サタデー」はその具体でもあります。地域に愛され、地域の誇れる「おらが信大教育学部」とよばれるようになりたいものです。

（４）学校週５日制時代への橋渡し

平成４年９月に第２週の土曜日に初めて週５日制が導入されました。本年度は第４週の土曜日も加えられ、近い将来完全週５日制時代を迎えることになるでしょう。しかし、導入開始直後から幾つかの問題が生じました。そのうちの一つは休業日が増えたにも関わらず文部省の学習指導要領の標準時数はそのままなので学習時間の不足のしわ寄せがあらゆるところに露呈してきたこと。そしてもう一つは、家族との時間を大切にしてほしいとのねらいもあって実施されたはずなのに、実際には両親の都合とは噛み合わなかったり、子ども自身が何をしてよいかわからない、またはそんな子どもに親は何をさせたらよいのか分からないといった状況になってしまったことです。そんな折りに「信大ＹＯＵ遊サタデー」が誕生したのにはもちろん理由があります。政策上、月のうち何日かの土曜日が休みになったからといって、教育関係者がその日の子どもの過ごし方に関して知らん振りというのではどうもいただけないような気がします。かといってまた子どもたちを学校や教育施設に集めて何らかの活動をするというのももとの黙阿弥といった感があります。しかしながら、少なくとも週５日制の過ごし方が安定するまでの暫くの間、教育関係機関がリーダーシップを取っていくことは理に適ったことと言えないでしょうか。一方もっと大切なのはそれぞれの家庭や地域で、子どもたちが周囲の人々と有意義な時間を持てるように促進し、助けを与えていくこと、ということになります。本学部で始まったような取組みはすでにいくつかのボランティア団体や自治会、地域の有志によってずっと昔から行われてきていますが、まだまだその数も講師や協力者となってくれる人も不足していると言ってよいでしょう。それから仮に定期的にやろうとしても、子どもたちの関心をひく活動ばかりを提供できるとは限らないということも問題となります。「信大ＹＯＵ遊サタデー」はそういった地域の取組みがますます増加拡大するよう地域に呼びかけ、促進し、質の改善を図るために必要があれば資料やモデル、人材をも提供していくことができます。また、外部との活動団体や個人との接触を図り連携を強めていくこともできるでしょう。

こういった運動や取り組みは家庭、学校、地域のバランスの取れた教育態勢を築き、完全週５日制時代の過ごし方を定着させる一助になることと思います。

３．第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の４つの柱

新しい実行委員会が組織されましたが、ちやほやされた第一期とは違って、第二期は周りの目も厳しくなり、真価の問われる年となるであろうという意見が聞かれました。そこで、昨年の取組みを土台として更なる発展と質の向上を図ろうと今年度の活動に当たって４つの基本的な活動方針が明確に打ち出されました。

①地域ぐるみの取組み
②学部ぐるみの取組み
③出張「ＹＯＵ遊サタデー」
④福祉面の拡充

（1）地域ぐるみの取組み

学生主体の取組みであるので学生が陣頭指揮をとることになるのですが、教育というものは家庭、学校、地域の三者の協力なくしては成立たないという考えから、地域の大人には参加してもらうばかりではなく、共にキャプテンやスタッフとして協力してもらうことも大切であろうという結論に至りました。そうすることにより、当大学と地域社会との関係がより緊密になるものと信じています。また、私たちは親子で「信大ＹＯＵ遊サタデー」に参加していただくことを歓迎しています。

今期を振り返ってみると、地域の方々にキャプテンやスタッフとして活躍していただいた例としては、本学部留学生を含む地域在住の外国人十数名に来ていただいて盛大に行われた「外国人と世界の遊びで楽しもう」、また「竹とんぼづくり」でもキャプテンを務めた学生の父親が、材料の手配をしてくださったり、道具を貸してくださったりと陰ながらご協力をいただきました。松本キャンパスで行われた第７回「ＹＯＵ遊サタデー」では、実践センターの土井進教官の講座の中で同氏による刃物の研ぎ方の講習も行われました。また、地域のお父さんが中心になって週５日制時代に取組むことについて話し合った「お父さん、あなたの能力を地域に役立てませんか」や、学部の教官や地域で熱心に青少年育成に関わっておられる方々をパネリストとして招待し、これからの学校週５日制時代の在り方を討議する「学校週５日制フォーラム」なども開かれました。これまで保護者が各講座に子どもの付き添いとして参観したり、子どもと一緒に楽しんでいただいたケースはたくさんありましたが、それに加えて、親子がペアとなって参加するよう設定されたものに「親子でバドミントン」がありました。

こうした取り組みを通して、家庭、学校、地域の三者が有機的に結びついた教育を実現していくための意識が多少なりとも高められたことと思います。

（2）学部ぐるみの取組み

普段は黒板の前で私たち学生相手に教えてくださる教授陣にも一肌脱いでいただき、学生と共に子どもたちの中に入って手腕を振るっていただいたり、その様子を見て学生が学ばせていただければこれほど学生にとって有意義なことはありません。学部の教授らにもどんどんキャプテン、スタッフとして参加していただこうということになりました。

昨年５月の第４回ＹＯＵ遊サタデーでは、体育科の渡辺伸教官が学生アシスタントと共に「大縄跳び」や「トランポリン」の講座を担当してくださいました。実践センターの土井進教官も９月の第５回ＹＯＵ遊サタデーで「お父さん地域で講座を開きませんか」を開講しました。また、生涯スポーツ課程の藤沢謙一郎教官、理科講座の漆戸邦夫教官（センター長）、技術科講座の浅輪光男教官も第６回ＹＯＵ遊サタデーでのキャプテン・デビューをしてくださいました。そのほかにも各キャプテンの講座の計画書（遊学プラン）に目を通して、助言をしてくださったり、協力をしてくださった教官がたくさんいらっしゃいます。

体育科の渡辺教官は反省会でこう言われました。「将来小学生を指導することになる学生を教えている身でありながら、実は自分が小学生についてまだ理解していないところがあることがわかり勉強になりました」。この謙遜な言葉は私たち学生にとってとても印象的でした。

（3）出張「ＹＯＵ遊サタデー」

学生の都合と先方の要望さえ一致すれば、いつでもどこでも“呼ばれて飛び出てジャジャジャジャ～ン”、「出張ＹＯＵ遊サタデー」もしようという積極的な方針も出されました。学生自らが地域社会へと出向き、学生らしい特長を生かして地域の育成活動に参加していくことは

学生にとっても地域の人々にとっても得るところが大きいものと思われます。

昨年６月頃にＰＴＡ分科会の１つとして親子で参加できる講座を開いてもらえないかとの相談が市内のある小学校のＰＴＡからありました。教採一週間前ではありましたが、２名の学生がその小学校に行って「ぼくらはみんな世界人」と題して子どもたちやその保護者と英語遊びをしてきました。非常に好評を博しました。その後９月には、上田市のある中学校の文化祭における生徒会主催の自主追求学習の講師としての依頼を受けたので、前期試験の合間をぬって４年生１０人が「オリジナル・キャンドルをつくろう」、「はりがね工房」、「色鉛筆でおしゃれな額縁作品」といった講座を開いてきました。こちらはいろいろと予期せぬ出来事もありましたが、学校や生徒たちとの交流を通して様々なことを学んでくることができました。

出張「ＹＯＵ遊サタデー」のきわめつけはなんと言っても第７回（最終回）に行われた信大松本キャンパスでの開催でしょう。当大学の学生は一年次には全員松本キャンパスで学生生活を送ります。また松本にある本大学附属の幼稚園・小中学校で教育実習をするものも多くいます。その松本で「ＹＯＵ遊サタデー」をしたいという学生の強い要望があり、実現の運びとなったわけです。非常に盛況で、学生も参加者もこの機会を満喫できたようです。

（４）福祉面の拡充

第一期のある講座で「注意欠損多動障害」（注意障害、多動性、興奮性、衝動性などが主軸障害とされ、強情、頑固、反抗的、言うことを聞かない、生意気、わがまま、協調性がないなどと表現される）の子の参加を受け入れました。普段からその子とも接触のあった障害児教育専攻の学生がマン・ツー・マンで付き添っていましたが、その子の行動についていくことは非常に大変で、まわりのスタッフもどう対応したらよいか全く術を知らなかった、という反省が出ました。これは事前にその子についての情報を確認したり、スタッフ同士での話し合いや訓練がなされていなかったことなど受入れ態勢が十分ではなかったところに問題がありました。

また、第一期終了後に行われた長野県社会福祉協議会主催の「福祉教育推進セミナー」では、ボランテイア活動としての「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実践レポートを依頼され、その取組みと成果を発表する機会を得ました。その際、「信大ＹＯＵ遊サタデー」への障害児の受入れや障害児のための講座作りなど福祉面での取組みの可能性が示唆されました。

こういった反省や示唆を受けて、今年度は障害児教育専攻の学生たちの協力を得て障害児の受入れにも積極的に関わっていこうという方針が出されました。特に、健常者と共に活動する機会が与えられれば、日本ではまだあまり研究の進んでいない「統合教育」（障害者の学習や生活の場をできるだけ健常者と同じようにし、相互に仲間意識や共同意識を育てる学習法）の実践として価値あるものになるそうです。

先に紹介した注意欠損多動障害の子が、今年度も参加してくれました。「アニマルダンス」という講座に参加してくれたのですが、前回の二の舞にならないようにとの心配をよそに非常に楽しく参加できたようです。ご両親共々参加していただき、「こんなに集中して楽しむなんてあまりないことです。」といった言葉を聞いたときにはとても安心し、また嬉しくもありました。それから、「『ＹＯＵ遊サタデー』に参加している間はうちの子のチックもぴったりと止まるんです。」といったの喜びの声も聞かれます。「信大ＹＯＵ遊サタデー」の福祉面の充実は地域の障害を持つ子どもたちやその家庭に楽しい話題をもたらしてくれることでしょう。

福祉面での成果はまだまだ小さなものですが、こういった取組みを本格的に手掛けたいという学生も現れ、今後の動きが期待されるところです。

４．第二期を振り返って

先輩方が残した偉大な礎にようやく柱と屋根を組み立てることができたような気がします。今期の目標として掲げた４つの柱においては、それぞれに成果があったと思います。先述の内容と重複するところもありますが、今期の特色をいくつか挙げてみたいと思います。まず、「基本理念」のところで触れたように、「楽しく」というだけでなく「学生も学ぶ」という意識や態度が多少なりとも養われてきたこと。学部教官や地域の方々のキャプテン・スタッフとしての参加、親子での参加、中高生や一般の方々のための講座開講が増えたこと。松本キャンパスや近隣の学校への出張。また、松本の一年次生や本学部以外の学生のスタッフ参加もかなり増えたことも挙げられます。一年次生のうち２人は、第一期の「ＹＯＵ遊サタデー」で、「教育学部ってどんなところに」という講座に参加した後、本学部に入学した学生です。前回は参加者として、そして今回はスタッフとして参加してくれたわけです。社会でそれぞれの道を歩んでいらっしゃる本学部及び「ＹＯＵ遊サタデー」の卒業生もスタッフとしてまたキャプテンとして参加してくださいました。はるばる名古屋から毎回のように駆けつけてくださった先輩もいます。

「ＹＯＵ遊サタデー」では多くの学生の自主的、献身的な助け合いが見られます。だれかの足りないところを別の人が補い、人知れず縁の下の力持ちとなってくれている人々がいます。またキャプテンやスタッフになってくれる人々は皆熱心で礼節を弁えた素晴らしい学生であると思います。このような素晴らしい同胞が信大にはこんなにたくさんいたのかと驚くほどです。

学生には、本当にバイタリティーと情熱があります。以前はそれを発揮する場がごく限られていましたが、今は違います。私たちには「ＹＯＵ遊サタデー」があるからです。「ＹＯＵ遊サタデー」に参加している学生は水を得た魚のようにいきいきとしています。

全く個人的な意見ですが、私はこの時代にこの信州大学にいられることを、心から誇りに思っています。他の学生もそう思っていることと思います。我らが信州大学に、そして「ＹＯＵ遊サタデー」に乾杯！

おわりに

「信大ＹＯＵ遊サタデー」は、実に多くの方々の支えによって成り立っています。ここでは一人一人名前を挙げることはできませんが、まずこれまで「ＹＯＵ遊サタデー」に関わってくださった学生諸君に心からの敬意と感謝の言葉を述べさせていただきます。そして、この取組みを行うに当たって、学生係、教務係、各専門の教官、松本分室の教官を初めとする学部教職員の方々、土曜の休日に快く食堂を営業してくださいました生協食堂の職員の方々や守衛さんの多大なご協力とご厚意にも併せて感謝申し上げます。また、ご尽力いただいた地域の方々や、「信大ＹＯＵ遊サタデー」の主旨に賛同いただき、多大な援助をしてくださった長野県テクノハイランド開発機構のご協力に心より感謝の意を表したいと思います。最後に、活動準備の場を提供してくださいます実践センターの事務員さんや、この取組みのうしろだてをし、二人三脚で歩んでくださいます実践センター教官方に厚く御礼申し上げます。

人と人とのつながりでできたこと
～平成７年度信大ＹＯＵ遊サタデー実行委員会の報告～

副実行委員長　片桐　宏（技術専攻　４年）

１．平成７年度実行委員会発足の経緯

平成６年度の第１１回実行委員会（１１月１２日の第３回ＹＯＵ遊サタデー反省会）の席上、ＹＯＵ遊サタデーの「来年度への継続」が話題となり、平成７年度実行委員会の役員選出を兼ねた「準備委員会＜委員長：渡辺一博君（英語専攻４年）＞」が設けられることになった。その後、来年度のＹＯＵ遊サタデーの活動について様々な検討が行われたが、具体的な役員選出までには至らなかった。しかし、翌年の平成７年１月１０日の第１回実行委員会において、実行委員長に英語専攻４年の渡辺一博君、副実行委員長に技術専攻４年の片桐宏がそれぞれ選出され、全会一致で承認された。この日をもって正式に平成７年度の実行委員会が発足した。なお、本年度も半ばを過ぎた頃、今後のＹＯＵ遊サタデーを見越して、３年生にも実行委員会の本部役員に参画してもらうことになり、家庭専攻３年の加納文香さんが新たに副実行委員長に就任した。

実行委員長　渡辺一博（英語専攻４年）	副実行委員長　片桐　宏（技術専攻４年）
事務局長　坂本真哉（理科専攻４年）	加納文香（家庭専攻３年）

２．実行委員会の特色

ここでは本年度の実行委員会の特色について述べたい。まず、実行委員会事務局の充実化があげられる。木曜日１コマ目に開講の「教育実践学演習」（以下、「演習」と略す）の受講生が、いわば「影の実行委員会」として、ＹＯＵ遊サタデーのめざす教育的なねらいの検討から、電話の対応やマニュアルの作成などの諸準備作業まで、あらゆる面からバックアップしていただいた。実質的な事務局活動は「演習」の受講生が中心になって行っていたと言っても過言ではなかった。影の立役者として活躍いただいた受講生にこの場を借りて心から謝意を表したい。次に、実行委員会の定例化があげられる。今年度は毎週水曜日の昼休み午後１２時４０分から実践センター１０４号室で実行委員会を定期的に開くことにした。また、実践センター内に「信大ＹＯＵ遊サタデー連絡ボード」を設置し、実行委員会の開催予告や様々な情報を掲示し、キャプテン・スタッフと事務局との架け橋にした。最後に、実践センターの土井先生の研究室に留守番機能付きのＦＡＸ電話が設置され、キャプテン・スタッフとの連絡や参加者からの問い合わせ等、絶大な威力を発揮したことを付け加えておく。なお、参考までに第４回実行委員会の組織体制図を次頁に掲載する。この組織体制は各回毎に編成し直したが、あくまでも目安であることをあらかじめ断っておく。

＜第４回実行委員会組織体制図＞

3．実行委員会の記録

本年度開催された実行委員会における協議内容の概略は以下の通りである。

回	月/日(曜) 時間	出席数	協　議　内　容
1	1/10(火) 16:30～17:30	１５名	・平成７年度実行委員会役員の選出 ・今後の日程（本年度は年４回開催し、そのうち１回を松本キャンパスで行いたい旨を確認） ・５月実施分の講座は４年生が中心になって行うことを決定
2	1/23(月) 12:40～13:00	１０名	・５月実施分の講座募集について ・具体的な係分担について ・参加者が着用する四角い名札の危険性について初めて指摘される
3	2/1（水）12:40～13:00	２６名	・オリジナルグッズについて（継続審議） ・実行委員会の定例化について（毎週水曜日午後１２時４０分から実践センター１０号室で行うことを決定した） ・５月実施までの日程の検討と指導案配布
4	4/12(水) 12:40～13:00	１３名	・春休み中の経過報告 ・５月実施の講座及びキャプテンの紹介 ・スタッフの募集と係分担について
5	4/19(水) 12:40～13:00	１２名	・修了証の簡略化について ・講座の追加について
6	4/26(水) 12:40～13:00	２７名	・５月実施の募集状況の報告 ・修了証について（修了証に押すＹＯＵ遊サタデー用のスタンプを美術専攻４年の山崎君に製作してもらうことになる。５月度は修了証は発行せず、はがきにスタンプを押印することになる） ・指導案の返却と２次案について ・教材材料の調達について ・１０月２８日（土）に松本キャンパスで本年度最後のＹＯＵ遊サタデーを開催することが正式に報告された ・新スタッフの自己紹介
7	5/10(水) 12:40～13:00	２７名	・５月実施の募集状況の報告

			・スタッフの募集状況の報告と係決め ・ＹＯＵ遊カードと腕章作りについて ・南部小学校ＰＴＡから出張ＹＯＵ遊サタデーの依頼があったことが話題になる
8	5/17(水) 12:40～13:00	２５名	・５月実施の募集状況の報告 ・スタッフの募集状況の報告と係決め ・次回にキャプテンとスタッフとの打ち合わせ会を確認
9	5/24(水) 12:40～13:00	３９名	・ＹＯＵ遊サタデー参加の心構えについて ・キャプテンとスタッフの打ち合わせ ・マニュアルの配布と日程の確認
１０	5/26(金) 18:00～	２１名	・準備状況の報告 ・当日の最終打ち合わせ
１１	6/8 (水) 12:40～13:00	１６名	・第５回(9/9)と第６回(10/14)実施分については同時にキャプテンとスタッフの募集を行うことにする ・教育実習との関係で夏休み前には講座名を決定したい旨を実行委員長より提案
１２	6/15(水) 12:40～13:00	２８名	・講座一覧表作成のための一次案提出 ・今後の予定の確認 ・修了証を復活させることが決定された ・スタッフはキャプテンが「自給自足」することになった
１３	7/19(水) 12:40～13:00	２９名	・ＹＯＵ遊サタデー「４つの柱」を確認 ・新たな参加者の自己紹介 ・講座一覧表の確認。その中で第５回は講座数少ないため、午前のみの開講にすることが報告された ・指導案を「遊学プラン」と呼ぶことにした ・教育実習生は後期の実習に入る前に、その他の学生は７月までに、第５回、第６回の区別なく指導案を提出することを確認
１４	9/4 (月) 12:40～13:00	１０名	・本部スタッフの決定 ・マニュアルの配布とその説明を行う ・名札、修了証、領収証の作成 ・材料の調達について
１５	9/6 (水) 12:40～13:00	３２名	・スタッフ名簿の確認と仕事の説明 ・本部スタッフの打ち合わせ

１６	9/8（金）17:40～	１６名	・キャプテンとアシスタントスタッフとの打ち合わせ ・準備状況の報告 ・当日の日程説明と役割の最終確認 ・本部スタッフの最終打ち合わせ
１７	9/20(水）12:40～13:00	２９名	・キャプテンとスタッフからのアンケート結果の報告（自分たちの教育的実践力に対してあまり良い評価がなされていないとの報告。以後、事務局を中心にＹＯＵ遊サタデーをやることの意義について熱心に検討する契機となった） ・スタッフの確保について ・２次案の返却と各キャプテンの責任（名札、修了証、領収証の作成）について
１８	9/27(水）12:40～13:00	３３名	・スタッフ名簿の提出と係分担 ・名札や修了証の作成
１９	10/9（月）12:40～13:00	４７名	・スタッフの係調整 ・教材と準備物の確認について ・小林輝行教育学部長より激励のご挨拶があった
２０	10/12(木）12:40～13:00	６９名	・注意事項の確認（楽しく、安全に） ・本部スタッフの打ち合わせ ・キャプテンとアシスタントスタッフとの打ち合わせ ・この日、実行委員長が作成した「信大ＹＯＵ遊サタデーの手引き」がマニュアルとともに全員に配布された
２１	10/13(金）17:30～	１１名	・前日準備の進行状況報告 ・本部スタッフの最終打ち合わせ ・当日の日程の最終確認
２２	10/18(水）12:40～13:00	３６名	・今後の予定について ・名札、修了証、領収証の作成
２３	10/24(火）12:40～13:00	３６名	・マニュアル配布とその説明 ・名札、修了証、領収証の作成
２４	10/25(水）12:40～13:00	４２名	・マニュアル配布と訂正事項の確認 ・本部スタッフの打ち合わせ ・キャプテンとアシスタントスタッフとの打ち合わせ

２５	10/27(金) 17:00～	８名	・バスの乗車人数と打上げの参加者の確認 ・バスへ積み込む物品の確認 ・当日の日程についての確認 ・松本キャンパス準備状況の報告

４．実行委員会と事務局

各キャプテン・スタッフと事務局とのパイプ役である、週１回の定期的な実行委員会は年間２５回にも及んだ。キャプテンとスタッフの打ち合わせが行われるとき、参会者は莫大な数になり、実践センターの教室が狭く感じられたときもあった。なお、大変残念ではあるが、どうしても出席してもらわなければ困る実行委員会に、キャプテンが連絡なしに欠席したりするケースがしばしばあった。「まだ間に合う」という意識ではなく「今すぐ間に合う」という意識で、諸準備作業に責任をもってあたっていただきたいと感じた。

「本部が何をやっているのかわからない」という声を何度か聞いたことがあった。実行委員会での伝達事項や事務局での協議事項をキャプテンやスタッフにも理解してもらう工夫が必要ではなかろうか（例えば、レジュメを作成したり、連絡ボードを積極的に活用するなどの工夫をしてみたら．．．）。なお、この声に応えるはずであった「実行委員会の会議録」は第８号までは配布・掲示していたが、以後その糸が途絶えてしまった。これは担当者である私の怠惰によるもので、謹んでお詫びしたい。

実行委員会事務局はほぼ毎日機能していた。事務局の中でもある程度の仕事分担ができていたので、大きな混乱はなかったのではないかと思う。今年度は事務局の仕事をキャプテンやスタッフにも協力してもらうことによって、いくらかは事務局員の負担を軽減することができたのではないかと思う。今後、更に事務局内での仕事の分担化、効率化を図り「慣れ」によるミスが皆無となることを切望したい。

本年度のＹＯＵ遊サタデーが滞りなく終了したのは、ひとえに「演習」受講生を中心とした事務局員の協力があったからである。「裏方」としてＹＯＵ遊サタデーを支えてきてくれた彼らに心から敬意を表したい。

５．まとめにかえて

私自身、副実行委員長として実行委員会の総括をする仕事にたずさわってきたが、行き届かない点も多々あったことと思われる。どうかお許し願いたい。最後に土井先生をはじめ、渡辺実行委員長、事務局の田中君や角田君には本当にお世話になった。共に楽しく活動できたことに感謝申し上げたい。

さらなる前進のために

事務局　田中清一（社会専攻 4年）

ここで与えられた課題は、今年度のＹＯＵ遊サタデーの総括を行い、次年度第三期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の内容の充実・活動のさらなる発展に資するような事柄を指摘することのようであるが、紙幅の関係上また何よりも筆者の能力上あらゆる事柄について言及することは不可能である。そこでここでは、前出論文「『信大ＹＯＵ遊サタデー』の目ざすもの」（渡辺一博実行委員長）、「人と人とのつながりでできたこと」（片桐宏副実行委員長）における論旨をふまえて、（１）ＹＯＵ遊サタデーにおける「講座づくり」と、（２）運営組織の在り方とその運用に関して、今年度の実態を粗描し、そこから浮かび上がってくる問題を指摘することで、与えられた課題に応えることとしたい。ただし、ここに粗描される「今年度の実態」は、あくまでも筆者の主観的観察に基づくものであり、事実の一側面を示しているにすぎないことを断っておきたい。

（１）ＹＯＵ遊サタデーにおける「講座づくり」について

今年度のＹＯＵ遊サタデーにおいて特徴的なことのひとつは、昨年度まで使用されていた講座進行計画書（「授業案」）を「遊学プラン」と改称し、その内容にも改良を加えたことであろう。このことの背景には、学校教育の場ではなかなか実現できないような内容を持った活動を行うための計画書が、学校の授業と同じ名称・内容の「授業案」ではおかしいのではないか、という昨年度以来の問題意識があった。また、こういった「器」の面での改良と共に、講座を担当するキャプテンへの、講座づくりの上での意識向上が執行部によって折に触れて呼び掛けられた。この結果、意欲に燃えた多くのキャプテン・スタッフの奮闘とあいまって、昨年度にも増して個性的でバラエティーに富む多くの講座が開設・開講されるに至った。このことは、今年度のＹＯＵ遊サタデーの積極的な側面として強調されてよいところであると思われる。

しかし、視点をもう少し離れたところに置いて、今年度ＹＯＵ遊サタデーの講座の在り方・「講座づくり」等を冷静かつ努めて客観的に見るならば、今年度だからこそ指摘される問題点が数多く見出だされるように思われる。「今年度だからこそ指摘される問題点」ということの意味は、今年度ＹＯＵ遊サタデーが第二期目であり、もうすでに「やることに意味がある」といわれるような段階ではないが故に指摘される問題点、という意味である。

まず第一点として指摘できることは、「講座づくり」におけるプロセスを軽視する傾向がまま見られたということである。確かに、講座そのものは参加してくれたこどもたちに楽しんでもらうことを、最大眼目としたものでなければならないだろう。そしてさらに、講座担当者自身がその講座に楽しく取り組むということはいうまでもないことである。しかし、講座担当者に最も必要とされることは、①その「場」（講座）を真に楽しい「場」たらしめるために必要な、あらゆる準備や手立てを行うこと、②当日実際に講座を開講すること、そして③その実践の結果を自分なりに考察することであろう。しかし、①③の手続きをおざなりにしておきながら、「子どもたちはとても楽しんでくれた」という結果にただただ満足、というのでは、講座担当者は何物をも獲得していないといわれても仕方ないであろう。講座担当者に必要不可欠なことは、ＹＯＵ遊サタデー当日に何を子どもたち

に語りかけ、何を子どもたちにしてあげられたか（与えられたか）ということはもちろんのこと、その当日までの準備、そして実践後の反省・考察を如何に真摯に行うかということであろう。「準備→実践→反省・考察」というプロセス全体を大切にする意識が、今後講座担当者（キャプテン・スタッフ）に切実に求められるものと思われる。この一連のプロセス全体から獲得できることこそが、講座担当者にとっての真の「楽しみ」なのではないかと思うのである。

第二点として指摘できることは、「講座づくり」において講座形態の定型化の傾向が顕著となってきていることである。これは、講座の在り方・形態そのものが定型化することそのこと自体が問題だというのではなく、慣例的に講座の在り方・形態が定型化していることに問題があるのではないかという意味である。具体的にいうと、これはどの講座にも共通して見られるティーム・ティチング方式のことである。今年度のＹＯＵ遊サタデーの各講座を見てみると、まず最初にティーム・ティーチングありきであって、この題材を用いたこの講座は必然的にティーム・ティーチング方式でなければならないという講座は少なかったのではないかと思われる。確かに、ひとつの方向としてはこのように継続的に、あらゆる題材の講座においてティーム・ティチング方式を導入して講座を実施することで、「ＹＯＵ遊サタデー式ティーム・ティチング」というものを案出するということがあっても良いだろう。しかし現状が全体的にティーム・ティーチング方式を採用しているから、今後もその方向で行くというのは、教育実践者としての力量の育成に資する何物かを獲得していこうとする、ＹＯＵ遊サタデーの在り方に鑑みて、決して好ましい傾向ではないように思われる。この点は、今後の検討課題といえよう。

（２）運営組織の在り方とその運用に関して

今年度ＹＯＵ遊サタデーの運営組織は、昨年度の組織形態をほぼそのまま引き継いだものであった。その組織は、実行委員長・副実行委員長・事務局からなる執行部と、執行部および参加する全キャプテン・スタッフとからなる実行委員会の、二つの機関からなっている。両機関の特徴を、その構成員の在り方から一言でいうならば、前者は固定的、後者は流動的であるということになろう。この両機関の特徴が、今年度ＹＯＵ遊サタデーの運営組織の在り方とその運用上の問題点と密接なつながりを持っているものと考えられる。

例えば、執行部の人員が固定化してしまっているために、執行部（特に事務局。以下執行部はこれに同じ）に処理事項（参加児童生徒の登録・管理、参加児童生徒への諸事項の連絡事務等）の過度の負担が生じ、それがＹＯＵ遊サタデー全体の運営に影響するという傾向が認められた。組織そのものが大型化すれば、当然、その組織の運用上中枢となる執行部の処理事項はそれに伴って増加する。従って単純に考えれば、その増加した処理事項を処理し得るだけの執行部要員を確保すればその問題は解決しそうである。しかし、処理事項の量的増加は、一方でその処理事項の内容的・質的複雑化を伴う。安易な執行部要員の増加は、かえって処理事項の処理の遅滞を招き、新たな問題を惹起しかねない。しかし一方で、執行部の構成員の固定化が組織全体の非流動性を助長し、執行部を各キャプテン・スタッフから遊離させ、「見えない執行部」を作り上げているという意見も聞かれる。

こういった現状から導きだされる課題としては、ＹＯＵ遊サタデーの開催規模の大型化に鑑みて、執行部における特に事務局の必要事項処理方法の完全マニュアル化、各キャプテン・スタッフ・参加者名簿、「遊学プラン」・実践記録等の諸情報のコンピューター管

理化を推進していくこと等が挙げられよう。前者が実施されていけば、執行部構成員の固定化が緩和され、各キャプテン・スタッフの執行部での活動への参加が促進され、組織全体の流動化が進行するであろう。また、後者が推進されていけば、執行部の必要処理事項の量的縮小化が進み、これまでの必要事項処理の煩雑さが緩和されていくものと思われる。

以上非常に大ざっぱではあるが、今年度ＹＯＵ遊サタデーの実態の主観的観察に基づく粗描と、そこから浮かび上がってきた課題を指摘した。繰り返しになるが、ここに述べられていることは、複雑多様で豊かな内実を有するＹＯＵ遊サタデーの、まさにそのほんの一端を「粗描」したにすぎない。「混沌」という言葉があるが、ＹＯＵ遊サタデーはまさに「混沌」とした存在であり、極端なことをいうならば、この膨大な実践記録をもってしても未だその実像が詳細に明らかにされてはいないであろう。結局、この実践記録そのものも、複雑多様で豊かな内実を有する、「混沌」とした存在であるＹＯＵ遊サタデーの一側面を明らかにしたにすぎないのかもしれない。

しかしこの後に、文字どおり「満載」されている「出会いと挑戦の記録」の中には、その一側面にしかすぎないはずの事柄が、如何に多くの豊かさを内に含んだものであるかを証明するような「証拠」が数多く見られるはずである。とにかく、この後に続く、ＹＯＵ遊サタデーに携わった多くの人々の真摯さがみなぎる「出会いと挑戦の記録」は、どんな解説やもっともらしい論評などよりも雄弁さをもって読み手に迫ってくるものを持っている。この小冊子を読まれる方にはまず最初に、それらを読んでいただきたいと思う。

次年度第三期「信大ＹＯＵ遊サタデー」が、今年度繰り広げられたような子どもたちとキャプテン・スタッフの笑顔と笑い声の絶えることのない、真に子どもたちと学生が学びあい、成長しあえる「まほろば」となることを祈念してやまない。

2．出会いと挑戦の記録
－第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実践－

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	宇宙生物「スライム」をつくろう	平成7年　9月　9日(土)（午前）
キャプテン名	林　康成（理科専攻　3年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　4　名 参加者数　20　名
指導教官名	村松　久和　教官	活動場所　N102

講座のねらい　Ｐ．Ｖ．Ａ．洗濯糊を使って「スライム」を制作する場面において、「スライム」作りの様な楽しい実験を目や手で体験してみることを通して、新しい友達をつくり理科に関しての興味、関心持つことができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
9：10	導入	1．自己紹介 2．キャプテンによる「スライム」のおもしろい話		
9：30		3．キャプテンによる「スライ作り」の演示実験	「スライム」の作り方の説明 注意事項 1．服や髪につかないようにする。 2．絶対、口の中に入れない。	
9：50	展開	4．「スライム」の制作 ①コップの下の線まで水をいれる。 ②コップの上の線まで洗濯糊をいれて混ぜる。 ③好きな色を混ぜる。 ④（飽和）四ホウ酸ナトリウムをはかり用コップで、はかりとって加え、すばやく混ぜる。 ⑤しばらくそのままにしておく。	各班（4、5人）にキャプテンまたはスッタフが一人つく。 固すぎる時には水を加え、やわらかすぎる時には手でさわり、水分を取り除く。	模造紙 コップ わりばし ポリ袋 洗濯糊 水 洗浄瓶 四ホウ酸ナトリウム 絵の具
11：00	まとめ	5．後片づけ 6．アンケー記入 7．修了証授与	「スライム」を放置しておくと、乾燥して薄い板状になる。ポリ袋に入れて封をすると、繰り返し使える保冷剤となる。	アンケート ゆうゆうカード

宇宙生物「スライム」をつくろう

林　康成（理科専攻　3年）

1．はじめに

教育実習を終え、自分自身の中で何かをやりたいという気持ちと、子どもと接する機会が欲しいという思いから、この信大ＹＯＵ遊サタデーに参加しました。１回目は、今まで全くＹＯＵ遊サタデーを経験したことがない上でのキャプテンでしたので、不慣れな点が多く、土井先生をはじめ多くの人々に助けていただきましたが、２回目となる今回は、仕事の内容も分かってきました。

今回は講座も前回よりも多く大変大きな規模のＹＯＵ遊サタデーとなり活気づいてきました。僕がキャプテンをするこの「スライム」の講座も今回は午前、午後の２つに分けてのものとなりました。スタッフの人も多く集まってくれて講座の中に自分のオリジナリティも組み込むことができました。また、子どもたちに配る絵を書いた「スライム」も用意できました。前回に比べ比較的余裕のある状態で前回の改善点を取り入れこの講座に臨みました。

2．講座の意義

この講座は教師を目指す僕たち教育学部生にとって教師として働く前に子どもたちと触れ合う場であり、また地域の人々との交流の場としても存在する意義があります。子どもたちや父兄との交流が深まれば、僕たち学生が暮らし、学ぶ上でよりよい環境をつくり、また地域文化を学ぶことにもつながるでしょう。ボランティアというのではなく参加した学生の一人一人の学びとして重要な意義があるといえます。

3．講座について

「スライム」の製作にあたり、身近にあるＰＶＡ（洗濯糊）と水を１対１の割合で混合し、四ホウ酸ナトリウムを加えることによりゲル状の物質ができることを通して子どもたちの理科に関する興味、関心が生まれると考えました。また、色を付けることにより子どもたちにやる気や創造に対する意欲をかきたてようとしました。そして、ＹＯＵ遊サタデーの主旨に則り、遊びという概念を念頭に置き、学校とは違った空間を築こうとしました。また、今までの講座では「スライム」の製作は個人の作業でしたが、今回は違う学校、学年を通した仲間をつくることを目的として、キャプテン、スタッフ、父兄、班員を含めたみんなの作業として班毎で一つの大きな「スライム」をつくることを盛り込みました。これにより、ＰＶＡと水の割合との関係を大きい「スライム」でも同じだということを気が付いてもらう良いきっかけになるのでは、と考えました。

そこで、学習の意図に沿っているかどうか、以下の４つの視点を設けました。

１）水とＰＶＡ（洗濯糊）の割合に意味があることに気が付いたか

２）身近な物からできていることに気が付いたか

３）理科に対する興味、関心が生まれたか

４）大きな「スライム」をつくることは今回どのような効果をもたらしたか

４．講座の実際と考察

上に挙げた４つの視点について、それが達成できたか考察してみました。

１）今回は大変低学年や幼稚園児の子どもが多かったため、理論として気が付いた子どもはいなかったと考えられます。しかし、前回のようにキャプテン、スタッフが「水を多くして作ってみて」や「ＰＶＡ（洗濯糊）を多くしてみて」など、割合の変化を呼びかけたことによって、中、高学年の子どもたちは感覚的に理解したようです。子どもたちは「水を多くしたらブヨブヨになる。」「ＰＶＡを多くしたら、固いのや小さいのができる。」「四ホウ酸ナトリウムを多くしても変わらない。」などと、スライムを実際にいろいろ作ってみることにより、スライムを作る上で水とＰＶＡと四ホウ酸ナトリウムの割合が重要であることに気付いていたことが分かりました。低学年や幼稚園の子どもは作ることに精一杯でした。

２）ＰＶＡという文字を使うと分からなくなるが、洗濯糊という言葉には低学年の子どもにも分かりやすかったようです。しかし、洗濯糊をよく知らない子どもも多くいたので、洗濯糊が普段の生活でどのように使われているか、キャプテンやスタッフが分かりやすく説明したら、もっと身近なものからできている視点に気付いたでしょう。どのように洗濯糊を身近なものとして認識させるか、というのがこれからの課題であります。またあまりにも低学年の子どもが多いのも原因のひとつであり、１～６年までの多くの子どもたちに理解させる共通した認識の言葉を選ぶことが困難でした。

３）ここでは、前回と同じように物をつくる楽しさから、理科というよりも自然科学に対する興味、関心が生まれたとみてとれました。

４）大きい「スライム」をつくることにより、どんな量の「スライム」でも水とＰＶＡの割合が変わらないことにはっきり気が付く子どもがいました。また、仲間とのコミュニケーションをとるという点でおおいに役に立ったと考えられます。子どもたちは「どんな色にしよう。」や「みんなで大きな『スライム』を持ってみよう。」などと、お互いに話し合いながら交流を深めていったようです。

５．終わりに

今回は低学年、幼稚園児が大変多く、午前、午後の２回ということでスタッフの方々も辛かったのですが、誰一人「つらい」などの泣き言を言わずがんばってくれました。このがんばりがこの講座を事故もなく無事に終わらせてくれたと思います。また、人気講座でもあり、より一層の改善をしたつもりですが、まだまだ不充分な点もあると思います。これから引き継いでいく上で常にこれらの講座を改善し新しいアイデアを導入し向上させていくことが僕たちに必要だと思いました。

第（７）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	スライムをつくろう	平成7年 10月 28日(土)（午後）
キャプテン名	今井　健文（理科専攻　3年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　6 名 参加者数　29 名
指導教官名	河内　晋平　教官	活動場所　64番教室

講座のねらい

ＹＯＵ遊サタデーでスライムをつくる場面で、仲間とスライムで遊ぶことを通して、今回参加して良かったなぁと感じるとともに、次回への希望ももてるようにしたい。

講座の展開

段階	学習活動	子どもの動き（意識）	時間	支援
課題把握	1．自己紹介しよう ①こどもたち ②スタッフ	・どんなスタッフの人かな？ ・早くつくりたいな	5	・「大きな声ではっきり言おうね！」
	2．作り方を学ぼう ①水を入れる ②洗濯のりをいれる ③よくかきまぜて色をつける ④四ほう酸ナトリウム水溶液加えてよくかき混ぜる ⑤固まったらコップから取り出し、手で形をととのえる ⑥できあがったのをビニール袋に入れる	・どうやってつくるのかな ・思っていたより簡単そうだ ・できたのをちょうだい！	5	・演示を前でしてみせる 注意事項 ・衣服や髪の毛につけないようにしよう ・食べないようにしよう
追求	3．個別につくってみよう	・ひとつできたから次違う色をつくりたい ・赤と黄を混ぜたらどうなるかなぁ ・全部混ぜたらコーラみたいになっちゃった ・冷たくて気持ちいいなぁ	50	
	4．班で1つ大きなスライムをつくってみよう	・大きいのって手で全部つかめないや ・大きいのをつくったのは、みんなでつくれて楽しかった	30	・話し合いを仲介しながら色を決める
まとめ	5．片づけ		10	・子どもたちには感想を書いてもらう
	6．終了（修了証を渡す）		10	

スライムを作ろう

今井　健文（理科専攻　３年）

１．講座のねらいと開講の理由

「スライム」は、こどもたちにとってはファミコンソフト「ドラゴンクエスト」などに登場するおなじみのモンスターである。

そこで、「スライムをつくろう」では、ゲームのモンスターを自分で作ったり触ったりできるという不思議な経験を味わってもらうとともに、半透明、無定形で、ひんやりとした感触を肌で感じてもらうことを、最大のねらいとした。

２．講座で取り上げた素材の研究

①　透明である。（色素　食紅 ――半透明）

ゼリーのよう、たいへんきれい！

②　無定形である。

どのような形にもなりちぎったりくっつけたりすることができる。

③　手触りが冷たくひんやりとしていてたいへん気持ちがよい。

④　誤って食べても無害である。

３．こどもの取り組んだ様子

①　全体を通して

今回は小学校１、２年生が多かったこともあり、スライムを自分で作ったことのある子はあまり多くはなかった。全体の流れとしてはキャプテンが作り方を説明した後、個々にコップに薬品を取り、スライムを作った（個別学習 ）。 一人で数個作った後は、５、６人の班で一個大きなスライムを作り（共同学習）、協力して作ったスライムを洗面器にいれたまま、お友達の前で発表した。

②　個別学習

赤や黄色や緑を混ぜて色彩を楽しむ子どもたちは、低学年の子が多かったこともあり半分ぐらいで、それよりも同じ色をたくさん作ってコップ何個分もの大きなスライムを作ると言う子がいた。量の方面に目を向けたのには驚いたが、次の共同学習への流れもでき、よかった。

③　共同学習

班で色を決め、洗面器に手をつっこみながらみんなでこねまわしたり、手にいっぱいになるくらいにちぎりとって水気をとばしたり、友達のとくっつけてまた一つのスライムにしたりと大騒ぎだった。なかには無色透明のスライムに何色もの色をぽつんぽつんといれてとてもきれいなスライムを作った班もあった。

４．反省と、実践から得られた課題

良かった点としては、まず指示を一回ですませることができたことが上げられる。汚れないように新聞紙を敷いたり、バケツを用意してのこりかすを捨てたりしたので、子どもたちも動きやすかったようだ。反省点としては、発表のときに洗面器のスライムをみんなで分けたが、「お姉ちゃんのお友達は黄緑色のスライムをたくさん持ってっちゃってずるいです」ともらす子もいたことだ。「みんなで仲良く分けるという難しい作業が残っていますが、みんな仲良く分けてくれるでしょう」と発表の時にふれたのにもかかわらずこういう結果になったことで、最後まで細心の注意を払うことの大切さを痛感した。

第（7）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	君のオリジナルキーホルダーをつくろう	平成7年 10月 28日(土)（午後）
キャプテン名	田中　忍（理科専攻4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　4 名 参加者数　23 名
指導教官名	榊原　保志　教官	活動場所　56番教室

講座のねらい

自分の家でも、小さな子でも手軽にできるキーホルダーづくりを通して、自分の手で物をつくる楽しさを知ることができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの活動内容	キャプテンの活動	教材
13:30	導入	自己紹介 今日一緒に活動する友達の顔と名前を覚えよう。 各自の持ち物確認 キーホルダーにしたいイラスト 黒の細いサインペン いろんな色のマジック はさみ	← ない子には貸し出す	
13:50			作り方説明（見本提示）	模造紙
14:00	展開	製作開始 ①紙に好きなイラストを描く。本とかから写してもいいよ。 ②絵の上にプラバンを置き、サインペンでその上をなぞって写す。 ③絵に油性マジックで色を塗る。（これは焼いた後でもいい） ④絵を切り取り、パンチで一つ穴をあける。 ⑤オーブントースターにアルミホイルをしいて焼く。 ⑥しばらくさましてから、穴に金具を通す。	注意事項 ・焼くとかなり縮むので大きめに書こう。 ・オーブントースターは台数が限られているので、④までできた子から順次焼いていく。 ・スタッフやキャプテンが一緒にやってあげること（④⑤について） ・<u>やけどに注意</u> ・アルミホイルはそのまましいてもいいし、クシャクシャにしてからしいてもいい。 ・焼きあがる様子はおもしろいので子どもたちと一緒に見よう。	見本品 オーブントースター アルミホイル プラバン キーホルダーの金具 油性サインペン はさみ ペンチ 下書き用の紙 パンチ イラスト
15:00	見定め	作品発表、修了証授与		修了証 アンケート
15:30		後片付け、諸連絡		

君のオリジナルキーホルダーを作ろう

田中　忍（理科専攻　4年）

1.授業作りの着想とねらい

最近の子どもたちは、室内でテレビ画面に向かって遊び、外で遊ぶことは非常に少ない。たとえ遊んでも、それはテレビゲーム同様「既製品」であることが多く、自分たちで作ったものではない。本来子どもとは、大人よりも遙かに優れた創造力を持ち、遊びにしろ、その遊ぶ道具にしろ、なにもないところからでも作り出せるのだ。しかし、「既製品」を与えられることに慣れてきている今日の子どもたちは、「自分で作る」という楽しみを知らない。そんな状況では創造力も育つはずはなく、個々人が持っている才能も伸ばすことはできない。児童期に「物を作る」という体験をすることは、子どもの人格形成において非常に大切なことであると私は考える。

よって今回のYOU遊サタデーでは、是非子どもたちに何かを作らせたいと思った。そこで思い出したのが、自分が子どもの頃流行った、プラ板を使った簡単なキーホルダー作りであった。自分の描いた絵や文字が、ちゃんとしたキーホルダーになるのはとても楽しく、また、それを友達などにほめられたり羨ましがられたりすると非常に嬉しかったものである。そんな楽しみを今の子どもたちにも知ってもらいたいと思い、今回の講座を計画した。

2.YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習から一年ほどたち、子どもたちとふれあう機会を失っていたためか、子どもたちとの接し方に少し怠慢があった。それに気付かせてくれたのは、昨年度のYOU遊サタデー実行委員長を務めた山口直行さんであった。山口さんは、現在はもう教師として現場に勤めていらっしゃるが、YOU遊サタデー当日はわざわざ駆けつけてくださり、私の講座のスタッフとして参加してくださったのだ。そのときの山口さんの子どもへの接し方を見て、教育実習で感じた初心を再び思い出すことができた。

講座の最初に20人ほどの参加者一人一人に自己紹介をしてもらったのだが、私は黒板の前の教壇の上に立ってそれを聞いていた。しかし山口さんは、発表する20人の子ども一人一人の横にその都度ついてやり、起立した子どもと同じ目の高さになるように自らはしゃがんでいた。子どもの発表中は、子どもが一言言う度に大きくうなずき、なかなか言い出せない子どもには「学校は？」「何年生ですか？」などのきっかけを与えてやっていた。

子どもたちよりも一段高いところから見下ろしていた私は、それを見てはっとした。キャプテンである私が教壇の前にいたのでは、みんなの視線は自然に前にいってしまい、発表している子どもにいかないではないか。今回はキャプテン一人とスタッフ数人を使ったティーム・ティーチング形式だったから良かったものの、本来ならば、私が山口さんのようにすべきであった。初めての場所で、学校も学年も違う知らない人たちに囲まれて、子どもが緊張していないわけがない。心細い思いをしていた子もいただろう。そんなとき、キャプテン、スタッフのお兄さんお姉さんが側で寄り添いながら、自分の話をしっかりと聞いてくれるということは、子どもたちにとって、どれだけ嬉しいことだろうか。

子どもの側で、同じ目線で、話を一言一言しっかりと聞いてやり、それをほめてやる。

教育実習で身を持って経験した筈の、子どもとの接し方の一番基本であり、一番大切であるそんなことを忘れかけていた自分が恥ずかしかった。本大学の教育実習は、三年生の6月から8月の間に6週間かけて行われる。よって現場に立つまで、短い人でも約2年のブランクがある。その間に、教育実習で学んだことが少しずつ忘れられてしまうこともあるだろう。その点、早い時期にそれに気付き、初心を思い出せた私は幸運であったと思う。YOU遊サタデーに参加することによって、教育実習でつかんだ「カン」が薄れることがなく、さらに新しいことが発見でき、非常に良かったと思う。

3.YOU遊サタデーでの子どもたちの取り組み

紙を与え、好きな絵を描いてもらおうと思ったのだが、これがなかなか描けなかった。白い紙を前にして、何を描いたらいいのか悩む子が多かった。そういった子がいると思って、キーホルダーにしたいイラスト（本など）があったら持ってくるように事前に指示したのだが、それでも描けない子はいた。このような子の横には、なるべく誰かが側にいるようにし、「○○君は何が好きなの？」「○○さんの持ってる筆箱かわいいね。これ好きなの？こんなの描いてみたら？」「絵上手じゃない！もっと描いてみて。」と語りかけ、少しでも自信を持って絵を描けるように手助けをした。また、何を描いたらいいか分からないと言う子に少しでもきっかけをあげれればと思って、子どもたちに人気のあるアニメのキャラクターを画用紙に描いて用意しておいた。すると少しずつだが、そういった子も絵を描き始めてくれ、それがキーホルダーになったときにはすごく嬉しそうであった。

プラ板は焼くと、非常におもしろい変化をする。この変化の仕方も、子どもたちに是非見せたかったところである。子どもたちは、自分の絵が描かれたプラ板が、焼くと急激にクシャクシャに縮むので、「大丈夫なの！？」と心配そうにしていた。しかしそれがやがてゆっくりと開きだし、小さく固まってくると「うわー、すごい！あんなになったよ！！」と驚き、喜んでいた。こういった子どもたちの声が、私にはとても嬉しかった。

子どもたちはキーホルダーが出来上がると、「キャプテン、ほらできたよ！見て見て！」と見せに来てくれた。一緒に参加したお父さんやお母さんにも誇らしげに見せていた姿が印象的であった。そしてひとつ出来上がると、もう一個、もう一個とたくさん作り、友達や家族へのおみやげにするんだと嬉しそうに言っていた。私にも作ってくれた子が何人かいた。「忍キャプテン、これからもがんばって！」と書かれたキーホルダーには、私の似顔絵も描いてくれていた。見るとその子はYOU遊サタデーに以前も参加したようで、私のことも私が前回にやった講座のことも知っていた。前回は私の講座に参加したわけでもないのに・・・。子どもたちは、私が見ている以上に私たちを見ていて、この企画を楽しみにしていることを知り、非常に嬉しく思い、また、その責任の重さを再確認した。

4.スタッフとのティーム・ティーチングについて

20人前後の子どもたちを4、5人の班に分け、一班に一人はスタッフがつくようにした。よって、全員に目を行き届かせることができ、内容をスムーズに進行することができた。

また、子どもがオーブントースターでプラ板を焼く際には、危険なので必ずキャプテンかスタッフの誰かについていてもらった。おかげで、誰一人としてけが人を出すこともなく無事に終わった。YOU遊サタデーにはもう何回も参加しているが、やはり子ども4、5人

につき、スタッフ一人は必ず必要であると毎回感じる。もし幼稚園や小学校低学年の子がいたら、その子らはマンツーマンで見るべきだろうし、今回のようになかなか絵が描けず一人でじっとしている子がいたら、その子らもやはりスタッフが横についていてやる方がいいだろう。その点、今回のティーム・ティーチングはうまくいったと思う。

5.反省と今後の課題

講座の内容自体は成功したと思う。今回の反省すべき点は、私の子どもへの対応の甘さである。教育実習から月日がずいぶんたっていたこともあると思うが、それよりもYOU遊サタデーへの「慣れ」も生じてきていたと思う。この企画には何度も参加をし、キャプテンも何度も務めてきた。そのおかげで、最初の頃よりはずっと余裕を持って子どもたちと接することができるようになり、いろんな場面に臨機応変に対応できるようになった。良い意味で要領が良くなってきて、自信もついてきた。しかしそれは、同時に自己への甘えと怠慢を引き起こす。YOU遊サタデー全体から、はじめの頃の緊張感が薄れてきているように感じる。

慣れから安全面のチェックをうっかり怠ってしまったり、子どもへの対応がおざなりになってしまったりする前に、そんな自分に気付いて襟を正せる力を、これからはつけていきたいと思う。

第７回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	小麦粉ねんど	平成７年１０月２８日（土） （午　後）
キャプテン名	坂本　真哉 （理科専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　３名 参加者数　　１６名
指導教官名	伊藤　武　教官	活動場所　Ｎ１０３教室

講座のねらい　一般家庭で日常的に使われる小麦粉を用いて、粘土細工を作る。そして、製作活動の中で、友達との関わりやスタッフとのやりとりを大切にし「ものをつくる」楽しさを味わってもらう。

講座の展開

キャプテン・スタッフの関わり	時間	予想される子どもの動き
＊キャプテン、スタッフの自己紹介。 ・キャプテン、スタッフを子どもたちがすぐ覚えられるようなものにする。	10	・子どもはすぐに、自己紹介はしにくいと考える。その為ここでの自己紹介はしない。
＊キャプテンからの説明。	8	
＊道具の確認。	2	
＊製作活動。 ・小麦粉と水の配分などは子どもの考えにまかせる（活動全体に子どもの主体性を尊重したいため）。 ・こねる部分は、求められたら手伝う。しかし、あくまでも「子供が作る」ということを念頭におく。 ・こねる活動が終わりそうなところで、子どもに何を作るか考えさせる。 ・色を着けすぎた子には、その濃い色で作れるものを考えさせる。それが嫌になる子にはもう一度、小麦粉をあげて作ってもらう。 ・色を混ぜる子には、混ぜた後、何色になるか考えさせたい。しかし、使いすぎる子には注意する。 ・退屈になった子には、この機会に他の子が作った物を見て回るようにさせる。この時、子ども同士のコミュニケーションがとれるようスタッフが声かけをするよう心がける。	85	・こねるのにかなり力がいると思う。キャプテン、スタッフの手伝いを求めるかもしれない。 ・何を作るか考える中で、それに応じた色などを考えるようになるだろう。 ・色のつけすぎなどをする子が出てくるだろう。 ・色々な色を混ぜたがるだろう。 ・あきた子が出てくるだろう。
＊修了証渡し、片付け。 ・製作中の子には、そのまま作り続けてもらう。	15	・まだ作っている子がいるだろう。

備考：基本的にこの講座はスタッフもキャプテンも多く子どもに関わってもらいたい。そして、ともに製作活動を通す中で、子どもを見つめてもらいたい。しかし、主役は子どもである。主役の子どもが「スタッフのお姉ちゃんに手伝ってもらってできたんだよ」というより、「私１人で作ったんだよ」と誇らしげに話せるようにするのが私の希望である。

小麦粉ねんど

坂本　真哉（理科専攻４年）

１．第Ⅱ期ＹＯＵ遊サタデーに臨む私の課題意識

第Ⅰ期もキャプテンとして関わらせていただいた。そして私は第Ⅱ期でキャプテンをするにあたり下記の点を課題にした。これは第Ⅰ期で気になっていたことであり、今後考えていく価値があるものであると思ったからである。

第Ⅱ期における課題

教育者としての子どもの活動を促す関わりとは

教育者とは私たちキャプテンや学校の先生のことのみを指すのではなく、保護者の方をも含んだグループで、子どもの学びに影響する人々全般である。そして、私が特に注目して考えたいのは共感とは一体どのようなものであるかと言うことであった。

２．子どもとの真の共感を求めて

子どもとの共感、このことは教育現場でももちろん必要とされていることである。しかし、子どもの活動を発展させていくような大人の共感とは、どのようなものであろうか。単に、大人や先生達が一緒に活動を行なうだけで達成されることなのであろうか。

答えはノーである。ただ、多くの大人は子どもと一緒に活動したり遊んだりするだけで共感が生まれるように感じる。もちろん子どもと何かを製作して完成したときの喜びや、好きなチームを一緒に応援していてそのチームが勝ったときなど、ともに「うれしい」と感じるのは共感である。また、家族で動物を飼っているような場合でも、その死と直面したときの悲しみは共感といえるであろう。確かにその場限りにおいては共感と言えるであろうが、その共感の多くは大人の時間的な都合により一場面で収束してしまう。これでは、子どもの活動の発展を促すことにはならない。ここで一歩踏み込んだ関わりが必要である。

例えば動物が死んだ場合などは、子どもの成長を促すチャンスといえる。「死」という問題は多くの課題を提示する。一つは死んだ動物の整理がある。お墓を作ることや、海に帰すこと、生まれたところに埋めることなどいろいろな展開が考えられる。このことにより、子どもはより深く動物には死が訪れると認識するであろう。「まだ子どもだから死について教えるのは早すぎるのではないか」と言われるかもしれないが、幼いうちに命の大切さを実感させていくことは、死について主体的に考えるきっかけになる。確かに愛玩動物の死が子どもに及ぼす精神的なショックは大きい。だからといって、今の社会では死のマイナスイメージばかり強調し、子どもと死を全く切り離してしまいがちである。しかし、このことが本当に良いのだろうか。隔離するのではなく、子どもに直面させることが子どもにとって必要ではないだろうか。動物が電池で動くと考えたり、おもちゃやさんで犬を探したりする子どもがいるという。これは驚くべきことではあるが、大人側が死を子どもから遠ざけた当然の結果でもある。死に直面した場面でも、大人も悲しみにのみ囚われないで、様々なことに子どもと取り組んでみるのがよいと思う。ペットの出生地を調べたり、実際に行くことなどを提案することも必要ではないだろうか。このような大人の関りで、

その子どもの学びは一匹の動物を通して多様に広がっていくのであり、日常的な生活の中でも子どもが学ぶ場はたくさんあると考える。それが私が小麦粉ねんどの講座を持つことになった理由でもある。

3．小麦粉の変化に気づいた子どもへの関り

小麦粉ねんどにおいて私が求める目的は、作品の完成ではない。作品の完成についてのみ述べることで、子どもの学びが深まるとは私は思わなかった。だから完成は達成されるに越したことはないが、むしろそこまでの過程を尊重しようと考えた。そして、子どもは意識はしないかも知れないが、「実体験として子どもに残ってくれるもの」に注目し追求した。即物的な結果が重要視されがちである中で、私の試みは保護者の方に伝わったかどうか分からないが、私は小麦粉の変化の点だけでも子どもに伝われば大成功だと考えていた。小麦粉と関る中での学びを私は下図のように捉えていた。

小麦粉の特徴についての学び

さらさらした小麦粉
↓　　水を加える
べとべとした小麦粉（グルテンの働き）
↓
固まった小麦粉
↓
ひびの入った小麦粉（乾燥）

小麦粉の変化だけでもこのような気づきがあると考える。もちろん子どもが頭で理解できるとは考えていない。特にグルテンの働きや乾燥に関したことは発達段階上理解は出来ないと考えていた。しかし、ここで小麦粉ねんどと関ったことで小麦粉の特性を肌で感じ、作る中で本来の小麦粉の働き、つまり水を入れれだ粘着性を持ち、粘着性が失われるのと同時に乾燥しひびが入る。この変化の過程をつかみ取っていたと考える。

多くの子どもが作品を家に持ち帰ったが、葉書などをいただくと「子どもはひびが入って残念そうでした。」とよく書かれていた。確かにできた作品にひびが入ることは悲しいことかも知れない。しかし、私は先ほどの動物の時にも述べたようにこの時がチャンスであり、私が狙っている部分でもある。私は、子どもが一生懸命関わった作品だからこそ悲しい気持ちになるのだろうと考える。そこで、保護者の方には子どもの気持ちに寄り添いながら、一緒に考え活動してもらいたい。保護者の方には負担になるかも知れないがＹＯＵ遊サタデーのような一回限りの講座では、お祭り的な要素が強くなりがちである。そのため、この学びを深めていっていただくのは保護者の方が中心になると考える。

4．小麦粉ねんどへの親の関り

例えば、小麦粉ねんどに関連させて親子でおやつ作りをすることはどうであろうか。小麦粉の性質を体験した上で、食べるものとしての小麦粉の働きを教えることが出来れば子どもの小麦粉に関する認識はよりいっそう深まるであろう。小麦粉はうどん作り、クッキー作りなどにも使われ、こねる作業が中心である。特に、幼児期においてはこねる作業は

楽しいものであり、成長を促す活動にもなりうる。その場では分からないことかも知れないが、大人側も即時的な成果を期待するのではなく、長期的な目で子どもの成長を見つめ、子どもに場面に応じた共感をし、次のステップを提示していくことが大切である。これが子どもの学びをより豊かにすることにもつながると考える。

私が小麦粉ねんどの講座を通じて考える教育者の関わりとは、「一場面のみの結果に執着しない、子どもの気持ちにそった共同活動」であると考える。とかく今の社会はすぐに結果を求めがちである。小麦粉ねんどの講座でも形を作ることを全員に課したのではあるが、強制はしなかった。確かに形を作ると成果をすぐに見ることが出来ていいように感じられる。反面、先ほども述べたように作った結果ばかりを強調していると子どもの活動は閉鎖的なものになってしまう。

形を作ることと、ものを創造することは、重なる部分はあるが同じものではないと考える。しかし、この二つのものが同質と考えられている風潮がだんだんと強くなってきているように感じる。そのため創造活動であるはずのものが作品の完成に重点をおいたもののように子どもが捉えてしまい、子ども達は失敗という不安に囚われながらの活動になりがちである。第Ⅱ期において２回講座を持たせてもらう中で、一から十まで聞いてくる子を多く見かけた。そして、この傾向は保護者の方にもあるように感じた。今の子どもは失敗は良くないことだと考えがちである。しかし、失敗とは汚点であろうか。むしろ失敗の中でのみ人間は成長を遂げるのではないだろうか。小麦粉ねんどは修正を何度でもできるし、形はいくらでも変えられるものである。

あるお母さんの感想文に私の考えと共通するものがあった。このお母さんは、自分の子どもが形を作らないことに心配されていたらしい。しかし、私が見ている限り子どもを焦らすような様子もなく子どもの自主性に任せ、キャプテンのほうがそんなに服を小麦粉だらけにしていいのかなと感じていたほどだった。このように小麦粉に関わっていただけのように見えていた子も最後には作品を仕上げたのである。講座の終了間際になって子どもが「ママ、からあげが出来たよ」と見せてくれたとき感動した、とそのお母さんは述べられていた。　ここでどうして人を感動させるようなものを造ることが出来たのだろう。この子の作品は全く知らない人が見たら何か良く理解できなかったものである。しかし、そのお母さんが感動するような物が出来たのは、このお母さんが子どもの納得行くまで小麦粉ねんどに触れさせたから可能になったのではないだろうか。そしてお母さんが最後まで子どもにつきあったからこそ、本当に子どもが作りたいものが出来たのではないだろうか。もし途中で「～を作ればいいじゃないの。」などといって方向づけを強引に行なっていたらどうであろう。きっと子どもの気持ちは作品に入らなかったように思う。

５．子どもの活動を促す関わり

創造的なもの作りに取り組む場合、失敗を恐れさせるのではなく、大人が考えるとつまらないことでもできる限り実現できるように働きかけることの重要性について実感した。子ども達は、その素材と十分に触れ、納得できるまで関わったならば、自分の表現したいものが表出できるようになると考える。そして、先ほど述べたお母さんのように、子どもの活動を精神的な面において保障し、安心感を持たせるような姿勢で臨み、かつ子どもの活動の意欲を失わせることなく支援していく必要があると考える。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	竹とんぼをつくろう	平成７年　５月２７日(土) （午前・午後）
キャプテン名	吉澤　正彦　（社会専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　１４　名 参加者数　４６　名
指導教官名	小林　詢　教官	活動場所　Ｎ１０２

講座のねらい　小刀を使って竹とんぼを作ることを通して次の３つについて経験をさせたい。小刀を正しく使うことができ、刃物の特性を知ることができる。竹の性質を実感することができる。自分の作った竹とんぼで工夫して遊ぶことができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習内容	教材
'15	導入	・自己紹介をする。 飛ぶ竹とんぼと飛ばない竹とんぼについて原因を考える。 ・材料の竹について知る。 竹の性質（割れ方、硬さなど） 竹の生えている場所など ・小刀の使い方を学ぶ。	・竹とんぼを実際に飛ばし紹介する。 ・棒の長さを変えた竹とんぼを用意しそれぞれ飛ばし違いに気づかせる。バランスによって飛ばないことがあることをわからせる。 ・安全指導は念入りに。 ・基本的な小刀の使い方の注意 実際に１本作りながら具体的に注意する箇所を挙げていく。 左手の親指で小刀を押す。 ・竹の幅を狭くしないよう注意する。	竹とんぼ 小刀
'45	製作	・竹とんぼをつくる。 ・正しく小刀を使う。 ・竹を削りながら竹の硬さを実感していく。 ・けがのないよう、周りを注意しながら ・小刀を使う。 ・よりよく飛ぶよう工夫する。	・２、３人に分かれ、スタッフがそれぞれのグループで指導を行う。 ・常に安全面に気を付ける。 ・黒板に注意事項を貼っておく。	材料
'40	遊ぶ	・自分でつくった竹とんぼを飛ばしてみる。 周りの安全に気を付けて飛ばす。 友達と飛ばし比べてみる。 飛ばし方を工夫してみる。 距離、高さ、時間など	・周囲に気を付けて安全に飛ばせるよう配慮する。 ・飛ばない竹とんぼについては個別に指導する。	
'10	まとめ	・そうじ、後片付けを全員で行う。 ・小刀が他のことにも使えることを知る。 ・鉛筆削り、りんごの皮むき等 ・修了証を渡す。		
'10		・感想をアンケートに記入		

特に安全面に注意をする。
小刀による切り傷、竹のささくれがささるなどの事が予想されるので子どもを安心させ応急措置をしてやる。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	しめなわをつくろう	平成7年 10月 14日(土) (午後)
キャプテン名	吉澤　正彦（社会専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　2 名 参加者数　2 名
指導教官名	小林　詢　教官	活動場所　N102

講座のねらい

わらを使ってしめなわを作ることを通して、お米をとったあとのわらの利用について知り、昔の人の知恵にふれる。

講座の展開

子どもの学習活動	キャプテンの学習指導	教材
自己紹介をする。 稲作について学ぶ。 米をとったあとのわらを利用しているものについて見ていく。 ・しめなわ ・なわ ・ぞうり	わらを利用したものを見せる。 ・しめなわ　・わらじなど ・なわ ・ぞうり	・ぞうり ・なわ ・わらじ ・しめなわ
わらたたき わらをたたきやわらかくする。 なわをなう。	・実際にやってみせる。 全員ができるようになったところで、しめなわを作っていく。 わらをむだにしない。（くずにしない。）	・わら ・つち
しめなわをつくる。 しめなわができたら、なわをどんどん長くなっていく。	・実際にぞうりをつくってみせる。	
後片付け 修了証をもらう。	・修了証 を渡す。	

竹とんぼをつくろう・しめなわをつくろう

吉澤　正彦　（社会専攻　4年）

1．講座のねらい

現代の子ども（自分たちの世代を含めて）にとって、昔から生活のなかにあるものを経験することは、難しくなってきている。今回講座を開くことにした「たけとんぼ」は、その代表的なものである。5月に行なわれたＹＯＵ遊サタデーでも、午前と午後であわせて50人以上の参加者があり、「たけとんぼ」というものは知っているし、やりたいと思っているけれども、なかなかその機会が無いということを感じた。また「しめなわ」についても、家には飾ってあるものであるが、藁を手に入れることが困難であったり、作り方を知らなかったりして、店で買ってくるほうが簡単であり、自分の家で作るということがなくなってきている。このような現状であるので、興味のある子どもたちに、ひとりでも多く経験をしていってもらいたいと考え、この講座を開いた。

2．素材について

「たけとんぼ」は、今の子どもたちでもよく知っているが、実際に作ったことはあまりないので、非常に興味を持ちやすいものである。教育実習の時に図画工作の授業で「たけとんぼ」を作ったが、ほとんどの子どもたちが興味を持ち、中には２本目、３本目を作る子どももいた。また、今の子どもたちは小刀で鉛筆を削ることもなくなり、全体に刃物を使うことが下手になってきているが、１本の竹があれば 100本以上材料を取ることができ、そしてたくさん削るところがあるので、「たけとんぼ」を作ることは、小刀を使うことに慣れるために有効であると考えた。そして自分で作った竹とんぼを飛ばすことで竹とんぼができたという充実感を味わえる。

また、ＹＯＵ遊サタデーで、竹とんぼ以外にも藁細工で講座を開きたいと考え、わらぞうり作りをしたかったが、２時間という限られた時間の中で子供たちが落ち着いて取り組み、作品を完成させることができるには難しいと考え、わら細工の基本的な部分である縄をなうことも含めて、しめなわを作ることで、「わら」に触れてもらいたいと考えた。

3．子どもの様子

5月に行った「たけとんぼづくり」では、参加者にアンケートをしてもらった。

1、今日の講座は楽しかったですか

楽しかった　４４人　　普通　３人　　楽しくなかった　１人

2、竹とんぼを作るのは、むずかしかったですか

かんたん　３人　　らくちん　１人　　普通　９人　　むずかしかった　３５人

3、自分の作った竹とんぼは飛びましたか

よくとんだ　２５人　　まあまあ　２０人　　あまりとばない　３人

とばない　１人

ほとんどの子供たちが楽しかったということで、この点に関しては良かったと思う。竹とんぼを作ることをむずかしいと感じた子どもが約７割いたことは、ある程度予想通りであったが、やはり普段から小刀を使っていないので、慣れていないということを感じた。難しいことではあったが、それだけに完成させることができ、飛ばすことができたときの喜びは大きかったと思う。子どもたちの感想では、「たけとんぼをつくるのは、はじめてだけど、苦しくって、つくっているときできないと思ったけど、つくりおわったらうれし

かった。もういっかいやりたい（４年男子）」「はじめてこがたなをつかって、だいじょうぶかしんぱいだったけれど、けがをしないでできたので、うれしかった。おしえてくれたおにいさんありがとうございました。（３年男子）」「すごくたのしかった。左おやゆびがいたかった。でも３つつくれました。またやりたいです。（４年男子）」「作るのはむずかしかったけど、できたときはうれしかった。（５年女子）というように、最初は今までに経験のないことなので不安だった子どもたちも、竹とんぼを完成させることができ、それが「たのしかった」「またやりたい」という言葉に現れている。

９月に行った「たけとんぼづくり」では、幼稚園の年長の２人が参加したが、小刀を使うことを怖がらずに、竹とんぼを完成させていき驚かされた。安全に気を付けて正しい使い方を指導してあげればできるということで、新しい発見であった。

「しめなわ」では、全員が縄をなったこともないという状態から始めたが、時間の終わりまでには自分のしめなわを作りあげ、なかには２本３本とつくっていく子どもたちもいた。この「しめなわ」は、竹とんぼと違って、作ったあとに遊んだりということがないので子どもたちの反応が気になっていたが、最後のほうで「もう時間だから」と言っても、もっと作りたいといっている子どもたちもいて、反応はとても良かったと思う。

４．感想

「たけとんぼ」「しめなわ」共にどちらかといえば地味なことであるが、今の子どもたちにも十分に受け入れられ、興味を持って取り組むことのできる対象であると感じた。今の生活の中で、直接すぐになにかの役に立つというものではないけれど、「たけとんぼ」や「しめなわ」をを作ることを通して、今までできなかったことができるようになったという達成感を味わうことができればいいのではないかと思う。そしてなにかのかたちで役に立ってくれればと思う。

第（4）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	やさしい木工教室	平成7年　5月 27日(土) （終日）
キャプテン名	片桐　宏　（技術専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　10　名 参加者数　11　名
指導教官名	杵渕　恭宏　教官　　北澤　競　教官	活動場所　S館地階木工室

講座のねらい

本立ての製作を通して、木のぬくもりやにおいを体で感じたり、試行錯誤しながら木工道具を使ったりして、木材工作の楽しみを経験する。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの活動内容	キャプテン・スタッフの援助内容	教材
9:30 9:40	準 備	◎　自己紹介（今日の抱負も交えながら） ◎注意事項を確認する	・「やさしい木工教室」の趣旨の説明 ・子ども→キャプテン→スタッフの順番に自己紹介をする。 ・サンプル品を見せながら、大まかな製作順序を説明する。 ・全体的な注意事項を確認する。 ①周りの機械や道具にはさわらない。 ②のこぎりやげんのうの扱いには十分注意し怪我をしないようにする。 ③わからないことがあったらスタッフのお兄さんやお姉さんに聞く。	・サンプル ・注意事項をかいた模造紙
9:50 途中適宜休憩や昼食を設ける	製 作 活 動	◎マンツーマンによる本立ての製作をする	★マンツーマン指導の原則 ①安全第一（絶対に怪我はさせない！） ②作品を修正するのはなるべく最終の段階のみにして、子どもにできるだけ多く体験活動をさせてあげる。 <製作活動について> ・全てスタッフに一任する。別紙マニュアルを参考のこと。 1．子どもの意見を尊重しながらも、与えられた板材の範囲で完成できる本立てを一緒になって考えてあげる。 2．けがきはスタッフが行う（寸法取り以外は子どもにも経験させてもよい）。 3．切断にあたっては、スタッフが必ず示範し、板材の端を使って練習させてあげるようにする。切断線は5㎜間隔で2本引き多少曲がってもダイナミックに活動させてあげる。修正はスタッフが行う。	・材料 ・木工道具各種

			4．緊結の際も、スタッフが必ず示範し、その後子どもに経験させてあげる。板の固定援助は必ずスタッフが行う。 5．サンドペーパーで素地磨きを行う。 6．時間があれば塗装を行ってもよい	
最終 14:25	ま と め	◎後片付けをする ◎アンケートに記入をする ◎完成作品と今日一日の感想を発表する	・後片付けをし、アンケート記入を行う。 ・作品と感想の発表を子ども→スタッフの順序で行い、スタッフが修了証を渡す。 ・写真撮影をする（個人と全体）。 ・今後の塗装方法についての説明をする。 ・見送り	・アンケート用紙 ・修了証

やさしい木工教室

片桐　宏（技術専攻　4年）

1．授業づくりの着想とねらい

昨年度のアンケートの中で、「来年も開講してほしい」との声があったのでそのニーズに応える形で本年度も「やさしい木工教室（以下「木工教室」と略称する）」を開講するに至った。参加者は定員の１０名で、断りの電話を入れるくらいの盛況ぶりに驚いた。さて、昨年度は半日で「本立て」を完結するという強行な日程であったため、アシスタントの学生が手助けをする場面が多く、子どもたちが活動できる時間が少なかったのが実状であった。今年度の木工教室は、①今日、高度な物質文明に陶酔している子どもたちに、木のにおいやぬくもり、「手作り」製品の良さを感じてもらう、②日頃は味わうことのできない本格的な木材工作を通して「世界でたった１つだけの本立て」を作ることの楽しさ、素晴らしさを感じてもらう、③関わる学生一人一人が子どもたちと作品の設計から完成までの「時間」と「空間」を共有する中で、自分のプラスになることを吸収する、を「教育的なねらい」とした。この「教育的なねらい」が成立する前提として、①子どもたちの「安全」が第一に保証されている、②肩肘を張らずに「モノづくり」の楽しさを子どもたちとスタッフが共に共有できる、③子どもたちの「こんな本立てにしたい」という欲求に十分に応えうる技能面のバックアップが可能である、が満たされなければならないので、昨年度と同様、技術専攻３・４年生の同士の協力を得て、マンツーマン指導を行うこととした。

2．木工教室での子どもたちへの具体的な対応や考え方

スタッフには「学習指導案」と「スタッフマニュアル」を配布し、木工教室における子どもたちへの具体的な対応方法についての共通の理解とした。以下、「スタッフマニュアル」から抜粋する。

◆子ども１人に１枚の杉材が与えられます。この板材の範囲内でののこぎりびきの練習から本立ての製作までを行います。余分な材料は多少用意してありますが、平等にするために、「１人１枚」の板材を使用することを原則にします。

◆やさしい木工教室講座の段取り

① 片桐からスタッフの順に自己紹介をします。
（学年・氏名。できたら意気込みを子どもに伝えていただくとうれしいです。）

② 子どもたちが順に自己紹介をします。

③ 片桐がやさしい木工教室の主旨を説明し、サンプルを見せながら作業の段取りを説明します。

④ 誰がどの子どもを担当するかを発表し、全体的な注意事項を確認します。尚、誰がどの子どもとペアを組むかは、片桐に一任させてください。

⑤ ペアの子どもと顔合わせをします。簡単な会話で子どもたちの緊張をほぐしてあげてください。

⑥ いよいよ作業開始です。この講座の目的は子どもたちにのこぎりびきやげんのうの扱い方など、いわゆる「技能」を教えるのではなく、一枚の板から本立てを作るプロセスを通して、木のにおい（杉はかなり独特なにおいがします）や肌触りを味わいな

がら木材工作の楽しみを経験させてあげることです。従って、けがき線から多少曲がっても問題ありません。我々学生はあくまでも助言・補助役です。うまくいかなくても、おこったり放ったらかしにしないで、やさしく励ましてあげてください。作業をしながら子どもとつまらぬ会話をしたりするのもなかなか経験できないことだと思います。やさしい木工教室開講中はペアを組んだ子どもとどう接してもかまいません。初対面の子どもとコミュニケーションをしながら今日一日が楽しい時間でありますように．．．。なお、言うまでもなく、安全第一です。けが人がでることは絶対に許されません。安全への配慮は決して怠らないでください。

⑦　具体的な作業については、スタッフ一人一人に一任します。技術科学生の腕のみせどころでしょう。恐らく保護者や様々な人の見学が予想されます。では、以下、どうしても徹底しておかなくてはならない点について補足を加えます。

1．本立ての構想を考えるときは、具体的な大きさまで子どもと一緒になって考えてあげて下さい。その際、のこぎりびきの練習をしたり、後々の修正する切りしろまで考慮にいれてあげないと、思ったよりも小さくなってしまいます。

2．差し金・スコヤを使って木取りを行う際は、原則としてスタッフが行って下さい。ただ、子どもが興味を示したり、やりたいなという表情をしていたら、スタッフの判断で経験させてあげても構いません。ただし、フォローはスタッフがしっかりと行って下さい。

3．材料の切断の際には、まず最初に、スタッフがのこぎりびきの示範を行ってください。いきなり経験させてあげるのも構いませんが万一けがをされた時は．．。また、スタッフの判断で、のこぎりの構造や切削原理の説明をしていただいても構いません（しかし、これに重点を置く必要はありません）。なお、切断線を示すけがき線は５㎜くらいの間隔で２本引いてあげると子どもにとっては許容誤差が示されるわけですので、リラックスした気分でのこぎりびきができます（前回の木工教室で実証済み？！）。子どものやる気や力加減などと相談しながら、何回かのこぎりびきを練習させてあげるとよいと思います。その際、ほめてあげたりすれば子どもはもっとやる気を出します（これも前回で経験しました）。

4．切断線が大きく曲がったりしたら、スタッフがのこぎりで修正をしたり、昇降盤でカットしてあげてください。尚、子どもたちには絶対に昇降盤を使わせないでください。

5．側板を糸のこで好きな形に穴ぐりしたり切断したりしたいという子どもがでてくることが予想されます。学校によっては糸のこを使った工作をしているところもあるようなので、糸のこに限っては子どもに経験させても構いません。ただ、スタッフが危険だと判断したり、難しい曲線を切断する場合には、スタッフが作業を行って下さい。こどもに糸のこを使用させる前には十分に説明を行い、スタッフが示範を行った上で細心の注意を払って作業させてください。なお、糸のこの刃が折れてしまうことのないように、お互いが確認しあってください。

6．背板は指定のもの（片桐が用意します）を子供の作る本立ての横の長さに合わせて切断して使用して下さい。数に限りがありますので、その辺りは融通していただくと大変嬉しく思います。

7．サンドペーパーでの素地磨きは、組み立てる前にある程度済ませておいてください（この方が作業効率の面から言って大変楽との北澤先生からのご指導です）。糸のこが混み合うことが予想されますので、その間にサンドペーパーを子どもにかけさせても良いでしょう。

8．組み立て時には釘を用いますが、げんのうの扱い方についてもスタッフが一度示範してあげてください。きりで下穴を空けるのはスタッフが行って下さい。子どもに経験させても構いませんが、今回の講座で用いる木工道具の中でもかなりの危険度があるので、先端を人にむけたりしないなど、安全面には十分に配慮して下さい。組み立て時には固定援助をしてあげて下さい。最後は、スタッフが釘締めを行ってください。

⑧　今回も塗装の時間はとってありません。塗料は若干用意してあります。時間の許す限り塗装をしていただいても結構です。なお、塗装の方法については、片桐が多少コメントする予定でいます。

⑨　子どもたちには１日がかりの講座になる旨を知らせてあります。休憩時間を適宜入れながらのんびりと木工教室ができればなと思っています。なお、進行状況によっては、作業を一時中断して、みんなでまとまって生協で昼食をとることも考えています。

⑩　慌てたり、妥協しすぎたりして、作品が雑にならないようにして下さい。失敗を修正するのはスタッフの役目です。子どもたちには、帰ってからすぐにでも使える見栄えの良い本立てを持ち帰らせてあげたいからです。少しくらいの曲がった切断痕を残すのも良いでしょう。仕上がりの程度も子どもとよく相談してお互いが納得した上で完成させてほしいと思います。

⑪　最後に全員で片づけをした後、子ども→スタッフの順に感想を発表しながら作品を見せ合い、スタッフとともに記念写真を撮影し、片桐が総括して、やさしい木工教室は閉講します。最後に、図書館前で記念写真を撮影して、子どもたちを全員で見送ります。

（補足）その他、北澤先生からご指導いただいたこと

- 斜めに切断する際は、無理してのこぎりでやらずに昇降盤を用いた方がよい。
- 釘での緊結にはつぶし釘を用いるとよい。
- 子どもの発達段階に応じた指導をすること。年齢、力加減、体格などを考慮して無理はさせない。
- 遊びではないのだから、けがは絶対にさせてはいけない。
- 何か教育的な価値をこの講座から学生一人一人がくみ取れればよいのではないか。

やや詳しく段取りを記述したのは、今回新たに加わったスタッフを考慮したためである。子どもたちの安全を守るために、危険が予測されるところは特に注意を促したつもりである。なお、「安全」への配慮は、子どもたちが楽しくしかもダイナミックに活動できるための必要最低条件であり、将来教壇に立った時、技術科教師が常に念頭に置かねばならないことでもある。当日は、とても和やかに楽しい雰囲気の中で木工教室を行うことができ

たが、全員無事故だったのは、どの学生の中にも「自分は怪我をしても、子どもたちにだけは．．」というピリピリとした緊張感がどこかにあったからだと思う。そして、１対１の完全なマンツーマンの指導形態をとることによって、学校や友だちの話をしたり、一緒に食事をしたりと、子どもたちに本当の意味で寄り添うことができたのではないかと思う。「小学生は遊びを通して子どもを理解する」と教育実習の中で指導を受けたが、今回の木工教室を通して改めてその大切さを痛感した。

３．子どもから学ぶ ― 「夢中」になれること

初対面の子どもと１対１で１日接する機会はめったにはないと思う。その中で子どもの様々なしぐさや表情を見ることができた。子どもが何かを欲している時、材料や道具に向ける眼差しは真剣で、自分から進んでやろうとする意欲が伝わってくる。逆に、退屈になってくると集中力がなくなり、視線は教室の外や他の子どもの方へ向いてしまう。そして、作品が完成近くになると、満面の笑顔でむきになってまでやすりがけをする。子どもが楽しそうにのこぎりをひいたりやすりがけをしているところを見ていると、嬉しくなって「心が洗われる」感じがした。子どもが夢中になれる ― 私はここに創作活動の一つの源があるのではないかと思った。興味や関心を示さなければ「夢中」にのこぎりなんかひかないだろう。何かを自ら求めなければ「夢中」にやすりがけなんかしないだろう。「夢中になれる」ことが、もっと教育活動の中でできたら．．．そんなことを痛切に感じた１日だった。

４．「本立て」の教材観

本立ては、小学校の図画工作科や中学校の技術・家庭科「木材加工」領域において扱われ、木材工作ではオーソドックスな題材になる。本立ては、基本的には「底板」、「側板」、「背板」の３つの部品により成り立っている。一枚の板材を「底板」と「側板（２枚）」の３つに切断し、背板とともに緊結すれば最も単純な本立てができる。この「単純な部品構成」ゆえにアレンジ方法は何通りもあり、当日１０人の子どもの作った本立てはどれ一つ同じものはなかった。「糸のこ」を使って側板に模様の穴をあけたり、二重スライド式の本立てにしたりと見ているだけでも楽しく感じた。今回は製作時間を一日にし、一人当たりの材料もいくらか多めにしたので、子どもたちの希望に添った本立てができたのではないかと思う。今回は本立てを家に持ち帰ってすぐに使えるようにしたので、子どもたちは、はりきって製作に取りかかっていた。

５．反省と今後の課題

子どもたちの迎えに来られた保護者からのお礼の言葉、子どもから直接お礼の手紙をもらったことなどを考えると、子どもたちに喜んでもらえてよかった、というのが率直な感想である。残念ながら指導した学生が木工教室からどんなことを得て、どのように感じたかは推測することはできない。木工教室はまさに「体験的学習」の指導による「実践的力量」を形成する場にふさわしく、しかも技術専攻の学生として自分が身につけた専門的な知識や技能を試す絶好の機会であったと思う。企画者である私をも含め、指導に携わった学生一人ひとりが、この経験をどこかで生かすことができれば、この講座を開講した意義があるのではないかと思う。残念ながら、昨年以来残された課題は改善の域を脱することはできなかった。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	紙ってすごい （ブローチ作り）	平成７年　５月２７日(土) （終日）
キャプテン名	橋詰　並子　（英語専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　４～５名 参加者数　２０名
指導教官名	伊原　巧　教官	活動場所　Ｎ２０４

講座のねらい

和紙を使ってブローチやはし置きを作る場面で、ボンドを用いて紙をはったり、つや出し液をぬることを通して、身近な紙も素敵な小物に変わることを知り、工作する楽しさを知ることができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
１０分 ４０分	導 入	・見本のブローチを見て、目標を知り意欲を持つ。 ○ブローチ作り① ・和紙を切る。 ・ﾎﾞﾝﾄﾞでブローチ台にはる。	・キャプテン・スタッフの紹介。 ・のりしろの取り付け方に十分注意させる。 ・紙をはる際には大きなしわができないように注意する。 （示範及び各スタッフによる指導）	・見本のブローチ、和紙、はさみボンド、ブローチ台
４０分	展	○はし置き①（ブローチ乾燥へ） ・牛乳パックの棒に和紙をはる。	・和紙のはり方を説明する 。	・牛乳パック、和紙ボンド
		昼食　ボンドを乾燥させる		
５分 １５分 ２５分 ２５分 ５分	開	○ブローチ作り② ・ブローチにつやだし液をぬる。 ○はし置き② ・①の牛乳パックを結びはし置きを作る （はし置きにつやだし液をぬる。） ○ブローチ作り③ ・つやだし液をぬる。 ○はし置き③ ・つやだし液をぬる。 （牛乳パックの再利用について） ○ブローチ作り④ ・つやだし液をぬる。 ○はし置き④ ・つやだし液をぬる。 （模造紙によるギフトバック作り） ○ブローチ作り⑤ ・両面テープで紙をはったブローチ台と飾り部分をはりつける。	・指紋を付けないようにする。 ・牛乳パックの結び方は分からない子がでないように一斉に行う。 ・つやだし液を用いる際に、十分換気する。 〔乾きづらい時にはドライヤーを使用する。（スタッフによる）〕	・つやだし液
１５分	まとめ	・感想用紙・アンケート等を記入してもらう。 ・片付け		

紙ってすごい（ブローチ作り）

橋詰　並子（英語専攻　4年）

1．授業づくりの着想とねらい

「とにかく出来上がってびっくりするような物を子どもと共に作りたい。」と願うことから私のＹＯＵ遊サタデーは始まった。そして、紙を使ってブローチを作る講座を開こうと思いついたのは、自分が幼い頃に母と一緒にこのブローチを作り大変感動し、今でも大切に持っているという自己の体験によるものである。

ブローチの台になる部分に和紙を貼り、つや出し液を何回か塗ることにより、紙がまるで七宝のような輝きを持つ。その驚きを伝えたいと思い本講座を開講した。紙に光沢を持たせるためには、最低でも３回はつや出し液を重ね塗りする必要があり、またつや出し液を十分乾燥させる時間も必要である。その時間を使って牛乳パックを活用した箸置き作り、わら半紙によるギフトバック作りにも挑戦することにした。

牛乳パックを使うに当たってはリサイクル、また、ギフトバックを作るに当たっては、一度使われただけで捨てられてしまうデパートの包装紙や広告紙にもう一度目を向けてもらうきっかけになれば・・・自分達の身の回りにある紙について考え直す契機になってくれれば・・・と願いながら取り扱った。

今回はあくまでもブローチを作ることが中心であったが、その中で「紙」という“もの”自体への関心を広げてもらいたいと願い本講座を開講した。このことは私にとっても、教科という枠組みを超えた教育、またGrobal Education を目指すステップ的要素でもあった。

2．生徒指導について－体験的学習での児童・生徒への具体的な対応や考え方－

本講座への参加者は２０名であったが、その２０名を４名づつ５つのグループに分け、それぞれにスタッフがリーダーとしてついた。スタッフには「子どもと共に楽しむこと」を目標としてもらった。最初は表情が堅かった子どもたちではあるが、ブローチの完成に近づくほど和やかな雰囲気になり、スタッフも含めグループ全体で盛り上がっていく様子がうかがえた。また、今回は一日の講座であったため、昼食を全員で食べ、その後グランドに行き、皆で遊ぶ時間をもつことができた。これが幸いしたのか、特に午後になってから子どもたちの間でも活発な動きが見られた。

ブローチの柄となる和紙や牛乳パック、わら半紙は子どもが自由に使えるようにと思い、できる限り多めに準備しておいた。そんな中で「お父さん、お母さん両方にプレゼントしたいから」とギフトバックを２個作った小学校２年生の女の子の姿が大変印象的であった。この他にも子どもたちからはいろいろな願いや相談があったが、スタッフが親身になり対応してくれ、共に活動したことが良い結果を生んでくれたと思う。また、ブローチが完成に近づくと、積極的な子どもは「見て！見て！」とブローチを見せにくる。その反面黙々と取り組んでいる子に「きれいにできたね」と声をかけると、とても嬉しそうな笑みを返してくれた。当たり前のことではあるが、どんな小さなことでもその結果を評価すること、声をかけることの大切さを認識させられた。

3．教職観について－教職への抱負－

教育実習を経験して私が感じたことは、とても単純ではあるが、子どもたち、生徒たちの喜ぶ顔が見たいということであった。教材を準備するのも、授業の構想を練るのも、ただその一心であった。しかし、内容にむらがあり、自分の未熟さを感じずにはいられなか

った。今回のＹＯＵ遊サタデーもただ子どもたちの喜ぶ顔が見たくて開いたといっても決して過言ではない。内容も自分の興味を広げたものだったので、比較的やり易かったといえる。それを学校教育の中にも広げていける力量を身につけたいと思っている。これからも教職に携わっていく原動力となるものは、やはり子どもたち、生徒たちの喜ぶ顔が見たいということであろう。そして、そのために私ができることは、これからも私自身が様々な事を経験し、感動し、人間的に豊かな人物になることではないだろうかと思っている。

４．今回の講座の反省

ブローチが良い思い出になってくれれば、身近にある紙をもう一度見直してくれればと思い開講した本講座であるが、「いい思い出ができた。」「紙でいろいろなものが作れることがわかっておもしろかった。」という感想を読み嬉しく思わずにはいられない。また、今回はスタッフの方々が私の目指すものをいち早く理解してくれ、積極的に子どもたちと関わってくれた。スタッフの方々に改めて感謝したい。私は一つのことに夢中になるとつい他の事には目が行き届かなくなる傾向がある。何事も余裕をもってた対応できるよう余裕のある人物になって行きたいと思う。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	ペーパーグライダーを飛ばそう	平成7年 9 月 9日(土)（午前）
キャプテン名	丹羽 則之（技術専攻 4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数 4名 参加者数 19名
指導教官名	高 哲夫 教官	活動場所 N103

講座のねらい

画用紙を使って飛行機作ることを通して、工夫すればうまく飛んだり、長く飛んだりすることに気付き、簡単な遊び道具を作る楽しさを知ることができる。

講座の展開

時間	子どもたちの学習内容	キャプテン・スタッフの学習指導	教材
１０分	○自己紹介をする ・学校、学年、名前をキャプテン、スタッフ子どもたちの順に自己紹介をする。	○子どもたちの緊張をほぐし、和やかな雰囲気作りを心がける。	
８０分	○見本を見て、作り方や今日の注意の説明を聞く。 ・各自、実際に画用紙を切り、はりつけ、作ってみる。 ・できた人から飛ばしてみる。上手く飛ぶように工夫したり、飛ばし方のコツを練習したりする。 ・早くできた人は、もう１機作ったり、色を塗ったりする。	○見本を見せ、作り方の簡単な説明をする ・はさみ、カッターなどを使うので事前に十分注意しておく。刃物の使用中は子どものそばについて見てやるようにする。 ・上手く飛ばない子どもには、どこを直せばよいかアドバイスをしてやる。 ・もしけがをしてしまったら、素早く処置をしてやるようにする。	見本 画用紙 ｶｯﾀｰﾅｲﾌ はさみ ボンド 色鉛筆 新聞紙 ｳｴｯﾄﾃｨｼｭ 電話帳 絆創膏 賞状 ｽﾄｯﾌﾟｳｫｯﾁ 巻き尺 布ﾃｰﾌﾟ ｱﾝｹｰﾄｶｰﾄﾞ
２０分	○飛行コンテスト ・各自の作った飛行機を飛ばし、距離と滞空時間の両部門で競い合う。	○飛行コンテストを実施し、飛行距離と滞空時間の２部門で３位までに賞状をわたす。 ・アシスタントスタッフの人に記録係をしてもらう。	
１０分	○感想・まとめ ・各自、アンケート用紙を記入し、修了書をもらう。	○アンケート用紙を配布し、感想を書いてもらう。 ・時間があるようだったら発表してもらう	

ペーパーグライダーを飛ばそう

丹羽　則之（技術専攻　４年）

１．講座づくりの着想とねらい

既成の画用紙を使って物を作ったり、できあがった物を工夫してよりよくする楽しみなどを知ってほしいと思った。そして、子どもの興味を引く講座名にするために、土井先生や実行委員長の渡辺君と相談する中で、「ペーパーグライダーを飛ばそう」と決めた。９月と１０月、それぞれに小学校３年以上で２０人、という募集内容にした。その理由はハサミやカッターなど刃物を使うこととアシスタントスタッフの人数にも限りがあるのでこのように判断したのである。この講座を行うに際し、社会専攻２年の中村典史君に全面的に協力してもらい、事前準備なども手伝ってもらった。

応募状況は、自分の予想以上に好評で、９月は当日参加も含め小学校２年生から６年生まで満員の２０人、１０月は、小学校１年から父母もいれて２１人という盛況ぶりで、うまく行くかどうか少々不安でもあった。

２．子ども達への対応、指導について

まず９月の時は、事前に夏休みなどが入ってしまいアシスタントスタッフの人との連絡がうまくいかずほとんど全員がぶっつけ本番でペーパーグライダー作りへと入ることになってしまった。また、自分でも１度しか作ったことがなく、子ども達がどんなところで戸惑い、うまく行かないかなど、把握できていなく、適切な指導ができない部分もあった。しかし、アシスタントスタッフが中村君を含め４人いたという事で子ども達への対応もスムーズにできたと思う。ただ刃物を使うので、その際に充分すぎる程注意してほしいとアシスタントスタッフや周囲の人にもお願いしておき、そのお願いがあってか、大きな怪我が無く終われたのだが、一人の子どもが小さな切傷をしてしまったのが残念でした。

次に１０月の時は、当日、用意のため中村君が参加できないというので充分理解しているのが私一人というので不安でした。さらにアシスタントスタッフが二人ということでスタッフ不足で刃物の心配もありましたが父母の方が何人かおられるというのでその子どもは安心できる部分があったのと、前もってアシスタントスタッフにもペーパーグライダーを作ってもらったり、１回やった経験により、必要以外の線を消したり、どこで戸惑うか多少なりとも把握できておりその点で指導はしやすく感じました。ただ９月の時に子ども達が喜んでいた飛行コンテストが、学校の駐車場の関係で行えなかったのが残念ですが、自分達で何回も飛ばしてみたり、他人の飛ばすのを見たりしている中で、どうして飛び方が違うのか考え、様々な工夫をこらしている姿がみられ、それがうまくいくいかないにかかわらずよかったと思う。

３：自己目標・自己課題

９月には既製品をそのままコピーして使ったので、不必要な線や部品などもあったが、１０月はその点を配慮して原紙を作ったので戸惑うことも少なかったように思う。また、１０月にはアシスタントスタッフの人にも事前にグライダーを作ってもらったので、少な

いスタッフでもスムーズに行った。このように充分な事前準備の重要性に改めて気づいた講座でもあった。

さらに9月に一人の子が切り傷をしてしまった。日常何も気を付けずに自分達が使っているはさみとカッターでも、子どもが使うと非常に危険であると感じた。ただ刃物の怖さというのは身をもって知らないと分からないものであると思うが、どこまで注意しても注意しすぎることはないと気づかせてくれた。さらにこの怪我はグライダーを作っていての怪我であり、ふざけあって刃物を振り回すようなことが全く無かったのでこの点では良かったと思う。

さらに、実際にグライダーを飛ばし始めてからは、こちらの想像以上の改造を加え工夫してよく飛ぶようにしている姿がみられたので、講座のねらいも達成できたように思う。

4．反省

まず初めに9月、10月ともに、参加してくれた子が少なくとも1つはペーパーグライダーを作れ、一応飛んだという事はよかったと思う。また、数々、面白い発見ができたのもよかった。というのも、うまく飛ぶようにしようと思うと自分達の感覚では丁寧に線から切り取り、きっちりと接着した方がいいと思うのだが、そうしている子どももいるが、あまり線など気にしないで切り取っていた子のグライダーが意外によく飛んだのにはかなり驚いた。また、うまく飛ばないといって翼を半分に切ったり、おもり用のクリップを10個以上つけて飛ばしてみたり、自分達と子ども達との感覚のずれが想像以上で面白かった。そういう子どもならではの感性というのを大事にしていってほしいと思った。また、学年に関係なく器用さで上手にできる子や、早く飛ばしたくて糊が乾いてないのに飛ばし翼がとれてしまう子など、その子どもの特徴や性格が見られ、なかなか面白い講座であった。機会があればまたやってみたいと思う。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	フェルトで作ろう アニマルマスコット	平成7年　9月　9日（土） （終日）
キャプテン名	河南　さおり（家庭専攻 4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　5　名 参加者数　10　名
指導教官名	林　隆子 教官	活動場所 実２０１ S２１６

講座のねらい　動物の顔や耳をコンピュータの画面上で組み合わせて、自分が作ろうと思うアニマルマスコットを決定する。決定した物の型紙を作り、フェルトのアニマルマスコットを作る。簡単なコンピュータの操作と物を作る楽しさを経験する。

講座の展開

過程	時間	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
導入	9：30	○今日行う活動を知る。 ・グループに分かれて簡単な自己紹介をする。 ・見本のアニマルマスコットを見る。	○自己紹介と今日の予定を説明する。 ・グループ分け（スタッフも）とそれぞれの自己紹介をする。 ・いくつかのアニマルマスコットを提示。（コンピュータには手をふれぬよう指示。）	・見本アニマルマスコット
展開	9：40	○コンピュータを操作して顔や耳を組み合わせる。 ・コンピュータの扱い方や使うキーを知る。 ・使用しないキーに触れてはいけないことを知る。 ・組み合わせる顔や耳の形などがコンピュータに入っていることを知る。	○コンピュータの扱い方を説明する。（コンピュータの使用経験などを聞く。） ・机間巡視を行う。（間違えた、違うキーを押したなどの問題が起きたときにスタッフを含めて対処する。） ＜スタッフ事前指導＞	・コンピュータ ・キーボードの絵（模造紙）
	昼休み		○子どもの決定したアニマルマスコットの型紙をＸＹプロッタで描く。	
	13:00	○午後行う活動を知る。 ・フェルトがどういう物か知る。 ・型紙からフェルトで何枚の型をとればいいのか知る ・糸の通し方、玉止め、玉結び、かがり縫い、綿の詰め方などを知る。	○午後の予定を説明する。 ・それぞれが決定したマスコットの型紙を渡す。 ・コンピュータは朝使った物と同じだが、型紙を描く道具がセットされていることを知らせる。 ・コンピュータを操作すると自動的にペンをとり線を描くことを知らせる。 ・何種類か用意したフェルトや道具を選ばせる。（使う物だけ持っていかせる。） ・糸の通し方、玉止め、玉結び、かがり縫い、綿の詰め方などを指導する。＜スッタフ事前指導＞	・フェルト、刺繍糸、ビーズ、色鉛筆、はさみ、ボンド、針、針さしなど ・型紙

まとめ	14:40 14:50	○お互いの作品を見せあう ・自分のものとどこが違うのかを知る。 ・後片づけをする。 ○アンケートに記入する。 ・今日の活動を振り返る。	○できた作品を見せあう。 ・工夫や苦労したところを発表してもらう。 ・後片づけを指示する。 ○アンケートを配り、記入してもらう。 ・回収する。 ○修了証を渡す。	・ゴミ袋 ・アンケート用紙 えんぴつ 消しゴム ・修了証

フェルトで作ろうアニマルマスコット

河南　さおり（家庭科　4年）

1．題材の選定理由

わたしは卒業論文で、「被服教育にコンピュータを導入する意義」について考えてる中で、プログラミングだけでは自分の立場からしか考えておらず本当の導入の意義について考えることができないだろうと思いました。そこで実践を通した子供の思いや姿をとらえてより深く考えるために今回の講座を開きました。

2．題材に関する素材研究

題目は「フェルトで作ろうアニマルマスコット」でしたが、内容は大きく二つに分けて①コンピュータを使って型紙を作ること、②フェルトなどを使ってマスコットを作ることでした。つまり題材が大きく二つに分かれていることで素材も大きく二つに分けられるということです。①では子供に型紙を選ばせるためのプログラミングでした。過去の先輩の卒業論文を参考にしながら、対象の小学4～6年生や初心者にわかりやすく、簡単に操作できるように何回も手直ししました。質問形式で自分の選びたい顔や目、耳、鼻や口を番号で選び決定すると画面にその形がでてくるという方法をとりました。型紙なので形だけでもよかったのですが、楽しく、またフェルトで作るときの参考にと色をつけられるようにもしました。さらに選んだ形をコンピュータが紙に描くこともプログラムしました。②ではどんな教材を使いどう作るのか実際にいくつか試作して問題点を解消しました。綿のつめ方などはその一つでした。①と②のどちらも自分だけでは見落としてしまうところがあるのでアシスタントスタッフにも相談して練り直しました。

3．講座のねらいと自己目標（自己課題）

講座のねらいとしては、コンピュータを子供が操作して型紙を作り、フェルトでマスコットを作る過程でもの作りの楽しさを経験してほしいということです。自己目標もそれに関わってきて、楽しく活動できることということはもちろん、コンピュータを簡単に操作できるよう配慮すること、そして一番の目標はコンピュータで作った型紙から自分の作りたいアニマルマスコットをいろいろ工夫して作ることです。そのためにマスコットの形に動物の名前を入れませんでした。ただ動物の形を選んでそのまま作るのでは、創造性がなくそこから発展がないと思ったからです。

4．子供達の活動

型紙作りでは、一人一台コンピュータが使えたため、子供達は自由にいろいろと形を選んでいました。幾つかの動物の形を作ってその中から選ぶ子供もいました。マスコット作りでは、4～6年生ということやマスコット作りをしたことのある子供が多かったことからか、どんどんと先へ進めていく子供がかなりいました。また基本的な説明しかしなかったので、縫い方や両耳の開き具合など一人一人異なっていて個性のある作品に仕上がっていました。わたしたち学生が、こんなふうにもできるのかと学ぶところがたくさんありました。自分の作品ができあがっても家で他のものも作りたいと全員が何枚も型紙を作って

いました。

5．反省と課題

この講座は、子供一人にアシスタントスタッフが約一人ついていたので子供が質問しやすく、わたしたちも一人一人を見ることができ、個々の子供の思いや考え、行動をとらえることができたのでよかったと思います。ねらいや自己目標は生き生きと活動している姿からもわかりますが、アンケートでも「とてもおもしろい」や「簡単」が多く、おおむね達成されたと思います。しかし「コンピュータで選ぶ形が少なかった」や「コンピュータをもっと使いたかった」という意見もあり改善しなければならないと思いました。コンピュータのことだけではないけれども、どんなことを教えそれをどういうふうに学び取るかは個人差があり、もっと高度に、多くのことを盛り込めばいいというわけではないので難しいと思います。今後の課題としては、個人に合わせて利用できるように段階的にプログラミングをしたり、コンピュータの扱い方練習のプログラミングをしたりするなど検討していきたいと思います。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	紙ひもでかごを作ろう	平成7年 10月 14日(土)（午前）
キャプテン名	北村　史（社会専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　１０名 参加者数　１１名
指導教官名	阿久津　昌三　教官	活動場所　Ｎ２０２

講座のねらい

荷づくり用の紙ひもを、割いたり編んだりすることにより、丈夫なかごができるとともに、紙の性質について知ることができる。

講座の展開

時間	課程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
10'	導入	・自己紹介	・自己紹介（こども、スタッフも） ・紙ひもでつくった、いろいろな作品を、提示する。 ・作り方の順序を書いた紙を貼り、紙ひもを配って、スタッフにまかせる。	・模造紙 ・作品 ・40cm×6 32cm×10 350cm×1
1.40' ①15' ②20' ③20' ④20'	展開	① 40cmのひもの真ん中に印をつけ、放射状にくみあわせておもしをする。 ② 32cmのひもを、2cmをのりしろにして輪をつくり、せんたくばさみでとめる。（内1本は、4cmをのりしろ） ③ 350cm のひもを割いて細くし、①にまきつけ、②の輪の円周と同じくらいにする。 ④ ②の輪をあみこんでいく、一番上のは、内側に②の小さくしたものをはめこむ。 ⑤ 350cm の残りを割き、④の上部をかがる。	・スタッフは、子どもといっしょに作り、作りながら次の手順へと進ませる。 ・父兄がいれば、いっしょにはいってもらうようにする。	・木工用ボンド ・せんたくばさみ ・おもし ・竹ぐし
5'	まとめ	・修了証をもらう。	・修了証をわたす。	・修了証

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	空き缶を使ってアルミのネームプレートを作ろう	平成7年 10月14日(土)（午前 午後）
キャプテン名	山崎 重幸 （美術専攻 4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数 8 名 参加者数 ～10 名
指導教官名	木村 仁 教官	活動場所 工芸室 N104

講座のねらい　空き缶を溶かし、そのアルミを用いて自分がデザインしたネームプレートを作成する場面で、持参したいらない空き缶が立派な作品となっていく過程を見ることを通して、廃品と思われていた物にも何らかの利用価値があるかもしれないと改めて考え、物を利用する視点に気づくことが出来る。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
9：00 9：20	導入	○ 具体的な制作方法を聞く。 ○ アルミを溶かすところを見学	○アルミの加工法、ネームプレトの下地の制作方法などの指導 〔スタッフ〕 ２名ほどはか釜に常についてもらい、アルミ缶溶かしを続けてもらう。	
9：40 10：30	展開	○下地のデザインを考える ○下地制作	○カッターの使用方法等、注意指導を行う	・発泡スチロール板 ・カッター ・木工ボンド
13：00 13：20 14：20 14：50		○砂埋めの際の砂を大きめの缶に入れる作業をする。 ○流し込みを観察する。 ○磨き上げ、仕上げを行う。	※危険を伴う作業なので注意をかり行う。 ○流し込み開始 ○作品と流し込み口を金切りの切断する	・大きめの空き缶 ・埋没砂 ・アルミ ・金切りのこ ・金属ヤスリ ・サンドペーパー
15：20	まとめ	○各自の作品をお互いに発表し合う	○修了カードを渡す。	

アルミ缶を使ったネームプレート作り

山崎　重幸（美術専攻　4年）

1．講座作りの着想とねらい

普段、飲み終えた後すぐに捨ててしまうアルミニウム缶。これを使って何かを作ることができないか？小学校時代、学校でこれらをつなぎ合わせて大きなロボットを作ったことがある。いつもは捨ててしまっている物が利用できたとき、子どもたちは大きな喜びを感じるものである。そこで今回は、少し違った方法でアルミ缶を加工して、子どもたちが喜びそうなネームプレート・オブジェなどを作ることにした。いらないと思われているものでも、何かに再利用して使えることを身を持って体験することによって、身の回りの様々なものを大切に使おうとする心を持って欲しいと願い、今回この講座を設定した。

2．ＹＯＵ遊サタデーと教育実習との関連

教育実習では、自分が「このような課題を、このように取り入れてみたい」と願っても限界があり、完全に自分の思うようには出来ない。今回行ったアルミ工房なども、教育実習では出来ないものの一つである。その理由として、設備の不足、使用教材の限界、教師一人当たりが受け持つ生徒数の多さなどがあげられる。しかし、ＹＯＵ遊サタデーでは、それが可能となるのである。教育実習の経験がＹＯＵ遊サタデーに生かせるのはもちろんのことであるが、ＹＯＵ遊サタデーの経験も将来の現場経験に大きく生かされてゆくであろう。教育実習とは違った意味で大変貴重な経験を積める場であることを強く感じた。

3．子どもたちの反応

この講座では、まず発砲スチロール板を用いてネームプレートのデザインをするところから始めたのだが、早く本制作に入りたかったのであろう、皆かなり早く下地を作り上げてしまった。この段階でもう彼らの頭の中にはアルミの完成作品予想図ができあがっていたのであろう。最初に完成品の作例を子どもたちに見せたことにより、より制作意欲を湧かせることが出来た。小学校では決して体験することの出来ない、少々高度な講座に臨み、彼らの目が常に生き生きしていたことが大変印象的だった。

4．ティームティーチング

今回スタッフとして３人に手伝っていただき、計４人でのティームティーチングとなった。生徒数に対する割合はよかったと思う。皆、子どもたちと一緒に楽しそうに制作補助をしてくれていた。子どもたちを指導するだけでなく、自らも楽しんで授業に加わるというのが理想であるが、ティームティーチングはそれを可能とさせる有効な手段であると改めて感じた。

5．反省

今回、この講座を行う前、私は松代にある信州アルミ工房に技術指導を受けに行き、事前にいろいろと学んできた。実際、講座の中でこれといった失敗もなかったが、中に少々大きすぎるスチロールを作っていた子がいた。無理だよと言ったのだが、どうしても作りたかったらしく、結局スチール筒に斜めにして固定し、アルミを流し込もうとにしたのだが、やはリプレートの下部の方まできれいにアルミが流れ込まず失敗作となってしまった。その子はもうすでに２作品完成させていたのだが、少々残念そうであった。

苦労した点は、やはり時間配分である。下地作りのスピードの個人差が一番難しいところであり、あっという間に３個分作ってしまう子もいれば、じっくり時間をかけて１つ仕

上げる子もいるのである。この講座では「一人２つの完成作品」という目標を定めて制作していき、その目標は達成できたのだが、なかなか足並みをそろえられずに苦労してしまった。

今回のこの講座の中で「再利用」というテーマを子どもたちに投げかけてみたが、皆この方法でのアルミ缶の再利用を大変気に入ってくれたようであった。日頃自分が使っているありとあらゆる物たちを大事に扱っていこうとする心を持ってくれることを願いたいと思う。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	草木で染めてみよう	平成7年　10月　14日(土) （午前）
キャプテン名	池田　安美（家庭専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　6　名 参加者数　13　名
指導教官名	徳田　節子　教官　　萩原　應至　教官	活動場所　Ｓ２２２

講座のねらい

身の回りの植物を利用し、ハンカチを染めることを通して、染色の楽しさ、物を加工するすばらしさ、たいへんさを知る。

講座の展開

時間	子どもたちの活動内容	指導・助言	材料・教材
15分	・班を決め、自己紹介をする。 ・手順、約束を覚える。	・事前に染めた布を見せ、今日の手順・約束事を伝える。 ・布は前日に豆汁につけ、乾かしておく。	・班を決めるくじ ・手順の模造紙 ・約束事の模造紙 ・手本の布
90分	・活動を始める。 1．染め草を煮る（水４リットル・沸騰から２０分） その間に布を糸で縛る。 2．草を取りだし、水に濡らした布を入れ、２０分煮る。 その間に酢酸銅を水に溶かす。（２リットルの水） 3．水の入った洗面器に布を取り出し、酢酸銅の入った洗面器につける。（１５分） 4．流しへ、洗面器ごと布を持っていき洗う。 5．よく絞って、糸を切って模様を見る。 6.使った物を片づける。	・絞り方を教える。 ・染草は時々かきまわす。 （子どもの様子を見ながら） ・ガラス棒でかきまぜる。 順番に、子どもがやるようにする。 ・直接、手で酢酸銅を触らせない。 ・ガラス棒でつつきながら色の具合を見せる。 スタッフは染色を捨て、洗面器を洗っておく。 ・最初にスタッフが洗面器を流しへ持っていき、流し水で布を洗う。だいたい薬が落ちたら、子どもに自分の布をよく洗わせる。（順番に流し水で） ・しっかり洗って、元の場所へ戻そう。	・机の上に分けておく物（各班ごとに） ガラス棒　2本 洗面器　3つ 酢酸銅　6ｇ １班 玉ねぎ　１００ｇ ２班 菊の葉　１５０ｇ ３班 ウーロン茶 １０－１２ﾊﾟｯｸ ・ごみ袋
15分	・作品を発表し、感想を述べる。 修了証を授与する。	・スタッフも一人ひとり感想を述べ、子どもたちの良かったところを言ってあげる。 ・ビニール袋を分け、それに入れて持ち帰ってもらう。 ・手順、ハンカチの干し方を書いたプリントを渡す。 ・修了証を渡す。	・持ち帰り用のビニール ・草木染の手順を書いたプリント

草木で染めてみよう

池田　安美（家庭専攻　4年）

1．草木染めをしてみようと思った理由

家庭科の専門教科の中に「染色学」と言う講座があるのですが、副免取得の授業をとる関係でこの授業を受講できませんでした。しかし、染色学を受講した友人の話を聞いたり、そこで作成した作品を見ていると、「私もやってみたい」という気持ちになりました。しかし、「一人でやるには大変そうだし、めんどくさい」という気持ちもあり、草木染めには、チャレンジせずにいました。

そんなとき、ＴＶで趣味講座の番組を目にする機会があり、実際に草木染めをしている場面を見ることができました。その時、「思ったより簡単そうだ。自分にもできそうだ。」と感じました。「材料も身のまわりの物であったし、どうせやるのなら、一人じゃつまらない。中学校の家庭科の項目にも、染色があるのだから、子どもにとっても面白い教材になるのではないか。」このような決意から、キャプテンになってこの講座を開くことにしたのでした。

2．素材研究とねらい

上でも述べたように、私には草木染めの経験がなかったので、まず図書館での文献調査から始めました。ここで、草木で染めると言っても、どんな植物でも良いわけでないことや、媒染剤によっても、染め色が変わることを知りました。また、子どもにとってより身近で、面白く、家庭でも楽しむことができる物を、と考えると、どんな植物を選ぶべきか非常に迷いました。また、作業手順には、火を使ったり、薬品を使ったりと危険も多いので、対象は高学年以上が良いのではないかとも考えました。また、ただハンカチを染めるだけではつまらない、模様も入れさせてみようとも考えました。こうして私の頭の中では、「木綿のハンカチを、ウーロン茶、玉葱の皮、菊の葉で染めていく」という大筋のプランができていきました。とにかく、どんな物ができるのかはわたしにもわからないので、とりあえず、子どもには染色そのものを楽しみ、何でも買えば手にはいる、という現代において、「物を作ること、加工すること」を家庭でめんどくさがらずに、楽しんでもらう良いきっかけにして欲しいと思いました。

本から学んだことをもとにして、アシスタントスタッフの人たちと予備実験をしました。このときには、「手軽に、簡単に染める」ということが念頭にあったため、本来「豆汁に木綿の布を浸す」という前処理をせずにハンカチを染めてみました。しかし、色濃く染まらず、模様もはっきりしないことがわかりました。そのため、草の量を増やし、前処理もしっかり行うことに変更しました。模様をつけることに関しても、本来は布を針で縫って、縮め、色の着かない部分を作るのですが、予定外に、低学年の子どもが２人入り、また、針の管理も大変だろうということで、布を糸で縛るという方法をとることにしました。これが以外とうまくいったので、当日も良い結果が得られるだろうという確信を持ちました。

３．講座の様子と改善点

子どもたちを３つのグループに班分けするために名簿を見たとき、女の子ばかりだったので、少し残念でしたが、学年別の構成は、どの班にも各学年の子どもを入れることができたため、班の中でお互いに助け合って、活動してくれるのではないかと期待しました。

いざ講座を始めてみると、スタッフたちが、「子どもには難しく、困難ではないか？」と思っていたのに対し、案外簡単に淡々と作業が進んでいきました。スタッフの細かい指導が行き届いていたというのも一つの理由ですが、講座の終わりに「草木染めの経験がある人」と、聞いてみたところ、全体の約７割が「ある」と答えていました。そのために、不安をあまりもたずに作業を順調に進められたのだと思います。このことを前もって知ることができていたら、もう少し高度な内容にしたり、対象学年を下げたりという工夫ができたと思います。また、草で布を染めるという作業には１５分から２０分という時間がかかるのですが、模様を作ったり、ハンカチを混ぜるというほかに、時間をつぶすためにすることがなかったため、子どもに退屈だと感じさせてしまいました。もう少しつなぎの時間を有効に過ごすためにゲームなどを用意しておくべきでした。このときは、最後に分けようと思っていた手順のプリントを分け、一緒に読むことで時間を埋めました。また、教室の設備の関係で、一班に６人という班分けをしましたが、人数が多すぎて、全員が作業に参加できないという場面もありました。人数を減らした班構成をすれば、子どもがもっと積極的に動いたかもしれません。

作業の様子には多くの反省点が残りますが、ハンカチを染め終えて、広げたとき、模様の出来映えが思った以上に良かったため、大変驚きました。布の縛り方は２パターンしか教えなかったのに、一人として似通った物を作った子どもはいませんでした。子ども一人一人の発想力のすごさを知りました。私たちスタッフが心からその出来映えをほめたので、子どもたちは自分の作品に満足し、自信を持ったようでした。多くの子どもが、「家でもやってみるね」と言ってくれたとき、キャプテンとして大変うれしく思い、また、自分のねらい通りになったことに満足しました。

４．反省に変えて　－キャプテンをやってみた感想－

はじめのうちは、アシスタントスタッフさえも２回しかしたことのない、しかも参加は今年が初めてという私がうまく講座を開けるのか大変不安でした。しかし、今回アシスタントスタッフになってくれた、同じ家庭科４年生の人たちのおかげで、無事に終えることができました。また、被服実験室や、薬品を貸して下さった萩原先生や、菊の葉を分けて下さった花屋さんにもお礼を申し上げます。講座での自分を振り返ると、ただ前に出て手順ばかり伝え、本当に子どもの中に入っていっての指導ができずに終わってしまった感じがします。作業手順についての準備にばかり熱心になってしまい、自分がこの講座を通してみたかった物をもっとはっきりさせるべきだったと反省しています。

しかし今回キャプテンになって、講座を持った経験は、将来教員になろうとする私にとって、必ず役に立つと思います。もう一度講座がもてるのならば、またやりたいのですが、今年で卒業です。この大学にいる間に、後輩たちにキャプテンになることのすばらしさを伝え、来年に生かしてもらえるように呼びかけていきたいです。このようなすばらしい経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

自然と遊ぼう・笹ぶねづくり

新井 清規　　（理科専攻　4年）

1．はじめに・・私がＹＯＵ遊サタデーで講座を開こうとした理由

これは、私への自戒の念から生じたと思う。なぜならば、今までの私は、教育問題についても現代社会の諸問題についても、単に言葉をつなげた理論を用いてすぐに結論を出してしまいがちであったのである。自分の中において言葉というものをつなげた実体験のない理論を積み上げていくことによって、すべてを知っているような感じがしていたのである。

すなわち、今までの私はまず結論を求めてしまっていたのである。じっくり物事や現象を観察することなく、自分自身が無意識のうちに速いテンポで動いてしまっていたのである。もしかしたら私は物事に対して結論のみを知り、その過程や本質は知らないままに過ぎてしまっていたのかもしれなかった。「知っていることは知らないことだ」という言葉があるが、今までの私はまさにこれであったと思われる。

そんな中、あるとき通学路である田圃のあぜ道を歩く機会があった。その田圃はいつの間にか道路に変わっていたが、私はそのあぜ道を歩きながら、かつてこの道路が田圃であった頃に思いを巡らせていた。家に帰ると「勉強しなさい」と言われるのが子どもながらに非常にいやで、この田圃のあぜ道で「道草」をしていた頃の私の姿である。

あのころたまたま田圃の中にオタマジャクシがいた。なんべんもなんべんもそれを見ているうちに、そのオタマジャクシからやがてえらがなくなり、カエルに変わっていく。今の私なら、教科書の写真か何かで見れば 「そうなんだ」で終わってしまいがちの現象であるが、当時の私は、教科書には言葉でしかでていないものが、現象として起こっていることを目のあたりにし、少なからずうれしさや興奮を覚えたものであった。

この体験は今の私にとっても大切な体験であり、必要な体験だと思う。言葉で区切られてしまう「オタマジャクシ」が、目の奥の方で姿をもって生きているからである。こうした体験の思い出を契機に、私はテンポよく言葉で区切り結論づけてしまう現代の風潮では、自分の眼で「道草」をしてみることも大切ではないかと考えるようになった。ある意味では、かつての自分の姿にノスタルジックになっていたのかもしれない。しかし、かつての「道草」の私の姿が今の私の中を通過していくことを通して、言葉で区切られてしまったものが、自分の内部で再生可能になり、また区切られたものにも,私の眼が内存する私の姿に、忘れかけていた何かを思い出したような気がしたことも付け加えておきたい。

こうした私の多分に私的なこだわりの中で、今の私の「道草」としてＹＯＵ遊サタデーを開講しようと考えたのである。その中で、今まで触れることのなかった小学校低学年生に対して、私は塾講師のアルバイトを通して小学校高学年生や中学生には接する機会が多かったということもあり、講座を開こうと考えたのである。その子どもたちから、今度は何が私の「道草」に影響を与えてくれるのだろうか。そんな私なりのかすかな期待から講座を開講したのである。もちろん他人から見ればほんの「道草」に過ぎないであろう。しかし、それ故に、子どもにとっても「道草」であってくれればうれしいと思っている。

2．私の学習指導観－講座づくりの着想とねらい－

（1）なぜ、「自然と遊ぼう・笹ぶねづくり」にしたのか

私が、「道草」をしたのが自然の中であったように、今の子どもたちも自然の中で「道草」を体験できるのではないか、と考えたのが発端である。

本来はお弁当持参で、子どもたちを山や川に連れていき、そしてその中で自然の草や木や生き物を見ながら１日を過ごしたいと考えていた。それが自然と遊ぶということになると考えたのである。しかしながら、ＹＯＵ遊サタデ ーは安全第一を大前提としている、子どもたちを山や川に連れていくには、連れていく人数やそれに伴ってのスタッフの人数調整などの安全面において、限界が生じてしまう ことになった。そのため把握しやすい人数だとか、大学の校舎内でできるという場所的な限界の中で様々なテーマを探した。このテーマを探していく中で大切に考えたのは、子どもたちを飽きさせないということであった。子どもたちは半日の間、大学の授業のように自然の説明ばかりしていると飽きてしまう。飽きさせないという観点から「ものを作る」ということを行おうと考えた。この講座は秋に行うということから、１番に思いつくのはドングリを加工して何かを作る（例えば、ドングリごま、ドングリシーソーなど）を真っ先に考えたが、他のキャプテンが『ドングリアート』というテーマでドングリを用いるということであったので競合を避けてこれはやめた。このような過程を経て学校の観察池で遊べること、また笹は近くの飯綱で入手できるという点で笹ぶねを作るというテーマを選んだのである。今回は小学校低学年が対象であるという点を考慮して、作り方にも難しさはなく、また、安全面において危険性が少ないという点で、この「自然と遊ぼう・笹ぶねづくり」というテーマを設定することにした。

（2）笹ぶねという教材について

さて笹ぶねをどうやって作るのかということについては、様々な作り方があるだろうと見当づけた。そこで図書館で調べてみたが、笹ぶねの様々な作り方について述べている本はほんの少ししかなかった。その中から資料として『夏の草花あそび』（ポプラ社）を参考にさせてもらった。しかし、いざ自分で作ってみると、この笹ぶねはなかなか作りにくいものである。ふねの形にするのは簡単だが、いざそれを水に浮かべてみると、笹の葉を切った部分から水が浸入し、すぐに沈んでしまう。うまく浮く笹ぶねはなかなか作りにくい。どうやったらうまく水が浸入しない笹ぶねができるのか、と自分自身で模索しながら笹ぶねを作ることは私自身なかなかおもしろいものであった。たかが笹ぶね、されど笹ぶねといった気持ちになったというのが本音のところである。

（3）この「笹ぶね作り」を通して、子どもたちに何を得てもらいたいのか。

はじめに、のところでも述べたが、私にとってこの講座は「道草」である。それ故に子ども達にとっても「道草」であってくれればいいと思っている。その「道草」という中で、子ども達が自然のものを使って何かを作るといった行為に立ち止まり、子ども自身が子どもながらに考えながら笹ぶねを作製してくれればいいと思っている。子ども達の心の中に、笹ぶねが見事に浮いてくれればそれだけで十分である。

3．講座の開講について

（1）指導案について

私が、この「自然と遊ぼう・笹ぶねづくり」で使用した指導案は以下の通りである。指導案中の、笹ぶね、風車は、笹ぶねだけでは時間に余裕ができてしまうと想定したときのものである。

第（6）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン（２次案）

講座名	自然と遊ぼう・・ささぶね作り・・	平成7年10月14日(土) 午前
キャプテン名	新井 清規　（理科専攻４年）	アシスタントスタッフの人数 3名 参加者募集定員 20名
指導教官名	伊藤　武 教官　和田　清教官	使用教室　Ｎ１０１

講座のねらい　「自立への基礎」を養う生活科の視点に立ち、自然にある（ササ）を自分なりに工夫して、笹舟、ササ笛、風車などを作り、遊ぶことを通して、自然を友として生きる楽しさを味わうことができるようになる。

講座の展開

時間	過程	学習内容と活動	学習指導	材料
9時 40分	事前 説明	・簡単な自己紹介をしてもらう（ゲーム） ・ササの説明 ・カッターの説明 ・手を切ってしまったときの処置の説明	・カッター、はさみのない人には貸し出す。	ササ カッター はさみ （絆創膏）
9時 50分	製作 指導	（例として作った笹舟、笹笛、風車の提示） （笹舟、笹笛、風車の作り方を実際に例示する） **キャプテンの例示に、とらわれずに、自分なりのものを作ってみよう。**	・プリントを用意し、配布する。	プリント
10時	製作	・自分なりに構想を立て、自分なりの舟や、風車（プリントと同じでもいいが）を作製を作製してみる。 ・自分なりの舟や風車ができた子は、友達に紹介してもいいし、その他のオリジナルの舟や風車を作ってみよう。	・アシスタントは、分からない子に助言する。	
11時	作品 発表	・自分の作った舟や風車を友達と見せあう。（自分なりに工夫したこと、大変だったことがあったら発表してもらう） ・作ったものを実際に、浮かべてみたり（観察池で）、風車を回して（外で）みたりする	・子供のがんばりをほめることを大切にする。	
11時 30分	修了証 授与	・修了証をもらう	・ひとりひとりのがんばりをほめる	修了証

（2）子ども達の活動の様子

9人の子どもが「自然と遊ぼう・笹ぶね作り」というテーマで活動したが、子ども達は笹ぶねを作るのにかなり苦心していたように見えた。まず笹の葉自体が紙のように柔らかいわけではなく、子ども達にとっては堅いように感じられたからである。資料として前述したプリントを配布したが、それを見ながらでも、その資料と同じような笹ぶねを作るのにはなかなか苦労していた様子であった。子ども達の何人かが「僕（私）これ幼稚園で習ったことがある」と笹ぶねを作製したが、実際に浮かべてみると、なかなかうまくいかず（すぐに沈んでしまうのである）何べんも何べんも作り直していた。そのような中で、子ども達の願いもただ笹ぶねを作るという思いから、いかにしたら沈まない笹ぶねを作ることができるだろうか、と考え始めていた。始めは笹ぶねづくりで1時間半の時間を持たせることができるのかと不安であったのがそれは杞憂であった。

「沈まない笹ぶねを作りたい」という願いをもった子ども達は、様々に工夫を凝らし（例えば葉の折り目にできる切り口の隙間に笹の葉を細かく切ってその穴を埋めたり）それを自分の作った笹ぶねに加えることで、より長く浮いていられるお気に入りのふねを作り出せるようになっていった。このような活動を通して、たとえ簡単なテーマであっても、達成感や成功感というものを味わうことができるのだ、ということを改めて強く感じることができた。

（3）活動の中で考えたこと

私やスタッフ自身もいかにしたら沈まない笹ぶねを作ることができるだろうか、と夢中になっていたため、指導案上にあるうまくいった友達の意見を聞くという機会がもてなかった。つまり、友の工夫を聞きあい、自己の活動の参考にしていく、という場がもてなかったのである。この点が残念であるが、小学校低学年対象であったことを考えると「自分なりの工夫」を凝らすことに重点を置いていたため、友の意見を聞くと悪くいえば「他人のまね」をすることになってしまい、より主体的な子どもの育成（なぜうまく浮かばないのだろうかと自分で考えること）を考えると現発達段階では「友の意見を聞かない」で行ったことは良かったのではないかと思われる。

また、集団行動と事故防止について小学校低学年において、子ども1人ひとりの異なった願い（例えば、気に入った笹ぶねができたので浮かべてみたい、という子どもと、さらに改良を加えるために教室で製作に取り組みたいという子ども）をどれだけ的確に生かせるか、というテーマと安全性を保つためには集団行動が必要であるという、この両者は、ともに重要視されるべき問題であるということに気がついた。今回は、子ども9人に対し、キャプテンを含めスタッフが4人いたことで、ある程度問題なく処理ができたが、将来自分が教壇にたつことを考えると、必ず考えなければいけない問題であることは間違いないと思う。

4.ＹＯＵ遊サタデーを開講してみて感じたこと

私がこのＹＯＵ遊サタデーを開講してみて感じたことは、子ども達が（今回の場合は小学校低学年であるが）自発的に自分の問題を見つけて（例えばいかにしたら、沈まない笹ぶねを作ることができるだろうか、といった具合に）それを追いかける作業というものは、すばらしいものであると感じた。今回はできるだけ子ども達だけで考えさせたいということを大事に考えて私たちキャプテンやスタッフから指示をなるべく出さないようにしておいた。

子ども達はそれ故に、自分でああではないか、こうではないかと考えながら作業し、たった笹１枚から沈まないで、長く浮くことができるできる笹ぶねを作ることの作業を通して、考えることの大切さを実感できたのではないだろうか。

そもそもスクールの語源は、ドイツ語のスコーレ(Schule)からきている。そして、このスコーレの元来の意味は「遊び」なのである。今回のＹＯＵ遊サタデーにおいては私はこの「遊び」を子どもたちの自由な時間・ 空間ととらえられていたのではないか、とこの講座が終了してみて感じた。

このような中で、私は将来教師になる身として大事なことを教わったような気がする。ＹＯＵ遊サタデーが学校とどう関係しているのか私自身明確なことはいえないが、この私の体験からいえることは、「教育」というものは元来人を育てるものであるということなのではないかということである。どれだけ見栄えがする笹ぶねができたかという点で評価してしまうのではなく、その子ども達が子どもながらに笹ぶねを作っているその姿を見なくてはいけないのだと思った。簡単な言葉では、子ども達の真剣さなのかもしれない。子どもをこれから「教育」しようとしている私はこのことを念頭に置いておかなくてはならないのだと思う。私は子どもたちが「学んでゆく」という過程においては、助言者はある意味では無力な存在でかまわないのではないのかと感じた。

私にとっては子ども達が「学んでゆく」ということを待つという点においては無力である。しかし、その過程を待つ間に何もしないのではない。その間に私は、子どもの人間性を見、実は養っていかなければならないのではないかとも強く感じた。

私はこの講座を通して、人間性という点で考えると「教育」を受けるのは、子どもだけではなく、実は私も子ども達から学ぶといった「教育」を受けているということを強く学ぶことができたと思う。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	お手玉を作って遊ぼう	平成7年　10月　14日(土) （午前）
キャプテン名	泉　貴子（音楽専攻　3年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　2　名 参加者数　5　名
指導教官名	久保　信男　教官	活動場所　N102

講座のねらい

昔ながらの遊び「お手玉」を自分で作ることで、簡単な裁縫を身につけるのと同時に、昔の遊びに興味をもたせたい。

講座の展開

子どもたちの活動	キャプテン・スタッフの支援	時間	教材
子どもたちとキャプテン・スタッフの全員が自己紹介をしてみんなのことを知る。		２０分	
○実際にお手玉にふれながら、お手玉に関心をもつ。 ・どうやって遊ぶんだろう。 ・早く遊びたい。 ○ お手玉の作り方を知る。 ・うまく作れるかな。 ・簡単そうだよ。 ・いっぱい作れそうだね。	○１０数個のお手玉を用意しておき、いろんな遊び方を見せながら子どもたちにも実際手にとってもらう。 ○基本的なお手玉の作り方を紹介する。 ・作る過程を順に、布を使って説明する。 ・裁縫は初めて、という子どもには、最初から教える。		お手玉
○自分のもってきた布で、お手玉を作り始める。 ・上手くできるかな。 ・なかなかできないよ。 ・やったあー、１つできたよ！ ・もっといっぱい作りたいな。 ・今度はもっときれいに作ろう。	○子どもたちに混じって、一緒にお手玉を作りつつ、子どもの手助けをしていく。 ・はさみ、針など、安全面には十分気をつける。 ・あずきは、一人一袋用意しておく。 ・子どもの出来具合によって、少し難しい作り方を紹介する。 ・子どもたちみんなが3つくらいできるようにしたい。	７０分	布、はさみ、針、チャコペンシル、ものさし、あずき
○自分の作ったお手玉で遊ぶ。 ○修了書をもらう。	○簡単な遊び方から紹介する。 ○修了書をわたす。	３０分	

お手玉を作って遊ぼう

泉　貴子（音楽専攻　3年）

1．講座設定の理由とねらい

今回のこの講座は、私が小学生のときに学校の児童祭で地域の方に教わったことを、今度は自分が子どもたちに伝えたい、という気持ちで開いてみました。

昔ながらの遊び“お手玉”を知らない子ども、そして与えられた既製のものでしか遊ばない子どもが多い今、そういう遊びを廃されたくない、という思いもありますが、自分で作ったもので遊べることにも気づかせ、それを楽しんでほしいと思ったのです。

そして楽しむと同時に、簡単な裁縫も身につけられればいいと考えました。それには、家庭科は5年生からの教科なので、対象は5年生以上からにするべきだったかも知れませんが、やはり、一番のねらいは作って遊ぶのを楽しむことにしたかったので、3年生以上からと、対象を広げてみました。

2．生徒指導について

今回集まった子どもたちは、小学校3～5年生の5人でした。それに対してキャプテン・スタッフは3人で、お手玉の製作段階では、子ども2・2・1人にスタッフ1人ずつついてもらい、一緒に作りながら、作り方やわからないことを教えていきました。

ここで、生徒指導からははずれますが、お手玉の作り方をみなさんにも。

作り方は非常に単純で、私たち大学生が作れば、それ程難しいことではないのですが、子どもにとっては、ひとつの過程が10分も20分もかかってしまうほど大変な作業です。特に今回は、糸も針も初めて持つ、という子どもが1人おり、その子にとっては針に糸を通すこと、玉結びをすること、縫うこと、玉止めをすること、何もかもが初体験でした。その他の子も、ぬいしろを作ること、玉結び・玉止めのやり方がわからない子が多く、比較的基本的なことを教える場面が多くありました。

そういう場面で、キャプテン・スタッフが実際に一緒に作っていたので子どもがそれを見て学んでいき、1回自分でできれば、次には1人でできるという状況ができたことは良かったと思っています。

そして、子どももみんな1つ1つの過程を大変な思いをして一生懸命こなしていくので、その過程が終わる度に「できたー」と言っては喜び、1個目のお手玉ができれば、本当に

うれしそうな顔をします。そういうとき、私たちキャプテン・スタッフは、「○○さんは、今ここまでできたよ。早くできたね。」「きれいにできたね。」とほめたり、全体に広めたりすることに気をつけてみました。しかし、できたことをほめたり、一緒に喜んだりすることは、そうするように気をつけたというより、自然にできた気がします。特に初めて針を持つ子が一時間以上をかけて一個目を作り上げたときは、みんなで喜んでいました。

特に製作過程の最初の方では、指導場面は多かったのですが、１人１人ができていくうちに、指導というよりは、共に作り、共感してゆく立場、また一緒に遊ぶ相手となっていきました。そういう場面で、まるっきり子どもの友達になるのではなく、キャプテンという立場や、その子どもの個性というか、独特さをひき出す、ということを忘れてはいけないと思いました。

３．反省点

今回の講座では、前にも述べた通り、裁縫を初めてやる子もいれば、慣れている子もいて様々でした。この場合、やはり、初めての子どもには特別な配慮が必要で、１対２の中に入れるのではなく、１対１のマンツーマンにするべきでした。最初に子どもの現状を理解しないまま始めてしまい、後になって作業の進み具合に支障を来してしまい、子どもたちにとって最善の環境にすることができなかったのが、一番の反省点です。

しかし、ねらいの観点からみると、私としては満足のいく講座になりました。

裁縫の初めての子も、時間はかかったけれども、お手玉を作り上げることができたし、玉止め・玉結びが最初上手くできなかった子も、上手にできるようになり、家庭科的な力は、だいぶついたのではないかと思います。

そして何より、たくさん作りたい子は作ることで、遊びたい子は遊ぶことで、それぞれの子がその子なりに楽しんでくれたように感じます。それに、自分で好きな形のお手玉を考えて作ってみたりして、こちらの用意した枠から飛び出して自由に作っていたのもうれしく思いました。

５人とも、余った布や小豆をたくさん持ち帰ったけれど、家に帰ってお手玉作ったのかな？気になるところです。

こうすれば良かった、と思った点が１つ。一人のお父さんが娘さんを迎えに来たとき、娘さんが作ったお手玉で、私にはできないお手玉さばきを披露して下さいました。そのような御家族の方にも参加してもらって、遊べたら、また楽しかったのではないかと思います。

４．これから生かしていきたいこと

私が教育実習を経験して、自分の課題だ、と思ったのは“子どもの側に立つ”ことです。授業をするにしても、何にしても、これが一番大切だと思い、また難しいとも思いました。

しかし、この今回の講座で、子どもと一緒になって作り、共感していくことで、少しだけ、“子どもの側に立つ”ということを感じることができた気がします。それはきっと、少人数だったことなどがあったからでしょう。たった数時間で子どもたちを理解する、ということは無理ですが、子どもたちと喜びを一緒に感じることで、その一歩を感じることができたと思います。

このことを、機会があれば次のＹＯＵ遊サタデーで、また、それを将来、教師となったときに生かしていき、さらに自分の課題として取り組んでいきたいです。

―中学生対象―はりがね工房

小倉　敬（大学院理科教育専攻　2年）

1．はりがね工房開設の経緯

この『はりがね工房』は、”針金ハンガー”を使ってモノを作る講座です。今回は本を開いたまま置いておける「ブックオープナー」を作って見ようと思いました。

・なぜ針金ハンガーなのか

私はモノ好きで、なおかつ作るのも大好きです。そして、できることならお金をかけないで作りたいと努力します。そんな中で見つけだしたモノ作りの素材が針金ハンガーだったのです。クリーニングなどに出した背広やコートは、たいていこの針金ハンガーに掛かって返されて来ますが、案外太さと強度があり結構しっかりした針金です。また、周りにはビニールのカバーがかかっていて、見た目にきれいだしサビなどが多少出ても平気です。この素材を使って、S字フックなどの日用品を作って見たところ、実用に耐える便利なものができあがりました。このように必要なものを自分で、しかもタダ同然で作ることができるという事を知ってもらいたいと思いこの講座を開設しました。

・針金ハンガーを使うことの教育的意味

私の場合、金銭的な条件と趣味的な要素から好んで中古素材を使うことが多いのですが、最近ではモノを作るのに材料は新品を買うことがほとんどです。中古の素材を使って新しく別の物を作り出さなくても、子どもに新品の素材を与えることはたやすいですから、子どもも中古品の再利用などをすることも少ないのではないでしょうか。結局人は性分として「無ければ無いで済むけれども、あるのに使わないというのは難しい」（例えば自動車の無い時代何十キロも歩くのも厭わなかった人間も、自動車のあふれる今その横を歩いて行くということはできない。新品があるけれどあえて中古を使うことはしにくい）ということでしょう。しかし、これからの社会は、そんな新品ばかり使って、使い捨てる文化が世界的に否定されるのは明らかです。そんな社会を生き抜く素地を養うためにも、小さいころから捨てられる物の中にも価値を見い出す姿勢はもっと養われてもいいものと考えます。これらの意味から、この講座で使用する針金ハンガーは、新たに購入されたものではその目的が半減してしまう訳です。

2．小学生向け講座の失敗から

この講座は、実は以前に小学生の中高学年向けに開設したことがあります。計画内容はまず基本的な針金ハンガーの崩し方から、切断方法、切り口（先端）の処理を学び、簡単なS字フックを作って見て、進んだ人はブックスタンドを作って見る、という計画でした。しかし、実際に小学生にやってもらうと、私が予想しなかった問題がたくさん出て来ました。

・ペンチが上手に持てない。
・力がないので針金を小さな曲線で曲げられない。
・力がないので切断するどころか，折り切りするための傷もつけられない。

これらの作業は、私が当たり前のように行っていたことなので、小学生だったらどうかという立場で考えることができなかったのです。結局、この講座ではS字フックを作るのが精一杯で、ブックオープナーなどはとてもできませんでした。また、付き添いの父母の方々がブックオープナーに挑戦しようとしていましたが、見本だけではなかなか同じよう

にはできなくて苦労しているのもわかり、このままではブックオープナーを子どもに作らせることはとてもできないと思いました。

そこで、次にやるなら小学生向け講座の反省を生かして、もっと力のある人向けに、また作業過程もきちんとした説明を加えて講座を開こうと思っていたところ、上田６中から講師の依頼があり、再度講座を開かせてもらう事ができました。

・講座改善の試み

中学生向けの講座ということで、小学生のときよりは腕力の問題は無いだろうと想定し、ブックオープナーの作業過程を考えました。このブックオープナーは３つの部品からなり、それぞれが立体的な構造をしているので、理解を助けるために立体図を描きました。また、針金ハンガーを真っすぐにのばしたものに、重ねてペンで印を付けるだけで曲げる位置を決めることができる台紙を作成し、よりスムーズな折り曲げ作業ができるよう工夫してみました。人数的に今回は３０人と多めなので、見本も以前は一つしか用意しなかったのをもう一つ作り、進行の速い生徒には見本を見ながら進めてもらうことも考えました。

３．活動の様子

当日教室は机が寄せられ、生徒は床にそのまま座っていました。全員の生徒が道具もハンガーも準備していて、準備の問題はありませんでした。しかし、実際作業に入ると思わぬ一人一人のペースの違いに苦労し、同時に全体のペースは私が考えているより、はるかに遅いことがはっきりしてきました。この原因として、生徒の個人差や不慣れなこともさることながら、私の説明にも問題があったと考えられます。今している作業は何のためにやっているのか、と言う事がまだよく分からない生徒にとって、目的達成のための工夫を自らできなくて、ただ言われたままに作業をしているような状況なので、私が実際見て指摘しないと問題点が発見できない生徒が多く見られました。例えば、ブックオープナーの底の部分は、きちんと直線でなければガタついてしまうので、それを理解していれば自分からその部分はきれいな直線にしたのでしょうが、それができない生徒が多くいたというようなことです。しかし、中には完成品を見てどんどん進む生徒もいて、進めば進むほどペースはバラバラになるといった状況になりました。

結局、ハンガーを伸ばして、折り曲げ箇所にペンで印をつける作業に時間を使ってしまい、１時間３０分の作業時間のうち実際に部品を折り曲げる時間が３０分ほどしか残らず、完成品をつくるには到底時間が足りなくなってしまいました。完成しないことが確実になるとすっかりやる気を無くしてしまう生徒もいれば、作業途中でも見本を見て一生懸命進めようとしている生徒もいて、説明する私も時間的な焦りよりも、完成させてあげることができなかった申し訳なさで一杯でした。

４．反省と改善点

結局、この上田６中の講座は生徒に完成品を作らせる事ができず、失敗に終わりました。私なりにその原因をあげてみました。先ず最も大きな原因として考えられるのが、

・１時間３０分の作業時間に対して、生徒の技術と照らし合わせても余裕の無い題材（ブックオープナー）を選んでしまった。

と言う事だと思います。これは私が中学生ならこれくらいのことはこれくらいの時間でできるだろうという想定の甘さでした。もう一つの原因として、

・中学生の技術を多少過信してしまった。

という事もあると思います。とかく自分ができるので相手もこれくらいできるだろうと勝手に考えてしまいがちですが、一人一人違うということを前提として考え、さらに大勢でやるときには小人数でやるよりも時間が掛かるということを常に頭においてプランを立てなくてはならないと思いました。

また、一人一人のペースの違いも十分想定できたことなので、その対策として説明さえしっかりしていれば各人のペースに合わせた指導も可能だったと思います。つまり、

・説明図が簡素すぎた。

という事も原因となったと思います。プラモデルや電気製品の組み立て説明図には、絵や写真を用いて書いてありますが、そんな物も参考にして視覚的に解りやすい説明図にするとよかったと思います。

5．講座を終えてみて

中学生が特に難しい時期の子どもだということは、私の中学生のころを思い出しても分かっていることですが、やはり指導するということは難しいことです。大勢いれば進度の違いは起こって当然なのですが、違った進度の生徒を限られた時間の中でどうやって指導して行くかは難しい課題として残りました。

さらに今回の講座は文化祭の一環で生徒全員参加という事でしたが、全員参加というのはどんなにたくさん講座があっても、やはりどれもやりたくない生徒もいるのは当たり前のことで、私としてはみんなに作ってもらいたいのは山々ですが、やる気が出ない生徒も仕方がないかなと思いました。しかし、中学生は大人でなくても子どもではありません。講座を担当して残念だったのは、こちらで用意したペンが壊されていたり、最後の片付けや掃除も私がやっていても、だれも手伝わなかったことなどは残念なこととして残りました。

【作品立体図】

出張ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	オリジナルキャンドル作り	平成７年 ９月 ２９日（土）（午前）
キャプテン名	佐野徳子　皆川麻緒　坂井雅子 井出湖清　荒井由美　近藤美葉	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　５名 参加者数　３４名
指導教官名	天岩　静子　教官	活動場所　上田６中木工室

講座のねらい

オリジナルキャンドルを作ることを通して、空き缶など要らなくなった物や身近な物も自分の工夫次第でリサイクルでき、より楽しく活用できることを知る。

講座の展開

活動	時間	内容	備考（必要な物）
１．導入	２０'	○スタッフ、生徒自己紹介 ◎予め作業の手順を書いた模造紙を黒板にはっておき、それに沿って説明をする。 ◎作業の安全面について注意をする。 ◎次の活動に移るまでの目安の時刻を言う。	・６班に分ける ・各ﾃｰﾌﾞﾙに人数分Ｂ５のわら半紙を用意しておく
２．缶作り	３０'	○缶の下から２㎝・７㎝の所に線を引き、下から７㎝の線をカッターやはさみで切る。 ・わら半紙を横にして、端から２㎝と７㎝の所に線を引く。７㎝の線を切り、それを缶の底に合わせて巻き、缶の下から７㎝の線を引く同様に２㎝の線も引く。 ○切り取った缶に下から２㎝の線まで１㎝幅の切り込みを入れていく。 ○１㎝幅の切り込みを指やはさみでクルクル巻いていく。 ◎巻き終えたら切り取った缶の上部を捨てるように言う。	・油性ペン ・カッター ・はさみ ・ゴミ袋
３．ロウを溶かし、缶に流し入れる	２５'	◎時間が来たら、これからロウを溶かし、流し入れる作業に移ることを告げる。 ◎班の中で２人組になってもらい、必要な物を前に取りに来るように言う。 ◎各ﾃｰﾌﾞﾙのアシスタントはマッチとマッチ入れを用意する。 ○ロウソクを折り、鍋缶に入れる。取った芯は残しておく。 ○わら半紙の上でクレヨンを薄く削り缶に入れておく。 ○鍋缶の中のロウソクをアルコールランプで熱して溶かす。 ○溶けたロウを缶の中に流し入れ、クレヨンが溶けるまで割りばしでよくかき混ぜる。 ○取っておいた芯を輪にして缶に沈め、割りばしで挟んで固まるまで固定しておく。 ○芯をちょうどよい長さで切る。	・マッチ、マッチ入れ ・アルコールランプ 三脚 石綿金網 鍋缶　（２人で１つ） ・ロウソク（１人２本） ・割りばし（１人１膳） ・クレヨン（好きな色１人１かけら）
４．後片づけ	５'	○使った物を返却し、ゴミを捨てる。	
５．感想を書き完成作品に火をつける	１０'	◎用紙を配布しキャンドル作りの感想を書いてもらう。 ○完成作品に火をつけ教室を暗くする。 ◎リサイクルについて一人一人が考えていくことを呼びかけ、終わりのあいさつをする。 《○＝生徒の活動　◎＝スタッフの指導》	・感想用紙 ・固まり具合によって変更

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	教育学部ってどんなところ	平成7年　10月14日(土) （午後）
キャプテン名	宮沢　弘至　（大学院・ 学校教育専攻２年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　1名 参加者数　1名
指導教官名	小林　輝行　教官	活動場所　Ｎ１０１

講座のねらい　教育学部に対し、進学を希望する高校生や、学部での活動や実態に疑問を抱いている人が、大学生の研究内容や生活に触れ、個人面接の中で相談を受けることを通して、学部への疑問を解き、イメージをふくらませることができる。

講座の展開

過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
導入	・教育学部の意義・機能・学生の活動内容等をキャプテン・スタッフの具体的な生活体験を聞き、イメージを持つ	・教育学部が学校の教員を養成するための機関であるため、それに沿った生活を学生は送っている。よって、学部での授業体験やサークル活動、アルバイト等の生活状況や体験談などを中心に、ビデオ等使用しながら、子どもたちの関心を押さえつつ指導する。	・ビデオ等 ・模造紙
展開	・学部内での研究をキャプテンの個人テーマをもとにしながら（長野県の教育の歴史）具体的で簡潔な話を聞く。	・「信州教育」をテーマの中心に、今の長野県の教育状況と関連づけながら紹介する ・大学での研究内容というところを中心に講義する。	
	・今までの学習内容をふまえた上で、質問や、教育学部に対するイメージを聞く。	・イメージをふくらませることができるようにする。	
発展	・一人ひとりに対し、個人面接、もしくはグループ面接を通して、悩み、疑問を解決する。	・子ども（個人）を大切にすることから、進学希望者には具体的な将来像や進学相談など、その他の参加者にも他の講義参観などもしながらイメージをふくらませるようにする。	
終末	・修了証を受け取る。	・修了証をわたす。	・修了証
	・この講義の他にも、何か子どもたちの姿を見てもらうために参加、参観する。		

教育学部ってどんなところ

宮澤　弘至（大学院学校教育専攻２年）

１．講座開設の理由と昨年度の様子

講座「教育学部ってどんなところ」は昨年度に引き続き開設された、高校生を主な対象とする、私たち大学生の今までの生活体験に基づいた体験論を発表し教育学部を紹介する講座である。このような大学紹介を目的とする催しは教育学部進学志望者に対して進学相談などの形で大学側が主催したものは存在したが、この講座は、実際参加者の大半は高校生であったが、高校生に限定せず一般の人々や地域社会に開かれた学部を学生の手によって紹介するものである。しかし、この講座のはじまりはキャプテンである私の積極的な試みからスタートしたものではなく、むしろこのような講座の開設を要請されてのものだった。初めのきっかけはＹＯＵ遊サタデーが開催されるにあたり、地域の子どもに開かれた大学の場を提供するＹＯＵ遊サタデーの基本概念に沿った講座がいくつか準備されたが、各講座が対象とした子どもの中心は小学生であり、高校生対象の講座がないということで、土井教官から高校生を対象とした講座の開設の依頼があった。かつ高校生が興味を示し足を運んでくれるような講座をということで、教育学部を学生の立場から大学生活の体験を踏まえて紹介する講座のキャプテンとして活動してもらいたいと要請を受け、私の体験や大学での研究内容を紹介する形で開設されたのが最初であった。

昨年度は２回の開催で２０名ほどが受講したが、全員が高校生でかつ学部の進学希望者であったため、将来の自分の姿と重ね合わせることができるような大学での授業内容や生活を紹介し進学を勧誘する、さながら進学相談のような形になった。しかし、ここには将来の教育学部の担い手になる高校生たちへの大学生活を有意義に過ごしてもらいたいと願う我々の期待がこめられていたように思う。というのも偏差値による進路決定が適切とは言えず、大学生活を無駄に過ごしてしまう人が見受けられる事への危惧と、私自身充実した大学生活を送ることができた感謝の念から、大学から受けた恩恵を還元する意味が込められていたためでもあった。

２．昨年度の反省と今年度の対策

まず昨年度の場合は対象者を高校生に限定していたため、参加者は高校生の中でも教育学部への進学希望者のみで、さながら学生による進学相談の様相を呈していた。これにはこれなりの効果を上げたと思うが、これではその他の人々は対象外となり一般の人々の問い合わせがあり実際当日に参加された方もいらっしゃったため、それにこだわらず地域社会の人々にも門戸を開き教育学部を理解していただくような内容を心掛けた。具体的には参加者が全く大学という所が何をしているのかわからないという前提に立ち話をするようにした。また昨年度の場合、私の話の内容がすこし抽象的であったこと、話したい内容が

多く時間がかかり過ぎたことにより、参加者をすこし退屈させるような場面が見られたこともありこのような処置を取った。そのため今年度第１回の参加者の中には最近長野県に転勤なされた方で、お子さんを他の講座に参加させるついでに他県とは違う長野県の教育の事情を知りたいということで参加された主婦の方もいらっしゃった。

つぎに参加者の活動内容について触れたい。昨年度までは一つの部屋で２時間座り続けて私の話の内容を聞き、質問を受け付けるという授業形態であった。個別指導の時間を設けた時は参加者とスタッフとのコミュニケーションがとれたが、全体的な活動のときには話の内容が興味を持つ題材でなかったためでもあるだろうが、参加者の反応が見られず一方通行的な会話にすこし不満でもあった。そこで今年度は参加者に学校内を散策し案内するなど体を動かすことも考慮に入れた。しかし、ただ校舎内を説明するだけでは教育学部の施設を理解するにとどまってしまうのではという不安と、また教育学部らしさをアピールする観点からも、他の講座を参観させてもらい“教育”という現象を実際に見てもらい実感してもらうことにした。教育実習など学部で学んだことを生かして子どもたちに対応しているスタッフの姿や子どもたちが取り組んでいる姿などを見てもらい、言葉では表現できない教育の実際を肌で感じ取ってもらおうという試みであった。とくに第３回目の参加者には、子どもたちの中に一緒に入り子どもたちの目線に合わせて話しかけるように指導したため“教育”にとって大切な子どもへの接し方などを実際に体験することができたと思う。

最後に私の教育観にかかわるものでもあるのだが、子どもの存在があってはじめて教育がはじまるという信念があるため、参加者の顔を見るまではいくら私が活動内容の計画を立てても机上の空論にすぎないという思いから準備がおろそかになりがちであった。当日は何とか対応できたがスタッフには迷惑をかけてしまったことは申し訳無いと思っている。

３．講座内容と方法

最初は教育学部についての簡単な説明をした。信州大学教育学部はおもに小・中学校の教員養成を目的とする学部で教育職員免許取得が卒業要件となるため、それに沿った形での教育活動が行われている。ゆえにこの学部に進学を希望とする者には将来教師を志望する意志がある、または“教育”という活動、現象に対して関心がある者が進学するには適当である学部であることを説明した。その他の参加者には教育学部は“教育”に関わる事を学問的に研究する場であることを説明した。しかし、“教育”という現象は学校という場所でのみ行われているのではなく、普段の生活の中にも、例えば生涯学習のようにさまざまな形で行われていること、また学問の出発点は生活であり、それが基盤となって広範囲に研究する身近な存在であることを強調した。

ではこの学部ではどのような内容の研究をしているのか私の卒業研究をもとに話した。私は長野県の教育の歴史を主な研究対象としているが、その長野県が「教育県」といわれる理由など歴史を踏まえて解説した。そこには教師はもちろんのこと長野県民全体の教育

に対する熱意と期待がこめられていたこと、近代になり学校という施設が建てられるが全国的には反発があった学校を長野県はいち早く受け入れ多くの子どもが就学したこと、立派な建物が各地に建てられたこと、また教師も熱心に研究などに取り組んだなどの成果が“教育”に対する熱意ととらえられ「教育県」という名声を得ることができたことなどを話した。

これまでは大学の学習面を中心に話してきたが、これのみでは学部が主催する進学説明会と変わりがないので、学部の中心的担い手である学生の立場から大学生活など体験論を話した。例えばアルバイト、サークル活動、親元から離れた一人暮らしの様子などあくまで参考になればと思い、笑いも交えながらではあったが大学生の実態を知ってもらうためでもあった。ここで主張したかったことは学生は自主性をもって行動しなければならないこと、またその重要性であった。大学生は一般的に遊びすぎであると言われている。確かにそのような批判は的を得ているが、大学はあくまで自治が基本であるため今までにない自由が得られる。よってその中で流されるままに生きていくこともできるが、逆に自分の意志で有意義に過ごすこともできその中で自分なりに考えての行動であるため、少し逸脱したことがあることを理解していただきたかったのである。高校生には大学生になるための心構えとして、一般の方々にはこのようなことへの理解と、大学生が自由を謳歌する中にも自らの意志と責任を持つことへの戒めの意味もこめてのものでもあった。

4．反省と今後の課題

この講座の趣旨は教育学部の様子を学生の立場から体験を踏まえて話す学部を紹介する目的で開設されたが、進学希望の高校生には大学の実際と将来の自分の姿と重なり合わせ進学に期待を持たせるために、一般の方には地域の中の大学生とのコミュニケーションを取り両者の懸け橋の意味を込めたものであった。実際参加者がどのような受け止め方をしたかは定かではないが、ある高校生は受験に向けて自信がついたことを語ってくれたことは大変うれしかった。また他の講座を参観させていただいているとき、はじめは緊張されていた様子ではあったが、子どもと接しているときの満面の笑みを見たときも同様の気持ちであった。さらに大学では本を読むなどとかく教育を文字のうえで考えがちな私にとっても最も大切な子ども（参加者）との触れ合いができたこと、また発語などの難しさを改めて思い知らされたことも大きな収穫であった。

しかし、私の多忙を理由に他のスタッフに迷惑をかけさらに準備までもしてもらったこと、スタッフとのコミュニケーションがうまく取れなかったことなど課題は多い。さらに土井教官には私を信じて任かせていただいたことには大いに感謝をしたい。

5．「信州大学教育学部」とは（配布資料）

（1）ハード面について

長野県長野市に位置する国立大学。施設・設備などは一度見学にどうぞ。

（2）ソフト面について

教育学部の２つの意味：①教育学系？大学　教育を学問的に研究する
②教員養成系大学　主に小・中学校の義務教育に携わる教員を育成するための学部。信州大学はこれに当てはまる

→教育学部での教育活動は教員になるための講義（授業）が中心となる。
教員志望以外の人にはつまらないかも・・・

学習面以外での大学生活面（私の体験論）
サークル・アルバイト・趣味・友人関係　etc.
→大学生活は自分が積極的に行動を起こすとそれなりの見返りがある。
逆に消極的、受け身的になれば４年間はただ流れて行く。

（3）大学での研究内容（私の研究発表）

長野県の教育の歴史　長野県は教育県か（信州教育）？
現在のような「学校」が始まったのは明治時代から（今から約１２０年前）
それ以前は現在のような「学校」制度は存在しない。（寺子屋など教育を行う機関は存在したが・・・）

◇江戸時代ごろから教育に対する関心が高く寺子屋の数は全国一。
◇明治時代になり就学率（子どもが学校に行く割合）も全国的に高かった。
また学校の施設、設備への投資が多く、全国的に見ても立派なものが数多く存在し、多くの視察者が長野県の教育を参観に来た。
◇大正時代は施設の充実から教師の人格的修養に関心が集まり自由教育が盛んに行われた。しかし、昭和初期ごろからこの様な教育に対する弾圧が強くなり、戦争へと加担していくようになる。
◇戦後　全国テストの結果が上位に→「信州教育」の存在が再確認
◇現在　学力問題が浮上。大学進学率の低迷。いじめなどの問題

（４）大学進学を考えているあなたへ

大学で一番大切にされるのはあなたの自主性。学習面にしろ生活面にしろ今までとは 違う自由な側面が多くなる。それだけ責任も増すが、大学生活を有意義に、楽しくしたいのならあなた自身が積極的に行動し、自ら求めていく姿勢が大切になる。それには常にあなた自身が考えることが大切。考えたことがあなたらしさとなる。

（５）教育学部進学を考えているあなたへ

信州大学教育学部は教員養成系の学部、つまり小・中学校教師になるための養成機関であるため教員志望の意志が全くない人は別の学部進学を真剣に考えてください。ただし、「教育」というものに少しでも関心がある人、将来の就職に人間同士の触れ合いを大切にしたいと思っている人、いままで「学校」で習得してきたことをもう少し考えたい、学問的に研究してみたい人などは教育学部進学を真剣に考えてください。

（６）最後に

私がなぜ教職を志望したのか、と問われてすぐにはっきりと答えられるだろうか。答えはＮＯである。いまだに理屈で割り切れる理由を言葉で表すことはできない。そんなときある教育学者が言った言葉を思い出す。「教育の道は子どもの存在とともにはじまる」目の前に子どもがいて、泣いたり笑ったり動き回ったりしている姿を見ると、こころをとらえられてしまう。子どもというより一人の人間としての触れ合いを大切にしていきたいと思うからであろう。人間に対する共感と信頼こそ教職につきたい理由の最も大きなものであろう。しかし、現在の「学校」は多くの問題を抱えており、「子どもが好き」だけで教師がつとまるとは限らないのである。子どもを正しく理解するための眼を養い、行末を見通し、適切な援助をする力量を身につけなければならない。子どもへの愛と広い意味での技術が伴って初めて教師としての責務をまっとうできるのである。もしあなたが教師になろうと思うのなら、今は夢をもっていてもいいが、大学生になったら現実を見据え自覚をもってもらいたいと思う。どういうことかと疑問に思うかもしれないがそれはあなたが考えることであって、あなたが考えたことがあなたの個性となりあなたらしいものへとなっていくことだろう。これは私自身としての戒めの意味もこめたあなたへの送る言葉としたい。

最後にもうひとつ。「だれも、はじめは子どもだった。しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもいない。」（サン＝テグジュペリ著　『星の王子様』より）

初心忘るべからず。教師として一番大切にしたい姿勢です。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	おしゃべり教育学	平成７年　９月　９日(土)（午前）	
キャプテン名	林　向達　（大学院　１年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数 参加者数	名 ５０　名
指導教官名	金丸　晃二　教官	活動場所	Ｎ２０１

講座のねらい

教育に関心のある人たちを対象として、普段はあまり関わることのない「教育学」をおしゃべりすることを通して、子どもたちや学校のこと、教育のおしゃべりのときに広い視野が持てるようになること。

講座の展開

おしゃべり教育学

林　向達（名古屋大学大学院　１年）

１．着想まで

学部卒業後の進路、同期の仲間とは少々違う道を選んだ。そういう私だから、ＹＯＵ遊サタデーに対する関わりも、少々違うものだった。私は、子ども達と対面することが限りなく好きであるし、教職への想いも人一倍のつもりである。しかしそれゆえに私は現場から距離を保ちたかった。甘い選択であったかも知れない。ときに実践経験を伴わない教育への言及が空威張りにさえ思えることがあり、恥ずかしい。さて、だとしても私は無力なままでよいのだろうか。私にとってＹＯＵ遊サタデーは無意味なのだろうか。

否。教育学を専攻する私にとって、ＹＯＵ遊サタデーは数少ない教育実践との接触機会である。そのいきいきとした空気を自分の研究に反映させるためにも、私はＹＯＵ遊サタデーの経験を大切にしたいと思う。異世代の交流が生む突拍子もない出来事の連続が、たった一日の実践の中で詰め込まれていくのである。目が離せられるわけがない。

さて、私には二つの課題があった。（１）ＹＯＵ遊サタデーを振り返り、参加父兄に語りたい。（２）教育学に対する一般認識を高めたい。どちらもかなり個人的な望みに近いが、一つの試みとしてその場を設けたかった。「おしゃべり教育学」はＹＯＵ遊サタデーの講座としては少々新鮮味に欠ける講義形式の講座ではあるが、こうした諸々の動機から開講するにいたった。

２．準備

【１】基本方針

ＹＯＵ遊サタデーも回を重ね、存在も次第に知れ渡るようになったが、そもそもどのような主旨のもとで開催されているものなのか、まとめて語る機会がなかった。参加父母も恐らく正確には把握しておられないだろう。私たちは教育学部と地域社会との些細な断絶を解消することが大切だと考えてきた。そのためには、ＹＯＵ遊サタデーが生まれた背景を知る機会を用意することが求められる。

現役教師と父母の対話が成り立っていないという教育問題があるが、一方ＹＯＵ遊サタデーは教師の卵と地域の人々が対話にとどまらず、共に活動している。私はこの意外な事実をもっと強く注目してよいと思う。企画の奇抜さを云々する以前に、こうした場が成り立っている素朴さを感じて欲しい。私の遊学プランの半分以上がＹＯＵ遊サタデーの理解、見学に割かれるのはこうした観点からも必然的であった。

もう一つは、教育学についてである。教育については関心があるという人々も、教育学となると別物だと思い込んでいる場合がある。難しい、あるいは役に立たないといって敬遠してしまいがちだ。確かに教育学は「教育」から離れて、「学問」色を強く押し出している。実際の教育には直結しない研究も数多い。だからといって教育学が無力で役に立たず、難しいだけかといえば、必ずしも正しくないと思う。教育学とて絶対ではないのだ。恐れる必要はなく、積極的に受けてたっても大丈夫だと知って欲しかった。

【２】参加者と対応方法

対象を一般成人とした。当初は高校生以上を考えていたが、他の講座との兼ね合いや講座の性格をより明確化するためにこうなった次第である。応募者以外にも当日会場にやってきた父母の方々にも参加してもらおうという目論見である。

しかし失礼ながら、大人は子供と比して、反応が鈍い。さらに体力的にも厳しい条件がある。ＹＯＵ遊サタデーの一講座として、やはり一風変わった講義を行ないたいとは思うものの、この条件下では講義すら維持できるか心配となった。話のあまりのつまらなさに反応を得られず、ただ教室の前で立ちつくしている自分の姿が見えそうであった。

今回の講座は、参加者との対話の中でどこまで雰囲気を盛り上げていけるかが重要であった。そのためには相手を引き込む「おしゃべり」を展開する必要がある。既存の講義との違いを出す最も大切な点だろう。そして動きの鈍い（であろう）参加者を、あえて動かすことにした。ＹＯＵ遊サタデーの見学は「百聞は一見に如かず」である。

【３】内容

ＹＯＵ遊サタデーに関しては、昨年度の実践記録冊子と自己体験をもとに紹介し、見学を折り交ぜることを基本内容とした。問題は教育学の話題選択だった。

教育学は時代の要請によって細分化され、今日その全体を把握することはきわめて困難な状況になっている。今回の講座の中で概観することはそう容易いことではない。確かに「いじめ」「学校５日制」「体罰」など話題にすべき問題はある。これらは論議されてしかるべき話題であろう。しかしながら私としては、これらを扱いたくなかった。教育学から視線がズレてしまうことを恐れたのである。私の基本的立場は、教育学の垣根を低くすることにある。それゆえあえてこれらを外した。

そこで私は遊学プランに次の話題を盛り込もうと記した。1)学校論 2)学力論 3)イギリス教育 4)長野教育史 5)クラス替え、以上５項目。これらで教育学の主要分野をほとんどカバーできる。

「学校論」には教育社会学での成果や教育制度研究を盛り込めるだろう。「学力論」には教育内容や教育評価といった問題を。「イギリス教育」を紹介することで、教育改革に関する実状を知ることができ、比較教育学になる。「長野教育史」では長野県が教育県といわれるようになった理由を見ることで教育史の一端を触れられるだろう。全体を通しては教育哲学、教育心理学にも触れざるを得なくなる。

しかしながら、今回の講座は諸条件から２時間が割り当て時間となった。時間に照らして盛り込もうとした内容は過剰だ。当日近くになって私は急遽、教育学のパートを新たに組み直すことにし、次のような構成とした。1)感覚教育の重要性 2)防災と教育 3)教育県といわれる理由、以上３項目。

「感覚教育の重要性」はＹＯＵ遊サタデーとの関連から、感覚教育のピークは９歳までとの学説を紹介し、その大切さと大人になっても必要なものであることを説明する。「防災と教育」は私のオリジナル教材であり、都市の防災計画と学校の教育計画を対比した図を通して教育の問題点を見ていこうというものである。新たな２案と、長野教育史からの部分拝借を合わせてもなお話題は過剰になりそうであるが、とりあえずこう変更した。

３．計画から実践へ

講座の流れは次のようなものを描いていた。前半はＹＯＵ遊サタデーのパート。これまでの活動と趣旨を説明し、見学を通して理解を深めてもらうことにする。後半は教育学のパートとし、前半を踏まえ、対話を通して教育学へご招待する。

計画では不確定要素が多く、具体的な流れのペースは当日にならなければわからなかった。そこで当日までにできることとして、「おしゃべり」の練習をする。遊学プランの流れに沿って、一度原稿を書く。次にテープレコーダーを利用し、自分のしゃべりを録音、自分で聞いておかしな点をなおすように努めた。

しゃべりに関して留意する点を考えてみよう。まず何をしゃべりたいのか明確にすること。そのために主語と述語に注意しなければならない。文と文の連結に問題がないか、だらだらと長くしゃべっていないか。文脈が飛躍していないか。また、変な口癖がないかも気をつけておきたい。「まぁ」が多いときには行き当たりばったりで物事をしゃべっていることがほとんどである。

話の内容だけでなく、話し方はそれ以上に重要となる。声の大きさ、声の高さ、しゃべりのスピード。これらを微妙に変えるだけで受け手側の印象はまるで変わってしまう。セリフの棒読みのようなしゃべりもいただけない。内容にしたがって抑揚をつける必要がある。例えば強調するには「声を大きくする」「ゆっくり話す」「前後で間を空ける」「繰り返す」といった方法がある。これらを使いこなせることが大切になってくる。

講座の中では簡単な資料を配布し、言葉だけでなく記録された文字でも理解を促せるようにする。説明には模造紙に描いた図なども利用し、視覚的な訴え方も試みる。

問題は恐らく、意見のひろいあげ方であろう。こちらが一方的なしゃべることだけでは参加者がただ聞くだけの受け身姿勢となってしまう。ＹＯＵ遊サタデーの参加の精神を尊重するためにも、対話の余地を残しておかなくてはならない。しかしそれこそが不確定要素として私を悩ませるものであった。

４．活動の実際

さて、当日は途中参加も含めて１２名ほどの参加者を得た。まずは軽く挨拶を交わし、名前をうかがう。ざっくばらんな雰囲気を作るためにはこの時点から少しくだけた感じを出していかねばならない。まずはＹＯＵ遊サタデーと教育学部に関する話題を紹介した。微笑ましい実践内容は、あえて笑い話を創り出さなくても十分参加者の反応を引き出すことができた。そのおかげだろうか、その後参加者へ積極的な問いかけや話しかけを行なうと、各々の持っている問題意識や経験を気楽に話し合うことができた。当初予定していたクラス替えに関する話題についても参加者から意見がのぼり、それに呼応して各々が学校に対する思いを述べ、新卒の教師に対する不満まで飛び出すに至って一同苦笑する場面すらあった。

以上のような進行から、対話を重視とした活動は成功したと考えられるが、残念ながら次に述べるような不手際も散見され、こうした活動の難しさを痛感した。

まず、机の配置が普通の講義形式と同様であったため、互いの顔を見て話し合うという活動に結びつかない失敗があった。さらに、活動途中でＹＯＵ遊サタデーの見学を取り入れたため、時間配分に失敗し、せっかく盛り上がった対話が十分消化されなかった上、後半の教育学のパートでは一方的なおしゃべりの展開を余儀なくされてしまった。

ＹＯＵ遊サタデーの見学に関しては、一つひとつを見て回る際に、キャプテンから紹介の言葉をいただいたため、時間がかかった。学生と父母との交流を促す意味でも望ましいやり方だったと考えているが、実際は私自身が世話を焼きすぎた感もあり、今後交流の方法を具体的に考えていかねばなるまい。

最後には慌てた形となり、教育学に対するイメージを軽くするという目的が、逆に何だかもっと難しく思えるようになってしまったかも知れないが、一人の居眠り者を出すこともなく、無事「おしゃべり教育学」はお開きとなった。

５．アンケート結果から

それではアンケートの結果から「おしゃべり教育学」を見てみることにしたい。まずは始まる前までの印象を聞いた。この質問から「教育学」という言葉に対する参加者の考えが見えてくるのではなかろうか。結果として半数の参加者が「堅そう・難しそう」であると答えていることから、教育学に対して敬遠する雰囲気がうかがわれる。もっともタイトルには「おしゃべり」の文字も踊っていたため、「興味があった」「面白そう」と答えた参加者もいた。

そして講座終了後の全体的な印象も聞いてみた。すると「もっと聞きたかった」「興味深かった」「面白かった」という選択肢に答えが分散した。また「忙しかった」という答えを選ぶ参加者もおり、実際の活動がそのまま結果として現れたことがわかる。

内容に関しても「面白かった」「興味深かった」が圧倒的に多いが、一方で「もっと現実的に先生、母親、子供の話かなと思っていた」という意見があるように、内容がなお抽象的であったことも否めない。

さて、講座自体にはおおよそ好意的な評価がつけられているが、講座の目的であった課題はどの程度達成できたであろうか。

ＹＯＵ遊サタデーの紹介について、スタッフのアンケートには「いろいろな講座をみることができてよかったというお母さんたちがいてよかった」と記されていた。他にも「学生の方から自主的に、このような企画が生まれた事は、大変素晴らしい事と思います。」「日頃学生の方と接触がないので、色々な立場の方の考え方や体験が伺えて勉強になりました」という記述がみられ、ＹＯＵ遊サタデーという場への理解は促されたと考えてよいようである。

しかしながら、教育学に関しては「問題が多い」といった印象を与え、むしろより難しいものであると思われてしまったようである。「役立ちそう」「意外と簡単」といった答えは数人であった。教育学自体の根の深い難しさが原因であろうが、時間的制約による慌てた説明にも問題があったと考えられる。そういう意味でも改善の余地があり、あきらめる必要はないと思われる。

また「おしゃべり」の部分に関しても問いを立ててみた。話し方や説明の仕方など、質問項目を設定したが、ほとんどが良好との評価であり、対話もできていたと答えている。この点に関しては当日までの練習などが十分活かされたと見ていいのだろう。

もっとももう一人のスタッフは「また、反省を活かして開いてほしい」と記していることから、今回の講座の実際には、かなり多くの反省点・改善点があると思われる。具体的には内容をもう少し詰めることや、時間配分の改善であろう。再度行なうとすれば、午前午後とにわたる時間をかけた対話や見学を実現したい。また、途中参加者に対して修了証の準備の不手際があった。スタッフとの打ち合わせが十分でなかった点でもある。この点も配慮できればと思う。

6．まとめ

「おしゃべり教育学」は、私が将来、講義を行なう立場に立ったときのための予行演習をもねらいとした企画であった。研究者である自分が居るとき、研究をわかりやすく表現する表現者としても居る必要があると考える。その点で意味ある試みであった。

キャプテン自身よりも低い年齢層を相手とする他の講座とくらべれば、この講座はいままでになかったタイプのものである。しかし今後ＹＯＵ遊サタデーという催し自体が意義を生み出すためには、父母をはじめとした地域の方々との接触をいま以上に展開しなければならない。今回、このような講座の必要性は確認されたものと思われる。今後は反省点などがフィードバックされた上で、より多くの一般成人の参加者を取り込む努力も望まれるであろう。

さて、蛇足ながら「おしゃべり教育学」は「～ＹＯＵ遊サタデー１周年記念講座～」という隠れた副題がついていたことを記しておきたい。私たちにとって、この一年間はなにものにも代え難い一年であった。多くの仲間に敬意を表し、新たな一歩のために貢献できればとの思いであった。今後他の大学院生による講座開設を期待したい。

外国人と世界の遊びで楽しもう

渡辺　一博（英語専攻　４年）

１.講座設定の理由

今日、国際化の重要性がますます叫ばれ、地域でも学校でも子どもたちが外国人やその子どもたちと接する機会も増えてきている。子どもたちは人や文化を受け入れることに対して柔軟な対応を示すことができると言われており、そのような子どものうちに、外国人や外国文化に接する機会を提供することは重要かつ意義のあることであろう。しかし、外国人と接することに不慣れであると思われる日本の子どもたちの実態をふまえると、リラックスした雰囲気のなかで、外国人との隔たりを感じないような場の設定が必要である。そこで、楽しみながら同じ活動を共有できる「遊び」を通して外国人と直接触れ合うことが有効であると考えた。また、様々な国の遊びやプレゼンテイションは、非常に表層的なものではあるが異文化理解にも繋がるであろう。本講座を通して、子どもたちに少しでも外国人やその文化に関心をもってもらいたいとの願いから「外国人と世界の遊びで楽しもう」を設定した。

２.実践計画

第（４）回ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	外国人と世界の遊びで楽しもう	平成７年　５月２７日(土)（午前）
キャプテン名	渡辺　一博　（英語専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　２３　名 参加者数　５０　名
指導教官名	渡辺　時夫教官　伊原　巧教官	活動場所　図２Ｆ

講座のねらい

子どもたちの地域に在住する諸外国の人々とそれぞれの国の言葉、歌、遊びなどを共有することを通して、どの国の人とでも友達になれることを体験させる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの活動内容	子どもたちへの働きかけ	教　材
20'	導入	1. Introduction of Each Country －Self-introduction －Explanation about Each Country －Interesting Things about Each Country －Greeting Words	・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ形式で各国の代表の名前、国、文化、挨拶言葉（こんにちは、さようなら程度）を紹介してもらう。各国代表には、まず母語で答えてもらい、その後で日本語で繰り返してもらう。それらのことを通して世界にはいろいろな国、（異）文化のあることを認識させる。	世界地図

95' 10'	展 開	2. Listen and Participate in Each Pavilion －Iran －France －Mongolian －Korea －Philippine －U.S.A. 3. Discussion & Farewell －Questions and Discussion for mutual deeper understanding －Presentation of impressions by students	・参加者全員にﾊﾟｽﾎﾟｰﾄを配る。 ・全部の国を回ることができるので、それぞれの国のﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝで遊んでもらう。ｱｼｽﾀﾝﾄは移動の際、偏りなくｽﾑｰｽﾞに始められるよう参加者の誘導、また各配属ﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝの補助に当たる。（特に日本語での説明やｹﾞｰﾑの方法の説明がわかりやすく伝わるよう補助する。 ・みんなに椅子を持ってきてもらい着席する。座談会のような和やかな雰囲気の中子どもたちに今日の感想や思っていることを述べてもらう。 さらに、国際理解を深められるよう質疑応答・意見交換を行う。	ﾊﾟｽﾎﾟｰﾄ
5'	ま と め	4. Summerization －Description ones' own impressions and questionnaire －Farewell	・今日の感想・ｱﾝｹｰﾄの回答をｱﾝｹｰﾄ用紙に記入してもらう。 ・全員並んで、一人一人握手で“さようなら”（それぞれの国の言葉で）	ｱﾝｹｰﾄ用紙 修了証

３.実践報告

Ａ．当日の様子と考察

この日プレゼンターとして６か国から１６名が集まってくださった。その多くは日本語がある程度話すことができた。うちモンゴルのプレゼンターは信大教育学部の英語科の留学生であり、他の人々は様々な理由で日本（長野市）に住む海外出身者である。親子で参加してくださった国も多くあった。会場に来てくれた参加者（子ども）は、約５０名でほとんどは小学生であった。また、付き添いの保護者や幼児たちも加わり、さらに信大生７名を加え会場は８０名近い賑わいぶりとなった。

〔活動１〕各国の紹介

はじめに各国のプレゼンターにステージにあがってもらい、インタビュー形式で自分の名前、自国の位置、文化、挨拶言葉など一国ずつ紹介してもらった。子どもたちは予想以上に６か国の地図上での位置を把握しており、驚かされた。とはいえやはり、フランス、アメリカ（アメリカ合衆国のこと。参加者の年齢も考えて「アメリカ」と呼ぶことにした。本文でも以下同様とする。）は多くの声があがったのに比べ、モンゴル、イランなどでは声はまばらだった。しかし、これはなにも子どもに限った現象ではないと思われる。日本人の欧米思考が反映されているのであろう。数か国のプレゼンターは民族衣装を身につけてきてくれたので、参加者も関心を持って見ていたようだ。また、各国の挨拶言葉は「こんにちは」と「さようなら」の２つに絞ったとはいえ、それぞれの言葉の発音体系が異なるので子どもたちには大変かと思われたが、やはり多くの言語学者が指摘しているように児童期の子どもは発音面に関しては児童期を過ぎた者よりも優れた習得力を持っているのであろう、非常にうまく発音を真似ていた。

〔活動２〕いろいろな国の遊びを楽しむ

一通り紹介が終わったところで、プレゼンターにはそれぞれのパビリオンに分かれてもらった。子どもたちにはあらかじめ「パスポート」を配布しておき、各パビリオンを訪問したしる

しにプレゼンターのサインをもらうようにしてあった。6つのパビリオンすべてを回れるようになっているので偏らないようにと言っておいたが、やはり出足に多少の人数の偏りはあった。ここで、非常に関心のあったことは、アメリカにどれくらい関心を向けて来るだろうかということだった。というのも今回はアメリカのプレゼンターには黒人の方にきていただいていたからだ。日本人とはかなり肌の色が違うが、子どもたちがどのような反応を示すか非常に注目される点だった。

各パビリオンの様子は次のようである。

○イラン

ロングコートに厚手のスカーフといったイランらしい控え目な衣装であった。小石を使ってイランの伝統的な遊びをした。石を上に放りあげ、その手で床に置いてある別の石を拾いあげると同時に、落ちてくる石もキャッチするというのが基本的な遊び方だったようだ。最初子どもたちが石をみたとき、「ただの石か」といった表情が読み取れたがプレゼンターが実際に遊び方を示してもらって子どもたちがやり始めて見ると、見た目のシンプルさとは違って意外と難しくまた楽しかったらしくその後はみんな順番を待って遊んでいた。学生のアシスタントとの関わりは多かったようだが、残念ながらプレゼンターとのコミュニケーションや触れ合いはあまり密であったとは言えないようだ。

○フランス

赤と白の可愛らしい衣装がいかにもフランスらしかった。まずはフランス語の歌に挑戦。おそらく初めて聞いたであろうフランス語で何とか歌おうとしていた。遊びは日本のくじ引きのようなものをした。今回は本来の材料がないのでスパゲティを使ってくじを作っていた。それが子どもたちには新鮮に見えたらしく、シンプルではあるが楽しそうにゲームをしていた。プレゼンターの二人は子どもたちとかなり近い位置で接していたが、やや一方的なプレゼンテーションとなってしまっていたので、インターアクションはさほど多くなかったようだ。

○モンゴル

非常に鮮やかな衣装で中国のものに少し似ていた。見た目は日本人とあまり違わないので、子どもたちも自然に溶け込めたようだ。「猫と鼠」という鬼ごっこや、日本の「ハンカチ落とし」や「花いちもんめ」に似た遊びなどプレゼンターの子ども（小5）の案によってさまざまな遊びが提供された。非常にアクティヴで楽しそうだった。また遊びそのものが日本のものと共通点が多かったので子どもたちの中から「それ・・・に似てる！」といった声もあがっていたようだ。ここはプレゼンターとその子どもたちも積極的に輪の中にはいって一緒にゲームをしてくださったので、非常によい交流の機会が持てたのではないかと思う。

○韓国

「ゼギ」と呼ばれる韓国の伝統的な遊びで、やり方は日本古来の蹴毬によく似ているが、蹴るのは硬貨をひらひらのナイロンで包んだものなので形としては羽子板の羽根に近い。プレゼンターのお子さんが韓国の民族衣装である「チマチョゴリ」を着ていたので間近でそれを見た子どもたちの目をひいたことだろう。思い思いに蹴ってみるがなかなか思うようにはいかないようだ。しかし、夢中になって取り組んでいた。プレゼンターの方がその後、羽根の作り方を子どもたちに丁寧に教えてくださった。そういう意味では、幾分かでも相互のコミュニケーションを図り、触れ合いがあったと言えるだろう。

○フィリピン

一番多くのプレゼンターが参加してくれていたが、皆非常に華やかな民族衣装（ドレス）に身を包み、壁掛けや置物などフィリピンの雰囲気を出そうといろいろと工夫してくださっていた。遊びは「バンブーダンス」であった。音楽に合わせて竹を開いたり閉じたりしながら拍子を取る。その内と外で器用にステップを踏む。見た目よりは足の動かし方が難しいらしく、初

めは練習のために竹を閉じずにやって段々に難しくしていった。一度に何人も一緒に飛ぶことができたり、珍しい遊びなので子どもたちも楽しそうに参加していった。またフィリピンの人達が熱心にステップの踏み方を指導してくださった。相互のコミュニケーションはまずまずといったところであろうか。

○アメリカ

プレゼンターはイギリス生れ、アメリカ国籍の黒人の方であった。いわゆる「サイモン・セッズ」という遊びをした。プレゼンターの発する英語に合わせて体を動かすゲームである。後半になって白人系の男性も加わってくれた。子どもたちが恐らくは初めて間近で接したであろう黒人の方とどう接するのか非常に興味深かったが、子どもたちは自然に彼と慣れ親しんでいたようだった。終始笑顔がみられた。ほとんど英語が使われていたこと、また常に子どもたちとプレゼンターたちが向き合って一緒に活動できていたので、非常によい感じで交流できたのではないかと思う。子どもたちは肌の色の違うプレゼンターに対して特に戸惑うことなく、楽しく体を動かしていた。高学年になるにつれて体を動かす事に対しての恥ずかしさのあるのが見て取れた。

どのパビリオンでも、子どもたちは初めて接するプレゼンター（外国人）との遊びに熱中していた。中には２、３人なかなか溶け込めない子もちらほら見受けられたが、これは相手が外国人であったことによるものではなく、まわりには知らない子ばかりであったために輪の中に入りそびれたものと思われる。大人も子どもも非常に生き生きとした表情で遊びに取り組んだり、プレゼンターからいろいろなことを教わっていた。また、各パビリオンでの活動が終りプレゼンターから記念のサインをもらうときには、非常に嬉しそうだった。

アメリカには勢いよく子どもたちが集まり、やや多めの人数でのスタートとなった。プレゼンターが黒人の方であってもやはり子どもたちのアメリカへの関心は高かったようである。ここでもアメリカ志向が現れる結果となったのであろう。アメリカというイメージが肌の色の違いを気にさせないほど強いものだったということだろうか。もしくはもうひとつの可能性として考えられることは、子どもたちの中には肌の色の違いを意識するとか、差別するとかいった感覚はないということである。肌の色による差別やそのイメージは後天的に生まれたものがほとんどと思われる。マスメディアやテレビ、雑誌等、溢れるばかりの情報によって、我々大人自身がかなり酷く毒され、刷り込みされているということは否めない。受けてきた情報の量とその処理の仕方が子どもと大人はかなり違うということである。まだ、経験の少ない子どもたちは、善かれ悪しかれ大人のような価値観はまだない中性の存在なのではないだろうか。実際に、文化理解の発達には、より寛容的で偏見の小さい子供のほうが優れており［Donoghue and Kunkle 1979:7-10］、子供の頃は、good-willと文化間理解の開始時期としては理想的である［Finocchiaro 1964:4］などの研究報告が成されている。

今回の取組みから、雰囲気づくりが整っていれば子どもたちはどんな外国人とも比較的積極的に関われるであろうことが見てうかがえた。「遊び」を通して相互のコミュニケーションを図るというところまではなかなか難しかったようだが、どのパビリオンも楽しく活動をし、お互いに交流を持つことができたと言える。

〔活動３〕相互の理解を深める話し合い

全員が６つのパビリオンを回ったところで、椅子を持ってきて円形に座席を取り、お互いの顔がよく見えるようにした。子どもたちはもう遊び疲れたのか、関心がなかったのか、活発な発言はなかった。「質問のある人？」といっても手は挙がらない。こちらの一方的なプレゼンテーションに終わってしまった。やはり「恥ずかしさ」からなのであろうか。あるいはもともと日本にしか住んだことがなく、ほかの国の文化や生活が自分たちのそれと違っているということがまだはっきりと認識できていなかったこともその一つの原因かもしれない。いずれにせよ、異文化に触れたことを実感してほしかったのだが、もう少し子どもたちの実態をつかんだお膳立てが必要であった。

〔活動４〕まとめ

あらかじめ用意したアンケート用紙に記入してもらい、簡単な修了証を手渡した。最後にプレゼンターに一列に並んでもらい、子どもたち一人一人とそれぞれの国の言葉で「さようなら」の挨拶を交わし、握手でお別れをした。どの子も満足げな表情で会場を後にした。

Ｂ．アンケート結果の考察

―外国人と世界の遊びで楽しもう―
に関するアンケート

※どれかひとつ（またはふたつでもよいです）に○をつけてください。

Ｑ１．どうして「世界の遊び」に来たいと思いましたか？

ア．外国人と会いたかった（遊びたかった）から　…２４人〔52.2 %〕
イ．親に「これにしたら」と言われたから　…１３人〔28.3 %〕
ウ．一番楽しそうだったから　…　５人〔10.9 %〕
エ．いろんな国の人のことを知るのは大切なことだと思ったから…１２人〔26.1 %〕
オ．その他（ガールスカウトできめられていた…６人〔13.0 %〕、友達にさそわれた…１人〔2.2%〕）

Ｑ２．今日ここに来たときいろんな国の「外国人」を見てどう思いましたか？

ア．金髪で青い目をしている人ばかりがいると思っていた　…　３人〔 6.5 %〕
イ．ちょっとこわい気がした　…　１人〔 2.2 %〕
ウ．ことばが通じるかしんぱいになった　…３０人〔65.2 %〕
エ．どの人とも同じように仲良くなりたいと思った　…２９人〔63.0 %〕
オ．なんとなくかたよった見方（差別する気持ち）も少しはあった…３人〔 6.5 %〕
カ．その他（いろんな遊びがわかると思った）　…　１人〔 2.2 %〕

Ｑ３．今日ここに来てみて自分が変わったと思うことや新しく気づいたこと、また今思っていることがあったら何でも書いてください。

・いろんな外国人と遊んで楽しかった　…１７人
・外国人と仲良くできてよかった　…　７人
・やさしかった、親切に教えてくれた　…　７人
・外国人に会えてよかった　…　４人

（その他の少数意見）

・もっとほかの外国人と会ってみたい、仲良くなりたい
・どの国もちがう遊びがいっぱいあると思った
・外国人に慣れた
・外国人とおしゃべりして楽しかった
・外国人は陽気で明るいなあと初めてわかった
・フィリピンの人や、外国の人は鼻が高かった
・外国人が日本語を少ししゃべれるなんて思わなかった
・日本と同じような遊びがあった

＊注）Ｑ１、Ｑ２は複数回答にしたので全部あわせて１００％にはならない。

〔考察１〕　アンケートのＱ１は今回の講座に参加しようと思った動機、きっかけをさぐるものであった。「外国人と会いたかった（遊びたかった）から」…２４人〔52.2 %〕ともっとも多かった。また「いろんな国の人のことを知るのは大切なことだと思ったから」…１２人〔26.1 %〕という理由も多かった。一方、「親に『これにしたら』と言われたから」…１３人〔28.3 %〕。これに「ガールスカウトできめられていた」…６人〔13.0 %〕も同質のものとし

て扱えば１９人〔41.3 %〕の子どもたちが自ら以外（大人）の働き掛けもあって参加していたことがわかる。

〔考察２〕　この設問は、子どもたちが外国人に対して抱いている価値観をさぐるものであった。言葉が通じるかどうかへの関心が高かった（３０人〔65.2 %〕）。これはごく当然の結果だと言えよう。言葉あるいはコミュニケーション上の心配をする反面、今回の参加者はほとんど自らが望んで、または納得したうえで参加しているので比較的目的意識がはっきりしていたものと思われる。外国人と自分たちとの違和感や恐れなどはほとんど感じておらず、「どの人とも同じように仲良くなりたいと思った」という回答もかなり多かった（２９人〔63.0 %〕）。これらは、ことばの壁をどうしたらよいか分からないが、それでも外国人と仲良くなりたいという積極的な子どもたちの態度が反映された結果であると思われる。

〔考察３〕　「楽しかった」という回答が大半であった。「外国人と仲良くできてよかった」、外国人が「やさしかった、親切に教えてくれた」が継いであげられている。特に「仲良くできてよかった」という回答の背景には、この活動が単なる遊びで終わらず、「私は外国人と友達になったのだ」という心情が子どもたちの意識の中にあったことを示唆している。言い換えれば、自己に対する自信と達成感といったものであろうか。程度の差はあれ多くの子どもたちはそういった心情を抱いていたのではなかろうか。「もっとほかの外国人と会ってみたい、仲良くなりたい」といった回答は少数（３人）であるとはいえ、そういった心的態度のより積極的な表出であろうと思われる。また外国人や異文化に触れて新しい発見をした子もいたようだ。例えば、「どの国もちがう遊びがいっぱいあると思った」、「外国人は陽気で明るいなあと初めてわかった」、「フィリピンの人や、外国の人は鼻が高かった」、「日本と同じような遊びがあった」、「外国人が日本語を少ししゃべれるなんて思わなかった」などである。

４.講座を振り返って

「遊び」を通して外国人に接するときには、不安そうな表情をしている子は見られなかったし、それぞれが思い思いに外国人と「遊び」を楽しみ、生き生きと活動していた。またアンケートの回答を見ても、子どもたち自身が国際交流を楽しみ、外国人と触れ合うことに喜びや発見を見いだすことができたようである。このような子供たちの姿やアンケートの結果から、本講座のねらいはある程度達成できたのではないかと思う。また、「遊び」が国際理解教育の媒体として効果的であることも確認できた。しかし、「遊び」に対してはそれぞれの子供たちが積極的に関わっていけたと思うが、「遊び」を通して「ひと」と交われたのかというと疑問は残る。また、アンケートの内容ももっと考慮していれば、さらに多くの貴重な資料を集めることができたのにと思う。今回の経験と反省をもとにコミュニケーションを通して「ひと」と触れ合う国際交流、国際理解教育を考え、実践していきたいと思う。

終りに

本講座のために積極的に準備とご協力をいただいた地域在住の多くの外国人の方々にまず感謝申し上げる。また、彼らを紹介してくださった本校非常勤講師の北澤教官、講座の計画に当たり、いろいろとご指導と励ましをしてくださった本校英語科の渡辺時夫教官と伊原巧教官、アシスタント・スタッフとして協力してくださった学生諸君に心からお礼をのべさせていただきたい。

〈参考文献〉

松畑　熙一（１９８３），「早期英語教育」，大修館

たのしい英語クラブ（PARTⅡ）

渡辺　一博（英語専攻　4年）

1．講座設定の理由とその目標

私は昨年度（第1期）にも、3度にわたり児童（4～12歳）を対象とした英語遊びの講座に取り組んできた。本講座を設定した理由は、子どもたちにとにかく英語を楽しんでもらい、好きになってもらいたいという願いがあったからである。昨年度の講座の目的は、一言で言えば「楽しい活動を通して英語に触れ、英語に関心をもたせる」ということだった。児童の様子やアンケートなどから推して、この目標はほぼ達成できたのではないかと思う。成果としては、児童英語教育についての研究意欲を高められたこと、児童の実態に合った活動内容（教材）の開発、児童への理解を深めることができたこと、などが主に挙げられよう。しかし、時間配分や疎放的な活動計画、言語材料の不適切さ、効果的なティーム・ティーチングの在り方などいくつかの課題も残された。卒業論文の研究題材として「小学校英語教育」にも取り組んできた今年度（第2期）は、前年の実践をふまえ、（1）「子どもたちが自らもっと英語を学んでみたいと思えるような質、量とも拡充されたより楽しい英語『遊学』の場の提供」をすると共に、（2）「児童の実態に合った英語活動の在り方の追求」をしていきたいと考え、「たのしい英語クラブ（PARTⅡ）」と称し、当講座を設定した。したがって、今期は2つの観点から目標を設定することにした。ひとつは「楽しい英語活動を通して英語に慣れ親しみ、自ら学びたいという意欲を持たせる」であり、もうひとつは「児童の実態に合った英語活動の在り方を観察やアンケート、簡単な口頭によるテストなどを通して調査・研究する」である。ただし、後者に関しては「ＹＯＵ遊サタデー」の基本理念である「楽しく」という大前提を幾分たりとも損なうことのないよう細心の注意を払ったことを付記しておく。

2．教材研究

昨年は、中身が多すぎたように思う。その結果、内容が系統性をもたず活動主体の講座となってしまった。実質、二つの全く違った教材をつなぎ合わせたというのがその原因である。そもそも、英語を覚えるとか使えるようになるとかいうのは初めから第一義の目標とは考えていなかったので、楽しむだけだったらそれでも十分だったかもしれないと思う。しかし、2年目の今年度は、「より楽しい英語活動」プラス「英語ができるという達成感」も、味わわせたかったので、方法を変えることにした。具体的には、目標とする言語材料を念頭に置き、段階的にそれを定着させるための活動を選定するようにした。これによって、活動のための活動ではなく英語に親しむための活動とすることができると考えた。言語材料として取り上げたものは主に“Ｕｐ，Ｄｏｗｎ，Ｒｉｇｈｔ，Ｌｅｆｔ”であった。ただし、聞いてわかることが第一の目標で、アウトプット（発話）については無理に言わせるのではなく、同じチームの友達を助けるために必要なので発話するといった臨場感と意味のある場面を設定することにより、児童の発話を誘引するよう工夫した。また、ほんの少しでも異文化理解を取り入れた英語活動を提供しようと思い、非常に表層的な内容ではあるが、第7回の信大ＹＯＵ遊サタデー（10月28日）の際には時節がら「ハロウィン」を教材の内容に加えることにした。

3．実践例（１０月２８日実施分）

第（７）回ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	楽しい英語クラブ	平成7年１０月２８日(土) （午後）
キャプテン名	渡辺　一博　（英語専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　4　名 参加者数　4　名
指導教官名	渡辺　時夫　教官	活動場所　５５番教室

講座のねらい： 英語に関心のある子どもたちが、「方向」を英語で学ぶ場面で、キャプテンシスタントの英語を聞くことや口頭練習、ゲームを通して、「方向」を英語で聞き取っやアたり、友達に教えることができるようになる。また、全体を通して、英語が楽しいと感じ、らに自ら学びたいという意欲を高められる。

講座の展開

過程	時間	活動内容	指導方法・注意事項	教材	指導体型
導入	10	1. Greeting 2. What is 'Halloween' -Introduction of Halloween -Game:'Where is my Fellows?'	・元気よく．リラックスできるように ・「ハロウィン」の起源や、どんなことをするのか簡単に紹介．モンスターの名前も紹介する（Bat, Jack-o'-lantern, Witch, Frankenstein, Wolfman, Dracula） ・目隠しをして、自分の名前（モンスター）を英語で呼び、仲間を探す	mon-sters' pic-tures 目隠し	一斉
ステップⅠ	15	3. Right & Left -Practice & Song -Game:'Trick or Treat'	・できるだけ英語を使い、練習や歌などを通して right と left を覚えさせる ・あめ玉を片方の手に隠し、両手を差し出して "Trick or Treat" と言う．right かleftかを言わせ、飴の入った方を当てたらそれをあげる	飴玉	一斉または2,3ｸﾞﾙｰﾌﾟ
ステップⅡ	15	4. Up & Down -Practice -Game: *'attcimuite Up'*	・Stand up, Sit down, Jump up, Squat down, などを用いてTPR活動 ・じゃんけん遊び「あっち向いてホイ」の要領で、ホイの代わりに Up, Down, Right, Leftをあてはめる		一斉
ステップⅢ	10	5. Facial Parts -Memorization & Practice -Game:'Simon Says'	・顔の各部分の名称を覚える ・顔の部位と方向を表す英語を、ゲームをしながら定着させる	「福笑い」のﾁｬｰﾄ	一斉
休憩	10	Break	・休憩．仮装の準備	仮装	
メインアクティヴィティ	15 15 20	6. Halloween Party -The Halloween Contest -Game: *'Fukuwarai'* -'ﾍﾟﾆﾔｯﾀ'	・仮装し、自分が何に扮したのか 'I am ～.'などの表現を用いて紹介し、パフォーマンスする ・方向や顔の部位を表す英語を復習し、「ふくわらい」をする．子供一人に目隠しさせ、仲間の子供たちの助言（英語）に従ってパーツの位置を決めさせる ・Go(forth), (Go)Back, Stopも覚えさせる ・目隠しをさせ、棒を持たせ、仲間の子供たちの指示を頼りに、目標のところまで行き 、ペニヤッタを思い切り叩かせる殻が割れてなかのお菓子がでたら一斉に拾わせる	ｺｽﾁｭｰﾑ ﾗｼﾞｶｾﾃｰﾌﾟ 顔のﾊﾟｰﾂ 目隠し 目隠し 竿 ﾍﾟﾆﾔｯﾀ お菓子 棒 丈夫な紙	一斉 一斉 または 2、3ｸﾞﾙｰﾌﾟ

まとめ	10	7.アンケート記入	・アンケート用紙に回答を記入してもらう ・修了証を渡す	ｱﾝｹｰﾄ用紙 修了証	一斉

4．講座の実際

今年度は、①7月1日、②9月9日、③10月14日、④10月28日の4回に渡って英語活動を実施した。①は、近隣の公立小学校のＰＴＡから依頼を受け、「僕らはみんな世界人」と称して、親子での英語活動を楽しんだ。「出張ＹＯＵ遊サタデー」第一号としては、上々であった。このときは、「自己表現」ということも目標の一つとして取り組んだ。動物の真似をして名前あて（英語）をするというゲーム（ジェスチャーゲーム）では、保護者のアンケートからは、やはりまだ子どもたちに恥ずかしさが残っているということであったが、「ストレートに入っていく姿が素晴らしい」といった声も聞かれた。また、昨年にもあったケースだが、初めのうちどうしても輪に馴染めない子がいて「半ベソ」状態の子がいた。私は、昨年の経験を生かしながら活動を進めていくと、最後には笑顔が見られ、自分から手を挙げて発言する場面も見られた。ほっとした。子どもたちは活動の楽しさに段々と引き込まれていくようである。しかし、まだこのときは昨年度のパターンのままで、活動のための活動が多かったように思う。

②では、その点がやや改善され始めた。まだ二段構成であることは変わりないが、二つの内容を最後に組み合わせた活動を取り入れることができた。内容にいくらか系統性がでてきた。今回は、色と図形を遊学させ、最後にそれらをどのくらい認知したり、アウトプットできるのか下学年（3年以下）と上学年（4～6年）にわけて調査してみた。調査方法には不備な点が多く信頼性には欠けるが、およそ次のようなことがわかった。ほとんのどの児童が、色や図形を英語で聞いてアイデンティファイ（同定）できた。アウトプットについては、上学年のほうが下学年よりも答える早さ、発音の面で優れていた。上学年の場合、親や英会話スクールからすでに英語を学んでいる子も多いし、わずか数年とはいえ生活経験が長いのでその間に与えらえたインプット（カタカナ英語）の量は相当の違いがあるものと考えられる。また、扱った教材は単語レベルのものであり暗記力の差ともとらえられる。従って、アウトプットに関する上学年の優位性はあくまで推測の域をでないが、聞いてわかるという能力については予期していたほど下学年と上学年との間に大きな差は認められなかった。ここから得られる示唆としては、アウトプット中心の活動は少なくとも下学年には適さないので、インプット中心（聞いてわかる）の活動を多く取り入れるのがよいであろうということである。

「二度あることは3度ある」というが、まさにその通りでまたもや一人の女の子（園児）が、初めての雰囲気に馴染めず、「半ベソ」症候群となった。幼いので無理もないかもしれないが、こちらも鍛えられてきていたので、アシスタントと共にできる限りその子とコミュニケーションを図り、励ましたりほめたりしてあげるよう努めた。なんとかしてあげたいと思った。とうとう最後には壁を克服し、一緒に参加できるようになった。この話しには、後日談がある。その子はその日のうちに、次の「信大ＹＯＵ遊サタデー」の講座を申し込んでいた。「たのしい英語クラブ」ではなかったらしい。「さもあらん」と思っていたある日、その子の名前が本講座の名簿に変更されていた。人伝に聞いた話しでは、あの子は別の講座への申込を済ませて一旦家に帰ったが、後になってやっぱり英語クラブに行きたいと言ったらしく、１０月に再会することになる。そのときには、彼女も会場の雰囲気になれており、楽しく参加できたようすだった。

その③の講座では、だいぶ内容が改善された。「２．教材研究」でのべたように、言語材料(Up, Down, Right, Left)を柱に活動を組んでいった。流れもすっきりし、系統性も生まれ、まずまずの出来栄えだったろう。「ふくわらい」では、周りの子供たちが方向を英語で教え、目隠しをした友達が正しい位置に顔のパーツを置けるよう助けることができた。発言する子にやや偏りはあったが、場面の効果が生きていたと思う。また「宝探し」では、チームごとに一人のアシスタントをつけ、行く先をチームリーダー（「隊長」と呼んだ）に英語で指示しながら仲

間を誘導させた。リーダーを交替させていくことにより、全員にその経験をさせた。右と左を混乱しながらも、積極的にリーダーを助けようとする態度がうかがわれた。これらは「聞いてわかる」活動であると共に、自然な形での発話が可能となる活動でもあった。つまり、伝えたいから言う、必要だから口にする、というコミュニケーションの本質に乗じた活動ができたと思う。これによって、「英語が聞いてわかった」、「友達に英語でちゃんと教えられた」という達成感が得られてのではないかと思う。

最終日④は、初めて松本キャンパスで「たのしい英語クラブ」を開講した。参加者は４人と大変少なかったが、海外生活経験者や英会話スクールに通っている子たちばかりであった。従って、もう初めから英語を聞いたり使ったりすることには積極的で、活発に活動に参加していた。こちらがもっと英語を使うべきだったと思ったくらいである。講座の流れは前回の③に準じていたが、ちょうどハロウィンの時期であったので、異文化理解にも繋がると思い、ハロウィンに因んだ活動も多く取り入れた。皆思い思いのコスチュームを身に纏って参加した仮装コンテストは自己表現を促す活動となり、「宝探し」の変わりに取り入れた「ペニヤッタ」（ハロウィンの代表的なゲーム）では、やはり目隠しをした友達がちゃんと「ペニヤッタ」を棒で叩けるように周りの子どもたちが英語を積極的に使って導くことができた。非常に盛り上がり、楽しい英語活動となった。

③、④とも、講座の終りにアンケートの中で、簡単な聞き取りテストを実施してみた。もちろん④の子どもたちができたことはいうまでもない。③では、はやり上学年のほうは全員（４人）が全問正解した。下学年では、１２人中、全問正解したのは４人であった。その中に年長さんの「半ベソ」ちゃんが含まれていたのは嬉しくもあり、驚きでもあった（この子は週一度英会話を習っているが、週に２、３度習っていてもできなかった低学年生も３、４人いる中でこの結果は素晴らしかったと思う）。

５．全体を振り返って

①～④の実践を通して、着実に改善されていった「遊学プラン」の内容を見比べてみると、大学や卒業研究で学んだこと、「ＹＯＵ遊サタデー」で得てきたものが確実に生かされ、お互い有機的に結び付いてきたことが自分でもわかる。事実、卒業研究のなかで「小学校英語教育」の在り方について私が主張しようとしていることは、「ＹＯＵ遊サタデー」で価値を見いだしてきた「個性伸張」、「自己表現力の育成」、「総合体験的活動」などが柱となっているのである。特に「小学校英語教育」における国際理解教育を考えるとき、「ＹＯＵ遊サタデー」を通して見いだしてきたことが、私のめざす教師としての在り方に大きな影響をあたえており、私の中ではすべてのことがひとつに繋がっているのである。これから現場で教員として働くことを望む私としては、何ものにも替え難い財産を得たといってよい。それは、一種の教師としての信念と自信とも言えるだろう。今、私には教師としての目標と方法が示されているような気がするのである。

子どもたちや学生との触れ合いからも多くのことを得ることができた。最後には笑って参加してくれた「半ベソ」ちゃんたち。そして、「もっと早くお知らせをください。とても楽しかったです。また来年もやってください。」などの声は嬉しいものであり、子どもの新鮮な驚きや喜びがストレートに生き生きと表現された感想文には感動した。また、ちっとも言うことを聞かずに騒ぎ回る子どもたちに忍耐と優しさを持って接してくれたアシスタントの姿は印象的であり、「こちらが、できるだけ子どもたちと話すなど、関わりを持とうとしたので、子どもたちは親近感を持ってこちらにかかわってきてくれました。」、「ほかの講座のように（モノを）自分で作ったゾっていう感覚がない分、どうなのだろうととても興味があったけれど、ペニヤッタのときのこどもの表情がすごく嬉しそうで、子どもたちが充実感を得て帰れるヒミツがわかったような気がしました。」などのコメントや、他のアドバイスをくれた学生諸君からも学ばせていただいた。アシスタントとの、ティーム・ティーチングも昨年よりは各段によくなった。お互いを信頼して、それぞれの役割を果たすことができたのではないかと思う。昨年よりも質・量ともに拡充されたと感じている。しかし、アンケート調査によると、「自分でもっと英語を学びたいと思いますか」の質問の回答はそれほど積極的なものばかりではなかった。

「自ら学びたいという意欲を持たせる」という目標は、十分に達成できたとは言えない。というよりも、目標が高すぎたのかもしれない。小学生には「英語に関心を持たせる」といったレベルの目標で十分のように思う。以上のような成果や反省点から考えて本年度の講座の２つの目的は概ね達成できたといってよかろう。今後の課題としては、インプットをいかに与えていくかということや国際理解を扱った教材の在り方の研究などが挙げられよう。

６．最後に

このように、私にとって非常に意義のある場を提供してくださった、土井進教官を始めとする実践センターの教官の方々と、「遊学プラン」を見てご指導と励ましの言葉をくださった英語科の渡辺時夫教官、そして実行委員会の面々とアシスタントを快く引き受けてくれた学生諸君にに心から感謝申し上げたい。そして、「半ベソ」ちゃんたちに特別の「ありがとう」を言いたい。

〈参考文献〉

「『信大ＹＯＵ遊サタデー』の実践」，信大教育学部附属教育実践研究指導センター，１９９５
渡辺時夫、他，「インプット理論の授業」，桐原，１９８８

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	お父さん、 地域で講座を開きませんか	平成７年　９月　９日(土) （午前）
キャプテン名	土井進（教官）　小倉敬（大学院　２年） 新井清規（理科専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　１名 参加者数　５名
指導教官名	土井　進　教官	活動場所　Ｎ２０４

講座のねらい

お父さんが、「ウィークエンド・コミュニティー・スクール事業」の指導者となることができるように、体験的学習の講座づくりの進め方について、具体的に学習する。

講座の展開

時間	活動内容	教材
９：３０	自己紹介……①子ども会、育成会等への父親としての関わりの有無 ②地域の教育力の現状に対する意見 ③子どもの頃の遊び体験 ④この講座への期待など	
９：４５	（講義・土井）　「地域で父親が子どもたちと関わることの喜び」 ・子育てへの父親の関わりの意義 ・地域での生活体験のもつ人間形成的意義 ・高齢化社会と少子化社会の地域における結合	「地域ぐるみ育てる夢」 （信毎、Ｈ７．６．２４） 茨城県総和町の事例 深町修司「時田寺子屋物語」 東部町常田公民館
１０：０５	（講義・小倉・新井）　「遊学プランの書き方」	文部省が推進する「ウィークエンド・コミュニティー・スクール事業」 「笹舟づくり」「ハリガネ工房」の遊学プラン
１０：１５	（ハリガネ工房・小倉）	針金ハンガー ペンチ 軍手
１１：００	他の講座の参観　「竹とんぼ」「ペーパーグライダー」「紙しばい」「アニマルマスコット」「書こう」「アイスクリーム」「スライム」「英語」「教育学」「そば作り」の１０講座	カメラ
１１：２０	遊学プランの構想発表 ・地域での具体化のために ・アンケートの記入	遊学プランの用紙 アンケート用紙
１１：３０	修了証授与	

お父さん、地域で講座を開きませんか

土井　進（実践センター教官）
小倉　敬（大学院２年）
新井清規（理科専攻４年）

１．なぜ、お父さんなのか

「信大ＹＯＵ遊サタデー」の趣旨として、①大学開放、②学生の実践的指導力の向上、そして③学校五日制時代への対応を掲げた。何故なら、この３つの課題に応える新しい実践を創造していくことが、今、教員養成学部に強く求められているからである。学校五日制に移行していくためには、家庭・地域社会の受け皿が重要になってくる。

文部省では平成８年度から「ウイークエンド・コミュニティ・スクール事業」に乗り出す方針を決めた。これは週末に学校のほか地域の公民館や図書館などを会場に、保護者らが指導者となって昔の遊び体験などをするというものである。また、社団法人経済同友会は、1995年４月に「学校から『合校』へ」を提唱したが、ここでも週末の「自由教室」「体験教室」の指導には、保護者や地域住民のほか教員、専門家、非営利団体、企業などが考えられている。両者とも保護者を週末の子どもの指導者として考えており、学校五日制によって家庭・地域社会の教育機能を回復していこうとしている点で共通している。

私は、家庭・地域社会の教育機能回復の鍵を握るのは、お父さんではなかろうかと考える。「子どもは親の背を見て育つ」といわれるが、子どもたちは会社勤めのお父さんの背を見ることもなく成長していく。このお父さんが地域社会に姿を現し、子どもたちとともに昔の遊び体験などをするということは、これまでの常識では考えられなかったことであるが、次世代を育てるお父さんの大事な仕事であると考えていく時代になったのではなかろうか。こうした観点から地域の子ども会活動や育成会活動に関わって見ようとされているお父さんと一緒に地域講座作りについて話し合いたいと考えた。

２．ＹＯＵ遊サタデーとお父さん

ＹＯＵ遊サタデーにお父さんが参加して下さる意義は大きい。先ず第１は、もの作りの体験活動などにおいては、昔とった杵柄でお父さんもにわかスタッフとして参加していただけることである。例えば「自転車大分解」の講座では、始めは周りでご覧になっていたお父さんがいつの間にかスタッフとなり、子どもたちと一緒にドライバーを握って活動に参加して下さり、大変盛り上がった。ＹＯＵ遊サタデーにおいては、お父さんの役目は子どもの送り迎えだけというのではなく、子どもの頃に身に付けた隠れたパワーを発揮して、子どもと共に楽しんでいただきたいと考えている。

第２は、キャプテンの学生が子どもたちに提供できる遊びやもの作り体験には限りがあり、既に修得しているものだけで講座を企画しようとすると行き詰まってしまう。そこで地域の方々から伝統文化などを大いに学んで、新しい体験として仕入れていきたい。ＹＯＵ遊サタデーは、このような技能をお持ちのお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんたちと出会うことができる場がでありたいと願っている。

３．講座の成果

上述のような思いを抱いて講座を企画したところ、５人もの参加者があり大変勇気づけられた。参加の動機は、２人はこれまでご自分がなさってきた地域での活動に何か新しい視点を得たいということであり、３人は学校五日制時代の子どもとどう関わっていけばよ

いかを考えたいということであった。参加者の一人に地域において１０年以上にわたってもの作り教室を開いてこられた吉澤嘉寿氏がいらっしゃった。同氏から地域講座においては、子どもたちをお客さんにするのではなく、今日教わったことは「借り」を作ったことであるから、次に自分が人のために尽くすことによって「返す」ようにしよう、ということを基本として指導されていることをお聞きした。これはＹＯＵ遊サタデーにおいても、キャプテンが子どもたちに接していく上で非常に重要な視点であり、私にこれまで欠けていた姿勢であると反省した。この吉澤氏に１０月に「刃物研ぎ教室」のキャプテンをお願いすることができ、そのスタッフとなった学生が、来年度に「刃物研ぎ教室」のキャプテンとなることを楽しみにしている。実に大きな成果であったと感謝している。（土井）

３．私の考える地域講座

（１）イベント的活動による子どもへの影響はどれほどのものか？

最近の子どもが手先が不器用だからといって、器用にモノを作れるような子どもにしたいと思っても、その日一日ではなかなかできるものではありません。しかし、私たちは非日常のイベントの中でしかなかなか子どもと関係を持つことはできません。ですからもの作りの目的は、自ずと「習得」ではなく「きっかけ作り」になると思います。その非日常の経験を子どもたちがいかに日常的な習慣や趣味、活動にすることができるか。どのように「きっかけ作り」をしてあげるか、ということが重要になってくると思います。ですから、地域講座においてはその日の結果としての、できるできないはあまり問題ではなく、後に続くか続かないか、あるいは子どもたちの中にジェットコースターのような刹那的な感動ではなく、いつか思い出せる活動となったかどうか、ということが何よりも大切だと思います。

（２）イベント的活動の限界

私たちが指導するのは自分の子どもではありません。ですから活動に際しては当然のことながら安全性という問題が重要になってきます。この当然のことが時にやっかいになってきます。他人である指導者が、どれだけ責任を持って思い切ったことをさせることができるかということです。自分で自分の子を教えるのであれば、崖から落とすようなこともできますが、他人の子ではなかなかそうはいきません。

子どもは小さなケガで危険やその予防を知ったりするものです。しかし、私たちが指導する以上、できるだけそのような危険は避けなくてはなりません。このような安全性と冒険性で戸惑うことがあります。

（３）私のモノ作りの思想

モノにはそれが機能する目的があるわけですから、逆にいうと目的のためにモノがあるわけです。ですから機能するのであればその素材は何であってもよいわけで、針金でも木材でも、また新品でも中古でも、あるいは廃品でもよいはずです。私はモノが欲しいとき、できれば安く上げたいと思います。簡単なものは作ってみようと思います。試しに作ってみて、案外作れるもんだと何度か思ううちに、既製品を観察してこれくらいのモノは自分にも作れそうだという気になります。私は新品でも中古でも好きですが、どちらかというと程度が良ければ中古が好きです。何故なら「手にしてから中古は良いとこ探し、新品はあら探しが始まる」からです。ましてや自分で作ったモノが案外具合良く役に立ったら、とても楽しいと思うのです。（小倉）

お父さん、あなたの能力を地域で役立てませんか

藤澤　謙一郎（保健体育教官）

1．講座の目的

「お父さん、あなたの能力を、地域に役立てませんか。」これが、本講座開設の目的である。即ち、優れた特技や能力を持っているお父さんが、地域に沢山いるにもかかわらず、それが地域の子どもたちの育ちに充分活きていないように思われる。そんな中で「何か役立ちたいと思っているのだが、専門家でもないし、どのように子どもたちにかかわったらよいかわからない。」という声を聞いて、これに少しでも応えたいと考えたのである。

2．題材について

ここでは、運動（スポーツ、遊び等の身体活動）にかかわる内容として、以下の事を題材とした。

1）発育期における至適運動量をめぐって
　イ.発達刺激としての適正な運動
　ロ.競技的能力向上のための適正なトレーニング
　ハ.栄養の問題
2）イ.子どもの特性と事故
　ロ.事故に対する指導者の対応の仕方
3）少年スポーツの問題点
　イ.適時性の問題
　ロ.技術指導の問題
4）子どもの心を引きつける，やる気を出させる工夫
　イ.動機づけ
　ロ.課題の設定
　ハ.場

3．内容について

参加したお父さんは2名であった。自己紹介の後、お父さんから、実際に地域の子ども（自分の子ども）と接して、日頃感じていることについてお話ししていただき、それを中心として展開した。具体的には、「遊ばなくなった子ども」「小さい時から専門化していくスポーツ」「親に指示されてやっているスポーツ」「子どもとかかわっていて事故が起きたときの責任を考えると、どうしても後込みをしてしまう。」が取り上げられ、これに関連する資料（上記2）により説明を行いディスカッションをした。

4．反省

1）人数が少なかったが、その分親近感が持ててよかった。
2）内容が多様になり、時間不足を感じた。
3）用意した資料が少し専門的過ぎたと思われた。
4）参加したお父さんからは、少し難しい点もあったが、学問的な雰囲気に接してよかったという声をいただいた。お父さんたちに、ティーチング・メソッドを学んでほしいのであるが、すぐ役立つものと、基本的な理論との関係をどのように展開するか、今後の課題であると感じた。
5）担当してくれた学生は、資料の準備等よく活動してくれた。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	インターネット入門	平成7年 10月 14日(土) (午前)
キャプテン名	小林　真樹　(社会専攻　4年) 市村　忠寛　(英語専攻　3年)	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　1　名 参加者数　6　名
指導教官名	東原　義訓　教官	活動場所　教育工学演習室

講座のねらい

この講座を通して、インターネットの可能性を感じ、この講座を終えた時に、学校に戻ってからもインターネットをやってみたいと思えること。

講座の展開

過程	子どもたちの学習内容	時間	キャプテンの学習指導	教材
導入	・自己紹介をする。 ・インターネットについて知っていることを述べる。	10	・自己紹介をする。 ・インターネットについて知っていることを尋ねる。	
展開・発展	・マウスの使い方、起動の仕方を覚える。 ・キャプテンの示す手順を見る。 ・「ひまわり」からの映像を呼び出す。 ・得られた映像から、情報を読みとる。 ・印刷をする。	60	・マウスの使い方、起動の仕方を説明する。 ・「ひまわり」からの映像を呼び出す ・気がついたことを述べさせる。 ・印刷の手順を示す。	
	・自由に情報を得る。 ・記録用紙にタイトル、内容、インターネット上の住所（URL）を記入する。 ・CU-SeeMeを体験する。	40	・記録用紙をくばり、説明する。 ・タイトル名 ・内容 ・インターネット上の住所（URL） ・交信のデモンストレーションをする	記録用紙
まとめ	・感想を述べる ・終わりのあいさつをする。	10	・終わりのあいさつをする。	

インターネット入門

小林　真樹　（社会専攻　４年）
市村　忠寛　（英語専攻　３年）

１．講座作りの着想

教師ですら、まだほとんど体験したことのないインターネットを、子どもたちが実際に体験できる場を作り、インターネットで広がる世界を体感してもらいたいと考え、本講座を設定した。

２．講座で取り上げた素材研究

インターネットでできることは、電子メール、ＷＷＷ（World Wide Web）、ＦＴＰ（File Trasfer Protcol）、ネットニュース、テレビ会議システム、リモート・ログイン、ネットフォンなどである。中でもＷＷＷとCU-SeeMe（テレビ会議システム）は簡単で、わかりやすく、インターネットの可能性を直感的に理解できるものである。

例えば、ＷＷＷを利用すると、マウスで文字や絵をクリックするだけで、関連するページへ移動でき、次々と情報を得ることができる。またCU-SeeMeを利用すると、テレビ電話のように相手の顔を見ながら通信ができる。

ＷＷＷとCU-SeeMeは、文字だけでなく、音や映像を扱えるマルチメディアであり、国境を越えたコミュニケーションをも可能にする。これらは、子どもたちが、インターネットによって広がる世界を感じ取るのに適しているものと考えられる。

３．ねらいと課題

インターネットにふれることのできる中学校から、二人の生徒がこの講座に参加を希望した。その生徒らは、ほとんどインターネットを利用したことがないということであった。そこで、本講座を通して、インターネットの可能性を感じ、この講座を終えた時に、学校に戻ってからもインターネットをやってみたいと思えることねらいとした。

本講座では、ＷＷＷを利用して、自分が知りたいと思う情報を引き出せるようになることを第一の課題とした。具体的には、気象衛星「ひまわり」から送られてくる雲の様子の映像と、地表の温度の分布図を呼び出して、そこから得られる有益な情報を読み取れるようになることであった。またCU-SeeMeを使って外国の人々と交信ができるようになることも第二の課題として設定した。

４．子どもたちの取り組みから

まず、キャプテンが、マウスの使い方やコンピューターの起動の仕方などを、子どもたちに教え、その後子どもたち自らインターネットへの接続を試みた。ＷＷＷを使って「ひまわり」からの映像を呼び出す場面では、子どもたちは試行錯誤を繰り返しながらも、次第に自分で目的の画像を呼び出せるようになっていった。

次に記録用紙を渡し、得られた情報を記録していくよう求めると、積極的に占いの情報や学校の情報など見ては、用紙にタイトルや内容、インターネット上の住所（URL）を記述していった。これらの活動を通して、子どもたちはインターネット上にも住所があること、またその住所（URL)を入力すると、直ちに同じ情報を見ることができること、などを知った。始め生徒を見守っていた中学校の先生方からも、次第に質問が飛び出してくるようになった。

また時間の関係上、CU-SeeMeを使って外国の人々と交信するところまではいかなかった

が、外国からの映像が画面に映し出されると、子どもたちは驚きの表情を浮かべていた。
私たちも当初は手探りの状態でこの講座を始めたが、この講座を終えた時の彼らの表情から確かな手応えを感じた。私たちもこの講座を通して、子どもたちと共に、インターネットで得られる情報の読み取り方を学ぶことができた。
そして、2週間後、美麻中学校の先生から、子どもたちが書いた、以下のような電子メールが届いた。

１０月１６日のＹＯＵ遊サタデーのインターネットでは、大変お世話になりました。ありがとうございました。図書委員会の方で１回やったことがありましたが、わけがわからずにやっていましたし、インターネットという意味もよく分からず、どうやったら何が出て、というのもろくに知りませんでした。You遊サタデーに行ってやったインターネットはとても楽しくて、興味を持ってしまいました。特に自分の顔が画面に写っていたこと、星占いが出来たのが面白かったです。学校で、どんどんやっていきたいです。そして、色々な学校・県などの様子を、インターネットを通して、どんどん知りたいと思います。本当にお世話になりました。ありがとうございました。 ＜美麻中学校、３年、Ｔ．Ｓ＞

こんにちは。この間の「ＹＯＵ遊サタデー」ではお世話になったIです。学校にインターネットというものはありましたが、一度も使ったことはなく、ＦＭ，ＴＯＷＮＳのようなコンピューターとの違いも分かりませんでした。だから少しでもインターネットが使えるようにと思い、教えていただくことにしました。 実際使ってみると何も出来ないほど難しいということはなく、いろいろかまうことが出来ました。そしてインターネットとは、世界中のインターネットとつながっていて、いろいろな情報が分かるというものだということが分かりました。インターネットというものがどのようなものか分かったので、今度は情報の内容に興味がでてきました。遊べるような内容がたくさんあり、楽しむことが出来ました。また学校でもいろいろと利用していきたいと思います。本当にありがとうございました。＜美麻中学校、２年、I.I＞

第６回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	「学校週５日制」フォーラム －学校・地域社会・家庭の役割－	平成７年１０月１４日（土） （午　後）
キャプテン名	角田　正和 （社会専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数１０名 参加者数　１００名
指導教官名	石澤　孝　教官	活動場所　Ｅ５０４教室

講座のねらい　今後完全実施に向かう「学校週５日制」について、現状の問題点をふまえ、今後の学校・地域社会・家庭の果たしていく役割を考えていく場面で、現在各地で実践しておられる方の体験談を紹介し、意見交換することを通して、今後のあり方を考えていく際の参考とし、参加者とともに考える機会を作る。

講座の展開

進　行　計　画	時間	注意・確認事項	備考
１，開会式 ・企画者挨拶　（角田） ・日程の説明　〃 ・パネラー紹介　（土井）　他	1:00	・会場準備は前日に行う（会場設営・機材調整） ・ｽﾀｯﾌは12:30に集合し、受付を開始する。 ・パネラーを控室に案内し、時間前に会場に案内する。（控室は泉会館１号室）	－係－ ・受付係　２名 ・記録係　３名 （ﾋﾞﾃﾞｵ・ﾃｰﾌﾟﾚｺｰﾀﾞｰ・書記）
２，発　表 ① 角田　正和（信大　教育学部　４年） 発表事項：「学校週５日制」についてのアンケート調査結果と、ＹＯＵ遊サタデーについて　（１０分）	1:10		
② 宮澤　秀幸（ふるさと教育ボランティアバンク） 発表事項：古里地区での郷土芸能、伝承遊技等の指導の様子を中心として　（２０分）	1:20	・ｽﾀｯﾌはパネラーの発表の際機器の操作などの補助をする	・案内係　２名 ・機器操作係　３名
③ 深町　修司（東部町立和児童館　館長） 発表事項：「常田寺子屋」での活動の様子を中心として。　（２０分）	1:40		－機器－ ・VTR ・OHP ・ｽﾗｲﾄﾞ ・ﾃｰﾌﾟﾚｺｰﾀﾞｰ ・受付台（ﾃｰﾌﾞﾙ１ｲｽ２）
休　憩　（１０分）	2:00	・人数が少ないのでお茶等も用意したい。	
④ 岩沢　以久（南部小ＰＴＡ　教養部） 発表事項：南部小学校での親子参加型研修会の様子を中心として　（２０分）	2:10		
⑤ 関　明夫（長野県子供会育成連絡協議会　理事） 発表事項：更埴市での子供会活動の様子を中心として。　（２０分）	2:30		－その他－ ・会場案内板 ・配布資料 ・ｱﾝｹｰﾄ ・お茶（ﾎﾟｯﾄ・紙ｺｯﾌﾟ・お菓子　他） ・名　札
３，全体討議 司会：角田　正和　（信大　４年） 土井　進　（教育学部　助教授） 参加者からパネラーへの質問を受け付けると同時に「学校週５日制」時代に向けた学校・地域社会・家庭の役割について考えていく。　（３０分）	2:50		
４，総　括 ⑥ 布谷　光俊（信大教育学部　助教授） 「学校週５日制」時代の家庭教育のあり方を中心に、今日の総括をしていただく。（　８分）	3:20		
５，閉会式 ・お礼のあいさつ ・アンケートの記入　等	3:28	・参加者にアンケート用紙を渡す。（予定） ・閉会後、パネラーを控室に案内する。	
解散	3:30	・会場の片づけは全体終了式の後で行う。	

「学校週５日制」フォーラム　―学校・家庭・地域社会の役割―

角田　正和　（社会専攻　４年）

１，開催目的

平成４年度から公立学校では「学校週５日制」が導入され、今年度からは毎週第２，４土曜日の月２回実施となった。学校週５日制導入の目的の一つに、「子供達を学校から地域社会、家庭へ返す」ということがあげられている。しかし、現在の状況を見ると、このことが必ずしもうまくいっているとは思えない。なぜなら、子供達が返された地域社会や家庭に子供達を受け入れる十分な環境が整っていないからである。

私は自分の体験から、「親子で過ごす休日の大切さ」を重要視している。家族は社会の基礎的集団であり、子は親によって保護され、教育されるからである。子供は学校の教育だけで育つのではなく、家庭教育や地域社会での活動などを通しても様々なことを学習する。しかし、現状に目をやると親子のコミュニケーションはおろか、家族一人一人が孤立化し、お互いの意志疎通が十分に行われていない。さらに、地域社会の有していたコミュニティー、相互教育力は組織の維持すら困難な状況で、十分に発揮されるはずもない。

このように、家庭や地域社会が十分に機能していない中で、子供達は無理矢理返されている。当然そのことで様々な問題が生じていることはご存じの通りであろう。今後、学校週５日制は完全実施へと移行していくと考えられるが、家庭や地域社会が現状のままでは、現在の問題が解決するどころかますます深刻化していくであろう。

そこで、私が今まで考えてきた「親子で過ごす休日のあり方」をキーワードに、ＹＯＵ遊サタデーに参加していただいている保護者の方々にお集まりいただき、現在の問題を指摘し、今後の学校週５日制の完全実施に際して、地域社会や家庭のあり方を考え、意見を聞かせていただくことを通して、今後の学習の参考にしたいと考え、本企画を計画した。

この企画は他のＹＯＵ遊サタデーの講座とは性格を異にしており、当初、この企画をＹＯＵ遊サタデーの中で行うことに不安があったが、土井教官のご協力と実行委員会のご理解により本企画が成立したことをつけ加えておく。

２，開催への準備

①　遊学プランの作成

本企画の目的は「学校週５日制」の是非を問うものでなく、今後の学校・家庭・地域社会の三者の役割のあり方について考えていくものである。そのことを念頭に置いて遊学プランを作成した。そのために、まず前半に地域で実際に活動しておられる方の体験と、今年６月に実施した「学校週５日制」についてのアンケート調査を発表し、現状を把握していただき、今後のあり方を考えていくための参考資料を提示する場を設定した。そして、後半に全体討議を行い、学校・家庭・地域社会の今後のあり方について議論を深めていく場を設定した。こうすることで、参加者にも実際に活動しておられる方の体験談を知っていただくことができ、全時間を全体討議に回すよりも双方にとってより収穫の多い場にな

るものと考えた。（フォーラムの開催に際して遊学プランを作成したが、本企画は講座ではなく、まして指導するものではないので、遊学プランはフォーラムの進行計画であることにご注意いただきたい。）

② パネラーの依頼、発表要旨

フォーラムの前半で、実際に地域で活動しておられる方の体験談を語っていただく場を設定したため、パネラーを探した。パネラーは土井教官から地域で活動しておられる方をご紹介いただき、企画の趣旨をお話しし、参加をお願いしたところ、快く承諾していただいた。また、当初の計画では、教育行政や学校関係者の参加も計画していたが、諸事情により断念した。しかし、企画の趣旨を遂行するためにはこういった関係の方にご参加いただくことが重要であると考えるので、今後何らかの形で補充したいと考えている。各パネラーには各自の活動を語っていただき、私は「学校週５日制」についてのアンケート調査の結果を報告した。発表の要旨は遊学プランを参照していただきたい。

③ 参加者の募集と広報活動

参加者の募集方法は、マスメディアへの掲載依頼、ＹＯＵ遊サタデー参加希望者へのパンフレット同封で行った。マスメディアは掲載を依頼してもなかなか載せてもらえず、マスメディアへの依頼の難しさを実感した。また、パンフレット同封も費用と労力を投入した割には反応が今一つといった感じであった。また、フォーラム当日もスタッフによって広報をしていただき、数名の参加者が集まった。最終的な参加者はパネリストも含めて三十数名であった。広報活動は精一杯やったつもりではあるが、参加者の数からすると今後の大きな課題の一つとなった。

３，反省と今後の課題。

当日は緊張の余り時間が過ぎるのが早く、司会も不慣れなため参加者の方々にご迷惑をおかけした。当初より私の力量不足は承知していたが、このような企画を開催するために今後とも学習を続けていく必要性を痛感した。

また、参加者の方に行ったアンケートの中にもあったが「参加者の少なさ」という点は大きな課題である。「参加者の少なさ」について、１つは広報活動の不足があるであろう。これは広報のあり方も含めて今後私が考えていかなければならない問題であろう。もう１つは参加者の方も指摘しておられたが、社会のこの問題に対する関心の薄さがある。特に、家庭の役割については私の方でも指摘したが、「夫婦共働き家庭の負担」は相当のものである。今後学校週５日制が完全実施されると、これらの家庭では相当の負担になる。この問題は「学校週５日制」の是非にもつながる大事なもので、各家庭でも十分考えていただきたいが、今回の参加者を考えるとまだまた他人事の感は否めない。参加者の方からも「こういう機会をもっと作っていただきたい」との要望もあったので、今後とも開催してこの問題に対する関心を高めていきたいと考えている。

最後ではあるが、ＹＯＵ遊サタデーの開講講座は小学生対象のものが多いが、今後は社会人や大人対象の講座も開催されることを希望する。

第６回　信大ＹＯＵ遊サタデー特別企画

学校週５日制フォーラム

― 学校・地域社会・家庭の役割 ―

平成４年度より公立学校の週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、今年度から２つの学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制が実施されます。「学校週５日制」は、学校週５日制の完全実施に際して学校週５日制の完全実施に際して学校週５日制の完全実施に際して

第（７）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	社会科を １０倍楽しくする方法	平成7年　10月　28日(土) （午後）
キャプテン名	山名　博夫（大学院社会専攻２年） 小林　真樹（社会専攻４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　３　名 参加者数　１０　名
指導教官名	松本　浩毅　教官　　牛山　佳幸　教官	活動場所　２０番教室

講座のねらい　日頃の社会科の授業に「嫌い・苦手」あるいは「好き・得意」という様々な思いを抱いている子どもたちに対して、ゼミナール形態の「課題設定・自主研究・発表・討論」という学習を実践することを通して、子どもと指導者の双方が「意欲・関心」に根ざした本当の「主体的な学習」のあり方を模索する場面、機会を提供する。

講座の展開

時間	活動の流れ	子どもの活動内容	留意点・備考
１５	・ゼミナール開会宣言 ・キャプテン、メンバー自己紹介 ・主旨説明、注意事項 ・事前アンケート記入等	左に同じ	
８０	・ＹＯＵ遊公開ゼミナール「社会科を１０倍楽しむ方法」開始	・キャプテン①示範ゼミ　（経済） （発表１５分　討論１０分） ・メンバー①　（中学生）によるレクチャー　（日本史） （発表１５分　討論１０分） ・メンバー②　（高校生）によるレクチャー　（異文化理解） （発表１５分　討論１０分）	・キャプテン、アシスタントスタッフ等から活発な質問をし、場を活発に盛り上げる ・司会者は発表内容の概略を述べ、討論に入る。
５	休憩		・討論に使うアンケートを事前に配る。
２０	・反省会、感想発表会「今後の社会科授業に対する私たちの提言」 ・事後アンケート記入	・自分の発表、他のメンバーの発表について一人一人の感想を発表 ・ゼミ形式の学習に対する感想、意見 ・どんな社会科の授業が楽しいか 上記の内容等について、大学生、高校生、中学生や見学者等から、ざっくばらんに意見を聞き、まとめる。	・アシスタントスタッフは、テープ録音等、討論内容を記録する。 ・参加者以外の見学者にも、できる限り意見を聞く。 ・アンケート用紙を配り、それに基づいて討論できるよう司会者は工夫する。

社会科を１０倍楽しくする方法

山名　博夫（大学院　２年）
小林　真樹（社会科専攻　４年）

１．本講座開設に至る経緯

近年の学習指導要領改訂以後、大学や大学院の社会科教育の講義等でも盛んにこれからの社会科教育の在り方について議論が交わされるようになった。その中で、現在の社会科教育が直面する課題や抱える問題点が浮き彫りにされ、将来教職を目指す私たちにとっても、考えさせられる面が大きかった。現在の社会科教育に求められているものは数多くあり、また、教師の教育観や生徒の実態などによって様々に変化するものと考えられるが、そのいずれのものにも共通して、今の社会科教育の根本的な課題となっていることは「子どもの主体性、自主性を重んじた個性重視の社会科教育」を実践することに集約できよう。そしてまた、この主体的、自主的学習活動とは、子どもの「興味、関心」に根ざしたものであることが求められている。

小学生、中学生の多くが嫌いな教科として「社会」を挙げることが多いと言われ、その理由は、暗記中心の教師の一方的な授業にあると言われて久しい。そして、この「社会科嫌い」の傾向は依然として続いているのが現状である。この事態を考慮して学校現場では、教師それぞれが創意工夫をして、より子どもの興味関心に根ざした主体的、自主的な社会科学習を展開しようと努力を続けている。

そこで、このような現状を踏まえ、将来社会科の教師を目指す私たちも、子どもの興味、関心に根ざした主体的、自主的な社会科教育の在り方を考えてみる必要があると思い、本講座「社会科を１０倍楽しくする方法」の実施を試みた。

２．本講座の主旨

本講座の主旨は、前述のような現状を踏まえ、「子どもの興味、関心に根ざした社会科学習とは」「子どもの主体性、自主性を重んじる授業とは」という２つの課題の解決策の一例として、具体的な授業形態、学習形態を実践することにある。そこで、具体的な講座のねらいとして以下の諸点を設定した。

・参加者（中学生、高校生）自らが授業者となることによって、従来の受け身的な学習ではない主体的な学習の機会を体験すること。

・従来のグループ学習や討論学習等の教師主導によるものとは違い、参加者自らが得意分野を教材化することによって、生活経験などを生かしたより主体的な学習を行うこと。

・課題設定、自主研究、発表という一連のサイクルの中で、自ら問題意識を持って追究すること、人に伝えることといった要素を重視することによって、より深まりのある社会認識を育てること。

・教材開発（ＯＨＰ作成やプリント作成など）や教具の使用（ビデオプロジェクター）などを実際に行うことによって、学校の授業では得難い体験をしそれによって社会科学習へのさらなる興味関心を喚起すること。

・大学や大学生と交流することにより、現在学んでいる社会科学習の内容が将来的にどのような方面で生かされているかを知り、社会科学習への主体的な取り組みを促す機会を与えること。

以上のねらいに基づいて体験的な講座を実施しようと試みた。

3.実践の概要

当日の実践の概要については遊学プランの通りであるので、そちらを参照されたい。

発表内容は次の通りである。

・中国の文化と生活（高三Ｂ治くん）。

・漫画から見る平安の歴史（中三Ａ子さん）。

・財閥の仕組み（大四Ｍ樹くん）。

4.実践結果の考察（参加者の反応と評価）

ここでは本講座の主旨やねらいが二時間の実践を通じてどのように達成されたのかについて考察していきたい。そこで、私たちは参加者が本講座に参加する前にどういう動機を持ち、この実践を通じてどのような成果があったのかを調べるために、事前・事後アンケートを実施した。以下実際に得られたアンケート結果を紹介する形で、本講座の結果考察としたい。

（事前アンケート）

Q.この講座にどうして参加しようと思いましたか？

A.社会科を好きになれたらなって思って参加しました（中三女子Ａ子さん）。

未来の教師を目指し、興味を深めようと思った（高二男子Ｂ治くん）。

Q.今まで受けた社会科の授業で、印象に残っている授業はどんな授業ですか？

A.先生の体験談を話し続ける授業（Ｂ治くん）。

Q.それでは逆に、今までで嫌いな社会科の授業はどんな授業でしたか？

A.苦手というのはあったけど特に嫌いというのはなかったと思う（Ａ子さん）

プリントの穴埋めの一時間（Ｂ治くん）。

Q.社会科の授業が「○○だったら１０倍楽しいのに・・・」。さて、あなたは○○に何を入れますか？

A.先生の人生談を交える（Ｂ治くん）。

（事後アンケート）

Q.発表してみてどうでしたか？

A.始めはドキドキしていたけど、発表して良かったと思う。話したいことを上手く話せなかったけど、自分なりには良くできていたと思う。もっと的を絞って話してみても良かったと思う（Ａ子さん）。

声が裏がえった（Ｂ治くん）。

Q.人の発表を聞いてみてどうでしたか？

A.中国のことなんかは、とてもいい話を聞けたと思います。文化の違いからくる生活の違いなんかも、とっても興味深かったと思います（Ａ子さん）。

Q.自分で工夫した点、苦労した点は何ですか？

A.工夫した点は、発表なんかはなるべく絵とか使ったり、漫画の話を入れたこと。苦労した点は、発表の時にどう話そうかということです。他は楽しくできたんでよかったと思います（Ａ子さん）。

このアンケート結果を見る限り、本講座の成果として次の諸点を挙げることができよう。

・自ら課題を設定し、発表への準備をする段階ではかなり苦労したようであるが、自らの経験や興味を生かした発表が行われ、充実した体験であったことがアンケートの結果から

もうかがえる。
・異年齢層との交流が深められ、社会科の目標とする社会的認識の形成という面から見ても、貴重な体験の場を設けることができたこと。
・自分が学習してきた内容について盛んに大学生に質問するなど、社会科学習で最も重視されるべき主体的・自主的な取り組みを、一層促す機会を提供できたということ。
また、ＹＯＵ遊サタデーに参加してみての感想として次のような意見も得られた。
・最初はどんなものかと不安に思ったりしたけど、とても楽しかったです。本当に社会科を楽しむということもできました。他の人の説明なども、とても分かりやすくて、学校の授業とかより親しめるものだった。次回も参加してみたいと思いました（Ａ子さん）。
・発表は三人でしたが、いろいろと特に学校の授業では先生から教えてもらえないところが良くわかってよかった（Ｂ治くん）。
・各自の持ち味が出ていて良かったのではないかと思います（取材記者さん）。
・いわれるまで全員大学生かと思うほど、中学生のＡ子さん、高校生のＢ治くんとも凛々しく、しっかりとした発表だった。学ぶということや、自分の考えを述べるということには、年齢などは関係ないということを実感させてくれました。「討論下手」といわれる日本人のイメージを覆してくれました。私も、もっと話し方の勉強をしたくなりました。この二人は、どんな学校生活を送っているのかしら・・・（発表を聞いていた、大学院生の方）。

５．本講座の反省と今後の課題

本講座に参加者から寄せられた要望として、次のようなものがあった。
・今回のように、発表していくという形式が一番良いと思います（Ａ子さん）。
・もう少し参加人数があれば、もっと良かったのではないだろうか。新聞社などに依頼して発表内容を事前に紹介すれば、参加者が増えるのではないかと思います（取材記者さん）。
・もっと宣伝して、参加者を増やした方が良いと思います。
このように、講座のねらいに対する要望よりも、講座の主旨を生かすためにも参加者の確保が重要な課題として残ったといえる。また、「高校生対象の講座をもっと増やして欲しい。例えば、家庭科専攻の人などによる高校生向けの料理講座や縫い物講座などもやると良いと思います」や「大学生の過ごし方などを知る講座が欲しい」などの意見があったことも考えると、ＹＯＵ遊サタデー自体の課題として、参加者の増加を促すような宣伝活動をさらに充実することや高校生向けの講座の開設等といったことがあるといえよう。

本講座の充実を図るためにも、今後も同趣旨の講座が継続的に実施されていくことは必要不可欠の要件であろう。もし、本講座の主旨を受け継ぐような講座が今後も実施され、多くの実践記録が累積されていくならば、本来この講座のねらいとする「子どもの興味・関心に根ざした、主体的な社会科学習」に対する何らかの回答が見いだせるのではないかと思う。

地域で役立ちます　―刃物の研ぎ方教室―

吉沢嘉寿　（何でも手作り吉沢学校）
斉藤かおる（家庭専攻３年　記録者）

１．講座開設の理由

吉沢さんが９月のYOU遊サタデー「お父さん地域で講座を開きませんか」に参加したとき、土井先生からYOU遊サタデーに講座を開いて見ませんかというお誘いがあった。そこで、刃物研ぎという生活の知恵が１０月の講座として向いていると思い、この講座を開設した。

２．ねらい

・刃物の研ぎ方を覚え、生活を豊かにする。
・地域の人たちに研いで差し上げる。
・さらには身近な人に教えて上げる。

３．自己目標・自己課題

・刃物の研ぎ方を覚えることによって、人の家を訪ねて話をすることができるきっかけを作る。
・人とのつながり、優しさを持ってもらう。
・刃物を研ぐという技術を伝承させる。

４．自己評価とアシスタントスタッフによる評価

自己評価：参加者に語りながら研修をするうち、その気になり、絶対にやりますと砥石を購入して帰られたので見通しはあると思う。スタッフの学生が、家庭科室の包丁を全部研ぐと決意され研修用砥石の貸し出しを依頼されたことも心強く感じた。

アシスタントスタッフ：参加されたのは３名のおばさま方だったが、皆さん熱心に包丁を研ぎ、技術は習得できたと思う。また、砥石も買って行かれたことを通して、お家に帰られても御近所の方の包丁を研いで上げようという熱意が感じられた。この講座の目標は達成されたと思う。

５．参加者の活動

今日覚えたら、明日は他人のために・・・から始めた。

①切れる②切れない③研ぎ減らすを実際に包丁を砥石に当てながら説明した。１時間半ほどで持参の包丁は完了。残る３０分は大学の家庭科室、あけぼの寮のを研ぐことの応援をしてくれた。この部分皆さんは国家のために働いてくれましたね、と労った。皆さんいろいろおしゃべりしながらも熱心で、自分の研ぎ方がほめられるととてもうれしそうで、自信を付けられたようだった。最初は砥石が３種類あることさえ知らなかった方々が、最後には包丁を短時間で研げるようになり、その進歩は目を見張るものであった。

６．反省と課題

・どう宣伝、案内をすればよいか。決して難しいことではない点を知ってもらい、気軽に参加してもらうにはどうすれば良いのだろうか。
・情熱を持った若い先生がこの技術を持って県下に散って各地で花開かせるには、どうすれば良いのだろうか。
・生活文化の伝承と個でできるボランテア活動にもなり、人の心をつなぐ判りやすい事業だと思う。この企画が何らかの形で続くことを願っている。またお手伝いさせてい

ただけたら幸いである。ありがとうございました。

7．素材研究

Ⅰ用具：砥石　粗砥－１番最初に用いる。灰色でザラザラしている。
中砥－粗砥の次に用いる。茶色であまりザラザラしていない。
仕上げ砥－最後の仕上げに用いる。クリーム色ですべすべしている。
刃物（包丁など）　水（大量）　バケツや洗面器

Ⅱ場所：松本では広場の芝生の上で行った。水道など水場に近く水がこぼれたりしても気にならない場所がよい。

Ⅲ刃物の研ぎ方（包丁）

(1)粗砥と中砥は良く水に漬けておく。

(2)まず包丁の刃を親指の爪の上にあて、ゆっくり引いてみる。切れない包丁はすべすべした感触である。

(3)包丁をぬらして、(1)の粗砥で研ぐ。そのとき、包丁の背と砥石の間は１０円玉を寝かせたものが挟まるぐらいあけて、砥石全体を使って、水を付けながら包丁の両面を同じ回数づつ研ぐ。包丁は全体の幅の刃から３分の１位まで研ぐ。ときどき親指の爪に包丁を当ててみて、研ぎ具合を見る。包丁を引いたとき吸い付く感じになると良い。

(4)粗砥で大体研げたら、中砥で同じように研ぐ。中砥では粗砥でざらざらになった刃を滑らかにする。

(5)最後に仕上げ砥で同じように研ぐ。包丁の刃の表面もザラザラせず吸い付くような感じがはっきり判ったら、完了。

8．最後に・・・スタッフとして

私はアシスタントスタッフとして吉沢さんの講座に参加した。吉沢さんは「包丁研ぎは単調な作業なので、皆さんを退屈させないように」と、いろいろお話ししてくださったり竹で作ったコマや、植物の苗など色々なお土産を参加者の方ばかりでなく私にもくださった。物に釣られるわけではないが、吉沢さんの人徳が伝わってきた。

吉沢さんの面白い話

★今日の私は昨日の夕食の残りのてんぷらです。～昨日から上（揚）がっています。

また包丁研ぎもとても判りやすく指導していただき、とても楽しくやる気になった。そしてこの講座が終わった後にも、新しい砥石を家庭科室に寄付していただくなど、いろいろ心を配っていただいた。この場を借りて改めて御礼を申し上げたい。私も吉沢さんのようには行かないかもしれないが、みんなで楽しみながら生活の知恵を学べる場を作ってみたいと思う。そして今回身に付いた包丁の研ぎ方の技術を多くの人に広めてみたい。

吉沢さんは何でも手作り吉沢学校の校長として、子どもたちに竹の独楽や竹とんぼ作り、今回の刃物の研ぎ方などを教えていらっしゃる我々の大先輩である。キャプテンをやってみたいけれども自信がないという人は、１度吉沢さんを訪ねてみるのも良いと思う。

このような有意義な時間を持たせていただいて本当にありがとうございました。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	ギターをやろうジャ～ン	平成7年　5月 27日(土) （午後）
キャプテン名	野本　毅　（英語専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　3　名 参加者数　5　名
指導教官名	渡辺　時夫　長谷川　博史　教官	活動場所　Ｎ２０２

講座のねらい

ギターで音を出し、曲を演奏する場面で、ギターの音階や簡単なコードを学ぶことを通して、ギターで音を出すことの面白さや、スタッフと一緒に音楽を作り上げることの楽しさを体験することができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
13:00	導入	① ギターを持って自由に開放弦の音を出してみる。 ② 開放弦を使って即興的な音楽作りをする。 ③ １人ずつつなげて、音楽作りを楽しむ。	・ギターの持ち方、姿勢を示し、開放弦の音を出してみる。 ・開放弦の音を充分に楽しませる。 ・即興的に音を出せるようにする。 ・開放弦以外の音を出してみたいという気持ちを持たせる。	ギター人数分
13:30	展開	④ スタッフの指をまねて、各自のパートを練習する。 ⑤ できれば、歌いながら弾けるようにする。	・子どもたちを三つのグループに分け、『四季の歌』を分奏させる。 ・各パート毎にスタッフが付き、示範などをしながら練習させる。 ・全パート合わせて合奏してみる。 ・スタッフは子どもの手助けをして一緒に弾く。	楽譜『四季のうた』
13:55		休憩 ⑥ スタッフと一緒に歌う。	・子どもたちが知っている曲を演奏し、子どもたちと一緒に歌う。	
14:10		⑦ スタッフの模範演奏を聴いたり指をまねたりして練習する。 ⑧ ギターで音階が出せることを認識する。 ⑨ 反復練習をして自分のパートを弾けるようにする。	・『かねの音』を用いて、グループ毎に旋律の分奏をさせる。 最終的に全員が弾けるようにする ・難しい部分はスタッフが楽譜を簡単にしてもよしとする。	楽譜『かねの音』
14:50	まとめ	⑩ 『かねの音』をみんなで合奏する。 ⑪ パートをかえて演奏する。	・ギターを弾く楽しさを知ってもらうのが目標なので、うまく弾けなくてもよしとする。	終了証

ギターをやろうジャーン

野本　毅（英語専攻　4年）

1．講座づくりの着想とねらい

私は自分の卒論のテーマとして、英語教育の情意的な側面を取り上げ、学習者が不安を感じずに積極的に取り組むことができる英語の授業について研究しています。しかし、この研究は英語だけでなくどの教科にも応用できるものです。そこで自分の趣味であり、特技でもあるギターを教える講座を計画し、子どもが積極的に学ぶことができる講座を実施してみようと思いました。

この講座では、ギターを初めて弾く子どもたちに対して、どのような指導、助言を与えていけば子どもたちのやる気を持続させ、さらに、これからもギターを弾きたいという気持ちを持たせることができるか、を自分なりに見つけることを目標にしました。

2．子どもたちへの指導について

子どもたちは全員ギターを弾くのは初めてのことであったが、好奇心も手伝って、講座を始めた段階で子どもたちの目は輝き、やる気が溢れているようでした。しかし、実際に音を出させてみると、どうやっていいのか戸惑ったり、思うように音を出せない子どももいました。こういった子どもに対しては、スタッフの示範で対処していきましたが、子どもたちのやる気を持続させるということにおいて、それは適切な方法ではなかったように思います。

ところが、「四季の歌」、「かねの音」という実際の曲をギターで分奏する場面では、子どもたちはギターに慣れてきて、「もっと難しい曲をやりたい。」という要求も出てきました。具体的な活動により、自分が出した音で曲ができることがわかり、子どもたちなりに楽しみを見つけた結果だと思います。また、休み時間に子どもたちが知っている歌（「車に揺られて」や「オブラディ　オブラダ」など）をスタッフがギターで弾き、みんなで大きな声で歌ったことによっても、雰囲気を和らげることができたと考えます。最後にみんなの前で「かねの音」を発表するという課題を与えたことも、良い動機付けになったようでした。

3．教職観について

「子どもにやる気を持たせ、それを持続させる」ということは教師であれば誰でも大切だと思うことであり、そのために誰でも悩み、苦しむことだと思います。子どもがやる気を持つ授業としては、「楽しい授業」、「不安のない授業」、「わかりやすい授業」などが考えられますが、それらの多くは教科の専門性には関係なく、教師としての人間性に関わることであるということが言えます。もちろん、教科の専門性は中学校、高等学校といくにつれて大切になっていきます。ですが、子どもを教育するものとしての人間性はどの年齢の子どもに対して授業をする際にも大切にされるべきです。教科の専門性は、人間性の上に築かれると言えると思います。

人間味が溢れる教師になるため、私は授業時はもちろん、授業意外の時の子どもとの関

わりを大切にしていきたいと思います。例えば、子どもたちと一緒に給食を食べたり、掃除を協力してやったりすることが考えられます。また、子どもたちの日記に毎日必ず目を通し、子どもの微妙な変化を見逃さず関わっていきたいと思います。授業中も子どもの間違いを責めることをせずに、なぜ間違えてしまったのかを一緒に考えられるようになりたいと思います。

このように、子どもたちが親近感を持ち信頼してくれるようになれば、自ずと子どもたちは授業に集中し、やる気を持続してくれると考えます。私は、このように子どもたちに信頼される教師になりたいと思います。

4．今回の講座の反省、感想

今回の講座では指導計画の甘さや、準備不足のために最初のうち子どもたちに、果たしてギターを弾けるようになるのだろうか、という不安を持たせてしまったと思います。でも、最後に子どもたちが「もっとギターを弾きたい」と思ってくれたのは、指導教官である長谷川先生の援助や、スタッフの丁寧な指導のおかげだと思っています。私も、子どもたちとできるだけ親近感を持って接するように心がけ、子どもたちの不安を少なくし、やる気を持続させようという努力をできていたと思います。

また、子どもたちのギターに習熟していく速さには驚くばかりでした。動機付けがしっかりしていると、講座は限りなく効果的になるということを知ることができました。

これからの課題として、講座の導入の場面でどのようにして子どもたちを引きつけていくかということが残りました。今回は、ギターを弾きたいという動機付けがすでになされている子どもが集まったため講座は軌道に乗ったのですが、実際の教育場面においては、教師が動機付けをしなければならない場面が多々あります。今回のＹＯＵ遊サタデーで得た、どのように講座を始めれば子どもたちがやる気を起こすことができるか、という問題について、今後更に考えていきたいと思います。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	演劇しましょう －グリム童話－	平成７年　５月　２７日(土) （午後）
キャプテン名	奥原　克水	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　２～３　名 参加者数　　１０　名
指導教官名	滝澤　貞夫　教官	活動場所　泉会館２Ｆ

講座のねらい

グリム童話を読み、劇を創作することを通して、身体全体を使って、表現活動をする楽しさを知るとともに、文学への興味を深めることができる。

講座の展開

時　間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
１５分	自己表現	◎　自己紹介 ・大きな声を出せるようにする。	・見本となるように元気よく、自己紹介をしてみせる。 ※「グリム」について、知っていることを聞く。	
１０分		◎　作品の朗読 ・高学年の子に読んでもらう。	・子どもの人数にあわせて、グリムの作品を選んでおく。	
５分	作品理解	◎　作品理解（１） ・元気よく、答える。	・作品について、質問をする。（登場人物について）	黒板
１５分		◎　配役の決定 ・自分のやりたい役に立候補できるようになりたい。	・ケンカにならないように注意公平に、ジャンケンなどを用いる。	
３０分		◎　作品理解（２） ・台詞について考える。	・クイズ的な形式がよい。	
３０分		◎　工作 ・自分の使うものを作る。	・ケガのないように注意。 ・工作を手伝う。	折り紙 色紙 マジック はさみ のり　etc
６０分	発表	◎ 道具を用いながら、台詞のやりとをする。 ↓ 劇化	・必要に応じて、助言する。特に「失敗」などないことを強調。 ↓ ・子どもの発想を大切に。	
２０分		◎ 発表 （ビデオに撮るor終了式で発表）	・キャップテンはナレーションをしながら、臨機応変に助言する。	

演劇しましょ ～グリム童話～

奥原 克水（国語専攻　4年）

1．授業づくりの着想とねらい

今回の「演劇しましょ」は、自分の専攻分野である「国語」というものを意識して、つくった授業である。

私は、「自己表現が苦手」といわれる現在の子どもに対して、今回の授業が、何らかの手助けになることを期待した。そこで、内容を明らかにする為にタイトルには「演劇」と銘打ったが、今回の授業では、上手に「演技」することではなく、自分の考えたことをしっかり「表現」できるようになることを目的とした。また、そのうえで、自分自身で作り上げる「劇」の題材となった文学作品（今回の場合は、グリム童話『白雪姫』）に対する興味も深められればよいと考えた。

2．生徒指導について

子ども達は、最初のうち緊張していたこともあって、声が出なかった。そこで「今日の目標は元気よくやることです。」と宣言し、自分自身も元気よく（風邪に悩まれつつも）授業を進めた。予めスタッフに方にも「いつでも、子どもの見本になるように元気よくやって欲しい。」と頼んでおいた。このキャプテン・スタッフの言動が授業の雰囲気を明るくして、子どもの緊張を解き、最終的には子ども自身の思いきりの良さを生んだ様に思われる。このことから、何事につけても、教師自身が子供と一緒になって実践することが、子どもに対して親しみを覚えやすくし、授業に打ち込ませる上で、大切なことなのだと思った。

また、今回は、年齢層が広かったために、低学年（幼稚園児及び一年生）と高学年（六年生及び中学生）に分けて指導を行うことにした。以下は、その指導の内容とその結果（結果は※で示した）である。

①低学年の指導→「七人のこびと」の台詞や行動を想像させるような質問をして、その答えをもとにして、表現運動をさせた。

※自分で考えた台詞をきちんと言えるようになった。

※身体全体を使って、表現運動ができた（身体を動かすのが特にに楽しいらしい）

②高学年の指導→脚本を使い、感情表現を豊かにすることに重点を置きつつ、低学年に対するフォローをするように求めた。

※脚本にとらわれず、自分の言葉を使うことで、小さい子を気遣ってくれた。

※鏡に言い寄る魔女に代表されるように、豊かな感情表現が見られた。

この結果からも分かるように、子どもの発達段階によって、その指導の方法は変わらなけらばならない。その子どもの実情に合った指導をすることが、目的の達成のためには必要なのだと改めて知った。

補足になるが、特に今回は「遊ぶ」ことも指導として取り入れ、子どもの快活さを引き出せるように努めた。これによって、子どもが失敗を恐れずに、思いきり行動できる場をつくることができたのではないだろうか。（傍から見たら「単なる遊び」だったかもしれないが、講座にとっては、大切な時間だったと確信している。）

3．教職観について

今回の授業を通じて、改めて教師という職業の難しさと楽しさを痛感した。個々の子どもの個性を生かし、一つの授業をつくることは簡単なことではない。個々の子どもが自分の考えを持っていて、時には教師の予想し得ない行動をとることもある。そんな中から一つのまとまった授業をつくる困難さは想像に難しくない。きっと教師になれば、そのことにずっと悩むことになるだろう。

しかしながら、それでも、子どもと向かい合う教師という職業は楽しいとも思う。それは、子ども達の千変万化する姿を常に見ることができるからだ。そこには何一つとして同じ日々は存在しない。きっと、教師と子どもが一緒になって試行錯誤を繰り返す日々になるだろう。確かに苦しい日もあるかもしれないが、今回の授業で、子どもが見せてくれたような笑顔をを見れば大丈夫だと思う。

私は、そんな子どもと一緒に歩んでいくような教師になりたいと思っている。

4．今回の講座の反省

全体を通じて、子ども達が活発に行動したこと、また真剣に一つの劇を完成させたことは評価に値すると思われる。特に、劇に使う「小道具作り」を子ども自身の手で行ったとき、高学年の子どもが率先して低学年の子どもの手伝いをしてくれたのが印象的であった。これは、別段こちらからの指導があったわけではない。彼女達が自分の役割を理解し、自分の考えで行動してくれたのである。ここに、今回の授業における一つの成果を見たような気がした。

しかし、少しばかり「遊びすぎた」感じは否めない。これによって、幼稚園児から中学生という幅広い年齢層での授業づくりの難しさと、そこまでの範囲は指導しきれない自分の能力のなさを露呈してしまった形になったように思われる。この点に関しては、これからもっと力を付けていかなければならないと決意を新たにしている。

最後の別れ際に、「キャプテン、九月にまた来るね。」と元気よく言ってくれた子どもの言葉と、「家（うち）の子の意外な側面が見れました」と言ってくれたお母さんの言葉によって、この講座を開いたことを本当に良かったと感じられました。この「ＹＯＵ遊サタデー」という機会は、まさに「一期一会」です。偶然だったにせよ、出会ったその一瞬を大切にしなければならないと思います。そうしたときに、あんなに嬉しい言葉を聞けるのだと思うのです。

『白花幻燈（しろはなげんとう）』という漫画で、人間に切られてしまう白い花を咲かせる樹がこう言います。

「・・・憎むより、愛させて下さい。人のためになら切られてもよいと、信じさせてください。・・・人はそういうものであって下さい。・・・・」

私はこの言葉に感動し、自分を見つめ返しました。私が感じたこの思いが感じられるような講座を次回はつくりたいと思います。又は今後、どこかの学校で子ども達に伝えられるように、また努力していきたいと思います。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	みんなで楽しい 紙芝居を作ろうぜ！	平成７年　９月　９日(土) （午前）
キャプテン名	奥原　克水　（国語専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　１　名 参加者数　１０　名
指導教官名	滝沢　貞夫　教官	活動場所　Ｎ１０４

講座のねらい

自分の考えたお話を紙芝居にすることを通して、想像力と表現力とを発揮して、楽しく作品を作ることができる。

講座の展開

過程	学習段階	時間	子どもの動き	指導・助言・留意点
導入	１．自己紹介 ２．見本の提示	５分 １０分	○元気よく自己紹介する。 ○キャプテンの作った紙芝居を見る。 ○説明を聞き、紙芝居の作り方を把握する。	○子どもの前に、キャプテンとスタッフが元気よく自己紹介をしてみせる。 ◎「夏休み」と「物語の続編」をあらかじめ紙芝居にして用意しておく ○紙芝居の作り方を説明する。
製作	３．紙芝居を作る	９０分	○自分の作品を考える。 ・ストーリー、舞台、台詞など。 ○絵を描く。 ・サインペン、クレヨンを使用。 ・必要に応じて折り紙を使用する。 ○文章を書く。 ・絵の説明を裏面へ。 ・台詞をいれる。	←子どもの中を周りながら、具体的な場面を考えさせる。 「何をしているの？」 「何と言っているの？」 ◎子どもの発想を尊重し、まかせること。 ←サインペン、紙、折り紙はあらかじめ用意しておく。 ◎１人４枚程度でまとめられるように助言。 ◎特に、ほめながら助言するように心がける。
発表	４．友達の作品を見る	１５分	○自分の作品を友達に見せる。 ・元気よく発表 ○友達の作品を見る。 ・静かに発表を聞く。	○作品を見る。 （ほめる） ※完成品（不完全でも）を、きちんと成果として認めること。

みんなで楽しい紙芝居を作ろうぜ！

奥原　克水（国語専攻　4年）

1．授業づくりの着想とねらい

「紙芝居」の講座では、第4回で行なった「劇」と同様に、「国語」というものに力点を置き、表現力や想像力を発揮できる場を目指した。

「劇」が、異年齢集団に対して指導するには、私の能力を越えてしまう教材であったので、今回は、もう少し自分の能力にあったものを考える必要があった。そこで、私が教育実習中に「国語」の授業を行なった「物語の続きを考える」というものをアレンジして使ってみることにした。それが、この講座では「紙芝居」という形になった。

この講座は「自分で考える」ことを子ども達に一番やってもらいたかった。そして、考えたことを、「絵」を通して思い切り表現してもらえれば良いと考えた。

2．教材観

先にも触れた通り、「紙芝居」で目指したのは、表現力や想像力を発揮してもらうことだった。そのために、「自分で考える」ことを最優先に考えた。しかし、ただ単に「紙芝居を考えなさい」と言うだけでは、子どもには難しいだろう。そこで、「何かの物語の続きを考える」ということにした。例えば「かぐや姫は月に帰った後どうなったのか？」を考えてみようと思ったのである。

一旦描きだしてしまえば、あとは子どもの自由にしても、すんなり流れる。そして、この教材で一番大切なのは「導入」の部分だ。このように私は思っていた。実際に、子どもがどんな物語を描くのかを決めるまでが、こちらの指導力が問われる時間であった。

3．子どもの様子

予想通り「導入」の部分が子どもには大変だった。なかなか描くものが決まらず、描きだせなかった。スタッフの方々にマンツーマンで付いてもらって、それぞれに雑談をしながら考えをまとめていってもらった。それでも泣きだす子どももいて、この部分で子どもは抵抗を感じるということを改めて実感させられた。

これを踏まえて、次の機会には、来る前に「物語の続きを考えて来てね」と連絡したところ、随分と「導入」が簡単になった。子どもにとっても、描きやすくなったようで、どんどんと描くことが出来た。

面白かったのは、子どもの描く絵が、年齢、つまり発達段階によって違っていることが観察できたことである。例えば、幼稚園の子どもは、四角を描いて「これはアンパンマンだよ」と自慢げに見せてくれた。こちらに伝えることをあまり意識しないで、自分の中にある世界だけを紙に書いているから今述べたような、こちらに分からない絵になるのかもしれない。それが高学年になるにつれて写実的になり、中学生ぐらいになるとさらに漫画的な絵になっていく。それぞれに味があって、素晴らしい作品になっていたと思う。

4．ティーム・ティーチング

スタッフの方々には、とにかく子どもの中に入ってもらって、一緒になって考えてもらった。学生とコミュニケーションをとりながら、難しい「導入」段階を乗り切った子どもは少なくなかった。そして、出来上がった作品をそのスタッフに喜んで見せ、そして「誉められた」時の子どもの嬉しそうな顔が印象的だった。キャプテンが、心置きなく全体を見渡せるのは、スタッフの方々が子どもの中に入って支えてくれるからであった。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	かこう・書こう・描こう	平成７年　９月　９日(土) （午前）
キャプテン名	塩苅　有紀　（国語専攻　３年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　１４名 参加者数　２２名
指導教官名	市澤　要三　教官	活動場所　Ｍ４０１

講座のねらい

毛筆を使って半紙に字や絵を実際にかくことを通して、書道に親しみ、自分の思いを自由に表現することができる。

講座の展開

時間	学習内容	準備するもの
９：３０	・スタッフの作った多種多様な作品を教室に展示しておく。 ○いろいろな作品を見てたくさんの表現方法があることを知り創造意欲を高める。	作品例
９：４０	○作品を書き（描き）、裏打ちするものを１点選ぶ。 （自分の思いを書き出したり（メモ）、自分のもってきた資料を利用したり、用意されているものを使ったりして「何を作品にするか」考える 。） ・マンツーマンで、すぐに書き出せる子ども、なかなか書き出せない子どもに対応する。	書道道具 図鑑・本など
１０：１０	○裏打ちする。 （裏打ちの方法の説明をきく。スタッフが１度見本を見せる。） ○乾かす。	裏打ち道具
１０：２０	・裏打ちが終わった子どもから、乾くのを待つ間に大きな紙（全紙）に大きな筆で字を書く。 ＜指導＞ ・墨をつけすぎると破れるので、つけすぎないように注意。 ・大きく元気よく書こう。	大きな筆 全紙
１１：２０	○裏打ちした作品をはがし、発表し合う。 ・修了証を渡す。	修了証

かこう書こう描こう

塩刈　有紀（国語専攻　3年）

1．講座開設の着想とねらい

筆と墨を使って何かを書く場面を考えるとき、子どもたちが考えるのは、学校のいわゆる書写教育であると思う。その中には、書き初めや手紙を書くときの字も含まれる。ここで注目されるべき点は、毛筆では美しく正しく文字を書かなければいけないと思っている子どもがいるかもしれないということである。そこに私たちのねらいがある。書道に親しむには、まずその楽しさを知ることが最善の方法である。そこで、文字だけでなく絵や好きな言葉、英語などを毛筆で「かく」ことで、手本を写すのではなく、自分の思いを自由に表現するという楽しさを知ってもらう。そして最後には毛筆で紙に「かく」ことは、楽しいものだと思ってくれると考えた。では、教材としてただ書くだけでよいのかと考えたとき、いっそのこと裏打ちをして作品にした方がより親しみがわくだろうと思い、これも取り入れた。裏打ちというのは、簡単に説明すると、かきあがった作品に厚紙を貼って見ばえをよくする作業である。

2．自己目標・自己課題とその評価

この講座において、私は次の2点を課題として考えた。1つは、子どもの想像力をできるだけ引き出すために、キャプテンやスタッフはなるべく手や口を出さないということだった。これは子どもの自主性を尊重するという点では評価されるべきだが、何をかこうか迷っている子どもに対しては適切な助言ができなく、ここぞというところで私たちが対応しきれていなかった。自由に表現することはとても難しいと感じた瞬間だった。もう1つは、子どもたちに楽しいと思ってもらうということである。これは「ねらい」にも関わっており、後で詳しく述べるので、ここでは簡単にふれておく。子どもたちが楽しくかいている姿や、作品をはがしたときのとてもうれしそうな顔を見て、私もスタッフもこの講座を開いてよかったと思った。

3．子どもたちの取り組みの様子～スタッフや子どもたちの感想から～

スタッフと子どもの2つの視点から考察したいと思う。まず、スタッフからは子どもが絵本を真似しながらだんだんと自分の絵を描こうとしたり、朱墨と墨の2色をうまく使って絵を描いたりなど子どもの発想力の豊かさが指摘された。また、どんどん好きな絵を描いている子どもがいる一方で、線の1本1本にこだわって、失敗するとかき直そうとする子どももいるというように、取り組み方の違いについての意見も出たりした。

次に、子どもの感想を見てみると、全般に楽しかったという意見が多かった。その中には、「最初は全然かけなかったんだけど1回かいてみたら、すっごく楽しくて、どんどんかけちゃいました」（中3・女子）というように、自由に表現できたという感想があったり、「最初、隣に大人の人がすわり、ビクビクしていたけど、楽しくできました」（小5・女子）というように、スタッフとの関係についての感想があったりした。楽しかったという子どもたちにも、表現がうまくいったとかいろんな先生と話ができたとか、捉え方は

様々であることがわかった。その他に、「字がなかなか上手に書けなかったけれど、楽しかったです」（中３・女子）、「少し難しかったけど楽しかった」（小３・女子）など、自由な表現に戸惑いを感じながらも楽しく取り組んでくれた子どももいた。

４．ねらいにおける反省と今後の課題

初めのうちは、戸惑っていてなかなかかき出せなかった子も、１枚かくとどんどん自由にかき出し楽しんで表現していた。そういう子が多く見られたので、ある程度「ねらい」は達成できたように思われる。親しむことに関しては、全員が達成できたと思っている。後片づけの指示やスタッフの裏打ちの技術といった点では、課題が残った。最後に、この講座に関わってくれたすべての人に心より感謝したい。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	新スターへの道	平成7年　10月　14日(土) （午後）
キャプテン名	小谷　将紀　（社会専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　4　名 参加者数　15　名
指導教官名	阿久津　昌三　教官	活動場所　泉会館２階

講座のねらい

内気で恥ずかしがりやな子どもたちを対象とし、みんなの前で大声を出して歌い、スターになりきることで、自分に自信をもち、より積極的、より陽気に生活ができるようになること。

講座の展開

（導入）キャプテン　オン　ステージ
・特に歌がうまくなくてもなんとかなるところを分からせる。
・明るく元気に恥ずかしがらずにやることをテーマとする。
ー曲目ー　①ＹＭＣＡ　ヤングマンⅡ
②課題曲「　？　」
ー用意ー　○ステージ衣装　○マイク　○スピーカー
○ステージライト　○カラオケテープ

（展開）①衣装づくり
・各自持参の服に、糸やテープなどで飾りをつける。
ー用意ー　、○針と糸（人数分）　○モール　○フェルトのアップリケ
○金・銀テープ　（うらは両面テープ貼り）
②唱の練習
・課題曲を大きな声で歌う練習をする。
・度胸をつける練習をする。
○テープにあわせてうたう　○大声をあげる　○机の上で叫ぶ
○課題曲や知っている歌をうたいながら校内をめぐる
ー用意ー　○歌詞カード　○テープ
③時間があれば振り付け

（まとめ）ＹＯＵ遊オンステージ
・大きな声で発表する。とにかく盛り上がること。（他キャプテンの協力）
・キャプテン及びスタッフは盛り上げ役及び司会にまわる。
ステージ後インタビュー
・興奮冷めやらぬまま、感想を聞く
・その場でサイン色紙の交換（修了証として）
ー用意ー　○ステージセット　○客席用紙テープ　○サイン色紙（人数×２）

『スターへの道』の道のり

小谷　将紀（社会専攻　4年）

1．道への入り口－講座開設にあたっての理由と野望－

「私に何ができるだろうか。」それがすべての出発点でした。それは信大ＹＯＵ遊サタデー開設の年、初代実行委員長・山口直行との他愛もない会話の中で試行錯誤、暗中模索の末出た結果でありました。

子どもとしばし同じ時間を過ごすに当たって、まず私自身この信大ＹＯＵ遊サタデーとどのようなスタンスで関わっていくか、というところから考えました。結果、「誰も教えないようなことをやや強引にでも教えてやろう」という考えが浮かびました。モデルとしては、頼んでもいないのに毎週練習にやって来てはひとりひとりに手取り足取りバッティングを教えてまわるような、いわば「おせっかい風子ども好き野球狂おやじ（３９歳・工務店経営）」に類するようなものです。なぜだか今でもハッキリはしませんが、とにかくそれが学校教育と相対するもうひとつの教育方法ではないかと考えたのです。

そのころ私はＴＶという情報媒体に興味を持ち、またＴＶ局側も私という暴発媒体に興味を持つという相思相愛関係に陥り、極プロ的素人学生タレントとして幾度かＴＶに出演していました。『セニョール小谷』という、スペイン留学を意識した名前でお茶の間の人気をかっさらっていました。あけぼの寮においては『小谷崎しげる』という名前で、幾度ものコンサートを成功させていました。

こんな私も中学生まではどちらかというと引っ込み思案な方で、何かと損をしてきました。しかしある先生の一言が私を変えたのです。「カラオケの一つも歌えんぐらいじゃ、野球もうまくなるはずがない」。あまりに悔しかった私が、思い切って『星空のタンゴ』を歌ったところ大反響。それからというもの、自分を『スター』だと思い込むようになった私は、度胸もつき大抵のことではへこたれなくなりました。

「何を伝えたいか」そう考えたときに、どうにかしてこの『スター』の陶酔の境地を一度でいいから味わせてあげたいという思いが沸き上がって来ました。

残念ながら第１回の信大ＹＯＵ遊サタデーでは講座を開き、募集を募ったものの「応募０」という結果でありました。それから１年・・・９月の講座には予想を上回る参加者が集まりました。

2．道の途中－講座の模様と展開－

スタッフを集める際、考慮に入れたことは、あくまでもこの「スターへの道」を「教育の場」にしてはいけないということでありました。そのためスタッフには教育の息のかかってない教育学部以外から集めることが必要でありました。運よくわが工学部の友人連中が私の意向を承諾してくれ、スタッフとして参加してくれることとなりました。これは信大ＹＯＵ遊サタデーのためにもそして工学部の連中のためにも有益であったと思います。衣装の製作において工学部のスタッフが少々苦手な面を見せてはいましたが、それを補ってなお余る女性スタッフの活躍も必記すべきことであります。

１回目の講座では、丸１日の日程をこなしました。参加者は仲良しの４年生グループが半分を占めており、全ては彼女たちの気分次第で進んで行きました。親に無理やり申し込まれたという子どもがほとんどということもあり、私自身の『スタースーパーゴールデンステージ』を見た後では危うく屈辱の脱走者が出そうな雰囲気でした。それでも遊び時間

でスタッフとの親交を深めることにより、なんとか最後のダンスのレッスンでは子どもの方から自発的にアイデアが出てくるほどでありました。反省点としては、

・低学年と中学年の子どもの衣装創作能力の差を読めず、低学年の子どもを飽きさせてしまった。

・スタッフ過剰により、子ども同志の関わりを持つ場が少なかった。

・学芸会のダンスの域を超えられず、子どもの意識を変えるまでにはいたらなかった。

ことが挙げられると思われます。

2回目の講座では、半日という日程もあり一回目とは大きく様子が変わりました。衣装作りを無くし、歌とダンスのみの内容で行いました。参加者が3人の小学校2年生のみということもあり、前回の年齢のばらつきによる能力差という問題がなかったので、よりやりやすかったというのが本音でした。スタッフも前回の経験を生かし、よりスムーズに子どもたちと仲良くできたようでした。2回目の反省点として、

・時間の不足による子どもの不満足とスタッフの焦り

が挙げられます。しかし全日程終了時に子どもたちを含め父兄方が「これから帰って忘れないうちにパパに見せないとね」と満足してくださったところをみると、まずまず成功だったと言えるでしょう。

何れの講座も子どもたちが意外に熱心に取り組んでくれたことが予想外と言えばそうであります。そしてなによりも子どもたちの父兄が熱心に見守る姿に、この講座に対する期待を感じてなりませんでした。

3．道の終わり－今後の課題と希望－

と、いろいろ反省点などなど並べ挙げましたが、本音を言えばどれもたいして重要なことではなく、自分自身この講座が大成功のもとに終わったと思っております。ただ今後の参考として頭においておきたいことは、子どもたちは自分たちの力で自然に学ぼうとしているということです。環境を整え、道具を十分にそろえてあげればあとは子どもたち次第です。今回の『スターへの道』が参加した子どもたちにとって、刺激的な時間であれば講座開催の甲斐があったというものです。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	秋のどんぐりアート	平成7年 10月 14日(土) （午前）
キャプテン名	坂井　雅子（音楽専攻　3年） 雨宮　なるみ（音楽専攻　3年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　5 名 参加者数　20 名
指導教官名	和田　清　教官　　山田　敏　教官	活動場所　N103

講座のねらい

どんぐりや落ち葉を使って、人形や帽子、コマなどを作ることと、どんぐりの栽培を通して、自然物に親しみ、物を作る楽しさを味わうと同時に自然を大切にするようになる。

講座の展開

時間		予想される子どもの動き	支えていきたいこと
20	1．導入 ・グループ分けをする。 ・あらかじめ作っておいた人形帽子、コマ紹介		・5人ずつ4つのグループに分ける。 ・カッター、ハサミの使い方の指導をしケガのないよう呼びかける。
65	2．製作と遊び	・グループごとに別れ、各々が机上にある落ち葉、どんぐり、画用紙を用いて人形、コマ、帽子を作る。 ・スタッフに作り方を聞いたり、周りの友だちと相談しながら作ったり、遊んだりする。	・思い通りに進まない子どもがいたら、スタッフが声をかけ、手伝う。 ・工夫している所や、うまくできた所などは、ほめてあげる。 ・終了10分前に片付けるよう指示。
15	3．発表 ・作品を紹介しながら終了証を渡す。	・一人一人名前を呼ばれたら作品をみんなに見せ、終了証をもらう。	・一人一人に修了証をわたす。 ・作品に「良くできたね。」などと、声をかける。
20	4．どんぐりを植える。	・芽が出ているどんぐりを見て、驚く。 ・自分もどんぐりを植えて、大きくしてみたいと思う。 ・どんぐりを植える。 ・喜んで家に持って帰る。	・すでに芽が出ているどんぐりを子どもたちに見せ、どんぐりから芽が出るという意外性に気付かせる。 ・用意しておいたプランターを一人一人に配り、どんぐりを植えるようよびかける。 ・プランターは一人一人、家に持って帰ってもらう。

秋のどんぐりアート

坂井　雅子・雨宮　なるみ　（幼児教育専攻　４年）

１．授業づくりの構想とねらい

昨年のＹＯＵ遊サタデーで「クリスマスカード作り」にスタッフとして参加し、子どもたちの創造力や発想の豊かさに驚かされると共に、教育実習の時とは違った楽しさを味わうことができた。この時の感動や昨年の教育実習、さらに和田先生から”どんぐりを使った講座を開いてみたらどうか”というお話もあり、普段あまり自然と触れ合う機会の少ない子どもたちがどんぐりを使って何かを作るということを体験できる講座を開こうと考えた。そして子どもたちが、ものを作る楽しさを味わい、少しでも周りの自然に関心を持ってくれることを願い取り組んだ。

２．素材研究

この講座では、どんぐりという素材から、造形的なことと栽培という２つの内容を考えた。どんぐりは、紙や粘土とは違い加工がしにくいので、それだけではあまり発展性がないと思った。そこで、落ち葉や松ぼっくりなど秋を感じさせるものをプラスさせ、人形、帽子、コマを作ることにした。人形は、作り方が難しいので一斉に行い、帽子とコマ作りは、一人一人自由に取り組み創意工夫を凝らすことができるようにした。

３．自己課題

「子どもたちが楽しく遊べる講座にすること」を自分自身の課題とした。子どもたちが楽しめるようにするには、子どもたちの思いを受けとめ、それに応じた援助が必要であると思い、できる限り、一人一人に目を配るように努めた。そして、ティーム・ティーチングであるということを十分に生かそうと思った。

実際の場面では、幼児を含む２０人近い子どもたちに何かを作らせようとすることは、かなり難しいことであると感じた。６人のスタッフでは、少し足りず、一人一人の子どもたちに十分に援助してあげられなかったように思う。しかし、”援助不足ではあったが、子どもたちが楽しそうに遊んでいたよ”というスタッフの声もあり、なんとか楽しんでもらえたようであった。

４．子どもたちの取り組みの様子

人形作りの時には、教室中が静まり返るほど静かでかなり緊張しているようであった。しかし、帽子作り、コマ作りと製作が進んでいくうちに、緊張がほぐれ製作や遊びに夢中になっていた。特に、コマ作りではかなり遊びに深まりが見られた。コマとなるどんぐりに色を塗る子どもや、軸の長さを変えるとコマの回り方が違ってくることを発見したり、丸いどんぐりと細長いどんぐりとでは回り方が違うことに気づき喜ぶ姿が見られた。また、どんぐりのコマ回し競争をすることで、初対面の子ども同士でも仲良く遊んでいた。

どんぐりの栽培では、あまり種まきの経験がないためか、少し戸惑う姿が見られたが、どんぐりを植えたポットを大切そうに持って帰ってくれ、大変うれしかった。

５．反省と今後の課題

スタッフ同士の連絡不足のためティーム・ティーチングがうまくいかなかったこと、４歳から８歳までの年齢差が予想以上に大きく対応がうまくできなかったことが反省点である。今後の課題としては、ティーム・ティーチングをうまく行うことで、その年齢差をカバーしていくことであると思う。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	リズムで楽しく遊ぼう	平成7年　10月　14日(土) （午前）
キャプテン名	佐藤　啓（音楽専攻　4年） 中村　薫（音楽専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　2　名 参加者数　5　名
指導教官名	長谷川　博史　教官	活動場所　第２音楽棟

講座のねらい

身体や打楽器でリズムを打って歌を歌ったり、合奏することによって、身体全体で音楽の楽しさを味わう。

講座の展開

時間	計　画	内　容
20分	リズムに親しむ	・数パートに分かれて、簡単なリズムを打つ。（手拍子、足拍子、膝拍子）
50分	リズムを感じながら歌を歌う。 （身体を使って）	①２拍子のステップ（キラキラ星） 両足首に鈴をつけて ②３拍子のステップ（いるかはざんぶらこ） バンブーダンス チムチムチェリー ③４拍子のステップ（大きな栗の木の下で） ・キャプテンが例を見せる。 ・子どもたちに好きなようにリズムを打たせる。
50分	合奏（打楽器を使って）	「山の音楽家」を合奏する。 “わたしゃ音楽家　「名前」 上手に　「楽器の名前」を 叩いてみましょ…” ・好きな打楽器を使って、順番にリズムを打つ。 ・ソロの人は一歩前に出て、他の人は後ろでリズムを打ちながら歌う。（鈴やタンバリンを使って）

リズムで楽しく遊ぼう

佐藤　啓　　中村　薫　（音楽専攻　4年）

1．講座開設にあたって

教育実習でわたしたちの行った音楽の授業は、決められた曲の楽譜を、指示されたように演奏するというものであった。実際、わたしたち自身も同じような授業を受けてきた。そのなかで常に思っていたことは、「もっと自由に、もっと自然に音楽ができたら、楽しいのではないか。」ということである。

そこで、楽譜はなくても（読めなくても）、曲が決まっていても、楽しく音楽ができるような講座を開きたいと考えた。

2．素材研究

a)曲 …①拍を感じやすい曲（のりやすい曲）

②年齢を問わず、興味をもって楽しめる曲

異なる年齢の子どもたちが一緒に活動するため。

b)楽器（道具）…①普段見たり触れたりする機会があまりない楽器

コンガ、ボンゴ、木魚、ハーモニー・トーンなど

②演奏しやすい楽器

すぐに音が出せ、リズムが打ちやすい楽器

③リズム打楽器

タンバリン、鈴、コンガ、ボンゴ、木魚

メロディー打（鍵盤）楽器

木琴、鉄琴、グロッケン

④バンブーダンス

3．自己目標・自己課題

①常に大きな動きでリズムを感じる。

なかなかリズムを感じにくい子どもが、キャプテンの動きをみて模倣することができる。

②曲、楽器、リズム奏法などのヒントを与えたり、提案したりはするが、強制はしない。行き詰まった子どもには特に関わる。

③年齢に応じた配慮

講座には、4歳から9歳の子どもがおり、発達段階に大きな差があると考えられる。

4．子どもたちの活動からの見取り（自己目標と照らしながら）

①より一じっとして歌っていた5歳児の前に行き、大きく縦のりしてみせると、一緒になって頭を縦に振ってリズムをとるようになった。

②より一始めは曲を提示していたが、徐々に子どもたちが好きな曲をしたがるようになった。また楽器についても、提示するだけで積極的に自分のやりたい楽器を手に取り、自分なりに表現していた。

③より―バンブーダンスでは、9歳の男児はすぐできるようになり、歌いながら楽しめたようであるが、4歳から7歳の子どもたちにとっては、竹をまたいで、リズムををとりながら歌を歌うことは少し難しかったようである。なお、4歳児には片足で立ったり、跳んだりすることも容易ではなかったようである。

5．反省

思った以上に4歳から9歳までのさまざまな点での発達段階の違いが大きく、特に運動能力の差が大きいことには驚かされた。　歌を歌う、リズムを打つなど、一つずつの動作は容易にできても、バンブーダンスのように、複数の動作が融合されると混乱し、難しくなってしまうようである。

また、年齢が低いほど、一つのことを長時間続けることが難しいようであった。。

年齢による能力の差が大きいということに加えて、個人差も大きいと思われるこの年代の子どもたちが、一緒に同じ活動をすることは不可能に近いのでわないだろうか。。もし一つの活動をするならば、役割を決めたり、段階に応じてそれぞれの目標をもちやすく、また達成しやすくする工夫が必要であろう。

イラスト講座

山崎　重幸（美術専攻　4年）

1．授業作りの着想や授業のねらい

子供達は基本的に絵を描くことが好きである。しかし、小学校中～高学年になってくると「絵嫌い」と呼ばれる子が増えてくる。その原因の一つに、自分の表現したい物をイメージ通りに表現することが出来ない、いわば表現力不足が挙げられる。

今回この講座では、色鉛筆、クレヨン、パステル、固形水彩絵の具、マーカーの5種類の画材を使って、様々な楽しい表現技法を用いた。普段普通に使っている画材も少し方法を変えることによって、全く違う表現が出来ることに気づいて欲しいと思い、またそこで得た技法を発展させ、好奇心を持ちつついろいろな表現を試していってほしいと願い、この授業を設定した。

2．ＹＯＵ遊サタデーと教育実習との関連

この授業は、今まで私が行ってきた講座の中で、学校で教わる授業に一番近いものである。しかし、これらの技法を学ぶのは主に中学校であり、小学校ではほとんど教わらない。好奇心旺盛な小学生たちに、おもしろい絵画技法を教えることは大変有意義なことであると思うのだが、学校では「自由な表現」をさせようとするあまり、表現法まで「自分の思い通りに」と子どもにいきなり任せてしまっている。子供達は自分の思い通りに描くすべを知らないので

私は中学校の教育実習で「モダンテクニック」についての授業を行った。これをもう少しやさしく、そしてわかりやすくアレンジして小学校でも教えたいと思ったのだが、教育実習では自分が行う授業の単元があらかじめ決められており、実際行うのは無理であった。しかし、それを今回のＹＯＵ遊サタデーで実行することが出来たのだが、実際に実習で行った「モダンテクニック」の授業がかなり有効なものとなって身についていることがわかった。教育実習で身につけたものは、将来現場に出たとき大きな糧となり、またＹＯＵ遊サタデーで身につけたものも、子育て、地区活動等教育に関する場に出たとき大きな糧になるものであると感じた。

3．子どもたちの反応

普段学校で使っている画材を用いて変わった技法を学ぶと言うことで、皆興味深そうに取り組んでいた。紙もキャンソン紙を使い、いつもの画用紙と違った感覚を受けてもらおうと思った。小学校の低学年～高学年までいたが、やはり皆「絵好き」の子供達ばかりであった。本来「絵嫌い」になりかかっている子にこそ受けてもらいたい授業であったのだが、この子たちはまたさらに絵を好きになっていってくれるのではないだろうか。絵を描いているときの真剣で生き生きとした姿がとても印象的だった。

4．ティームティーチング

今回スタッフとして二人の方に手伝っていただいた。生徒数とのバランスもちょうどよく、スムーズな授業展開が出来た。私が気づかなかった細かなところまで指摘していただいたりもして、非常に楽しく授業が出来た。ティームティーチングに男性の目、女性の目を両方加えることは有効なことだと改めて感じた。

5．反省

この授業の反省点は、個人差による制作時間の差を調整する点にあった。講義でなく制作の授業の場合、最も難しい点であると思うが、作業の遅い子も早い子も決められた時間内で完成させなければならないため各生徒に合わせた指導・助言をしていく必要がある。今回も、時間ぎりぎりで完成した子と、早々と終えてしまう子との差が激しかった。これは主に別の学年の子を同時に教えることにも関係していると思う。また、やはり描いている絵を見せてくれない子が一人いた。これは学校の図画工作の時間の環境に問題があるためだが、私は指導の方法をじっくり考えながら、最良の環境で子供達に図画工作を学んでいってもらえるよう努力しようと改めて思った。

出張ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	色鉛筆でおしゃれな額縁作品	平成７年９月２９日(金) （午前）
キャプテン名	渡辺　一博（英語専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　４　名 参加者数　２０　名
指導教官名	渡辺　時夫教官	活動場所　上田六中

講座のねらい　①額縁を作る過程で材料の特性を知り、道具の正確で効率的な使い方を学ぶ。②簡単ではあるが感覚的に表現できる「ぼかし」の技法を学ぶ。①、②を通し、また両者を統合することにより、自分で作品を作ることの喜びと絵画的表現の楽しさを味わう。

講座の展開

製作工程・作業内容	補助・注意事項	材料道具
1．額の縁部分の製作 ・バルサ材を２２．０㎝×２本と２７．５㎝×２本に、カッターナイフで切断。 	・バルサ材は傷つきやすいので、扱いは丁寧にする。 ・寸法の取り方、定規とカッターのあて方、カッタの力の加減、切断の仕方をバルサ材の特性に則して助言・指導する。特に安全面（手の置き方、押さえ方には注意）	ﾊﾞﾙｻ材 鉛筆 長定規 ｶｯﾀｰ ﾅｲﾌ
・それぞれのピースの端を４５°角で切り落とし、台形状にする。 	・４５°角三角定規を木材に平行に当て、正確にまっすぐ切断するように神経を集中させる。	鉛筆 45°角三角定規 ｶｯﾀｰ
・切り口や角をサンドペーパーで整え、長方形に組み合わせてみる。接合部に隙間がないように調節する。 	・サンドペーパーはあまり木に巻き付け、軽くみがく程度でよい。接合部ができるだけぴったりつくよう木材をひっくり返したり、削ったりして調節する。	ｻﾝﾄﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ あまり木
・そろえた木枠をそのまま裏返しにする。ホチキスを開いて木材の接合部に４～５か所ハリを打ち込み木枠を固定。 	・指で接合部をしっかりと押さえつけてハリを打ち込む。	ﾎｯﾁｷｽ
2．ホルダーを作る ・割り箸（２膳）を割り、箸の元の方を下にして、木枠の外側から３㎜前後の所に木工用ボンドで接着する。横と底の三カ所だけで上方はあけておく。 	・はみ出た木工用ボンドはティッシュでふき取る。	割り箸 木工用ﾎﾞﾝﾄﾞ ﾃｨｯｼｭ

3．内枠づくり ・内枠となるケントボードをホルダーの内側に入るように寸法をとり、切断する。 ・おさまったら、おさえながらひっくり返し、木枠の内側にあわせて薄く線を引く。 	・割り箸は一番幅の狭いところ（底の方）に合わせる。 ・内枠に使うので、絶対汚さぬよう、机の上を片づける。 ・線を引いた方が、後で裏側になる。	ケント ボード カッター ナイフ 定規　鉛筆
・ケントボードの中の枠からさらに２．０cmずつ内側に線を引き、線に沿ってきれいにカッターで切り抜く。 ・表側になる部分に少し「かえり」ができるので丁寧に元に戻す。 	・仕上がりが、斜めにならないよう確認しながら、切り抜く枠の位置を決める。切るときには、特に角に注意を払う。四角だけ少し残しておき、最後に刃を入れる方がよい。	鉛筆 定規
4．窓をはる ・ケントボード（内枠）はいったん横に置き、窓にガラス代わりとなるＯＨＰシートを貼る。 －木枠（裏側）の内側から０．５mmほど内側に両面テープをぐるりと貼る。 －両面テープの外側部分に合わせてＯＨＰシートを切断し、両面テープを剥がしてＯＨＰシートをはり付ける。 	・両面テープが、はみ出さないように注意する。 ・ＯＨＰシートは、手で触ると汚れが付いて落ちなくなるので、できる限り端をもつ。	両面テープ OHPシート カッター
5．内枠を貼る ・先程用意した内枠（ケントボード）を木工用ボンドでしっかり貼り付ける。 	・木工用ボンドが窓側の方にはみ出るのを防ぐ為に、ボンドはＯＨＰシートの外側から割り箸までの間に適量を広く塗る。 ・表面を見て、内枠がきちんと外枠の真ん中になるように調整する。 ・接着面を指で押し付けて、しっかりと固定させる。	木工用 ボンド 内枠
6．背板を貼る ・背板となるもう一枚のケントボードを用意し、割り箸のホールダーの横幅だけを合わせて、切断する。 ・ホールダーの出し入れ口に当たる部分（背板の上側中央）を３～４cmほど切り取る。（絵の出し入れが便利になるようにする） ・割り箸に木工用ボンドを塗り、背板を貼る。 	・背板の縦の寸法は、ちょうど合うので、横幅だけ寸法を合わせる。 ・ホールダーの割り箸が、隠れる程度の大きさに切る。 ・フックや掛け紐は、自分で必要に応じて付けてもらう。 （以下省略）	

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	アイスクリームを作ろう	平成7年　9月　9日(土) （午前）
キャプテン名	下沢　栄子　（家庭専攻　4年） 井上　清美　（家庭専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　5　名 参加者数　10　名
指導教官名	渡辺　敏明　教官	活動場所　泉会館1号室

講座のねらい

簡単な道具と材料で友達と遊びながらアイスクリームを作ると共に、家庭に帰っても一緒に楽しくおやつを作り、家庭でふれあう機会が増えるようなきっかけを提供する。

講座の展開

時間	学習内容	学習指導	教材・材料
9：30	○今日の活動を知る ・アイスクリームの作り方を知る	○全体の予定、作り方を説明する ・作り方を演示する ・アイスクリームを固める間に行う遊びに関して説明する。プリントを配る	○作り方のプリント ・ビニール ・断熱材 ・蓋つき缶 ・ガムテープ ・氷、塩 （卵黄、牛乳、生クリーム、砂糖） ・皿 ・スプーン
9：50	○アイスクリームを作る ・スタッフと協力して、アイスクリームの作れる状態にする	○グループごとに活動させる ・スタッフがグループについて指導する ・水漏れしないかスタッフがチェックする ○アイスクリームを固める間に遊べるように準備する	
10：05	○アイスクリームのできる間、缶を転がす遊びをする ・アイスクリームができるためには缶を転がす必要があることを知る ・缶ころがしリレーと、ボーリングをする	○なるべく缶を動かす時間が長くなるようスタッフが注意する ・アイスクリームを作るのに転がすことが必要なことを簡単に説明する ・安全には十分注意する ・氷が溶けてしまったら氷を取り替える	
11：00	○試食する ・アイスクリームをお皿に盛りつける ・試食したら協力して後片付けをする	・アイスクリームが融ける前に食べられるように指導する	
11：30	・修了証をわたす	・今日の感想を聞いて家でもぜひ親と一緒に作ってもらえるよう指導する	

アイスクリームを作ろう

井上　清美（家庭専攻　４年）
下沢　栄子（家庭専攻　４年）

１．授業づくりの着想

始めに、アイスクリーム作りをＹＯＵ遊サタデーの講座の題材にしようと発案したのは、体育科の渡辺敏明先生だった。アイスクリーム作りと聞くと、難しく時間もかかるように思うが、題材として取り上げたこのアイスクリームは、短い時間で簡単に作れるものだ。しかも、水に塩を入れると氷点下以下の温度になるという理科的要素やアイスクリームは空気を含ませることによりふんわりと仕上がるという特長のある調理性を備えている。そのようなアイスクリームの作り方をお聞きして、この題材は子どもが興味を持ち、様々なことが学べると思い、取り上げることにした。

２．ねらいと教材研究

講座で取り上げるならば、ただ作るのではなく、家庭に帰って親子一緒に作ったり、そこから発展して、おやつに限らず、家にある材料で工夫していろいろなものを作るきっかけにして欲しいという願いがあった。そこで、使う材料はなるべく身近なものを使用した。作り方もなるべく簡単にした。講座で実際に用いたアイスクリームの作り方は図に示す。

また、短い時間で作れるとはいえ、アイスクリームが固まるには２０分くらいはかかり、その間アイスクリームの入った缶を振り続ける必要がある。しかし、単純作業を２０分も子どもたちは続けことは困難である。さらに、その時間を遊びを取り入れた有効な時間にしたかったため、その時間の使い方を考えるのに苦労した。結局、缶を転がし合ったり、障害物リレーを取り入れることにした。

３．子どもたちの取り組みの様子

２人組で、子どもたちの前で見本を見せながら、アイスクリームを作った。アイスクリームの缶を振る場面では、子どもたちにお互いに缶を転がし合ってもらった。子どもたちは生き生きと楽しそうに転がしていた。スタッフの１人が缶を転がす相手の名前を呼んで転がすことを思いつきやってみると、子どもは転がすだけとは違った表情を見せていたので、みんなで楽しめるよい方法だったと思う。最後に簡単な障害物を避けながら缶を転がしてリレーするというゲームを行ったが、真剣にやってる子どもやそれを一生懸命応援している子どもの姿が見られ、子どもたちは私が計画した講座のねらい以外に、友達と接する中でいろいろなことを学んでいることを感じた。

アイスクリームを試食する場面では、今まで騒々しかった子どもたちの声がぴたりと止んだ様子から、子どもたちはおいしく食べることができ満足だったようだ。

４．反省と今後の課題

今回、計画したより講座が早く終了し、子どもたちを時間が来るまでその場で遊ばせた。その中で、子どもがけがをしそうな危険な場面があったが、そのような時の子どもの対応に困ってしまった。その時は何もなく済んだが、今後講座を開く上で、いくら注意をしていても、そのような場面に遭遇しないという保障はない。計画通り行かなかった時の対応は十分考える必要があると思うし、してはいけないことをしたときには、私たちキャプテンやスタッフも厳しく注意しなければいけないことを痛感した。

アイスクリームはすぐに溶けてしまうため、家に持ち帰ることはできない。持ち帰って

もらったのは作り方を書いた用紙だけだった。ねらいが家庭に帰ってからもこの講座で学んだことを生かして欲しいことだったのに、何も持ち帰らないのは不十分だったと思う。作り方の用紙は紛失しやすいし、印象も薄いと思う。何かを持ち帰ることがいいとは言えないが、持ち帰った方が印象が強く、家庭でまた作ってみようという気を起こさせる一つの道具になると思う。従って、今回のアイスクリームでも用紙以外に使用した缶を、全員に配れるほど数がなかったが、希望する子どもには持ち帰ってもらえば良かったと思う。

アイスクリームの作り方

●材料

アイスクリームのもと（２人分）
- 牛乳　＝＝＝　１５０cc
- 卵黄　＝＝＝　１個分
- 砂糖　＝＝＝　４０ｇ
- 生クリーム＝　７５cc
  （動物性）

- 氷
- 塩
- 蓋付き缶（大きい缶と小さい缶で円柱状のもの）
  実際に使用したものは調整粉乳の入った缶とコーヒーの入った缶です。
- ガムテープ
- 断熱材（缶に巻いて冷たさを逃がさないものならば何でもよい）
- ラップ

●作り方

①小さい缶に卵黄と砂糖を入れよく混ぜ合わせ、次に牛乳と生クリームを入れてもう一度よく混ぜ合わせる。

②アイスクリームのもとがこぼれないように、ラップをはさんでしっかりと蓋をする。

③大きい缶の中に、蓋をした小さい缶を入れ、大きい缶と小さい缶の隙間に細かく砕いた氷と塩を入れる。

④大きい缶に蓋をしてガムテープでしっかりととめた後、缶の周りに断熱材を巻く。

⑤最後に④の缶を約２０分間転がす。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	おやつパラダイス ～クッキーを作ろう～	平成７年　５月２７日(土) （午前）
キャプテン名	井上　清美　小野　雅子 （家庭専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　６名 参加者数　２４名
指導教官名	粟津原　宏子　（入江　建久　角尾　篤子）　教官	活動場所　Ｓ２２８

講座のねらい　クッキー作りに挑戦する場面で、友達と一緒になってクッキーを作ったり、簡単なラッピングにチャレンジすることを通して、おやつ作りの楽しさを知るとともに、人にプレゼントするときの工夫を知り、それをもらった人の喜びを理解できるようになる。

講座の展開

時間	過程	子供達の学習内容	キャプテンの学習指導	教材
９：３０	導入	○みじたくを整え、着席する。 ○キャプテン・スタッフのお話を聞く・自分の班のスタッフのお姉さん（お兄さん）を知る。	○キャプテン・スタッフが補助・誘導する。	・材料費 ・諸注意を書いた模造紙
９：４５	展開	○クッキーを作る。 ・作り方のプリントを見ながら、キャプテンの説明を聞く。 ・手洗いをした後、クッキー作りを始める。 ・焼いている間 （ア）器具などの後片づけをする。 （イ）いくつかのラッピング方法を知る。	○子どもを前に集めて、ポイントを実演によって理解させる ○上級生だけでなく、すべての子どもが作業に参加できるようにする。下級生には、スタッフが手を貸すようにさせる ○巡回指導をする。 ○後片づけの指示をする。 ○用意してきたラッピングの例を紹介する。	・ラッピング例
１０：４５ １０：５５ １１：１０ １１：２０	まとめ	○できあがったクッキーを試食する ○簡単なラッピングに挑戦する。 ○キャプテンの説明を聞いてから、スタッフのお姉さんや友達と一緒にクッキーをラッピングする。 ○後片づけをする。 ○感想カードに感想を書く。 ○修了スタンプをもらう。	○楽しい雰囲気の中で、おいしく試食できるようにする。 ○子どもを前に集めて師範する ○後片づけまでやり遂げることの大切さを理解させる。	・紅茶orジュース ・ラッピングの材料 ・感想カード ・スタンプ

おやつパラダイス

クッキーをつくろう

井上　清美　　小野　雅子（家庭専攻　４年）

１．授業づくりの着想とねらい

第１期ＹＯＵ遊サタデーで小さなこどもたちが目を輝かせておだんごやおまんじゅう作りに挑戦している姿が私にはとても印象的であった。よく考えてみると学校生活の中では小学校５年生になるまで、調理実習なるものを経験することができない。家庭生活においても、お母さんのお手伝いをすることこそあれ、おやつ作りや食事の仕度に１００％かかわって、自分の手で何かを作り上げたことのある子は少ないであろう。

そこで、子どもたちに自分の手でおやつを作る喜びを味わってもらおう、と今回もおやつパラダイスを開講することにした。また今回の講座では、クッキー作りだけではなくできあがったクッキーを家の人に持っていってあげたいと望む子が多いだろうという予想のもと、簡単なラッピングにも挑戦することにした。更に前回の反省を生かして、子どもに後片づけまですることの大切さを理解させることもねらいの一つであった。

２．生徒指導について

今回の講座はとにかく時間との戦いであった。限られた時間の中でおいしいクッキーを作らせてあげたい。だからといって私たちキャプテン達が手を出しすぎては、本講座の意味がなくなってしまう。そこで私たちキャプテンとスタッフは、子どもになったつもりで２度の対策会（予行練習）を開き、当日に向けて念入りに打ち合わせを積み重ねていった。それでも当日は思っていたようには作業が流れていかなかった。時計と進行度を見比べて何度も手を出したくなかったが、ファイトをおこさせるように助言をしたり、手のあいている子に「この次は何をするんだったけ？」と声をかけたりして、何とか子ども主体のおやつ作りを時間内に終えることができた。

また、年齢差のある子どもたちが集まっての作業であるため、どうしても上級生中心になって作業が進行していくことが予想された。予めスタッフには「班のみんなでおやつ作りができるように。」と告げてはあったが、そううまくはいかないものである。力やスピード、テクニックを要する作業は、やはり上級生中心になりがちであったし、下級生の中には材料をただかき混ぜるだけの作業には興味を示さない子もいた。そのような光景を見かけた時、「これだけ終わったら、○○ちゃんたちと交替しようか。」とか「じゃあ、今のうちに台の上をきれいにしておこうか。」と声かけをし、なるべくボーッとしている時間が少なくなるようにしたため、それぞれの子どもなりに充実感を得ている様子だった。しかし、クッキーの形を作る段階まできたら私たちに何の心配もなくなった。一人一人の子どもが目を生き生きとさせ、大人には思いつきそうもない形を次々と作り上げ私たちを驚かせた。

今回の「おやつパラダイス」では、大人と子どもの思考パターンや行動パターンのギャップや子どもの視点で物事を見つめようとすることの大切さをつくづくと実感させられた。

３．教職への抱負

ＹＯＵ遊サタデーでの講座の特徴は、学校教育の中の授業とは違う意味で、キャプテン、スタッフとなる学生も、子どもたちも、１日をのびのびと過ごすことができ、教育実習では得られなかった充実感を得られるということだ。では一体、学校の授業とは何が違うの

だろうか。第１に、１つの講座に２時間というまとまった時間がとれ、その時間内に一応の内容の完結が遂げられること。第２に、学生は自分の得意とする分野で講座を開き、子どもは興味ある講座を選んで参加するという点で、共通の目的意識を持って自主的にとりくめるということ。第３に、学校教育の中ではなかなか扱えないような内容を扱えること。第４に、固定化した友人関係の中での作業ではなく、知らない友だちと同じ目的に向かって、努力、協力することで、子どもたちは新鮮な気持ちや勇気みたいなものを得られるということなどがあげられる。

この忙しい時期に敢えてＹＯＵ遊サタデーに挑戦したのは何故だろう。それはやはり私が、子どもとふれあうことが根っから好きだからであろう。当日は、疲れ切った体調で参加したのにもかかわらず、子どもたちが体全体で楽しんでいる様子を見て、もうないはずのパワーが、どこからか生まれてきた。子どもというのは、実に素直で、エネルギッシュな存在である。これから先、教師という職業についた時もあの生き生きとした表情や笑顔を少しでも多く引き出してあげられるように、子どもの視点で物事を見つめる姿勢を忘れずにいたい。

理論やテクニックだけにとらわれず、子どもたちに体当たりでぶつかっていける教師でありたいと思う。ＹＯＵ遊サタデーでもそうであるように、そこから多くのものが得られるであろう。

第（６）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	おやつパラダイス スイートポテトをつくろう	平成7年　10月　14日(土) （午前）
キャプテン名	加納　文香　（家庭専攻３年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　６　名 参加者数　２１　名
指導教官名	林　隆子　教官　　粟津原　宏子　教官	活動場所　Ｓ２２８

講座のねらい

スイートポテトを作る場面で、友達と一緒になって作ったり、試食することを通して、おやつ作りの楽しさを知り、手作りに関心をもつようになる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習内容	教材
１５分	導入	・班ごとに分かれて席につき、班のみんなと顔合わせをする。 ・身支度を整える。 ・実演を見る。	・スタッフ、キャプテンの自己紹介をする。 ・名札の着用を確認する。 ・エプロンの着用をする。 ・スイートポテトの見本を提示し作り方を実演する。 ・約束を確認する。	・黒板に座席表の用意 ・机の上に作り方のプリント ・見本 ・実演の材料 ・道具
７５分 ２０分	展開	・スイートポテトを作りはじめる。 ・オーブンにいれて焼く。 ・焼きあがったらお皿にあける。 ・試食をする。 ・簡単なラッピングに挑戦する。 ・後片付けをする。	・上級生だけでなく、すべての子が作業に参加できるようにする。 ・やけどをしたときのために、水や氷を用意する。 ・飲み物の準備をする。 ・ラッピングの方法を説明する。 ・スタッフが中心になって、班員のお土産ができるようにする。 ・後片付けまでやり遂げることの大切さを理解させる。	・皿 ・飲み物 ・ラッピングの道具 ・せっけん ・ふきん
１０分	まとめ	・修了証をもらう。	・各班のスタッフにわたしてもらう。	・修了証

おやつパラダイス
スイートポテトをつくろう

加納　文香（家庭専攻　３年）

１．講座を開くにあたって

恥ずかしい話、私は幼い頃、コロッケはお店で買う物、シュウマイもお店で買うか、飲食店でしか食べることができない物と思っていた。味噌やマヨネーズも、工場で作る物と決めつけており、テレビの前でマヨネーズを作った出演者を魔法使いだと思ったこともある。そんな私に手作りのすばらしさに目覚めさせてくれたのは、家族で作った手作りコロッケである。ある日曜日に、家族みんなで作った揚げたてほくほくのコロッケの味は言葉では言い表せないほどおいしかった。このときからか、何かを作るおもしろさを感じ始めた気がする。何でも市場にでている今だからこそ、手作りの味を味わってほしい、私が経験したような手作りの楽しさを感じるきっかけにしてほしい、このような思いから手作りおやつの講座を考えた。

２．スイートポテトについて

お菓子と言ってもいろいろある。簡単なようで奥が深いのがお菓子である。その中でなぜスイートポテトを選んだのかということを述べたいと思う。

今ではハウス栽培などもあり、季節に関係なく何でも食べることができるが、私は安く手に入り、その季節だからこそおいしくいただける旬のものを生かせるといいな、と考えていた。私が講座を開いた１０月はまさに秋！さつまいもが有力な候補にあがったのである。またおやつパラダイスは低学年にも人気の講座であったため、対象学年を幅広くしたいという思いが強かった。そこで、小さい子どもでも手軽にでき、失敗があまりないと思われるもの、また作った物を家の方にも食べてもらいたいという思いが生まれることを予想して、持ち帰ることができそうなお菓子を、と考えた時、スイートポテトを思いついたのである。実際不器用で失敗の多い私が、失敗したことのないお菓子だったのである。スイートポテトと一言でいっても、作り方はいろいろで、生地の堅さの違い、火を使うもの、使わないもの、型の利用の仕方など考える要素は多方面からある。対象年齢や技術力に応じて、道具や、材料の分量をかえることで、どんな年齢の子どもでも楽しむことができる教材であると思う。

３．子どもたちの様子

この講座を開くことが決まったのは教育実習前であり、どこまで子どもたちだけでできるのか、ということが一番の不安であった。しかし教育実習で小学校２年生と接することを通して、低学年の子どもであってもある程度のことは何でもやってみようとし、自分で成し遂げることで満足感を得ていくということを痛感した。そこで、集まった子どもたちは低学年がほとんどであったが、なるべく子どもたちだけでやるようにしていこうと考えた。まずスイートポテトの見本を見せると、子どもたちはそれだけで目を輝かせ、夢中になって作業に取り組んでいた。しかし普段はやりなれない作業。子どもたちは何でもやってみたいという気持ちはあるのだが失敗したくない、という気持ちがあるために慎重になってしまう。しかし、スタッフが各班一人ずつついて、しっかり見守っていてくれたため、子どもたちも安心して確認しながら作業を進めていたように思う。

4.反省にかえて－講座を開いてみて思うこと－

今はいわゆる”やんちゃぼうず”がいないような気がする。講座を開いてみても、めちゃくちゃないたずらをしてしまう子どもはいない。逆に何をするにも、失敗しないようにと思うあまり、必要以上に慎重になる様子がうかがえた。しかし、好奇心はやはり旺盛なのである。やってはみたいが手が出せない、そんな子どもにこそ体験をする楽しさを知ってもらう、といった意味でもスタッフを十分につけたということは良かったと思う。今回は、おやつ作りの経験があるスタッフに参加してもらったが、逆にそのような経験のないようなスタッフが子どもたちと同じ立場で悪戦苦闘しながら一緒に作る、というものであれば、子どもが考えながら作業することができ、子どももスタッフも満足感が違ったものになるかもしれないな、ということも思った。キャプテンもスタッフも子どもの上に立つ、と考えるよりも子どもと一緒に楽しむという感覚がなにより大切なことである。

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	そば作り名人になろう	平成7年　9月　9日(土) （午前）
キャプテン名	池田　貴信　（大学院　2年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　2　名 参加者数　5　名
指導教官名	野口　宗雄教官　　粟津原　宏子教官	活動場所　調理室

講座のねらい

そば粉をこね、薄くのばして切り、ゆでておいしく食べることを通して、長野県の伝統的な食習慣を理解し、手作りのそばの良さが体験できる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
３０分	こねる	○ボールにそば粉を入れ熱湯を注ぎながら、はしでかきまぜる。 ○小麦粉と水を入れて良くかきまぜる全体を玉にまとめ良くこねる。	○熱湯を注ぐ際は、スタッフと一緒に行い、安全に配慮する。 ○こね方は、あせらずにゆっくりと力強く行うこと。	そば粉　１５０ｇ 小麦粉　５０ｇ 熱湯　５０ｇ 水　５０ｇ ボール
２０分	のばす	○練り上がったら丸くまとめ、うち粉をまいてそばの玉を置き、平らにしてから麺棒を使って延ばす。	○なるべく平らに丸くなるように延ばす。 ○形がくずれてきたらスタッフも手伝う。	うち粉 麺棒
２０分	切る	○うち粉をふってから折りたたむ。 ○たたんだ麺を、まな板にのせ２㎜位に切る。	○ゆっくりと、最後まで切る。 ○スタッフも一緒につきそい、安全に配慮する。	麺を切る補助具
２０分	ゆでる	○沸騰した湯に麺をバラバラと振り入れ、静かにハシでかきまぜる。さし水を入れ、ゆで上がったら冷水に入れ、ザルに上げる。	○ゆで上げるのは基本的にスタッフが行うが、さし水を入れたり、冷水からザルに上げたり、盛り付けることは子どもたちが行う。	なべ ザル
２０分	味わう	○テーブルに持ち込み、みんなで自分の作ったそばを食べて味わう。 ○友達と食べ合って出来具合を話し合う。	○うまくいった点や難しかった所などを話し合ったりしながら手作り麺のおいしさを味わう。	麺つゆ
１０分	修了式	○無事修了し、手作りの麺が出来たこと、栄誉を称える。	○家庭に戻っても、機会があれば自分で作ってみることを勧めてみる。	修了証書

そば作り名人になろう

池田　貴信（大学院　２年）

１．講座設定の理由

長野県と言えば、そば、リンゴ、野沢菜など全国的にも有名な特産品を産出している。高冷地でなかなか米が作れないので、山深い土地の人々はそばや、おやきなどを常食していた歴史的背景がある。修験道の山で知られる戸隠に最初にそばが入って来たのは千年前に学問行者が持って来たと伝えられている。水や湯でといただけで食べられるので携帯食として使われていた。長い間、そばの実を団子のように丸めたり、平たく延ばしてやいて食べていたようだが、江戸時代に「しなのや」というそば屋が現在のように細く切って汁につけて売ったのが大ヒットして現在に伝わったそうである。

おばあさんたちの中には日常的におやきを作っていたり、そばを作ることができる人がかなりおられますが、世代を経るごとに出来る人は少なくなっている。他の多くの伝統と同じようにそば作りも一般家庭ではほとんど見られなくなりつつある。手打ちにすると手間は多少かかるが、機械で延ばした麺よりはるかに強い、腰のあるそばになる。そばを作りながら子どもたちに「自分にも出来るんだ」という成就感を持ち、できあがったそばをおいしく味わってもらえることを目的にこの講座を開こうと思い立った。

２．目標

そば粉をこねたり、薄く延ばして切り、ゆでたりしながら、そばをおいしく食べることを通して長野県の伝統的な食習慣を理解し、手作りのそばのよさが体験出来る。

３．展開

こねる：ボールにそば粉を入れ、熱湯を注ぎながら箸でかきまぜた。小麦粉と水を入れてよくかきまぜた。全体を玉にまとめよくこねた。まとまってから２００回以上。
熱湯を注ぐ際はスタッフと一緒に行い、安全を確認した。こね方は焦らずにゆっくりと力強く行った。子どもたちの額にはちょっと汗も。

延ばす：こねる作業が終わったら丸くまとめ、打ち粉をまいて綿棒を使って平らに延ばした。なるべく円形に均一に延ばす。約２㎜ぐらい。
形が崩れて来たらスタッフも手伝った。
切る：打ち粉をふってからおりたたむ。まないたに乗せ、麺を切る補助具として木の板をのせた。ゆっくりとひとすじひとすじ確実に切って行く。スタッフも一緒に付き添い、安全に配慮した。子どもたちにとっては細く切ることが難しそうだった。
ゆでる：沸騰した湯に麺をほぐしながら入れ、静かにかきまぜた。一度沸き上がったら差し水を入れ、再度沸き上がったらザルに取り、冷水にさらした。湯で時間は２～３分。湯で上げるのは基本的にスタッフが行うが、さし水を入れたり、冷水からザルに上げたり盛り付けることは子どもたちが行った。
味わう：すのこに盛り、テーブルに出してみんなで自分たちの作ったそばを食べて味わう。友達と食べあって、出来具合を話し合ってみた。うまくいった点や難しかった所などを話し合ったりしながら手作り麺のおいしさを味わった。
修了式：無事終了し、手作りのそばを作ることが出来た栄誉をたたえた。余りをお土産に持って家族に食べてもらった。
工夫した点：そば粉と地粉（強力粉）の割合は４：１で混ぜたので、そば本来の風味が増

し、延ばすことも平易にできたと思う。切るときの補助具は木切れを厚さ3㎜縦横5×4㎝に切った木っ端を使った。切る面にあわせてうまく太さを均一にすることが出来た。

4．子どもたちの様子

調理台の高さが子どもにとって高かったので、とくにこねる過程ではうまく力が伝えられないので苦労していたように見えた。のし棒を使って広げる過程ではころころ転がしながら楽しく延ばしていた。切る過程では皆きちょうめんに一本ずつ切っていた。できあがって食べているときや修了式後お土産を持って帰って行くときは嬉しそうな表情をしていた。

5．反省

道具の面では、そばきり包丁がないために普通の包丁を使ったところ、切る長さが制限されてしまい、長い麺が出来にくく、若干短い麺になったがこれは何事も差し支えなかったようだった。今回はざるそばだけで賞味したのだが、余裕があれば暖かいかけ汁なども用意して、各自好きな具を入れられるようにしていれば多彩な味わい方を堪能出来ると思った。

不思議な化学実験をやってみよう

石井寛子・田中栄司・坂野和久（理科教育・大学院１年）
漆戸邦夫（理科教官）

１．本講座のねらい

近年、学校教育現場における「理科離れ」が取りざたされている。安全が考慮され、実験・観察を多く取り入れた「理科」の授業であれば「理科嫌い」など多くなるはずがないと思われる。

高校の「化学」の授業も限られた授業時間数の関係で、じっくり腰を据えて多くの化学実験に取り組むことができないのが現状である。

そこで、高校生に、不思議で楽しい化学実験を思う存分できる場を提供することにした。

一人でも多くの高校生に化学のおもしろさを知ってもらい、将来理科教師をめざす人が出るならば、近い将来「理科離れ」も解消に向かうことが期待される。

２．講座の内容

８テーマを、３時間かけ、参加者全員が全テーマを自分で実際に薬品や器具に触れながら、不思議な化学変化を肌で感じてもらい、化学実験の醍醐味を味わってもらう。

１）　赤い字・青い字　：　画用紙にＡ液とＢ液を塗り分け、Ｃ液をつけた絵筆で文字や絵をその上にかくと、不思議なことにＡ液を塗ったところは赤色に、Ｂ液を塗ってあったところは青色になる。これは、Fe^{3+}イオンにSCN^{-}あるいは、$[Fe(CN)_6]^{4-}$イオンが配位した錯イオンの色である。

２）　振動反応　：　無色の水溶液が次第に金色になり、次に一瞬のうちに暗紫色となる。この色の変化が数分間の間隔で数回繰り返し起こって反応が終わる。過酸化水素水、ヨウ素酸カリウム、濃硫酸、デンプン、マロン酸、硫酸マンガン（Ⅱ）を使用する。このような振動反応のくわしい機構はよくわかっていない。

３）　時計反応　：　反応試薬を混合して、ある時間経過したあとに突然生成物が現れるような反応を時計反応という。

（Ａ）無機時計反応：ヨウ素デンプン反応による呈色反応を利用する。チオ硫酸イオンの量を変えると呈色するまでの時間を任意に変えることもできる。したがって、呈色する時間を予告することができる。

（Ｂ）有機時計反応：ホルマリン、亜硫酸水素ナトリウム、亜硫酸ナトリウム、フェノールフタレインを用いる。ある時間が過ぎると、突然赤色にかわる。呈色するまでの時間を変えられる。

４）　スライム　：　合成洗濯のり（ポリビニルアルコール）とホウ砂を反応させ、食用色素で好みの色をつける。世にも不思議な物質ができる。幼児や小学生が作っても、中学生や高校生が作っても、また大学生や大人が作っても、皆同じように眼を輝かせて取り組む不思議な反応である。ポリ袋に詰め乾かぬようにして冷凍庫や冷蔵庫に入れておけば、保冷剤や水まくらに使える。不用になったらポリ袋から出し、乾燥後消却するか土の中に埋めれば水溶性のため微生物により分解される。

5）　火で書く文字　：　硝酸カリウム水溶液をつけた筆で紙に文字を書き、ドライヤーで乾かす。線香でその文字の一点に火をつけると、筆で書いた部分だけが不思議なことに燃え落ちて、文字が浮かび出る。花火に使う硝酸カリウムの高燃焼性を利用したものである。

6）　色の消える液体　：　青いメチレンブルーがしばらくすると無色になる。その溶液の入った三角フラスコを振りまぜるとまた青色に戻る。この反応は半日位繰り返すことができる。これは、青い色素メチレンブルーが酸化還元反応を受けるのである。ブドウ糖の還元反応を利用して青色から無色に、空気中の酸素の酸化反応を利用して無色から青色に変化する。

7）　爆発　：　小学校の理科の実験における爆発事故は、水素の発生実験、過酸化水素を使った酸素発生実験やアルコールランプの爆発などがある。安全さえきちんと確認すればこんなに楽しい実験はない。今回行った実験の中では、最も人気の高い実験であった。また、プロパンガスによる爆発の原理やその恐ろしさも知ることができる。

爆鳴気：水素と酸素を２：１に反応瓶に混合し点火する。大音響とともに爆発する。手のひらに石鹸液をぬり、そこにこの混合気体を吹き込むと手のひらの上にシャボン玉ができる。これに点火すると爆発する。

爆発：ジュースの空き缶に薬包紙でふたをし輪ゴムで固定する。缶の下部に小さい穴をあけ、アルコール１～２滴を滴下する。マッチで火をつける。爆発し薬包紙がふき飛ぶ。ガス爆発の原理である。

8）水や二酸化炭素の中で物は燃えるか？　：　マグネシウムは、二酸化炭素の中でも、水の中でも激しく燃える。

二酸化炭素の中では、燃えてＭｇＯ（白色）とＣ（黒色）になる。水中では、ＭｇＯができ、フェノールフタレインを落とすと赤くなる。

3．高校生の反応

長野県下１１高校から３９名（１年生１７名、２年生９名、３年生１３名）が参加した。実験の原理まで教えてもらえたので実験の内容が理解でき充実した化学実験ができた。大学の実験室で大学の先生や大学院生に指導を受けられたことや、県下の多くの高校生と一緒に実験ができたこと、高校の化学の授業ではやったことがない多くの実験ができ、３時間という休憩なしの化学実験は疲れたが、大変楽しく満足できた。このような企画は毎年行ってほしい。化学が好きになった。などが終了後のアンケートの内容であり大好評であった。

しかし、このための前日までの準備は大変な労力を必要とした。

4．反省と課題

今回目的とした、高校生に楽しい化学実験を思う存分してもらうことに関しては目的を達成することができたと思われる。

しかし、安全のために途中で休憩をとること、テーマの精選、内容の充実、実験指導法の改善、反応を説明する時間の確保など多くの問題点があることが明らかになった。来年に向けて検討したい。

金属の組織を見てみよう

小林　大士（技術専攻　4年）
浅輪　光男（ 同　　教官）
宮本由己雄（上田千曲高校非常勤講師）

1．はじめに

今回はじめて第6回YOU遊サタデーの講座開講に参加しました。参加の主な理由は単純ですが次の三つです。(1)学部を場とした地域との接触　(2) モノ・自然現象に興味を持つ生徒への題材提供　(3) 我々の自己研修　です。この講座のテーマは、日常身近にあり、よく利用している鋼製のナイフ、はさみ、包丁などの刃物の顕微鏡組織を観察することによってそれらへの理解を深め、生活に潤いを与えることです。とくに、自分自身が使ったものには興味が持てるのではないかと考えて、不用となった刃物を受講者に持参して貰うことにしました。

刃物の材料については、用途が広く使用量も極めて多い炭素鋼が一般的なものであり、受講生が持ってくる刃物も炭素鋼である可能性が大きい。従って、この炭素鋼を中心にこの講座の「金属のおはなし」を進めたい。

2．実践経過

他の講座より遅れて開講の申し込みをしましたが、センターには快く応じていただき、感謝しております。また、センターではマスコミや各学校に広報して、受講者確保のご努力をしていただきましたので、定員四名に対し受講者は一名でしたが休講をしなくて済みました。午前・午後を通した一日のややハードなコースであること、作業服着用と刃物持参（それも、刃物を数種類例示しましたが、後述のようにどうやらそれらを全部持参しないといけないように受けとられたようです。）としたことも受講者が少なかった原因のようです。（陰の声：キャプテンが何もしなかったことが一番いけない！）
なお、受講生は普通高校一年生でした。

また、キャプテンには標記二名のほかに上田千曲高校機械科の宮本由己雄先生も参加され、早朝から熱心に受講生と本学部学生とを指導していただきました。また、YOU遊サタデーのアシスタント役で技術専攻の学生達が開講時前より刃物の熱処理に使う電気炉の昇温調整等にも汗を流しました。とにかく難しい理論は抜きにして、楽しくやることをモットーにしました。

午前は「金属のおはなし」（小林担当）、金属のかたさ試験、火花試験、熱処理、金属組織検鏡用試片の採取および同試片の埋込み樹脂への埋め込みまでです。ここで樹脂の硬化を待つため、多少早めの昼食を生協食堂にてみんなでとりました。

なお、受講生の持参した刃物は、切出しナイフ・ステンレス鋼のナイフ・鎌（異なる種類の鋼を圧着した二層の刃を持つ。）の三種類もありました。せっかく持参されたのですから、欲張ってそれらをキャプテン・アシスタントも手分けして全部見ることにしました。

午後は、埋め込んだ試料のエメリー紙研磨・バフ研磨・組織現出のための研磨面の腐食等を順次行い、組織観察に移った。しかし、終了予定時刻が迫ってきたので、大切な組織観察の時間は十分でなかったが、一応一通りのことはできました。

受講生も頑張りましたが、我々も一緒になって作業を手伝いました。また、時間待ちの間には宮本先生がご自身で持参された転造ねじ・切削ねじ断面の繊維組織の資料や他の金属組織の写真の説明をして下さいました。更に、技術科の研究室、実習室をまわりパソコンネットワークや、木材加工など、受講生の抱く疑問に答えることによって、信州大学教育学部の技術科に理解を示してもらえてよかったと思います。

そして、実験室内での記念撮影でこの講座は終わりました。

後日、組織の撮影、フィルムの現像、印画紙焼付けをほかの学生と一緒に行いました。そして、組織写真、写真フィルムネガ、使った試料さらに宮本キャプテンからいただいた火花試験などの見事な写真を、説明を付けて受講生に提供しました。・・・・撮影などの失敗もあり、フィルムの現像から写真の完成までにまる二日もかかってしまいました。しかし、そのおかげで宮本先生のご感想では、迫力満点の写真が出来ました。

3．おわりに

土井先生をはじめとするセンターのお膳立てをいただきこの講座を開講しましたが、上記のような反省点が残りました。しかし、所期の三つの目標にはかなり近づいたと考えております。

講座が終わった後、受講生が「楽しかった。」と感想を話してくれたことが、この講座のまとめであろうかと思います。また、高校より参加された宮本キャプテンには、来年も開講するならばまた参加したい、と言われて意欲を示していただいております。（来年はどうしようかな？）

最後に、センター関係者やアシスタントの学生に感謝したいと思います。

第（7）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	マウンテンバイクを整備しよう	平成7年 10月 28日(土)（午後）
キャプテン名	松永　泰幸（数学専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　1　名 参加者数　1　名
指導教官名	浅輪　光男　教官　伊藤　武廣　教官	活動場所　外

講座のねらい

マウンテンバイクをもつ子どもを対象にして、自分の自転車をメンテナンスすることを通して、自転車の工具に興味を持ち、できれば他のメンテナンスもできるようになり、自転車を楽しめるようになること。

講座の展開

時間	過程	活動内容	指導	材料・教材
20 分	導入・説明	・自己紹介・自動車紹介 ・整備の目的・内容の説明 ・自転車工具の説明	・整備内容は ・チェーンに油をさす ・パンク修理 の２つをやる。目的は ・整備後の自転車の爽快感 ・工具の使い方 を得る点にあることを伝える ・工具の名前と使い方を教える	自転車概図 工具
50 分	整備	・パンク修理 一回目は針金で穴を自分であけて修理する。 二回目は針であけた穴を探して修理する。	・最初にやって見せる ・子ども１人に対し指導者を一名付ける ◎パッチをはがすところが難しい。→うまくいかない子は切り込み入りのパッチを使う ・穴にマジックで印を付ける ◎タイヤの脱着 ・クイックレリースの脱着 ◎タイヤのつけはめ ・チューブを切らないように注意する。 ・力がうまくかからないときは手伝う。	プール 針金 セメント パッチ マジック 切り込み付きパッチ 布 空気入れ プラスチック製タイヤ外し 布
10 分		・自転みがき 布・ワックスを用いてみがく。	◎布がからまぬように注意する	
10 分	片付け	・手を洗い、集合して証書を渡す。	・手は爪まできれいに洗う。	洗剤
	証書授与			

マウンテンバイクを整備しよう

松永　泰幸（数学専攻　４年）

１．講座開設の理由

自転車は身近にある乗り物であるにもかかわらず、その整備方法や適切なポジションの決め方、乗り方を知っている人は少ない。また、移動手段として用いられることが主で、サイクリングやマウンテンバイクの楽しい乗りこなしといった遊ぶために自転車に乗るという人もまだ多くはない。そこで、自転車で遊ぶことの楽しさを伝えられないかと考え、自転車についての講座を開設しようと考えた。最初はサイクリングに行くことを考えたが、大学構外では安全確保が難しいので、断念した。また、マウンテンバイクを色々と乗りこなして遊ぼうかと考えたが、安全でかつ楽しい遊びを考えられなかったので、これも断念した。そこで、自分の自転車を工具を用いていじってみることで、自転車に対する興味を持ち、自転車で遊ぶようになってもらいたいと考え、この講座を開設した。

２．講座のねらい

「マウンテンバイクを持つ人を対象として、自分の自転車をメンテナンスすることを通して、自転車に興味を持ち、できれば他のメンテナンスをするようになったり、自転車で遊ぶＹＯＵになって欲しい。」という願いのもと、プランを考えた。

３．この講座で追求しようとした自己課題

○子どもがどの程度工具を使いこなせるか、どれくらいの整備ができるかを知る。

○工具を使うことは楽しい、と思える動機づけができる講座内容はどうしたらいいかを考え、子どもの興味が自転車に対して深まるようにできたかどうかを分析する。

４．素材研究

この講座では以下のことを行おうと考えた。

○パンク修理

○タイヤの脱着

○自転車みがき

○チェーンの油差し

全てに共通して、日頃見慣れない特殊な専用工具にふれる、という目的を持たせた

・普通の自転車でパンク修理をしたところ、前後輪外すにはかなり力がいるということと、組み立て、調整が難しいことがわかった。また、油差しもカバー付きの自転車では難しかった。マウンテンバイクなら普通の自転車に比べて簡単に行えるので、マウンテンバイクをもつ子どもを対象とした。

・準備したもの

プール、針金（直径約３ｍｍ）、ゴムのり、パッチ（中）１０枚、画鋲、布、空気入れ（メーター付き）、プラスチック製タイヤ外し６本、洗剤、チェーン油（５５－６、チェーンルブ、パラフィン油、スピンドル油）油性ペン、箱、マウンテンバイク（錆びついてパンクしているもの１台）

・パンク修理の方法

①前輪をフレームから外す

②タイヤを外す

－○ネジ、バルブ等の細かいものを無くさないように置き箱にいれる。

○工具はそろえて置き、使ったらもとに戻す。
○タイヤ外しを多く用いて、外しやすくする。ヘラを滑らせて外さないようにする

③チューブを引っぱり出す

④針金で穴をあける

針、画鋲で穴をあけたところ、見つけにくかった。針金の穴が丁度良かった。

⑤プールの水で穴を探す

穴の場所に油性ペンで印をつけておく

⑥ゴムのりをつける

充分に乾かせばしっかりとくっつくので、急いでやらない

⑦パッチを貼る

パッチのシールを画鋲でひっかくとはがしやすい

⑧よくこすり、パッチに土をつける

⑨タイヤにチューブをいれ、チューブをリムにはめる

⑩空気を少し入れ、タイヤをはめる

○ネジはつけないでおく
○最初にバルブのところをはめてしまう
○必要に応じてべらをつかう

⑪空気を抜いてネジをつけ、空気を適正気圧までいれる

・タイヤの脱着

クイックレリースの脱着をやる。二人でやった後一人でやってみる

前輪：二人のときは一人が車体にまたがってハンドルの引き下げを行う
一人のときは自転車の正面からタイヤをまたぎ、足でタイヤをまたぎながらハンドルの引き下げを行う

後輪：二人のときは一人がサドルを持って車体の引き下げを行う
一人のときは車体を寝かせた状態のときにあらかじめチェーンの輪の中に後輪を通してからサドルとタイヤを持ち上げて、装着する

・自転車みがき

布で拭く

・チェーンの油差し

○油の違いをさわって感じる
○５５－６、チェーンルブのような噴射タイプの油差しは、リムに油がつかないように油をさす
○ペダルを回しながらふくと布がギア板にからまり手を切る危険があるので、ゆっくり丁寧にふく。

５．講座の様子と自己課題の評価

・参加者一名

・工具の説明－５分
パンク修理－５０分
チェーンの油差し－１５分

タイヤの脱着－５分
片づけ、証書渡し－５分

・参加者のマウンテンバイクはクイックレリースではなかったので、準備したマウンテンバイクでパンク修理、タイヤの脱着を行った。
・計画ではパンク修理は２回はできると予想していたので、一度目は穴の見つけやすい針金で行い、二度目は針でやってみたら面白いかと考えていたが、一度で時間が終わってしまった。

（評価）

・プラモデルづくりが趣味ということで、工具の使いこなしの程度はかなり良かった。一番力のかかるタイヤ外しもできるだけの力もあった。小学校高学年対象で良かったと思う。
・参加者に「今度自転車で親戚の家に行く」という目標があったことと、プラモデルが好きというよう機械いじりに対する興味があったので、楽しそうに工具を用いていた。

６．反省

・今回上限を１０名にし、スタッフとしてサイクリングクラブの仲間に声をかけておき、参加者に対して一対一で行うことを予定していた。今回一対一で実際に行ってみて、大勢の参加者を相手にする場合を考えてみると、工具さえあれば何人でもかまわないと思う。最初からパンク修理だけを講座名に掲げて、工具持参もしくは購入してもらい参加者を募ってもいいかもしれない。
・対象者は小学校高学年以上が適当だと思う。また、保護者の参加や大人の参加者が会っても面白いと思う。
・タイトルを「整備しよう」とせず、「自転車をいじりまくろう」とか「これで安心自転車パンク修理」といったように、（面白そうなタイトルを自分は思いつかないが）なにか楽しめそうなものに工夫した方が、参加者が増えると思う。

第（７）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	宝探しをしよう	平成7年　10月　28日(土) （午後）
キャプテン名	丹羽　則之（技術専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　2　名 参加者数　10　名
指導教官名	嵩　哲夫　教官	活動場所　61番教室

講座のねらい

方位磁石の使い方や歩測の仕方を覚え、実際にそれらを生かし、宝探しをすることを通してオリエンテーリングの楽しさや、屋外で工夫して遊ぶ楽しさを知ることができる。

講座の展開

時間	子どもたちの活動	キャプテン・スタッフのかかわり	教　材
10分	・自己紹介をする。 学校・学年・名前を自己紹介する。	・キャプテン・スタッフ・子どもの順で自己紹介し子どもの緊張をほぐし、和やかな雰囲気作りを心がける。	
15分	・方位磁石の使い方を知る。 ・方位の呼び方、磁石の使い方を覚える。	・方位磁石を配布し、方位の呼び方を子どもたちに尋ねながら確認し、磁石を使う際の注意事項を伝える。	・方位磁石
15分	・自分の歩幅を知る。 ・１０ｍを何歩で歩いたかを数え、自分の歩幅を知る。	・１０ｍで歩測をさせて、自分の歩幅を覚えさせる ・４、５回測らせて、できるだけ誤差を少なくさせる。 ・大股で歩いたりせず、ふつうに歩くように注意する。	・歩幅のプリント ・巻き尺
60分	・実際に宝探しをする。 ・１度全員で練習をしてみる。 ・その後、各自で宝探しコースに挑戦する。	・宝探しのルール説明をし、コースのプリントを配布する。 ・練習コースを全員で移動しながら、詳しい説明をする。 ・わからなくなったら、チェックポイントまで戻るようにさせる。 ・できるだけ独力でやらせるようにし、必要に応じてアドバイスをする。	・コースのプリント ・方位磁石 ・計算機 ・宝物
20分	・修了証をもらう。 ・アンケートカードに感想を書き、修了証をもらう。	・アンケートのプリントを配布し、感想を書いてもらう。 ・方位磁石を回収し、修了証を配布する。 ・時間があるようなら、アンケートのプリントを集める際、感想を発表してもらう。	・アンケートのプリント ・修了証

磁石で探検しよう（宝探しをしよう）

丹羽　則之（技術専攻　4年）

1．講座づくりの着想とねらい

前回、平成6年の１１月に行われたYOU遊サタデーに半日ではあったが、スタッフとして参加し、教育実習の時に子ども達と接していたときの楽しさを思い出した。そして、今回は参加してくれる子ども達と、もっと深くかかわりたい、いっしょに楽しみたいと思い、自分でキャプテンとして講座を開こうと考えた。

そこで講座内容をどんなものにしようかと考えたとき、自分の子どもの頃といまの子どもの達を比較してみると、夕方などに屋外で遊んでいる子どもの姿というのをあまり見かけなくなったと常々感じていたので、まず屋外でできるものにしようと考えた。さらに自分が子どもの頃、子ども会の行事やボーイスカウトで経験したことを生かし、子ども達が自分達でも楽しめるような講座にしようと様々な案が思い浮かんだのだが、土井先生とも相談し、安全面を考慮し、オリエンテーリングを分かりやすくアレンジし、探検という形をとり、「磁石で探検しよう」という講座にすることにした。

さらに、１度講座を行ってみての反省点などを含め、せっかく広い松本キャンパスで行うという事なので、オリエンテーリングを利用しながらも、オリエンテーリングだけに捕らわれず、また子どもの興味を引きつける講座名にしようと思い「宝探しをしよう」という講座名にした。

2．子ども達への対応、指導について

まず５月の募集の際に、一応、探検という形で分かりやすくアレンジしたといってもオリエンテーリングを基礎としているので方角の知識や方位磁石の使い方などの事や、スタッフの人数などを考慮に入れて、小学校４年生以上１０人以内で講座を開きたいと思った。しかし、３年生が二人参加したいとのことで、一人は母親、もう一人は、５年生の姉と一緒に参加するとのことで、スタッフが注意して付き添えば大丈夫であろうと判断した。

さらにコースを作成する際にもこの二人の３年生のことを念頭に置き、できるだけ分かりやすいコース作りを心掛けた。また、実際コースを回るときにも個人作業となるので、この二人にできるだけ付き添ってコースを回ろうと考えていた。

しかし、子ども達の方角に対する知識不足が自分の想像以上だったり、歩測の計算に手間取ったりし、その二人だけに注意を払ってばかりいられない状況となってしまった。その際に、スタッフとして参加してくれていた、荒川君、中村君の二人とも臨機応変に対応し、子ども達にうまく付き添ってくれ、３年生の二人以外にも戸惑っている子ども達に適切なアドバイスをしてくれ、全員無事にゴールまでたどり着いたことはよかったと思う。

次に１０月に松本で行う際には、５月の段階での反省点を生かし、募集に際してはできるだけ低学年の方は遠慮していただくようにお願いし、またコース作りに関しても中村君に全面的に協力をお願いし、広い松本キャンパスを有効に利用したコース作りにしようと考えた。

さらに、チェックポイントを多数作ってそこから次のスタート地点への指示を出すことにし、途中で分からなくなってもそのスタート地点へと戻ればいいように配慮をした。広いキャンパスで長いコースで行ったのだが前回と同じキャプテンと、アシスタントスタッ

フ二人という人員構成でも対応できたので、このチェックポイントを多数作ったのはよかったと思う。さらに、コースの最後に暗号文を作っておいたのも子ども達に意外と好評であった。しかし、広すぎたりコースが長すぎたせいもあってか、一人の女の子が途中で迷ってしまい、それにスタッフ全員が気づかず、全員がゴールしてから自分も気づいたのが最大の失敗で、もっと周囲全体への配慮が必要だったと痛感した。

しかし、当日参加で参加してくれた2年生の女の子もスタッフの中村薫さんのおかげもあってゴールでき、また何人かのグループになって進んでいたのも前回にはない傾向であったがそれがよい方向へ向かい、ほとんどの子どもが長いコースを途中で飽きることなくゴールできた理由ではないかと思う。

3．自己目標・自己課題

今回、この講座でねらいとした、子ども達にオリエンテーリングの楽しさや屋外で工夫して遊ぶ楽しみというのを伝えられたかを考えると全部分で達成できたと思う。それはアシスタントスタッフの助けによるところが大きく、１０月の松本キャンパスの時のように１人の子どもが迷っているのが分からなかったという一歩間違えば事故になっていたかもしれないという事態を起こし、土井先生始め、本部スタッフのみなさまにも迷惑をかけてしまった。もっと周囲全体を見渡せる目と心のゆとりを持つことがこれからの自己課題であると思うし、そのためには、アシスタントスタッフとの事前の打ち合わせをもっと充分に行う必要があると思った。

4．反省

方角の知識があまりない子ども達にオリエンテーリングの楽しさが充分伝わったかどうかよく分からないが、今回参加してくれた子ども達が、本物のオリエンテーリングと出会ったときに今日のことを思い出してくれれば、この講座は成功と言えるのではないかと思う。２回とも講座の終了前に自分で作成したアンケート用紙に感想などを書いてもらったが、難しいと感じたのは方位磁石の使い方で、楽しいと感じたのはゴールしたことという答えが多かった。そこから考えると、もっと分かりやすいコースで使いやすい方位磁石を使って行えばよかったと思うが、今回使用した方位磁石でもうまく使える方法を考えついたのが１０月の松本の講座の途中だったというのが、素材の研究不足だったと反省している。

また、事前の打ち合わせもあまりしなかったのに、惜しみない協力をして下さったアシスタントスタッフの荒川君、中村薫さん、特に松本でコース作成にも協力してくれた中村典史君にこの場を借りて感謝します。

この講座を行ってみて、教育実習で感じた子どもとふれあう楽しさを改めて感じた。さらに、様々な学年の子どもを相手にすることの難しさも感じた。機会があればまたこのような講座を開いてみたいと思う。ただ、松本キャンパスでの途中で迷った１人の子のことを考えると不満な点もあるが、その子が次の機会にも参加したいと言ってくれたとのことを聞いて多少安心した。しかし、その子の母親に言われた、「チェックポイントがたくさんあるのに途中で人員の確認はしなかったのか」という言葉を肝に銘じて、これからは安全面には特に気をつけていきたいと思った。

第（４）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	大なわとび	平成７年　５月　２７日(土) （午前）
キャプテン名	浦山　洋美　（保健体育専攻　４年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　７　名 参加者数　２２　名
指導教官名	渡辺　伸　教官	活動場所　体育館

講座のねらい

長いロープを使って、ロープをくぐったり、とんだりするタイミングを練習することを通して、直行とび、屈折とびができ、連続して三角とびのできる楽しさを味わうことができる。

講座の展開

時間	過程	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導	教材
１０分	準備	準備運動	・大きな声で ・特にひざ、こし、足、足首について念入りに準備運動をさせる	
３０分	導	大縄跳びをする ○２チームで競争する ○遮断機 	・縄の持ち手は、はげしく床にたたきつけないように注意させる ☆（１人ずつばらばらに、数回 ２３人連続で）	大なわとびのロープ
	入	○「かぶり縄」くぐり抜け 	・くぐったらまわし手のすぐ近くを抜けていく感じで。できたら拍手をしてほめてあげよう ☆（　〃　）	
		○揺り縄向かえ跳び 	・縄が自分の方に来た時に跳ぶ ・大波小波の要領と同じ ☆（　〃　）	
		○「向かえ縄」直交跳び 	・入るタイミングがつかめない子にリズムをとったりして声がけをする ☆（　〃　）	

		○かぶり縄屈折跳び ○かぶり縄屈折跳び（逆方向から跳ぶ） 	・スタッフが先頭でやってみる ・直行とびにならないよう、浅くはいること ☆（　　〃　　） ・体育館の線を目印にして、出てくる方向を覚える ・跳んだ後６０°ぐらいに出てくる	
１０分		休憩	ジュースを買ってきて飲む	
５０分	展 開	○大学生のデモンストレーションを見る ○屈折跳び ○屈折跳び連続Ⅰ ○屈折跳び連続Ⅱ ○屈折跳び－かぶり縄くぐり抜け 	・スタッフが３方向から三角形に入り、一周で交替する ・導入での復習をやる かぶり縄屈折とびを両方向から ☆（２３人連続で） ・はじめの縄で奥に入りすぎないよう、浅くとぶように注意する ・次の縄をとぶ心構え ☆（１人ずつばらばらに、数回 ２３人連続で） ・まわし手は、できるだけゆっくりとびやすいようにタイミングを合わせてあげよう ・回転しながらとぶ。あまり大きく遠まわりをしないように ☆（　　〃　　） ・最後のくぐり抜けの時、足にひっかからないように注意する ☆（　　〃　　）	

		○向かえ縄直交跳び－かぶり縄屈折跳び ○向かえ縄直交跳び－かぶり縄屈折跳び－かぶり縄くぐり抜け 	・２つの縄をとんだ後、出てくる方向にスタッフが立つ ☆（　　〃　　） ・２本目の縄で奥に入りすぎないように、勢いを次の縄をとぶ方向転換へとつなげてゆく ・できるだけ小さい三角形を描くようにする ☆（　　〃　　）	
２０分	ま と め	○前の跳び方で３方から同時に３人入って跳ぶ ○大学生と一緒に連続跳び 	・前の練習と同じように跳ぶ ・ひっかかると次の人が跳びにくくなるので、慎重に跳ぶ ・３人１組で数回跳ぶ ・１、２、３、ハイのかけ声は元気に大きな声で ・ひっかかってしまった子どもには常に声がけし、励ます ・入るタイミングに注意する ・スタッフ中心にもり上げる	

第（５）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	トランポリン	平成7年5月27日（土）（午　後）
キャプテン名	金森　晴彦（保健体育専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　6　名 参加者数　16　名
指導教官名	渡辺　伸　教官	活動場所　体育館

講座のねらい　トランポリンという普段の体育ではなかなか体験することのできない道具を使うことを通して、簡単に高く跳び上がることができる楽しさや気持ちの良さに気付き、その中で思い通りに体を操ることができるようになる。

講座の展開

時間	子どもたちの学習内容	キャプテンの学習指導
10	準備運動をする。 ・基本的な運動及びストレッチ。 ・体をＶ字にたたんで転がる。 ・ペアになり、１人がブリッジをしもう１人がその下をくぐるなど	・大きな声で。 ・スタッフが子ども達に混ざってスムーズに進める。 ・キャプテンの言った事以外はやらないように約束する。
45	エバーマットやトランポリンの感触に慣れる。 ・とび箱からエバーマットにとび下りる。 ・とび箱からエバーマットに尻から下りる。 ・とび箱からエバーマットに四つんばいで下りる。（各落差は30cm位） 図１のようなセットを作り、いろいろなとび方をしてみる。 ・自由にとんでみる。 ・トランポリンに両足で下り、両足で跳ぶ。 ・エバーマットを高くしてみる。 図２のようなセットを作り、いろいろなとび方をしてみる。 ・とび箱からトランポリンにとび下りて、エバーマットで前転、倒立前転、側転してみる。（できる子だけ） ～ここまでの様子を見て、自力でどんどんとべる子とそうでない子の２班に分ける～ 図２のセットで、エバーマットを高くしてとんでみる。 ・半分ひねってマットにすわってみる。 ・半分ひねってマットに背中から落ちてみる。	・セッティングをスタッフ全員で手際良く行う。 ・着地で子どもが回りすぎないように常に補助者がつく。 ・安全面に充分配慮する。 ～図１～ ・トランポリンの足とエバーマットの手を同時に着くように指示する ～図２～
5	～休憩～	・回りすぎないように補助者をつける。
30	図２のセットで後ろ向きでとんでみる。 ・エバーマットにお尻・背中から落ちる。 ・背中から落ちて、そのままでんぐりがえってみる。 ～宙返りを示範して、子どもに意識づけをする～ 図３のセットからでんぐりがえって下りてみる。（後方）	・トランポリン上でのとび方を指導 ・回りすぎて頭から落ちることのないように補助者をつける。 ～図３～ ・しっかり補助する。 ・自力でできる子にも補助をつける
30	・もう一度図２のセットにもどし、エバーマットに背中から落ちてみる。 ・しばらくしたら、補助をつけて宙返りをしてみる。	・「１、２、３、」と声を出させて補助者との息を合わせる。 ・補助者は決して子どもから手を離さず、子どもの動きに合わせて移動する。 ・自力でできない子は、補助者が回してあげる。 ・自力でできる子にも、いつでも補助に入れるように構えている。

トランポリン

金森　晴彦（保健体育専攻４年）

１．授業づくりの着想とねらい

私たちが子どもだった頃の遊びの思い出といえば、おそらくほとんどの人が野球やサッカーあるいは縄跳びやゴム跳び、木登り、鬼ごっこといったものであろう。一日中体を動かして泥だらけになって家に帰ったという経験のある人も多いはずである。しかし、最近の子どもたちの遊びというものは大きく変わりつつある。テレビゲームに代表されるようにほとんど体を動かすことのない遊びが主流となっている。また、公園などの遊び場所も大人の手によって狭められたり、道路が整備され学校の周りでさえも危険な場所が増え、子どもたちはますます家の中へと追いやられる一方である。それとは裏腹に、様々な運動の感覚を身に付けることができるのもこの頃の年齢なのである。

今回のＹＯＵ遊サタデーでトランポリンを選んだのは、日常の生活の中ではまず体験することのできない感覚を体験させてあげたいという思いと、少しでもその体験から体を動かすことに楽しみや気持ちのよさなどを感じられるようになれればというねらいがあったからである。また、運動というものは個人個人の能力の差が浮き彫りにされてしまう性質がある。そのために子どもたちが、優越感や劣等感を直に感じてしまうことのないようにどのような指導ができるかが自分に対しての課題であった。

２．生徒指導について－体験的学習での児童・生徒への具体的な対応や考え方－

トランポリンと聞くだけで、少し運動が好きな子どもならば喜んで参加してくる。子ども自らがこの教材に興味や関心を持って接してくれるので、２時間という授業はさほど長くは感じなかった。むしろ少し物足りなさを感じたかも知れない。子どもたちにとっては自分の順番がまわってくるのが待ちどうしく、ほとんどの子がじっとしていられないという状況だった。しかし、それほどまでに興味を持ってくれているのだと思うと、教える側の私たちがなんだか申し訳なく思えてくる、そんな気持ちにさせられた。教育実習では、いかに導入部分を工夫するかがその１時間の授業の鍵になったのに、今回は完全にトランポリンが子どもの意識を引きつけていてくれた。

このような中で我々スタッフが気を付けたことは、子どもたちが自分なりに抱えている課題を少しでも克服・達成できたまさにその時に心から誉めてやれることである。決して他人と比較して優劣をつけないように心がけた。また、子どもたちが安心して跳ぶことができるように、安全面にも充分配慮した。何よりも、全ての子どもが本当に楽しかったという感想を持てるようにがんばった。

３．教職観について－教職への抱負－

理想の教師像というのはどうあるべきか、という問題を教育実習並びに今回のＹＯＵ遊サタデーが教えてくれた。教師は自分のすべき事を決して仕事だと割り切ってはいけないということである。子どもたちに何かをわからせたりできるようにさせることはもちろん大切であるが、それがいわゆるやっつけ仕事になってしまうと授業はとても機械的になる。そこには人間関係というものが存在しない。しかも、教師と子どもの間に主従関係が生じてしまい教師は絶対視されるようになってしまう。あくまでも教師と生徒は対等でなければならない。子どもたちは教師を見て成長し、また教師はその子どもを見て成長していく。互いが互いを写し合う鏡でなければならない。そうなれば、より人間的なつきあい方がで

きるようになり、互いに通じ合える心の拠り所が生まれるのだ。わかったとかできるようになったとかいうのはその後の問題ではないだろうか。

4．自己形成について－今回の講座の反省－

今回は、上で述べたような機械的な授業になってしまった。トランポリンという教材の性質上一度に大勢が楽しめるわけでもないし、また危険の多いものだったので多少子どもを縛り付けてしまうこともあった。しかし、子どもたちにとっては得るものがあったと思う。自分にもこんなことができるのかと感動する子もいれば、今度こそやってやるぞと負けん気になっている子もいた。また、今回はこちらで課題を与える方法をとったが、もう1時間もあれば子供たちのやりたいようにもやらせてやりたかった。子どもとしては、なぜこのような課題が与えられているのかわからずに何を最終目標にすればよいのかつかめない授業であったと思う。

今後は、子どもたちが授業の見通しを持てるように工夫して、子供たちのほうから授業に取り組めるようにするにはどうしたらよいかを考えていきたいと思う。

第（７）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講　座　名	アニマルダンス	平成7年　10月　28日(土) （午後）
キャプテン名	荻原　まゆ美　（音楽専攻　3年） 柳沢　久美　（音楽専攻　3年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　4　名 参加者数　5　名
指導教官名	大城　康宏　教官	活動場所　体育館

講座のねらい

自分のイメージした動物の様子を、メロディーやリズムにのって歌ったり踊ったりして楽しく自由に表現できる。

講座の展開

子どもたちの動き	キャプテン・スタッフの支援	時間	教材
1. 自己紹介 「ミッキーマウス・マーチ」	・表現しやすいよう、音楽や動きをつけて盛り上げる。	3	
2. 動物に関する歌を歌いながら、動物のまねをしたり踊ったりする。　ピアノ伴奏 ①「アイアイ」 ③「こぶたぬきつねこ」 ②「山の音楽家」 ④「ゆかいな牧場」 ・楽しく踊っている内になりきれるだろう	「動物さんのまねをして楽しく歌って踊ろう」 ・スタッフ・キャプテンは振り付けで踊り、子どもたちがまねて踊れるようにする。 ・１対１で対応し、子どもの表現が引き出されるようにする。	１７	ピアノ 歌詞の紙
3. サン・サーンスの「動物の謝肉祭」に合わせてまねして踊る。 ﾗｲｵﾝ～ﾆﾜﾄﾘ～ｶﾒ～ｿﾞｳ～ｻｶﾅ ～ﾈｺ～ﾄﾘ～ｻﾙ～ﾊｸﾁｮｳ	・スタッフ・キャプテンは、子どもたちがまねて踊れるよう、なりきって表現し、盛り上げる。 ・テープに編集しておく。	１８	テープ ＣＤ
4. ひと休み	・動物クッキーと飲み物を用意しておく。 ・気分を変えてコミュニケーションを計る。 ・疲れさせないよう注意する。	１７	
5. 聴こえてきた音楽から動物をイメージし自由に表現する。 ・とり、さる、ねこ、かめ ・さかな、らいおん、うさぎ、とり ・リズムに合わせて踊れるだろう。	・単純で動物の特徴をとらえた曲を作ってピアノで弾き、４枚ずつイラストを提示して選ばせる。 ・１回ごとに座らせる。 ・動物に変装して登場し、踊って見せ、踊らせて、誉める。	１８	ピアノ 変装
6. 自分のなりたい動物のお面を作る。	・お面の芯は作っておく。 ・難しいところは手伝う。 ・道具の扱いに注意させる。	２７	材料 道具
7.「今日はお祭り」の紙芝居を見る。	・ストーリーについてこれるように紙芝居を作っておく。 ・８で使う曲に合わせて読む。	３	テープ
8. お面の動物になりきり「今日はお祭り」と題して構成した曲に合わせて動物を表現する。 目覚め「朝」ｸﾞﾘｰｸﾞ～雨「ピーターと狼」ﾌﾟﾛｺﾌｨｴﾌ～雨あがり「春のうた」ﾒﾝﾃﾞﾙｽｿﾞｰﾝ～お祭りのはじまり「ウイリアム・テル」ﾛｯｼｰﾆ～動物たちのおどり(ﾋﾟｱﾉ) ～フィナーレ「動物の謝肉祭」ｻﾝｻｰﾝｽ～おやすみ「家路より」ﾄﾞﾎﾞﾙｻﾞｰｸ	・１人１人について同じ動物を表現する。 ・「動物たちのおどり」では自分の出番で踊り他の動物の出番は見る側にまわらせる。	２０	テープ
9. 修了証をもらう。	・読めるようにひらがなで書いておく。	１０	

アニマルダンス

荻原　まゆ美（音楽専攻　3年）

1．授業づくりの着想とねらい

教育学部にあがってきて、音楽科教育法の講義の中で初めて、最近では小学校の音楽の授業で身体表現が扱われていることを知った。私が経験してきた小学校の音楽は、年中行事のための歌や合奏、リコーダーをやったくらいしか記憶になかったため、私にとって身体表現は新しい分野であり、今後の広がりの可能性を感じさせられるとても興味深いものであった。私達の世代は、現在の教育よりも型にはまった教育を受けてきたように思う。現代の子どもが個性的に見えるのは、現代の方が個性を尊重されてきているからではないだろうか。身体表現を扱うことで、人の模倣でなく、自分なりに何かを表現し、それを認められるという経験を小さいうちからしておくと、大きくなってからも、自己表現・主張をすることに、それほど抵抗を感じずにできるようになるのではないだろうか。身体表現の大きなねらいはそこにあると思われるが、学校の授業とちがってＹＯＵ遊サタデーでは、初対面の人と、初めて行く場所で、初めて体験するということで、環境としては、抵抗を多く感じてしまう子どももいるかもしれないと考え、自己表現へのワンステップとして、「自分のイメージした動物の様子を、メロディやリズムにのって歌ったり、踊ったりして、楽しく自由に表現できる」というねらいを設定した。子ども達は「楽しかった」と言っていたので、その点では良かったと思うが、それがどういう楽しさだったのかは、わからない。「自由に」というのは、どうしても抜かせないポイントだったが、予想通り、とても難しかった。しかし、講座のはじめと終わりを比べれば、動きが大きくなったり、恥ずかしさがなくなったり、なりきれたりと、一人ひとりの収穫はあったのでは、と思う。

2．子どもたちの様子

やはり、すんなり動物になりきって入り込んでしまう子と、どう表現してよいかわからない子、恥ずかしさを感じてしまって表現できない子、さまざまであった。Ｙちゃんの場合、受け付け時から「ウーッ。」とうなり声をあげて、ねこになりきってしまっていた。この子がスタッフや他の子どもの不安を吹き飛ばしてくれたように思う。おかげで終わりまで、良い雰囲気の中で進めることができ、初めは戸惑いがちだった子も、終わりに向かうにつれて乗ってきて、良かったと思う。Ｍちゃんの場合は、Ｙちゃんと同じ４歳でも、恥ずかしいという意識が大きくて、初めはなかなかなりきれずにいたようだった。知っている歌なら振りを付けることを楽しみながら体を動かせて、入り込みやすいだろうと考え導入時に「アイアイ」などを歌って踊ることにしたのだが、歌は歌として歌うという意識が強かった彼女にとっては、かえって抵抗感を与えてしまったかもしれない。Ｒちゃんの場合は、全員で５人いた内３人は同じ幼稚園のお友だちで、かたまってしまって、もう１人は小さい男の子だったので、初めに疎外感を感じさせてしまったように思う。もっと一人ひとりの間にスタッフが入り込んでいけたら不安にさせずに済んだかもしれない。Ｋちゃんの場合は、最年少の３歳だったのでお母さんがつきっきりだった。初めは恥ずかしがっていてお母さんの陰にかくれていたりしたので、１人でおいていくのは無理だったかもしれないが、お母さんはこちらに迷惑をかけまいと、無理矢理手を持って絵を描かせたりしてしまい、「楽しく」というねらいとずれてきてしまったので、その辺の関わり方は難しいと感じた。

3．子どもへの関わり方と反省点

ある１つの動物になりきって、森の一日を表現してみたが、そのお話の内容にとらわれて、自分が今うさぎさんなんだという意識がうすれ気味だったように思う。また、ある動物としての表現ということになるとやはり動きも限られてきて、キャプテン・スタッフの模倣になってしまうことに問題を感じた。子どもたちがなるべく恥ずかしがらない環境を、ということで、こちら側から先に表現して見せてしまったので、大人の固まった概念を押しつけ、自由な表現の幅を狭めてしまったのではないかと思う。また、こちら側の疲れやノリの悪さを敏感に感じ取って不安になってしまった子もいるかもしれない。いろいろな子がいるので、個人に合った対応ができるようにと、スタッフ１人に対して子ども１～２人という担当を心がけたことが、全体の雰囲気に与えた影響は良いものだったのかどうか自信がない。また、体育館で音が拡がってしまったことは、集中力を欠く大きな原因だったように思う。

4．講座をやってみての感想と今後の課題

普段、子どもとふれあう機会がないので、子どもとふれあえたということがとてもうれしくて、やはり私はこういう方面に進みたいという気持ちを改めて確認できた。また、こういう場でしか実現できないだろうと思われる、マンツーマンに近いティーム・ティーチングを試みることができて、良い経験になった。変装グッズを作ったり、踊りを考えたり、音楽を作って編集したり、動物クッキーを焼いたり、紙芝居を作ったり、と準備はとても大変だったが、その分、今しかできないことをやったという充足感と、子どもが喜んでくれた感動を味わうことができたと思う。今後の課題としては、もっと表現に幅のある題材の追究と、初対面だからこそ、それを生かした、表現しやすい環境の研究が必要だと感じた。ここで勉強・経験したことを、今後の研究・実践に生かしていきたいと思う。

第（７）回信大ＹＯＵ遊サタデー遊学プラン

講座名	親子でバドミントン	平成7年 10月 28日(土) （午後）
キャプテン名	小坂　和　（社会専攻　4年）	ｱｼｽﾀﾝﾄｽﾀｯﾌ数　5　名 参加者数　5組10　名
指導教官名	井出　嘉憲　教官	活動場所　体育館

講座のねらい

バドミントン講座に参加してもらい、バドミントンの楽しさを知ってもらうと同時に、親子および他の参加者との交流を深める場としよう。

講座の展開

展開	指導方法	留意点	時間	その他
起	○自己紹介（参加者、スタッフ） ○準備体操 ・ランニング ・ストレッチ　など ・コート設営	・ケガのないよう十分に、準備体操を行う。	３０’	・集合前の道具の確認をする。
承	○ガイダンス （競技内容の説明など）	・楽しむことを前提に、分かりやすいルールにする。	１０’	・学生ペアによる模範演技。
転	○練習開始 ・シャトルに親しむ ・コートを使ってのミニゲームなど	・ゲームなどを取り入れることによって、バドミントンにより親しみ、技術の向上もはかる。	１０’	・スタッフを各ペアに１人配置
結	○ゲーム ・（親子ダブルス、学生ダブルスでローテーションしながら全チームと対戦しよう。） ○まとめ ・修了証授与 ○後片付→解散	・全ペアが学生ペアと対戦できるように配慮する。 ・勝負にこだわることなく技術の向上と、参加者同志のコミュニケーションをはかるようにする。	５０’	・参加記念のシャトルと修了証の授与 ・清掃 ・備品の確認 ・解散

親子でバトミントン

小坂　和　（社会専攻　4年）

1．講座のねらい

わたしが講座を開こうと思ったきっかけは、過去に何度かＹＯＵ遊サタデーが開かれ、スタッフとして数多くの講座に参加したことによって、いろいろな観点から講座を見つめることができたことがおおきい。それぞれの講座が、それぞれの目的のもとに開かれているが、そのほとんどは子どもたちを対象としたものが多く、付き添ってきた親御さんが何らかの形で気軽に参加できるような講座を開きたかったので、高校時代部活動で行っていたバトミントンをとりあげた。ただ、技術向上のための講座では、普段の学校のクラブ活動ででもできるし、親子で受講してもらう意義がない。親子で行うことそれこそが、この講座のねらいなのである。

核家族化が進み、加えて共働きが当たり前になった今、余暇は増えてはいるものの、家庭内における会話がめっきり減っている。それは、子どもにも親御さんにもよい傾向とはいえない。この講座を技術向上の場として参加してもらうより、普段の生活をより楽しくするきっかけとしてバトミントン講座に参加してもらいたい。

2．講座の構成

本講座の目的として、①バトミントンの楽しさを知ってもらう　②バトミントンを通して、親子の交流を深め、親子でのレクリエーションの在り方を提案するを据えた、この目的に沿って、講座の展開を構成した。まず、体育的活動で最も注意しなければならないのが、事故、ケガの防止である。楽しいはずのスポーツがケガの発生でつまらないものになってしまう。したがって、まず最初に十分な時間をとって、準備体操を行った。

次に、競技内容などのガイダンスを行った。この際、この講座ではバトミントンに親しむことを目的としているため、本格的なルール説明や、技術の披露は行わず、あくまで、分かりやすく、簡単な楽しむことを目的としたルールを用いることに留意した。

次に、実際にシャトルを使って、練習を開始していく訳だが、その際もすぐにクリアーやドライブなどの本格的練習に入るのではなく、まず、シャトルに親しむため、

①ラケットでシャトルを拾うこと

②飛ばしたシャトルをラケットで受ける

③打ち上げたシャトルをシャトルケースで受け取る

などの練習メニューを組んだ。その後、コートの隅にシャトルケースを置き、それを的としてシャトルを打った。また、ミニゲームを取り入れ、参加者がバトミントンに親しみながら、技術の向上が図れるように配慮した。

最後に、時間の半分を割いて、親子でダブルスを組み、学生と試合をすることによって、コミュニケーションの場を提供できるよう配慮した。その際、技術レベルでの差が予想されるので、レベルに応じた組み合わせにして、試合を行うことにした。以上の点に留意して、本講座を実施した。

3．反省

a　参加者の様子

当初の講座の目的であった親と子のコミュニケーションの場を提供するという面では大変よかったと思う。親と子どもそれぞれにとってお互い日常生活では見られない違った一面をみられたのではないだろうか。練習や試合の節々で「お父さんてすごいなぁ」「こうやればもっとうまくなるぞ」などといった会話があちらこちらで飛び交っていた。しかし、低学年を対象としていたことで、練習内容をこなせるかどうか心配だったが、そのことがかえって、親子で話し合い、助け合うといった場面が見られたことが、うれしい誤算であった。

b　講座の目的との関係

先にも触れたような目的が果たして達成できたか。それを知るためにも、講座の最後にアンケート用紙を親御さんに配付し、講座についての印象、感想を書いていただいた。それによれば、ほとんどの参加者が講座のねらい通り、「いつもはできないような経験ができ、子どもも喜んでいる」「子どもの違った一面が見られて今後の生活に役に立ちます」などのような感想をいただき、この講座がそれぞれの家族にとってそれぞれに意義あるものだったということが推測される。

c　今後の課題

しかし、課題も多く残っている。それは、技術向上を求めてきた参加者には、この講座が消化不良だったに違いない。本講座の目的と参加者それぞれの目的とがあまりにも食い違っていると、それぞれに満足してもらう講座は開かれ得ないと思う。果たして参加者は何を期待し、何を求めていろいろな講座に参加しているのか、それはこれから講座を開こうと考えているキャプテンに何よりも考えてもらいたいことである。同時に、教職を目指すわたしにとっても重要なこととして考えていきたい。

講座の課題としては、わたしは初めて開いたこともあって気持ちに十分な余裕がなかった。それはアンケートのなかでも挙げられていた。「もう少し子どもとの触れ合いが多くてもよかったのではないだろうか」「教師になるうえでもう少し勉強が必要ですね」という厳しい御意見も含まれていた。これらの課題をもとに、実践で生かしていきたい。

4．まとめ

初めて開いた講座ということもあって、あらゆる面で不十分な点が多かったと思う。しかしそれを、優秀なスタッフのおかげで事故やケガもなく無事終えることができた。当初の目的であった「親子でバトミントン」＝コミュニケーションの場の提供はほぼ達成できたのではないだろうか。何よりも満足感に浸れたのが講座後の参加者からの感想文である。今年度最後のＹＯＵ遊サタデーに参加でき、感謝の気持ちで一杯である。。

このような小さな講座からではあるが、親子の和が広がり、家庭内における雰囲気がよくなればと期待している。そうなることが、教育問題の最大のテーマであるいじめについて解決の糸口となっていくのではないかと思う。

3．「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実像に迫る
－アンケート調査・感想文・投稿から－

参加者から見た「ＹＯＵ遊サタデー」

－保護者アンケートの結果から－

角田　正和　（社会専攻　４年）

１，アンケート調査の目的

今年で第二期となる信大ＹＯＵ遊サタデーであるが、第二期を開催するにあたって、各方面から「昨年との違いは何か」と問われることが多かった。要するに、外部の人たちは、この活動が一過性のお遊び的活動なのか、それとも価値ある実践的活動なのかを見分けようという厳しい視点で捉えていることがわかる。このように、ある活動が回数を重ねていくと、外部の人たちの要求や、活動に対する評価はだんだん厳しいものになってくる。

それに対しての私たちの回答として、一つは、活動を振り返り、記録として残した「実践記録」がある。これは昨年、「平成六年度、信大ＹＯＵ遊サタデーの実践－体験的学習の指導による実践的力量の形成－」という形で、発行されている。この中で、各講座を企画したキャプテンは、自らの課題を設定し、それを実際の講座を通して実施し、その結果を報告し、自らの教育実践力として高めている。

しかし、ＹＯＵ遊サタデーの運営そのものについてはどうかというと、昨年は初年度ということもあって、運営面は手探りの状態であった。また、参加者からのご意見や要望についても、個人的に寄せられたものがあったが、委員会として、自らの活動を振り返り、今後の運営面での改善につなげるための調査は行えなかった。今後、ＹＯＵ遊サタデーを、よりよいものにしていくためには、自らの講座の反省だけでなく、運営全体についての参加者の評価、要望を把握し、参加者の求めるものも活動の中に取り入れていくことが必要となってくる。

そこで、今回、各講座に参加していただいた参加者の保護者にアンケート調査を実施した。アンケートによって参加者の様子や感想、要望、意見などを把握し、今後の活動に取り入れていくための資料とした。これにより、いままで十分取り組めていなかった運営面での向上を図り、参加者により満足していただく活動としていくことができた。

２，アンケート調査の概要

アンケートは、教育実践研究指導センターの東原　義訓教官にご協力いただき作成した。アンケートは運営面のＮＯ，１と、参加していただいた講座についてのＮＯ，２の二つに大別される。回収率はＮＯ，１が４２．４％、ＮＯ，２が４１．９％と低調であった。

３，アンケート調査結果による運営面での改善

スペースの関係上、アンケート調査結果の全容をここで紹介することはできないので、ここでは二つの改善例について報告する（全容については４の資料に全容を掲載しているのでそちらを参考にしていただきたい）。

（１）受付面での改善

参加者からの指摘が最も多かったのがこの受付面での改善である。まず、開催に際しての報道の不足が指摘された。例えば、「開催情報が伝わってこない」と

か「広報をもっと多くしてほしい」といった声が多かった。報道に関しては、昨年まで行っていた学校を通しての広報が、受け入れ学校側の負担となっているため行えず、今年は新聞社と情報誌への依頼しかできないのが現状であった。広報は予算などの関係上、これ以上は行えない。そのため、第５回以降の広報については、次回の日時や内容、問い合わせ先を開催日に掲示するなどして対応した。しかし、広報の問題については、今後とも改善策を模索していく必要がある。

次に多かったのが参加申し込みでの改善である。例えば、電話での申込みが多く、係が十分対応できなかったり、一人が複数の講座を受講できたため、申し込んでも受講できないなどの状況であった。これについては、電話での受付をやめ、往復ハガキでの受付に一本化したり、受講講座についても、原則として一人一講座として、一人でも多くの方に受講していただけるようにした。

（２）修了証の復活

昨年は、各講座の修了者には各キャプテンから「修了証」が渡されていた。しかし、これは賞状用紙の経費がかかり、また、キャプテンが作成する手間がかかるなど、いくつかの問題があったので修了証をやめ、ＹＯＵ遊カード（入場券）に印を押すという形に変更した。しかし、これが参加者には不評で、また、印を押すのにも手間がかかるし、朱がこすれて汚くなるなと、さらなる問題を引き起こした。そこで、再び「修了証」を発行し、子供たちに配布することとした。しかし、賞状の経費はやはり負担なので、参加者に対して障害保険と修了証の用紙代を請求する形になった。

４，参加者の希望する講座

ＹＯＵ遊サタデーで開講する講座は各キャプテンの興味、関心や、持っている知識や技能を生かした講座である。しかし、受講する参加者は各キャプテンの開講した講座に興味、関心があるとは限らない。そのため、開講しても参加者が集まらず不成立という講座もある。しかし一方で、参加者の希望する講座のみを開講することは各キャプテンの「教育実践力の育成」という観点からはずれてしまうし、現実問題として、会場や機材などの都合上、行うことができないのが現状である。この二つを上手く調整しながら今後も開催していく必要がある。参加者の希望する講座は、大別すると、１、芸術、工芸的講座　２、スポーツ講座　３、アウトドア関係講座　４、料理講座　５、語学、ボランティア的講座　６、その他などである。この中には既に開講されているものもあるが、アウトドア関係講座のように会場や設備の関係上、不可能なものもある。しかし、可能な限り、参加者の希望も取り入れながら開講していきたい。

５，まとめ

アンケート調査は多額の費用と労力を必要とする。今回の調査においても実行委員の方のご協力と、ご理解がなければ実現しなかったことは言うまでもない。しかし、今回の結果を見ても明らかなように、アンケート調査を実施することで、我々の見えなかった点について、参加者の皆さんが、多くのことを教えてくれる。残念ながら、今期は一回のみの実施になってしまったが、今後も小規模なものでいいから、何らかの形で参加者の声を聞く機会を作り、参加者の意見の反映されたＹＯＵ遊サタデーであって欲しいと思う。

参考資料

第１回　信大ＹＯＵ遊サタデー

アンケート調査集計報告書

－MEMO－

第１回調査日	：1995年5月27日（土）
参加者数	：202名（男子85名、女子117名）
開講講座数	：14講座
参加スタッフ数	：約80名
アンケート実施期間	：6月1日～6月20日
アンケート回収率	：NO,1　42.9%　NO,2　41.9%
編集責任者	：角田　正和（社会専攻　４年）

＊注：この資料は、昨年７月に提出した報告書に、加筆、修正をしたものであり、一部内容については削除したものもある。従って、このアンケート調査報告書は抜粋版であり、原文と抜粋版の間には多少の差があります。その点に注意してお読み下さい。

1996年3月1日　アンケート編集責任者　角田　正和

e、保護者からの感想、意見

アンケートNO，１の最後に２つの欄を設け、思うところを書いていただいた。

① ＹＯＵ遊サタデーが発展していくためにはどのような工夫をしていけばよいとお考えですか。今後のためにご意見をお聞かせください

実に多くの意見を寄せていただいた。そのなかで最も多かったのが、「講座を増やす」「回数を増やす」などの意見であった。こちらとしても、できる限りの努力はしているが、スタッフの数等限りがあり、無理をするより、できる範囲で充実させることの方が大切なので、これらの要求に対しては実現が難しいのが現状である。

－参加者の意見－

＊ 回数を増やしていただければうれしいですが、無理でしょうか？
＊ もっと回数を増やして下さい。
＊ もっと講座数をふやしてください。
＊ もっといろいろな講座を作ってほしい。
＊ これからやるときは他の講座に行きたい。
＊ 月に一回くらいやっていただけると、うれしい。
＊ 今後も、このような機会を持っていただきたい。
＊ 一年を通して定期的に活動をし、何回か日をかけ達成できる物をとりいれていけば良いと思います。
＊ 講座数、参加人数を増やして欲しい。
＊ 継続は～なり。単発ものばかりでなく、４回通しての講座や親子参加で連続できるものも考えて欲しい。
＊ 継続して（１年間又は半年）企画していただくと、先を見通して参加できる。

その次に多いのが「広報の回数を多くする」などの意見である。予算等の都合であまり多くは広報を出せないが、一人でも多くの方に知っていただく努力は今後とも続けて行う必要がある。

－参加者の意見－

＊ 事前のPRをもっとして、多くの子ども達が参加できるようにしてほしい
＊ YOU遊サタデーはどのようなものなのか、もう少しわかりやすくアピールしていただきたいと思います。
＊ ４の質問のようなことですが、このようによいチャンスにめぐりあいたいと思っていました。今日は、ガールスカウトからの誘いがありましたが、一般の人にはどうやってお知らせしているのでしょうか。また、どうしたら参加できるのか情報が欲しいです。
＊ 「こういうことが行われている」と、もっと広めた方がいいと思う。このような企画があることを知らない人がずいぶん多いと思うので。
＊ とっても楽しい企画でした。今後ともずっと続けて、数多くの人にYOU遊サタデーの存在を知らせていって欲しいと思います。

＊　YOU遊サタデーがある事を、今回は週刊南長野新聞で知ったのですが、学校を通して一言教えていただけば、参加者はもっと増えると思います。
＊　YOU遊サタデーのことを知らない人が多いと思います。ニュースや新聞で開催されたことを知った人が多いと思いますが、大変良い催しですので、どんどんPRすることが必要だと思います。

また、ＹＯＵ遊カードに対する要望もあった。これはｅの方でもあったように、次回から改善していく予定である。

－参加者の意見－

＊　昨年、終了後、修了証書をいただいて、喜んで飾っておりましたので、今回ハガキで残念に思っていたようです。（予算の都合と思いますが・・・）何かもっと工夫があったら・・・と思いました。集めて喜んでいます。
＊　入場券をもっとかっこよく。

そのほか、数多くの意見をいただいた。ここに掲載する。このような意見を今後どのような形で実現していくのかが今後の課題であろう。

－参加者の意見－

＊　対象年齢の巾が広いので、それを一度に大勢でやろうとすると、どこかに無理がかかる場合もあるので、気をつけてもらいたいです。
＊　あきのこない講座をお願いしたい。
＊　紙ってすごいには、親も一緒に参加したかったと思います。
＊　YOU遊サタデーが、いつもやってればいいなと思ったのですが、それは無理として、子ども達があとで自分たちで発展して遊べるようなもの。その「きっかけ」を与えてくれるような活動があればいいと思います。昔なつかしい伝統の遊びや、近くの山、野原を歩く散策コースなど取り入れてもらいたい。また、費用等も参加費という形で集めてもいいのではないでしょうか。
＊　同伴の親も、参加できるような企画構成にしたらどうかな。
＊　今回始めて参加させていただいたので、少し不明な点もありますが、次回(9/9,10/)はメニュー変わるのですよね。小学生の内容良かったのですが、中学生も参加できるもの増やしてほしいと思います。（会話のできる英語）
＊　普段子供達が体験できないことを中心に企画願います。
＊　大変でしょうが、回数を増加してできればと思います。かかる経費は、会費としてとってもよいのでは。
＊　参加した子ども達の一口文章を作り、残していったらいいと思います。
＊　多くの子ども達に知ってもらうために学校、サークルなどにお知らせしたらどうでしょうか。
＊　大縄とびに参加したかったが年齢が達していなかったため×。本人残念がっていた。
＊　子ども達はどんなことにも興味を持って自分を発見していこうとします。今まで同様学生のみなさんにその手助けをしていただけたらと思っています。
＊　もう少しスポーツ等を取り入れてほしい。
＊　母親も参加できる講座があると良いと思う。
＊　低学年の子供も、もう少し色々な講座に参加できるといいと思います。

＊　”演劇しましょ”に入りました。午前・午後との講座でした。お昼は皆と一緒で楽しかったようです。又、１日グループの中で、お姉さんやら弟やらの年齢の人々と過ごして本当に楽しかったようです。最近では、子供同士で過ごす時間がなく、このような講座は、有意義だったと思っております。

＊　場合によっては、一般の協力も求めながら、講座や指導の充実を計っていくことかと思います。

＊　とても楽しかったようです。「スタッフのお兄さんは、将来先生になるんだよ」と教えましたら、喜んでいました。

＊　何かを作ったり、体験するのもとても大切なこととは思いますが、お兄さん、お姉さん、違う学校のお友達と、たくさん話ができたり、ふれあいがあったり、そういう講座も増やしていただけたらと思います。（フォークダンス、どっちボール大会等）

＊　ほとんど無料に近い形でやって頂いてとても恐縮しています。少しでも料金をとっていただいて、皆様方の反省会の時のお飲物代にでもしてもらってもよいかな・・・と思いました。

＊　大学内を見学させていただけることも意義がありますが、外へ出張していただけたらうれしいです。例えば育成会や子供会からの依頼に答えていただく等。是非お願いします。

＊　子供達の創造性を育てるため、より一層の創意工夫をお願いします。今後も発展的に継続してください。

② お気づきになったことがあったら記入してください。

基本的に①と大差はないが、参加しての感想が多く、参加者の満足度が高いことを示している。

－参加者の意見－

＊　信大附属小に行っていましたので、昨年各クラスに案内が配布していただいたので、今回も同じようにくると安心していましたところ配布されず、多くのクラスメートが知らなかったようです。附属小ですのでもっと、連絡を密にして下さい。参加したい所に入れませんでしたが、でも、参加した所が、とても楽しかったと申して喜んでいました。学生さんが、とっても仲良く接して下さり、ありがとうございました。いつも、有意義に参加させていただいています。これからも楽しみにしています。

＊　去年は、学校（城山小学校）からお知らせをもらってきて知りましたが、今年は、新聞を見てあることを知りました。学校を通して詳しい内容を知らせていただければ、おともだちといっしょに参加できてよいのでは・・と思います。

＊　附属に行っていますが、他校のお母さん方にYOU遊サタデーの話をしても知らない人ばかりでした。みんな今度は是非行かせたいと言っていましたが、知らない人が多いようです。

＊　午後の部の開始時刻が、はっきりしていなかったので、（集合時間か開始時間か）受付はしていたのですが、ブラブラしてて出遅れてしまった。また「あつまれー」の声が、まわりの声に消されてしまい、わからなかった。プラカードでもかかげてくれると、声を出すよりもよくわかります。大学というめったにこれない（？）場所にたいしてや、自分の背丈の何倍もあるお兄さんお姉さん方に対しての親近感がぐっと縮まり、自分たちの街にある学校、たたけば答えてくれる学校というイメージは、しっかり子どもたちに焼き付いたようです。いつかは自分たちがスタッフに・・・そんな夢を持ってくれたらなぁて思います。

＊　受付時間にいっても、もうすべていっぱいと言い、参加できる講座が選べず残念。

＊　①開始と終了時間を参加者も守って欲しいと思います。
②午前と午後２つの講座に参加したのですが、講座により、準備に差があり、すべて至れり尽くせりという所もあるし、ちょっと準備不足かな？という所もありました。
③どちらの講座のキャプテンもスタッフも非常に熱心でとても感じが良かったです。
④又機会があったら参加したいと思います。

＊　午後のトランポリン、定員オーバーで参加できずとても残念がっていました。

＊　時間がもう少し短くしてもと思いますが。
場合によっては、一般の協力も求めながら、講座や指導の充実を計っていくことかと思います。

＊　午前の講座と午後の講座の間に、昼食をとりますが、大学の食堂等使わせていただいていいのか情報が欲しい。

＊　大学生のお兄さんお姉さんと、楽しく一日を過ごす事ができ良かった。

＊　とても親切にしていただいて、子ども達は大満足でした。このような機会を多くしていただいて、一人でも多くの子ども達が、参加させてもらえたらと思います。

＊　初めて参加させて頂きましたが、子ども達もとても喜んでいました。リーダーをはじめとするスタッフみんなが、とても優しく愛情に満ちた笑顔で対応して下さったのが印象的でした。これからもすばらしい活動を期待しています。ありがとうございました。

＊　親がいっしょに居なかったので詳しい事はよく分かりませんが、家に帰ったら、子ども達がとっても楽しかったと喜んでいました。

＊　講座の指導者の人数も大勢いてくれ、参加した者は大変感激して興奮して帰ってきました。楽しかったのですね。今迄、この様に感動した子どもをみたのははじめてです。ありがとうございました。次回も参加したいと言っています。

＊　思ったより雰囲気が明るくて、説明してくださった信大生の方も優しく親しみやすい感じで接して下さったのでうれしかったです。

＊　熱心に教えていただき、又、とても親切にしていただき、ありがとうございました。YOU遊サタデーのますますのご発展をお祈りしております。

＊　講座以外のところで、大学生のおにいさんおねえさんとのふれ合いがうれしいようでした。

＊　皆様のいっしょうけんめいさに心が洗われるようでした。

＊　先生になろうとする方が子どもの名前を読みまちがえました。（良くあるのですが）子どもはとても気にしていました。
＊　やって結果の残るものが良かったと思います。形の残るものですね。
＊　子供にっとて始めての体験でしたが、学校の授業とは違って刺激的で楽しかったようです。子供がいろいろな面で興味をもついいきっかけになったと思います。信大生の方々も子供と同じ立場になって楽しんで下さっていたときいています。楽しい一日をありがとうございました。
＊　大学生という年代の方に触れることのできるよい機会ですので、とにかく回数が多ければな、と思います。親や友達、先生とは違った勉強をしている大先輩にあうのですから、中学生の参加できる講座もほしい気がしますが、部活等で忙しくて、参加しないのでしょうか。
＊　牛乳パックで作る箸置きがとってもきれいで実用的です。これからもこのような身近なものを使った作り方を教えてほしい。（来年のお正月やお盆にさっそく使いたいです。）
＊　YOU遊サタデーが終わって帰ってくると、いろいろな話を聞かせてくれます。親の私共も、それを楽しみにしております。友人はさそわずに、一人で行っていますが、勇気のいることですが自分でいってみたいという意志の強さに親も協力してあげようと思って行かせました。初回の時、大学の教授がやりぬく、やりとおすと話してくれたと得意に話して聞かせてくれました。本人にとって一生忘れられない言葉になったのかもしれません。スタッフの皆様ありがとうございます。
＊　目にみえない所からの準備等、ご苦労な点、多かったのではと思います。参加させてもらい、パワーを感じました。学校で、パワーを感じられる先生は本当に少ない気が致します。何処に消えてしまうのでしょうね。子どもは体験したこと、祖父母に話しておりました。とても嬉しそうに。学校での出来事を、あのように話すことはほとんどありません。どうしてかな？親子の講座もつくって、私にもパワーをわけていただきたいし、パワーを感じられる自分でいたいと思いました。ありがとうございました。
＊　とても楽しい一日を過ごした様でした。また参加したいと言っていました。お世話になりありがとうございました。
＊　とても楽しい一日の様でした。今度は友だちを誘って参加したいと言っていました。ありがとうございました。
＊　お祭り騒ぎに終わらず、なにか子も先生も教えられる事が感じ取れていたらいいナー。
＊　もっと近くでやっていると、気軽に参加できる。
＊　準備などが大変とは思いますが、いろいろな小学校や中学校の体育館や調理室など外に出てやっていただいても楽しいし、多くの人が参加できると思います。
＊　小麦粉ねんど、対象者が小さい子供達だったので大変だったと思いますが、スタッフの方々もやり方を良く理解してなかったように感じました。でも前回になかった小さい子も参加できる講座があり、とても良かったと喜んでいます。最初に粉にさわってもいいよと言われ、手にした時の子供のうれしそうな顔（家では粉がとぶからと、絶対にさわらせません）が印象的でした。子供も頑張って粉だらけになって練ってました。作品は大事に家

へ持って帰りました。

＊　スタッフの方につきっきりで指導していただき、立派な作品が出来ました。普段家でも学校でも使うことのない機械を使ったり、紙ヤスリでみがくなどとても良い体験が出来ました。

＊　会場への交通の便をもう少し考えていただきたいと思います。

＊　駐車場への誘導、整理があれば、なお良かったと思います。（構内への出入口が少し混雑しました。）

c、参加者の意識変化

参加した子供たちが、今回のＹＯＵ遊サタデーを通してどんなことを感じたのか、また、何か意識の上で変化が生じているのか聞いてみたところ、実に様々な意見が寄せられた。もちろん、このことは短期間で得られるものではなく、長期的に観察していく必要があるのだが、短期間でこれだけ現れたというのはある意味でうれしい誤算であろう。

－参加者の意見－

＊　人の話を聞いて自分で努力する。また、学校では経験できないことにもチャレンジできてよかったと話していました。

＊　がんばれば初めてのことでもできるんだと思うようになった。

＊　次の日、さっそく「サンエイ」で、ブローチのキットを買って作ってみました。興味がわいたようです。

＊　クッキー作りに興味を示すようになった。自分から料理を進んでやるようになった。

＊　昨年参加したときには自分ではいかれなかったのだが、今年は一人でいかれるようになり、他の場においても一人で積極的に参加できるようになってきた。

＊　内気な子で、参加するまで不安があったが、その後「楽しかった」「この次も参加しようね」「午後もやろうね」という気持ちになった。

＊　みんなの前で台詞が言えたことでちょっぴり自分に自信がもてたみたいで、近所の人に自分から「ＹＯＵ遊サタデー」のことを話したりして、前より明るくはなせるようになった。

＊　恥ずかしがりなので、最初は心配でしたが、結構積極的で、申し込みはがきの記入から持ち物の準備まで全部一人でやっています。

＊　知らない人の中へ入っていくことができなかったが、少しずつ入っていけるようになった。

＊　一人で知らない友達の中に入っていく自信が少しついたようです。

＊　「知らないひとでもともだちになれる」。

＊　昨年、今年と参加して、同じ講座を第一志望として選んでいました。好きなもの、得意とするものの方向が自分で見えてきたのではないでしょうか。
＊　一回り成長したように思います。自分の方からみなさんの中に飛び込んでいくことができました。
＊　姉弟で別々の講座に参加して、特に下の子は一人きりで、知り合いがいないのが不安だったようですが、一人でも結構がんばったようでいい経験だったようです。

＊　「小麦粉粘土をうちでもやろう」とせがまれています。「何でもやってみよう」「できるかもしれない」という気持ちが強くなったようです。
＊　縄跳びに自信がもてた。一人縄跳びもうまくなった。
＊　苦手な縄跳びに対する見方が変わったようです。
＊　ナイフを使ったことで自信を持った。

＊　竹トンボを家で作って（いくつも）楽しんでいます。学校でも一緒にやって友達といろいろ話をしたようです。
＊　ものを作り出す楽しさを覚えたようです。
＊　近所の子供と参加したので、みんなで教わった変わった歌？（替え歌か）を歌ったり、あの日のことを話しています。
＊　人の話を聞いて自分で努力する。また、学校では経験できないことにもチャレンジできてよかったと話していました。
＊　優しかった指導者のことが忘れられず、自分もあのようになれたら…といっています。
＊　信州大学に行くんだと言っている。
＊　テレビで料理番組があると興味をもって見ている。
＊　３回参加してとにかく楽しんでいます。実際に英語を使う場面が体験できればと望んでいます。
＊　帰ってきたときの第一声に「とっても楽しかった。今度はね、キーホルダー作りやるよ」。生き生きして目がキラキラしていた。
＊　親がいろいろ言っても右から左といったことがたびたびありますが、ＹＯＵ遊サタデーに行ってからはスタッフの人たちの話してくれたことはしっかり覚えています。
＊　「ギターを買ってほしい」と言われ続けています。
＊　大学生の方々がとても好きになり、「またキャプテンにあいたいな」といっていました。
＊　いままでナイフは危険だから、と持たせたことがありませんでした。こうすれば危険、こうすれば安全と、自分なりにわかったようでした。また、竹トンボの飛ばし方もこうすれば危険とかの判断もできるようになりました。
＊　ものを作ることに興味を持つようになった。
＊　帰宅後もチャレンジしていた。
＊　家にあった木箱と、手作りの木箱と交換して使用しています。手作りには愛着があるようです。
＊　竹トンボ講座ーとっても楽しかったそうで、材料をもらってきて、家で何個も作って飛ばしていました。学校へ持っていって「僕が作った」と発表したようです。

＊　演劇一行く前は「小さな子ばっかりならいやだなあ」と言っていましたが、小さな子とも友達になったり、面倒を見てあげたりとっても楽しかったようで、「また参加したい」と言っておりました。
＊　テレビのニュースで外国の名前が出てくると、目を輝かせてみるようになりました。
＊　ますますよい子になった。いつも家にいるか、一人もしくは妹と外で遊んでいるので、ＹＯＵ遊サタデーに参加することを楽しみにしています。帰ってからはたくさん話をしてくれて楽しかったのだと思います。
＊　昨年、今年と参加して、同じ講座を第一志望として選んでいました。好きなもの、得意とするものの方向が自分で見えてきたのではないでしょうか。
＊　口に出して何も言いませんが、やはり何か得るものがあったように思います。
＊　別の講座別発表をみて、ギターに興味を持ったようです。
＊　作品を手に自慢して帰ってきました。本当にありがとうございました。
＊　ものを作る楽しさとすばらしさを感じる心を育ててくれたことと思います。

d、保護者の講座への参加

当日、会場には多くの保護者の方の姿があった。しかし、大半の方は参加者の送り迎えのみで、実際に講座に一緒に参加された方は多くはいらっしゃらなかった。アンケートにも参加された方からの回答は少なかったが、参加された方について、その目的について聞いたところ、保育園から小学校低学年の参加者の付添として参加された方が多かったようである。

－参加者の意見－

＊　付き添いのつもりで行ったのですが、つい、一緒に作ることができ、感謝しています。
＊　講座に興味があり、子供たちの様子も見たかった。
＊　一人では参加できそうもなかったので。（初めての参加です）
＊　せっかくの週休２日制になったのだから、親子でこのときにしか体験できない楽しいことをたくさん経験して、有意義な時を過ごしたいと思いました。
＊　子供がまだ５歳で心配だったので、最初のうちはそばで見ているつもりでしたが、最後は一緒になって小麦粉粘土を作っていました。
＊　子供と共通の時間を、共通する作業で楽しみたいと思ったから。
＊　子供が不安がっていたので安心させるため。
＊　長野県に転勤できましたので、この土地の文化や学校のことなど、いろいろなことを知りたいと思ったから。（どのような信大生の方が、先生になられようとしていらっしゃるのか）
＊　小さな子供（４歳）も参加したので、付き添いのつもりでしたが、小麦粉粘土の作り方を知りたいという気持ちもあり、いつの間にか自分も一緒になって楽しんでいました。

また、父母向け、父母同伴の講座への参加の有無を尋ねたところ、多くの方が関心を示している。回答の中にもこういった要望が多く、今後、検討していく必要がある（資料６参照）。

＜資料４＞

参加者の評価

	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体	4.42	3.75	4.01	3.99	4.46
小学生	4.39	3.76	3.99	3.96	4.49

質問の内容

Q14　申し込み時の係の対応
Q15　YOU遊カード（入場券）
Q16　当日の会場案内
Q17　受付時の係の対応
Q18　各講座のスタッフの対応

＜資料６＞

父母向け講座の参加

第4回信大YOU遊サタデー　アンケート調査用紙

：　兄弟で参加された方はもう一枚の別紙をご利用ください
：　回答欄に数字でご回答ください。（　）には必要事項を記入してください

No.＿＿＿＿

A.　YOU遊サタデーの運営について

1　参加されたお子さまについてお聞きします

①　性別　　1　男　　2　女　　[1]

②　お子さまの学校・学年（1を選ばれた方は学年は空欄にしてください）

1　幼稚園・保育園　　3　中学校
2　小学校　　4　高等学校

[2] 学校
[3] 学年　　年

2　参加された講座を選んでください

ー午前・午後ー
1　小麦っ子（小麦粉粘土）
2　おやつパラダイス
3　竹トンボで遊ぼう
4　磁石で探検しよう
5　ギターをやろうじゃーん
6　君のオリジナルキーホルダーを作ろう
7　外国人と世界の遊びで楽しもう
8　教育学部ってどんなところ
9　大縄とび
10　トランポリン
11　宇宙生物すらすらスライム

[4] 午前
[5] 午後

ー終日ー
12　やさしい木工教室
13　演劇しましょ
14　紙ってすごい（ブローチ作り）

[7] 終日

3　これまでのYOU遊サタデーへの参加回数を記入してください

[8]　　回

4　今回の開催を何で知りましたか一つ選んでください

1　新聞、雑誌の広報で
2　友人に聞いた
3　実行委員会に問い合わせた（　電話・パンフレット請求）
4　テレビ、ラジオ等で
5　その他（具体的に：　　）

[7]

5　申し込み方法

1　はがき　　3　来　学　　5　団体申し込み
2　電　話　　4　当　日

[8]

6　みなさまのご家庭の情報源についてお尋ねします

①　購読新聞を1つ選んでください

1　朝日新聞　　4　日本経済新聞　　7　その他（　　）
2　産経新聞　　5　毎日新聞　　8　な　い
3　信濃毎日新聞　　6　読売新聞

[9]

②　下記の機器について、お使いの方は1、お使いでない方は2、を記入してください

a　FAX
b　パソコン通信（ネット名：　　）

[10] a
[11] b

7　当日、会場に何で来られましたか

1　徒歩　　2　自転車　　3　バス　　4　電車　　5　自家用車　　6　その他　　[12]

8　以下の項目について、○をつけてください

	非常に満足 5	4	普通 3	2	非常に不満足 1
例　当日の天気					
①　申し込み時の係の対応					
②　YOU遊カード（入場券）					
③　当日の会場案内					
④　受付時の係の対応					
⑤　各講座のスタッフの対応					

9　YOU遊サタデーが発展していくためにはどのような工夫をしていけばよいとお考えですか。
今後のためにご意見をお聞かせください

（　　）

10　お気づきになったことがございましたらお書きください

（　　）

B. YOU遊サタデーの講座について

1 参加された講座を選ばれたのは誰ですか

1 本人　2 保護者　3 団体代表者　4 その他（　　）　13

2 参加された講座を選ばれた理由についてお答えください

（　　）

3 参加されたお子さまはどのような感想をお持ちですか

（　　）

4 YOU遊サタデーに参加されて、お子さまの中で変わったことがあったらご記入ください

（　　）

5 講座にお子さまと一緒に参加されましたか

1 はい　2 いいえ　14

①、参加された方にお聞きします。その目的は何ですか。あればお書きください

（　　）

6 父母向け、父母同伴の講座があれば参加されますか

1 はい　2 いいえ　15

7 今後開催してほしい講座があれば記入してください

（　　）

8 YOU遊サタデー全体でお気づきのことがあれば記入してください

（　　）

C、学校週5日制について　No.2

1 今年から毎月第2，4土曜日が休日となりましたが、お子さまの反応はいかがですか

（　　）

2 お父さんは完全週休2日ですか。

1 はい　2 いいえ　3 4週6休　16

3 土曜日をお子さまはどのように使っていますか

（　　）

4 学校週5日制を利用して家庭で行っていることがあれば記入してください

（　　）

5 学校週5日制を利用して地域で行っていることがあれば記入してください

（　　）

6 学校週5日制を利用して学校で行っていることがあれば記入してください

（　　）

7 学校週5日制が導入されて困っていることがあれば記入してください

（　　）

8 他に、第2，4土曜日を利用した催しや活動などをお知りの方は記入してください

（　　）

9 学校週5日制は今後どうあるべきだとお考えですか

（　　）

ご協力ありがとうございました

ＹＯＵ遊サタデー／キャプテン・スタッフアンケート

（Ｈ７・９・９実施）

実行委員会

本日は、大変ご苦労さまでした。

ＹＯＵ遊サタデーも、今回で第五回を迎え、今後第六回、第七回と、より一層の発展が期待されています。その参考とする為に、次のアンケートにお答えください。

ＹＯＵ遊サタデーは、教師となる為の実践的指導力の向上を図ることを目的の一つとしています。このアンケートは、皆さんがＹＯＵ遊サタデーで実際に子どもと関わることにより、どのような指導力を身につけたかを調査するものです。下の表を参考にして、自分に当てはまると思われる箇所に○をしてください。

1	2	3	4	5
全く思わない	思わない	どちらとも言えない	そう思う	非常にそう思う

Ｑ１：これまであなたが参加したＹＯＵ遊サタデーの時期に○をしてください。

	（９／10）	（10／８）	（11／12）	（５／27）	（９／９）
①キャプテンとして	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
②ｱｼｽﾀﾝﾄ・ｽﾀｯﾌとして	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
③本部スタッフとして	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回

Ｑ２：ＹＯＵ遊サタデーを通して、子どもに実際に触れることは、今後、教育に携わる上で役に立つと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ３：あなたは、子どもに意欲や関心を発揮させる力（発問、説明、教材提示などに関する力）が向上したと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ４：あなたは、子どもの反応を見て、その動きを予想したり、それに対応する力が向上したと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ５：あなたは、一つの講座を通しての子どもの活動を、適切に評価する力が向上したと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ６：［キャプテンをやったことがある方のみにお聞きします。］あなたは、遊学プラン（旧・指導案）の作成を通して、講座を計画する力が向上したと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ７：あなたは、スタッフが講座の全体像をつかみ、キャプテンを助ける上で、遊学プランが役に立ったと思いますか？

1　2　3　4　5

Ｑ８：あなたは、ＹＯＵ遊サタデーが参加した子どもにとって、意義のあるものであったと思いますか？

1　2　3　4　5

ありがとうございました。今回の結果は、まとめ次第お知らせします。

YOU遊サタデー・アンケート・結果

1	2	3	4	5
全く思わない	思わない	どちらとも言えない	そう思う	非常にそう思う

Q２：
YOU遊サタデーを通して、子どもと実際に触れることは、今後、教育に携わる上で役に立つと思いますか？

Q２	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	1	1	2
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	0	0	2	11	12
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	0	1	4
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	0	0	1
ｱｼS ＋ 本部S	0	0	0	4	4
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	0	0	2
合計	0	0	3	17	25

Q３：
あなたは、子どもに意欲や関心を発揮させる力（発問、説明、教材提示などに関する力）が向上したと思いますか？

Q３	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	2	1	1
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	1	3	15	3	3
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	1	3	1
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	1	0	0
ｱｼS ＋ 本部S	1	3	3	0	1
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	0	1	1
合計	2	6	22	8	7

Q４：
あなたは、子どもの反応を見て、その動きを予想したり、それに対応する力が向上したと思いますか？

Q４	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	1	3	0
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	1	6	10	8	0
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	2	2	1
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	0	1	0
ｱｼS ＋ 本部S	1	1	3	3	0
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	0	2	0
合計	2	7	16	19	1

Q５：
あなたは、一つの講座を通しての子どもの活動を、適切に評価する力が向上したと思いますか

Q５	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	2	2	0
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	2	4	11	6	2
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	3	1	1
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	1	0	0
ｱｼS ＋ 本部S	1	1	4	2	0
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	1	0	1
合計	3	5	22	11	4

Q６：
［Q６のみキャプテンをやったことがある方にお聞きします。］あなたは、遊学プラン（旧・指導案）の作成を通して、講座を計画する力が向上したと思いますか？

Q６	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	1	2	0
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ					
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	2	3	0
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	0	1	0
ｱｼS ＋ 本部S					
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	0	0	1
合計	0	0	3	6	1

Q７：
あなたは、スタッフが講座の全体像をつかみ、キャプテンを助ける上で、遊学プランが役に立ったと思いますか？

Q７	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	2	2	0
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	0	2	１３	5	3
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	1	3	1
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	1	0	0
ｱｼS ＋ 本部S	1	0	2	4	0
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	1	1	0
合計	1	2	２０	１５	4

Q８：
あなたは、ＹＯＵ遊サタデーが参加した子どもにとって、意義のあるものであったと思いますか？

Q８	1	2	3	4	5
ｷｬﾌﾟﾃﾝ のみ	0	0	0	2	2
ｱｼｽﾀﾝﾄS のみ	0	1	3	7	１３
ｷｬ ＋ ｱｼS	0	0	0	2	3
ｷｬ ＋ 本部S	0	0	0	0	1
ｱｼS ＋ 本部S	0	0	1	5	2
ｷｬ・ｱｼS・本部S	0	0	0	0	2
合計	0	1	4	１６	２３

総合	1	2	3	4	5
Q２	0	0	3	１７	２５
Q３	2	6	２２	8	7
Q４	2	7	１６	１９	1
Q５	3	5	２２	１１	4
Q６	0	0	3	6	1
Q７	1	2	２０	１５	4
Q８	0	1	4	１６	２３

《考察－by奥原》

全体を通して、まずＹＯＵ遊サタデーに参加したことは、学生にとっても、子どもにとっても、「意義のあることだった」と感じている人が多いということが言える。しかし、実践的指導力の向上に関する感想は「どちらとも言えない」が多い。それでは、学生にとって、いったい何が「意義」として感じられるものだったのかが疑問である。（質問事項が、かなり具体的だったこともあって、自分が身につけた指導力は、これではないという人が多かったのかも……？）

◆Ｑ２では、ほとんどの人がＹＯＵ遊サタデーで子どもに触れることが、今後「教育」携わっていく上で「役に立つ」と感じている。

教育実習以外に、子どもと接する機会がほとんどない学生にとって、ＹＯＵ遊サタデーで実際に子どもに触れるだけでも「役立つ」のかもしれない。また、「学校教育」に限らず、地域での活動を含めた「社会教育」や「生涯教育」に役立つという考えもあるものと思われる。

◆Ｑ３では、「導入」に関する力を質問した。しかし、スタッフは（アシスタント、本部ともに）、恐らく「導入」の段階にはタッチしていないのではないだろうか？（自己紹介ぐらいはしたとしても……）それならば、スタッフのみで参加した人の答えが「どちらとも言えない」から「そう思わない」という割合で高くなったことも頷ける。

実際に「導入」をしたであろうキャプテンは、その指導の難しさに「力の向上」を感じられなかったのかもしれない。

◆Ｑ４では、子どもの動きをだいぶ見ることができ、その動きにそれぞれが対応することができたと感じていることが見て取れる。

キャプテンは「森」を見て、スタッフは「木」を見ていた結果なのかもしれないが、アシスタントスタッフの人で「どちらとも言えない」と答えた人は、「森」を見る目で子どもを見られないから、そう感じることが多いのかもしれない。

◆Ｑ５は「適切」の言葉に引っ掛かったのかもしれないが、まだまだ「評価」する力は向上仕切れていないと感じているようだ。

Ｑ３の結果と比較して感じるのは、スタッフだけでなく、キャプテンもあまり「評価」する力が付いたと感じていないことである。これは、何を、どのように評価するのかという基準を持っていないことを示してように思える。また、時間的に忙しくなって、最後まで完全に子どもの姿を見切れないこともあるのかもしれない。

◆Ｑ６は、キャプテンだけへの質問だが、遊学プランが講座の計画段階で比較的意義があることを感じているようだ。

頭で考えていることと、実際にやったこととではかなり違いはあるかもしれないが、実際に子どもに面する前に、あれこれ考えることが、どこかで役に立つということだろう。

◆Ｑ７は、遊学プランがどれくらい活用されているかが表れた結果だろう。

アシスタントスタッフのアンケートの中に書かれた言葉に「（遊学プランって）何ですか？」というものがあったのだが、それに代表されるように遊学プランから講座の全体像をつかむことはあまりできていないようだ。（私のようないい加減なプランしか書かない奴のスタッフになった泉さん、関谷さん御免なさい。）もちろん遊学プランだけでなく、それぞれのキャプテンにあった方法で、きちんと説明していることを示した結果かもしれないが、もう少し効果的に活用しても良いように思う。

◆Ｑ８では、ＹＯＵ遊サタデーが、かなり子どもに意義のものであるものだと感じている人が多いことを示しされている。

「楽しかった」を含めて、帰る時に、子どもが「来て良かった」と思えるような何かしらの「お土産」を渡せたという自信が伝わってくるような結果だと思う。

以上の結果を通してみて、キャプテンよりも、スタッフが、指導力の向上をあまり感じていないことが言える。これから、より「意義」のあるＹＯＵ遊サタデーにする為に、キャプテンとスタッフとの連絡を密にして、全員で一つの講座を作り上げるのだという意識を高め、スタッフも一緒に講座を動かしていけるようになることが望まれる。

学生がＹＯＵ遊サタデーに参加した動機

１．調査日：平成7年１０月１４日（土）
２．調査対象：第6回ＹＯＵ遊サタデーにキャプテン、スタッフとして参加した100名の学生
３．回収率：３３名（回収率３３％）　ＹＯＵ遊サタデー終了後の慌ただしい中で実施したので、回収率が低くなった。
４．質問文：今回「信大ＹＯＵ遊サタデー」に参加した動機は何ですか。
５．調査結果：回答の内容を、(1)子どもとのふれあいを求めて　(2)充実感を求めて　(3)楽しさを知ったから　(4)頼まれて　の４つに分類した。以下に全回答を列挙する。

(1)子どもとのふれあいを求めて

・勉強以外で子どもとのふれあいをしたいと思ったから。（2年男子）
・子どもたちと話をしたり、遊んだりしたかった。（２年女子）
・自分自身の教師になろうという気持ちを再確認するためと、教育実習を終えてからこういう機会に接することが少なくなり、是非子どもたちと活動を共にする時間を持ちたいと思ったからです。（４年女子）
・子どもとふれ合う機会をもっと持ちたかったから。（４年女子）
・実習で子どもたちと過ごす中で、普段の大学生活では得られない充実感を感じ、続けて子どもと触れ合いたいと強く思ったから。（３年女子）
・子どもたちとの出会いを求めて参加させていただきました。「楽しく」が第一のキーワードであることにも魅力を感じました。（３年女子）
・子どもと一緒に何かをやりたかったから。（４年女子）
・子どもたちとのふれあいの場をもちたかったから。（４年女子）

(2)充実感を求めて

・私がやりたかった。（４年男子）
・やり遂げた後の何とも言えない成就感を味わうため。（４年男子９
・前回参加して、アシスタントスタッフになりたかったからです。（４年女子）
・一度くらいキャプテンになっておこうと思った。これで最後になるから。（４年女子）
・次回の松本でのキャプテンとして参加するための準備として。（４年男子）
・前回参加してみて、自分が勉強する良い機会であると感じたことと、興味ある講座を知人がキャプテンとして行うことになっていたため。（４年男子）

(3)楽しさを知ったから

・今年２回参加して、ＹＯＵ遊サタデーの楽しさにとりつかれてしまったから。（３年女子）
・何回か参加して、楽しく、ためになるものだと思ったから。（３年男子）
・前回やってよいと思ったから。（４年男子）

(4)頼まれて

・キャプテンに頼まれて。幼稚園くらいの子どもが参加するとも聞いたので参加しました。（３年女子）

・キャプテンから話をもらって、興味がわいたので、やろうということになりました（４年女子）

学生から見たＹＯＵ遊サタデーの意義

１．調査日：平成７年１０月１４日（土）　　平成７年１０月２８日（土）
２．調査対象：第６回ならびに第７回ＹＯＵ遊サタデーにキャプテン、スタッフとして参加した学生　　第６回は100名、第７回は６５名
３．回収率：第６回は33名、第７回は20名、合計52名で回収率は32％と低かった。これは参加者の見送りや会場の後かたづけなどの忙しい最中にアンケートを実施していることに原因がある。
４．質問文：今回の「信大ＹＯＵ遊サタデー」を振り返っての感想や自分にとっての意義を教えて下さい。
５．調査結果：回答の内容を(1)子ども理解の場　(2)教師へのステップの場、力量形成の場　(3)人との交流の場、もの作りを体験する場　の４つに分類した。以下に全回答を列挙する。

(1)子ども理解の場

・授業中以上に興味を持って意欲的に子どもたちは取り組んでいたと思う。私にとっては子どもと過ごすことができたことはもちろん、次から次へと考えを広めていく子どもに、子どもの可能性の大きさを教えられ、楽しく学ぶと言うことは本当に大切だと感じることのできる時間であった。
・学年の違うものを一緒に教えることは、とても大変だった。
・自分なりに一生懸命やったつもりです。子どもたち以上に私自身が楽しめました。
・初体験の味。
・子どもの扱い方、指導の仕方が少しだけうまくなった。教職の準備ができる。
・子どもたちが自分たちの予想よりも上手にできていることに感心したことや、さらに高度なものへもチャレンジしていく所に好奇心を感じた。自分にとって子どもと触れ合い、共に学べたことは意義があったと思う。
・子どもたちに話を聞いてみると、結構草木染めの経験のある人が多く驚いた。５人に２一のスタッフがついてみたが、全員の子に気を配り、声をかけ、一緒に楽しむと言うことが少人数の子どもしかいないのにもかかわらず、大変だということを実感した。
・新しいことに挑戦でき、自分自身も楽しむことができた。様々な状況での様々な子どもとの接し方について考えさせられた。
・もっと子どもと接する機会を持たないといけないと思った。
・初めて参加させてもらったが、どの講座も工夫してあって、参加者が生き生きとしていたので、成功だったと思います。小学生のころの興味や関心を忘れてしまっているので、子どもたちの目から見た感じ方を思い出せた。
・自分自身の学習の場。より子どもが好きになった。
・今回子どもたちといっしょに過ごした時間の中で、改めて子どもの素直さに気づいた。というのは、一言声をかけるだけで、子どもの働きが全く違ってくる。生き生きしてく

るということに気がついた。教師の一言の大切さを実感した。

(2) 教師へのステップの場、力量形成の場

・教えることは難しいと思った。でも、こうやって子どもたちと一緒にいると、見えないものが見えるような、教員へのステップをふめるような気がしてきて、とても楽しく、また、勉強になった。

・やはり子どもの活動を見ていると楽しい。何から何まで新しい発見ばかりです。こういう場に接するということは、私自身の教師としての力量を高める場になるとともに、教師になりたいという気持ちをさらに強めてくれるものとなります。自分にとっての良い勉強になります。

・講座の教材研究を手伝ったことによって、教材の扱いの難しさや気をつけようと思うことはいくらでもある、ということがよーくわかった。

・インターネットを利用すればいろいろな情報をリアルタイムで取り入れられるので、理科にも生かせそうだと感じた。今後考えていく課題ができた。

・短い時間でしたが、７人の子どもたちとたくさんの会話ができ、楽しそうに作品を製作する姿を見て、私自身とても楽しい時間を過ごすことができました。また、参加したいです。私にとっての意義とは、子どもとの出会いの場が第一ですが、教育者としての力量形成の場でもあります。

・自分にとっても貴重な体験を子どもたちと共にすることができました。ありがとうございました。

・創造力に力点をおいて講座を作ったが、四苦八苦の展開になってしまった。子どもは一朝一夕に力をつけることはできないが、これが今後の契機になってくれることを期待する。自分の今後の教師生活に大きく役に立ったＹＯＵ遊サタデーには感謝している。

・高校生に正確な知識を教えてあげられなかったのが残念であったし、申し訳なかった。

・先輩を見ていると、自分はまだまだだなあと感じました。

・スライムと化学実験に参加したが、自分の力不足と知識力のなさをを実感した。

(3) 人との交流の場、ものづくりを体験する場

・多くの人とふれあえ、楽しかった。簡単に手作りでできるものをいろいろと知ることができた。

・子どもと一緒に楽しい一日がおくれたと思います。今、とてもすがすがしい気がします。

・当日本番までの準備はとてもたいへんだった。けれど、しっかり準備していたのでハプニングもなく、失敗もなく、余裕をもって取り組めてよかった。

・こういう企画はいいと思う。楽しかった。もっとやりたい。

・教育実習を終えて、子どもとふれあう機会がもてたことが大変な喜びでした。また、自分の知らないもの（かご、しめ縄、小麦粉ねんどなど）の作り方をいろいろ知ることができたのも良かった。

・だんだん慣れてきて、また次が楽しみだなあとなってきている。

・あまり子どもと接する機会が無く、こういう機会があることにとても感謝している。まだ２年生だが、教育実習に行く前からこういうことがあると、実習も頑張っていけそうだ。・キャプテンとして参加してみて、初めて裏方の人たちの支えの大きさというものを感じました。安心して講座のことに専念できる有り難さがどんなものか。とてもう

れしかったです。
・一度は参加してみたいと思っていたＹＯＵ遊サタデーに今回参加することができて大変うれしいです。半日楽しく過ごせたと思います。

保護者から見た子どもの参加動機

１．調査日：平成7年１０月２８日（土）
２．調査対象：第７回信大ＹＯＵ遊サタデーに子どもを参加させた保護者
３．調査方法：会場にアンケート用紙を置き、回収ボックスに入れていただいた。
４．回収数：２３
５．質問文：保護者の方にお聞きします。今回お子さまが参加された動機をお書き下さい。
５．調査結果：全回答を以下に列挙する。
・いろいろな知らない人の中でも行動できるように社会性を身に付けさせたかった。
・地域の中での遊びが少なくなっています。遊びを通しての交流があまりないので参加しました。
・第２、第４土曜日が休日となってきているのに、なかなか子どもたちを遊ばせる場が少なく、そんな中で今回のＹＯＵ遊サタデーは大学のお兄さん、お姉さんたち、大勢のお友達と遊ぶという大変すばらしい場であると思い、参加しました。
・子どもが自分で参加したいとチラシを持ってきた。
・ものを作ることが好きだから。
・母親自身が本当は参加したかったのですが、・・楽しさを子どもに味わってもらいたかったから・・話し合って。
・兄ちゃんが違う講座をうけたので、弟が一緒にゆきたがったので。
・普段、遊びでバドミントンを行っており、興味をもちはじめたため。
・本人の希望
・アニマルダンスか小麦粉ねんどかと言ったら、すぐに「小麦粉ねんど」と言った。
・小麦粉ねんどでいろいろなものを作って楽しみたかったから。
・子どもが興味をもったから。
・小麦粉ねんどがやりたかったから。
・昨年参加し、今年も参加を希望したから。
・子どもたちも休みが増え、楽しく有効に時間を過ごせればと思ったから。
・小麦粉ねんどをやりたいと言った。何かを作りたかったようです。
・学校からのプリントにて、友達と話し合って参加いたしました。
・親子でできるから。
・やりたかったから。
・小学校、幼稚園が休みなので。
・やりたい講座が満員で、係の方にすすめられたから。
・案内のプリントをもらって、おもしろそうだったから。
・楽しそうだから。

（土井）

「信大ＹＯＵ遊サタデー」に見る学生の教材観・教育実習観

土井　進（実践センター専任教官）

１．調査の目的

学生キャプテンが「遊び」と「学び」を共有した体験学習を組織したことによって、大学キャンパスに、学校でも塾でもできないような楽しい「ＹＯＵ遊サタデー」という場が実現した。それぞれの講座は、キャプテンが自らの生活体験や学習体験を教材化することによって成立したものである。このような個性を発揮した、オリジナルな教育実践によって培われた実践的指導力は、今日の学校教育現場が抱える困難な教育課題に立ち向かっていく上でも有効な働きをするものと考えられる。この観点から、

①キャプテンが講座に結びつくような「体験」をいつ、どこで、誰から獲得したのか、

②「教育実習」の成果がどのように「信大ＹＯＵ遊サタデー」に生かされているのか、

を明らかにすることは、教育学部における実践的指導力養成の方途を考察する上で貴重な資料を提供してくれるものと考えられる。

２．調査の方法

「信大ＹＯＵ遊サタデー」において開講された講座数は、７回合計で６４種類、１０７講座である。この内教官がキャプテンを務めた４講座を除いた６０講座のキャプテン６０名を対象に、1995（平成７）年11月に記名式によるアンケート調査を実施し、４７名から回答を得た（回収率７８％）。アンケートは、次の(1)～(7)の各問いの選択肢に○をつけるという方法で行った。

（　　）内の数字は４７を母数とした％を示している。（小数点以下は四捨五入した。）

３．調査の結果

(1)　あなたが、この講座を開設するに至った「生活体験」や「学習体験」（以下「体験」と略す）をしたのは、いつですか？

（　２）　幼稚園のころ
（２７）　小学生のころ
（　４）　中学生のころ
（　９）　高校生のころ
（４９）　大学生になって
（　９）　その他（　　）

(2)　あなたが、この講座を開設するに至った「体験」を、どこでされましたか？

（２０）　家庭で
（１０）　地域社会で
（５７）　学校で
（１４）　その他

(3)　あなたは、この講座を開設するに至った「体験」を、だれから教わりましたか？

（　９）　父母から
（　０）　祖父母から
（　４）　兄弟姉妹から
（２８）　友達から

（３０）　学校の先生から
（１１）　地域の人から
（１９）　その他

(4)　あなたは、この講座に参加した子どもたち（大人も含む）にとって、どのような意義があったと考えていますか。次の中から２つ選んで下さい。
（７７）自分で作ったり、表現したりする体験を豊かにすることができた。
（４７）楽しく遊ぶひとときを過ごすことができた。
（２６）技能を身に付けることができた。
（３４）様々な人とのふれ合いを経験することができた。
（　９）その他

(5)　あなたは、この講座を開設することによって、どのような収穫がありましたか。次の中から２つ選んで下さい。
（１４　）教育者としての技能（話し方、間の取り方など）が向上した。
（４０）子どもたちの心に寄り添い、共に活動することができた。
（２１）異年齢集団を組織する経験を積むことができた。
（３８）講座を構想し、構成する力が向上した。
（　９）公開の場での授業経験により度胸がついてきた。
（　２）ティームティーチングにより友人との絆が深まった。
（１７）子どもたちを預かって教育することの責任の重さを実感することができた。
（１５）父母や地域社会の人々の教師への期待の大きさを肌で感ずることができた。
（３６）伸びゆく子どもたちの可能性、すばらしさに触れ、教職への意欲が強まった。
（　６）その他

(6)　あなたはこの講座を実施してみて、「教育実習」から学んだことが基礎・基本となって生きて働いたと思うことは何ですか。次の中から当てはまるものに○をつけて下さい。（いくつでもよい。）
（２１）教育実習で教わった教科指導の方法
（　２）教育実習で教わった道徳指導の方法
（　０）教育実習で教わった特別活動の指導方法
（７７）教育実習で学んだ子どもへの声のかけ方、かかわりかた
（２３）教育実習で学んだ学習指導案の書き方
（４７）教育実習で学んだ教材の作り方、提示の仕方
（３８）教育実習で体験した授業時間の配分のしかた
（５３）教育実習で深まった子ども観、教育観
（　６）その他

(7)　あなたはこの講座を実施してみて、「教育実習」では経験できなかったが、ＹＯＵ遊サタデーでは経験でき有意義であったということがありましたか。ある人は次の中から当てはまるものに○をつけて下さい。（いくつでもよい。）
（５３）異年齢集団の指導を経験することができた。
（３４）２時間単位あるいは４時間単位の時間だったので、一つのことをやり遂げることができた。

（４０）附属学校園以外の子どもたちとふれあうことができた。
（１７）親やマスコミの環視の中で真剣に取り組むことができた。
（４５）学生同士のティームティーチングを経験することができた。
（６６）自分の考えに基づいてのびのびと授業を実施し、反応を確かめることができた。
（　９）その他

４．考察

(1)の結果から。小学生時代の体験を基に講座を開設した学生が２７％もあり、中学生、高校生時代に比べて圧倒的に多い。ＹＯＵ遊サタデーに参加している小学生にとっても、１回ごとの体験のもつ人間形成上の意義は、あなどることができないものとなっているのではなかろうか。また、大学生時代の体験をあげたものが４９％と最も多かった。このことから私は、教員養成を任務としている本学部にとって、学生が人間としての教養を深め、自らの力量形成を図れるように、一層カリキュラムの改善に努力することが大切であると思った。

(2)の結果から。教育は家庭、地域社会、学校において行われるものであるが、我が国においては学校教育の占める比重が極めて大きいことを示しているものと言えよう。これからの学校五日制時代を有意義なものにしていくためには、家庭や地域社会での生活体験を豊かにしていく具体的方策を講じていくことが極めて重要な課題となってくる。

(3)の結果から。学校の先生（３０％）と友達（２８％）の影響が大きいことがうかがわれる。いい先生、いい友達と出会った子どもは幸せである。本学部から高い資質を備えた教員が巣立っていくように、学生とともに一層努力していきたいと考える。また、地域の人から教わったという人が１１％もあることにも注目したい。地域社会における子ども会活動や育成会活動にも関心をもっていきたいと思った。

(4)の結果から。学生は、ＹＯＵ遊サタデーの子どもにとっての意義は、体験を豊かにすることである、ととらえている。自ら作ったり、表現したりする直接体験をすること、それ自体が子どもにとって価値あることである、と学生は受け止めている。

次ぎに「教育実習」の成果がどのように「信大ＹＯＵ遊サタデー」に生かされているのか、について考察したい。(5)の結果から、学生にとっての意義としては「子どもたちの心に寄り添い、共に活動することができた」（４０％）こと、「講座を構想し、構成する力が向上した」（３８％）こと、そして「伸びゆく子どもたちの可能性、すばらしさにふれ、教職への意欲が強まった」（３６％）ことがあげられている。また、(6)の結果から「教育実習で学んだ子どもへの声のかけ方、かかわりかた」（７７％）と「教育実習で深まった子ども観、教育観」（５３％）がＹＯＵ遊サタデーに生きて働いたことがわかる。この(5)と(6)を合わせて考えると、学生は教育実習で修得した「子どもへの声のかけ方、かかわり方」を、ＹＯＵ遊サタデーで更に磨き、子どもへの共感力を向上させているものと考えられる。最後に(7)の結果から、ＹＯＵ遊サタデーならではの収穫として、「自分の考えに基づいてのびのびと授業を実施」（６６％）することができたこと、「異年齢集団を指導することができた」（５３％）こと、「学生同士のティームティーチングを経験することができた」（４５％）ことが挙げられている。勇気を持って自己を出し、個性を発揮する場を経験することが、学生の力を引き出すのである。学生が自主的・主体的に教育実践を展開する場としてのＹＯＵ遊サタデーが有する存在意義は極めて大きいと考える。

感想文

キーホルダー　5年　菅沼　建司

ぼくは「ゆうゆうサタデー」に参加して、本当によかったと思いました。

ファミコンカセットのマスコットの絵や、自分のサインがうまく焼けた時は、とてもうれしく、感動しました。

これも、ぼくが分からない事を聞いた時、「これは、こうするんだよ。」と、やさしく教えてくれたスタッフの人がいたからだと思います。

とてもおもしろい世界に一つしかない自分だけのキーホルダーを作るきかくは、とてもいいと思います。

次回のゆうゆうサタデーにも参加したいと思いますが、その時このきかくがあればとてもいいと思います。

たのしいバトミントン　1年　森　瑠衣

わたしは、おやこでバトミントンに、さんかしました。大学へいくのは、はじめてです。それで、楽しかったことは、はねが入ってるつつに、はねを入れるのが、楽しかったです。はねをうつのは、少しよくなってきました。また、家でもたくさんれんしゅうをしたいです。うまくなったら、何回つづくかやってみたいです。三年生か高学年になったらまたやってみたいです。さいごまで私におしえてくれてありがとうございます。とてもたのしかったです。またやりたいです。

楽しい英語クラブ　6年　中澤　峻

ぼくは、楽しい英語クラブに参加しました。

ぼくは四年生の時から二年間アメリカへいったので、英語にとても興味があっ たからです。僕の妹も楽しい英語クラブに参加しました。楽しい英語クラブでは 沢山のことをしましたが、中でもペンニャッタというゲームはとても楽しく心に 残りました。ペンニャッタは新聞紙でできているかぼちゃをたたいてわって中のお菓子を取るというゲームです。たたいてもたたいてもへこむだけで破れなかったので、キャプテンがジャックナイフで切り目をつけたりもしました。ＹＯＵ遊 サタデーを松本でやるのは初めてなのに百人もの人が来たということはすごいことだと思います。来年もまたやって下さい。

親子でバトミントン　4年　古舘　優子

今日はＹＯＵ遊サタデーで、お母さんが、バドミントンが得意だから出ました。私は好きだけど下手でダメ。はじめは拾うことからやっても全然ダメでした。たまにまぐれでラケットの上にのっかかるだけ。上がったのをとるのは、とてもむずかしくてはねてしまいました。つつの中に羽根を入れるやつは、ほかの親子がやってその人が３つも入ってすごいと思いました。でも私がやったら、５つも。私はうれしかったです。つつたおしはとてもむずかしい。いつまでたってもできませんでした。休けいの時間も、続けてやりました。そして、上、中、下に分かれ、私たちは中に入ったけれど、お母さんがうまいから上に行ってしまって、私は、とてもどきどきしました。私は、サーブは近くからやらないと相手のチームに入りませんでした。そして、私がサーブをやろうとすると、１人のキャプテンが「おっ」と大きな声で言ったので、私は笑ってできませんでした。試合は負けてくやしかったです。また、今度こういうのをやりたいです。

今日はとても楽しいＹＯＵ遊サタデーでした。

スライム　1年　ひらばやし　ひろみつ

すらいむをつくろうでいっかいめのときいろをつけるのをわすれて、しっぱいかとおもいました。でも、しっぱいしなくてよかったです。またらいねんはねんどがやりたいです。でも、どうやってすぐにかたまるんだろう。でもなんで、なげちゃだめなのかなぁ。すらいむをおしえてくれてありがとう。

スライム　　2年　ふじおか　るね

このあいだはありがとうございました。
おかげでスライムの作り方が、わかりました。
おねえちゃんが学校で作ってきたので、すぐ五つも作れました。1ばんさいごにみんなでおけに大きいのを作ったときは、つかれました。わりばしがおっぽれるくらい力を出してまぜました。またやりたいです。よろしくおねがいします。

宝探しをしよう　　4年　加藤　紀久子

楽しかったな。宝さがし
今日は、たのしみにしていた、宝さがしでした。じしゃくだったので、さいしょは、ぜんぜんわからなかったけど、お姉さんにおしえてもらっていたら、だんだんわかってきて、自分一人でも、できるようになりました。さいごの方だったけど、ゆっくりなやみながらいきました。そしたら、じしゃくのやり方もわかってきて、さいごのあんごうまできて、あんごうもわからなくて、お姉さんもいっしょになやんでくれた時、うれしかったです。らいねんも、やってほしいとおもいます。ほんとうに、いろんなくふうがしてあって、おもしろかったです。
ありがとうございました。

紙しばい　　2年　北原　あゆみ

みんなで楽しい紙しばいを作ろうぜをやってみて一日あっという間でした。
はじめに外に出て、絵を書こうとしました。でもぜんぜん書くものが思いつきませんでした。へやへ帰って、うさぎさんを書くと、とってもうまく書けました。
作っていくうちに、できていったのでとてもうれしかったです。
来年も大学でやってほしいです。
一人だったけど楽しかったです。
ひらいてくれて　ありがとうございました。

楽しいイラストこうざ　　3年　山本　百合子

今日は楽しくできました。
またらい年も、ＹＯＵ遊サタデー、にいきたいと思いました。こんどは、たからさがしにしようかと思いました。きょうはありがとうございました。

君のオリジナルキーホルダーを作ろう

3年　菅沼　由貴

今日、ＹＯＵ遊サタデーに行ってとても楽しかったです。
君のオリジナルキーホルダーを作ろうで、とてもかわいいキーホルダーが4つもできました。ハムスターがチョコを食べてるのと、ハムスターのお母さんと子どものと、うさぎちゃんのと、ママレードボーイのみきちゃんのです。
キャプテンや、スタッフのお兄さんやお姉さんありがとう。
次のＹＯＵ遊サタデーも行きたいです。
世界に一つしかない自分だけのキーホルダーが四つも持っているなんて、ちょ－幸せです。
かばんにつけていって、じまんしちゃおーかな。
本当にありがとう。

とってもとっても楽しくてよかったです。

ペーパーグライダー　　5年　和田　幸也

開会式の後キャプテンやスタッフの人たちとペーパーグライダーを作る教室に行きました。始めに自己紹介をしました。その後ペーパーグライダー作りに必要なものを用意しました。スタッフの人たちが2枚の画用紙を配ってくれました。それには違う種類のペーパーグライダーの設計図がのっていました。ぼくは、どっちがいいか迷ったけど５１６というペーパーグライダーを最初に作ることにしました。１～８までの番号の部分を切り取りました。それを1番の右に2番左に3番右に4番というふうにのりづけすると、タウンページにはさんでおきま

した。その間に羽を切りました。切り終わったらどう体を取り出してボンドで羽をつけました。かわいたら飛ばしに行きました。なかなか飛ばないので羽の角度をかえたら、ブーメランみたいにもどってきました。このあとの飛ばし大会は１位～３位に入れなくて残念でした。キャプテンやスタッフのみなさんどうもありがとうございました。

古田　つつみ

紙しばいを作った　　３年　竹内　綾

私はどういうお話を書けばいいのかわかりませんでした。でも、キャプテンが人魚ひめとか・・と言ったから、人魚ひめにしました。せきやお姉さんが「やさしい。このお話やさしいね」と言ったから、私はうれしくなってしまいました。私はせきやお姉さんが大スキです。

私はこんどポテトサラダをお願いします。

スライムを作ろうにさん加して　３年　蟻川　勇貫

ぼくは、さいしょスライムを作るのは時間がかかって、むずかしいと思っていました。スライムを見た事はあったけれど、作ったことはなかったのでＹＯＵ遊サタデーにさん加しました。

スライムを作り始めて薬品を入れてまぜるときにすごい力をいれてまぜなくてならなかったので、そこがむずかしかったです。

でも思っていたよりかんたんでした。

キャップテンやスタッフのお兄さんやお姉さんがとてもしんせつにつくり方をおしえてくれました。ありがとうございました。

ぼくはこん虫がすきなので、もし大学に虫のことをよくしっているお兄さんがいたら、（こん虫を調べてみよう）こうざをひらいてもらえるとうれしいです。ぼくはしょう来こん虫はかせになりたいと思ってします。

２年　ふじおか　るね

ＹＯＵ遊サタデーを想う

林向達（大学院１年）

［はじめに］

雨知らずなのは、晴れ男や晴れ女が多いせいでしょうか。ＹＯＵ遊サタデーは、天気に関してはこれまで連勝中です。天気にも人にも恵まれて、私達の教育実践活動は今期も元気に楽しく行なわれました。そして結果も大成功です。

教員養成学部としての信州大学教育学部に生まれたＹＯＵ遊サタデーは、独特な活動として登場しました。運営のほとんどを学生が担い、地域社会を大胆に巻き込んだ教育ボランティア的活動であり、別の角度から見れば、学生達自身の実践的指導力形成の応用教育実習の場として全国的に見ても珍しい活動なのです。

私は第１期に引き続き、第２期にも参加させてもらいました。本来ならば、ＹＯＵ遊サタデーをも卒業しなければならないところですが、教育実践の場を眺めていたい想いと、自分自身の追究を深めるためにも続けて参加した次第です。第１期、私達がＹＯＵ遊サタデーの創造に向けた努力は、この第２期においても、いささかの陰りを伴うことなく継承されています。本稿はＹＯＵ遊サタデーへのオマージュ的な想いを込めて、活動を共にした多くの仲間に捧げるものです。

［一瞬］

継続への扉が開く。珍しさも手伝って、実行できただけでも成功だと称賛を集めた第１期に比べて、第２期は活動の真価を問われるものとなりました。当然のごとく第２期が昨年に比べどのように違うのかという点に外部の眼は注がれることとなったのです。

結果的に第２期の活動は、さらに多様な発展を試みるという形で独自性を出していきました。ＹＯＵ遊サタデーの基本を押さえつつ、外部に積極的に出かけた「出張ＹＯＵ遊サタデー」、松本キャンパスでの開催、学校５日制フォーラムの開催といった目に見える部分の発展はわかりやすいでしょう。しかし一方で、目に見えない発展の努力こそ見過ごされるべきではない大切な変化だといえます。

たとえば遊学プランという講座計画書は、より自由な発想を表現するために第２期からスタートした形です。第１期は教育実習で作成する指導案を模倣したものでした。さらに、研究冊子にまとめるための情報が当日中に記録できる用紙を配布するなど、改善点がいくつも見受けられます。第１期ではこうした細かな配慮に手が回っていなかったのです。また、参加者の安全確保はスタート時から最重要課題でしたが、第２期では万が一の場合にも対処できるよう保険加入も実現しています。そして何よりも、参加学生の意識に大きな前進が見られることです。

ＹＯＵ遊サタデーは当日の華やかな実践が目立ちます。もちろんスタッフもこの一日が晴れ舞台ということになるわけです。しかし、最も大切な部分となると別のところだと思います。やはり準備段階や実践を考察しまとめる期間を挙げたいのです。一生懸命の準備があって初めて当日が生き生きとしてきます。このコントラストこそがＹＯＵ遊サタデーの筆致尽くし難いバランス感覚を支えている原理です。たとえば花火を思い描いてください。夜空に舞散る花火は確かに美しいわけですが、その花火は、花火職人による長く地道な仕込み作業の結晶が爆発しているからこそ美しいといえるのではないでしょうか。花火職人は、その後もさらに美しい花火を打ち上げられるように研究と仕込みを重ねていきます。ＹＯＵ遊サタデーも心情的にはこれに近いものがあると思うのです。

しかし、これは同時にＹＯＵ遊サタデーの限界でもあります。教育という営みは、連続した時間の中で、前もって準備することも追いつかぬまま展開されていく行為なのです。これに立ち向かうための何かが、ＹＯＵ遊サタデーで得られると安易に考えることはできません。むしろコントラストの原理で、日々の教育の問題がより鮮明に見えてしまう結果となるようです。ＹＯＵ遊サタデーが力量の形成に役立つかについての問いは、今後参加した学生達が機会あるときに自分で答えを出してもらえばいいと思います。ここでいえることは、ＹＯＵ遊サタデーのような教育実践を経験できる機会がそう多くはないこと、そして、学生のうちに問題に直面し悩むことも大切だということでしょう。

［矛盾］

場をつくることの難しさを痛感します。そして自分達でさえ得体の知れない活動を始めようとしていたときの不安感と緊張感は独特なものでした。

ＹＯＵ遊サタデーの運営方法は、確固としたモデルがあったわけではありません。事務的なものを除けば、すべては手探りの中から編み出したものばかりなのです。その編み出し方も、かなりスタッフの性格が反映されていました。実行委員の中に「実践肌」と「理論肌」の学生がバランスよく混在し、お互いの立場を理解しつつ議論が展開されたのです。ゆえにＹＯＵ遊サタデーの中に多様な要素が自然と入ることは容易に想像できます。そしてこれは様々な矛盾を抱え込む原因ともなるのです。

学校ではできないこと、つまり学校的でないものにしようと努力する一方で、実際の活動はきわめて学校的であったりします。前節の問題とも関わりますが、ＹＯＵ遊サタデーという教育実践の場が持つ限界をどれだけ理念的に克服できるかは、第１期でかなり悩み続けた問題でした。「力量を形成する」という目的意識的な教育実践の場の生成行為が、ＹＯＵ遊サタデーの「楽しさ」という面をいびつにしていくのではないかという不安。事実、第１期はいささかスタッフの精神面を堅くしてしまった感があります。しかし当日の実際的な子供達との戯れに浮かれているだけでは、逆に他の催し物との差別化ができず、ＹＯＵ遊サタデーという場自体の意義が霧消してしまうでしょう。

一方で、こうした問題が、ある意味克服できない、活動の基礎要素であるという考え方もあります。日常の教育も全く同じではないでしょうか。様々な方向からやってくる要請事項に全て応えることができない以上、何がしかのバランス感覚の上に立ってこなさなければなりません。ＹＯＵ遊サタデーはこの点をスタッフの連携で乗り越えてきました。仲間とのぶつかり合いをも経て、想いやりと信頼の大切さが明らかになったのです。そしていずれ現場に出たとき、その感覚をふと思い出すことができたなら、ＹＯＵ遊サタデーの意義はあったと考えていいかなと思います。

［実習］

ＹＯＵ遊サタデーの登場は、正課の教育実習に深い関わりを持ちます。この経緯の紐解きは繰り返しませんが、その後この新しい場が「応用教育実習」としての意義を見出されたことなど考え合わせれば、理解はしていただけると思います。

しかし教育実習に対する位置は一定ではありません。ここにも多様性は顔を出しています。たとえば、ＹＯＵ遊サタデー初期の準備努力には「アンチ教育実習」の考えが散見されます。つまり子供達との接し方において、単純に先生と生徒の関係は受容しなかったのです。さらに内容も学校ではできないことが一つのポイントとして明確に打ち出されていました。教育実習で感じた苦い経験を排除する考え方といえそうです。

ところが一方で、「実習を補完」するものとしてのＹＯＵ遊サタデーもあります。これは苦い経験の排除ではなく、むしろ各自が教育実習で抱えた課題を自分なりの努力によって消化していく方向で

す。教育実習には様々な制限条件が課せられるため、自分の思い通りの教育実践ができるとは限りません。特に「実習期間」という一種の特殊な環境の中では、実践していくのではなく、実践をこなすことで精一杯となり、豊かな発想も、満足いく課題の追究もままならないのです。そのような不満を解消する機会としてＹＯＵ遊サタデーは貴重な場を提供します。

教育実習の扱いは大学によって異なります。信州大学は３年次の夏に実施するスケジュールとなっていますが、他大学は複数学年に振り分けて実施しているところもあれば、最終学年に実施するところもあるのです。この扱い方の問題は各大学でたびたび論じられます。たとえば、ある大学は従来４年次に行なっていた教育実習を３年次へ移行させた際に報告冊子をまとめていますが、そこには移行に関する様々な検討が残されているのです。それによれば、移行の大きな理由として、従来までは教育実習を学部での勉強成果を発揮する集大成的な位置づけで捉えていたが、現実にはむしろ様々な問題・課題を得る場であることから、３年次に移行すべきであろうという考えを挙げています。つまり教育実習以後こそ問題・課題意識を持った重要な勉学期間と考えたというのです。

確かに信大においても教育実習前後で「教科教育法」講義への学生の関心度は、実習後の方が高いといえます。しかし現実はいささか皮肉な事態でもあります。学生は２年次段階でより多くの単位取得を得ようとするため、教育実習後に受講する「教科教育法」などの講義は極端に少ないのが現実なのです。かといって２年次に実習を移行するのが好ましいとも思えません。では振り分け型の教育実習ならば期待に応えられるのでしょうか。機会が複数化することは歓迎すべきことですが、１回の実習期間が残念ながら短くなってしまいます。それだと正課の教育実習としては、いささか物足りないのです。

私達の結論は、課外の実習空間を創造することだといえます。ＹＯＵ遊サタデーは、学生が３年次の教育実習を終えてしまうと以後、教職に就くまで子供達と触れ合う機会がカリキュラム上保証されていない現実に対する一つの回答でした。ところが結果的には、２年次生にも早々と教育実践を体験させる機会となり、また松本キャンパスで一年間学んでいる１年次生にも参加の波が及んだのです。いずれ１年次生が単独で松本キャンパスを舞台に教育実践の貴重なチャンスを実現してくれる予定となっています。正課教育実習を鏡に写したように登場したはずのＹＯＵ遊サタデーが、教育実習を補うものとして存在し、教育学部をうまく活性化していることは、自然なことなのかも知れません。

［追究］

活動のまとめをするのも、ＹＯＵ遊サタデーにとり重要なことです。今まで自分達が行なってきた活動とは一体何だったのか、繰り返しになろうとも振り返って深めていかなくてはなりません。

しかし、正直な告白をすれば、私達が考えを深めようと試みるほどに、追究が問題へ届かなくなっている現実があります。自分達の活動成果を何か他のものと突き合わせようとした途端、成果が力を失ってしまう感覚をも味わうのです。それは多分にＹＯＵ遊サタデーが多様であることから来ているのかも知れません。すでに書いたように、関わった学生には実践を好む者と理論を好む者が混在していました。各々が高校時代の経験やサークルの経験、大学の講義の影響を持ち込み、さらには周りの様々なものごとにも気にかけていたのです。ある一つのものと比べようとすることはできそうにありません。つまり、ＹＯＵ遊サタデーの活動を簡単にはまとめられない難しさがあるといえます。

追究には様々な次元があります。理論的に展開していくというものもあれば、場が活性化する実践を追い求めるという形のものもあるでしょう。ではどの次元が本来的なのかという問いも出てきそうですが、どの次元も切り捨てるべきではないと思います。すべての次元を満足させながら追究を進めることは簡単ではないかも知れません。しかし難しいことと、できないことは同一ではないのです。

多元的な動きにどう対応するか、この問題をＹＯＵ遊サタデーでは「人間力」という言葉で考えたいと思います。

ただ単に人間力という言葉のみでは、統括的な力能、メタ的な力を意味すると誤解されがちですが、「人間」と名の付く以上は「他者」との関係に注がれる力であって欲しいと願います。つまりどれだけ相手を「想える」かということが、人間力のバロメーターだと思うのです。実は、それがひいてはどれだけ自分を想えるかという問題でもあるのですが、とにかくこのような力が教育者には必要ではないでしょうか。名古屋大学の堀内守教官は、〈リニアモデル〉と〈フィールドモデル〉という考えを記しています。ものごとを直線的に進めてしまうのがリニアモデルであり、従来多かったタイプです。一方、フィールドモデルとは「非決定性」を内に持ちます。つまりスタートからゴール（というものがあればの話ですが）の間が直線的ではない、実に様々な経路があるのだというのです。そして、フィールドモデルをとることのできる人を〈コーディネイター・タイプ〉の人だと言います。教師にとってリニア的な考え方は必要なのですが、同時にコーディネイターとしての素質も持たなければならないのです。スタートとゴールの例えから、コーディネイター・タイプの典型例を思い出しました。「ドラえもん」です。劇画中、ドラえもんはこの非決定性という考え方を披露していたのを知っているでしょうか。ゴールを特定してしまうことの問題はさておいて、物語の中でドラえもんは確かにコーディネイター役でした。こう読み取れてしまうのは「ドラえもん」というマンガが、とても学校的なマンガであることも一因でしょう。これはこれで追究をしてみると面白い遊びになりそうです。現実の教師はドラえもんというわけにはいきませんが、そうした遊びの部分もちょっぴり必要であるということだと思います。

ところでコーディネイターの素質を持つためにはどうすればよいのでしょうか。まず一元的な態度ではダメです。分野に捕らわれない様々な知識を持つ必要があり、それらを場が広がるように活用する力が望まれます。そしてそこに多元的な人間力というものが重なるのでしょう。自分をどれだけ想えるかというのは、こうした様々な知識など吸収する自分を好きになるということですが、そこに安住する自分を嫌うことも含まれます。そうして初めて他人を想うことができるのです。

さて、ＹＯＵ遊サタデーは人間力を使うにはもってこいの「フィールド」だといえます。残念ながらどうやって人間力を向上させるのか、親切なマニュアルもテキストもありませんが、実地の活動の中でその必要性を気付くことはできると思います。そこから各自、自分なりの追究を頑張れば良いのです。ＹＯＵ遊サタデー自体は、そのような役目として今後どう続けていくことができるのか、少しずつでも構わないので追究していって欲しいと思います。

［おわりに］

私をＹＯＵ遊サタデーに関わらせたのは、第１期実行委員長の山口直行君でした。現在は教職に就き、中学校の教師として頑張っています。彼の明確なスタンスと意思表示は、活動の方向性を決定づけるものとして貴重なものでした。そしてＹＯＵ遊サタデーへの想いを寡黙に行動として表現していたのです。そのため相棒としての私の役目が、言葉の消費であったのは当然だったのかも知れません。今期においても、私の文章の稚拙さと活動の実相を、どうか取り違えないようにお願いします。

私達はどちらもＹＯＵ遊サタデーの限界について十分理解していたつもりです。しかしまた、限界は乗り越えるものではなく、うまく付き合うものだということも実践を通して感じていたと思います。もちろんできることなら克服してしまいたい。そうしたチャレンジを続けてもいいのでは、と思うと同時に、困難だと思ったならばうまく回避していくのも悪い選択では決してないと考えていたに違いありません。私の実感では、第２期もこの辺りは似ていると思います。

彼をはじめとして、多くの同輩が教師になりました。時々の連絡の中で、現場の楽しさや充実感を聞くと同時に、様々な苦悩を抱えている様子も知らされます。私には、ただ話を聞いて共に考え合うほか術がありません。一緒の場所で試行錯誤する時期は、もう終わりを告げていたのです。そうした時期が、ＹＯＵ遊サタデーという形として残ったことに幸運を感じます。

ストレートに書けば、このＹＯＵ遊サタデーという繋がりをどんなに後になっても構わないので思い出して欲しいと思います。そしてほんの少しの茶目っ気を出して、誰かに一声かけて欲しいなと思うのです。そうして「場」ができあがります。人間力は、ほんの少しの茶目っ気が始まりです。朝の寒い中を布団から出るのが辛いとき、意外とほんのちょっとの心の切り替えでスッと出られるときがありますが、それと同じなのです。私自身はそんな一声に応えられるような誰かで居たいと思っていますし、時に誰かに声をかけてみたいと思っています。

第２期は、後輩達との縁に恵まれた期でした。在学当時よりも卒業してからの交流の方が生き生きとしていたというのも悔しい話ですが、しばしば手に余る先輩を快く受け入れてくれたことに感謝したいと思います。後輩達がのびのびとしたＹＯＵ遊サタデーを展開できたのも、第２期実行委員長の渡辺一博さんの場づくりのおかげでしょう。私もその中に都合よく混ざらせていただきました。

なにぶんスタッフも百名を越える人数になりましたから、後輩全員と話はできません。その分、知らん顔しないように接しようと心掛けたつもりです。なかなか難しかったですが。そして幾人かの後輩とは仲良くなれました。あとはそこから輪が広がることを祈るしかありません。第３期を担う後輩達には、また頑張って欲しいと思います。

ＹＯＵ遊サタデーを支え続けている土井進教官には第１期同様、第２期でもお世話になりました。「人間力」という言葉は、そもそも土井先生が反省会時に口にした言葉から始まっています。土井先生自身、人間力に長けた方であることが、ＹＯＵ遊サタデーの発展の基盤となっていることは言うまでもありません。これからもご指導・助言をよろしくお願いします。

さて、これでようやく私自身のＹＯＵ遊サタデーに決着をつけられそうです。今後はもっと周縁の部分からＹＯＵ遊サタデーに関わろうと思います。そして、いつまでも子供達の目の高さを忘れずにいたいものです。

第３期以降、そしてまた別の場所で生まれる活動が、触れ合いの場となることを新たな願いとして。

以上

4．資料
（第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の記録）

信大ＹＯＵ遊サタデー関連のテレビ放映

私たちの一生懸命な取り組みがテレビ番組で扱われる機会が増えてきた。これはＹＯＵ遊サタデーが地域の方々に関心を持たれ、期待されている証拠であろう。ブラウン管にＹＯＵ遊サタデーに参加している子どもたちのいきいきとした姿が映し出されることは私たちにとって大変励みになった。

５月２７日（土）　１７：４５～　ＡＢＮ　『ＡＢＮステーション』
（第４回ＹＯＵ遊サタデー　西長野キャンパス）

８月第１週　チャンネルＴＯＫＹＵ
『いきいきタウンウォッチング　この指とまれ！』
‘信州大学教育学部ＹＯＵ遊サタデー’
（ＹＯＵ遊サタデーの活動内容を紹介）

９月　９日（土）　１８：４５～　ＮＨＫ　『イブニングネットワーク信州』
（第５回Ｙ０Ｕ遊サタデー　西長野キャンパス）

１０月２８日（土）　１８：４５～　ＮＨＫ　『イブニングネットワーク信州』
（第７回ＹＯＵ遊サタデー　松本旭町キャンパス）

信大ＹＯＵ遊サタデー関連の新聞報道

今年のＹＯＵ遊サタデーに関する新聞報道を集めてみた。今年は２年目という事で、去年と違ったかたちの報道がなされている。地域に根付きつつあるこのＹＯＵ遊サタデーに対する期待といったものがうかがえる。また、今年は一般向けの講座の開講や、松本での開催など、新たな試みが多く取り上げられているようである。

１．実践的指導力　教育新聞（7.4.10）
２．信大ＹＯＵ遊サタデー　今年も開催　日本経済新聞（7.4.19）
３．学生と子供達でつくる体験学習　週刊長野（7.4.22）
４．信大生と過ごす土曜休日　ＹＯＵ遊サタデー今年も来月第１回　信濃毎日新聞（7.4.23）
５．今年もスタート子供と信大生週末の触れ合い　信濃毎日新聞（7.5.28）
６．子供のための「遊び講座」好評　信州大教育学部　読売新聞（7.5.28）
７．工作などに子供ら生き生き　教育学部の学生が手作り講座　中日新聞（7.5.28）
８．土曜日の有効活用　信大ＹＯＵ遊サタデー　秋の日程決まる　教育新聞（7.7.17）
９．９月は父母対象の講座も　同様の場の参考に　実践をもとに具体策指南　信濃毎日新聞（7.7.21）
１０．お父さんも休日は子供のリーダーに　長野で信大生有志ら講座　信濃毎日新聞（7.9.10）
１１．学校５日制で子どもたちは…　地域の父母はどう受け入れ　来月長野でフォーラム　信濃毎日新聞（7.9.19）
１２．信大の「先生の卵」が講師　ＹＯＵ遊サタデー２８日に　市民タイムス（7.10.2）
１３．３００人以上参加　楽しく２２講座　信濃毎日新聞（7.10.17）
１４．土曜のふれあい出張　信濃毎日新聞（7.10.29）
１５．遊びが授業面白いね　松本で初めて「学生先生」も張り切る　市民タイムス（7.10.29）
１６．教育学部学生６０人が出張　市民１２０人と楽しく　まつもとタウン情報（7.11.7）
１７．小中学生向けに多彩な講座　「教員の卵」たち力量高める場に　教育実習で痛感－勉強不足と責任の重さ　子供たちと接したい、自分の工夫試す時間、将来への意欲高まる　信濃毎日新聞（7.12.4）

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

第五回 信大YOU遊サタデー

スタッフマニュアル

今年度の「信大YOU遊サタデー」のスタッフマニュアルからの抜粋です。

責任者出て来い！

おれ、No.9
「アイスクリームを
たべよう」
に行くだブー

「信大YOU遊サタデー」キャプテン・スタッフマニュアル第5号（9月版）

編集長：渡辺一博（YOU遊サタデー実行委員長）
発行所：第二期信大YOU遊サタデー実行委員会
後　援：信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター
発行日：1995年　9月4日

©1995 YOU遊サタデー

第六回ＹＯＵ遊サタデー

＜今後のスケジュール＞

１０／１３（金）　最終準備・最終打ち合わせ

○ 実 行 委 員 会（１２：４０～１：００ｐ．ｍ．）

○ 教 材 作 り 仕 上 げ ・ 材 料 調 達 最 終 確 認

＊翌日は教室準備だけでＯ．Ｋ．というくらいに準備を徹底させておいてください。アンケート用紙（必要な人は）や、マグネット等細かいものまで確認しておいてください。

１０／１４（土）　当日、本番で～す！

１３日（金）

○最終準備

４：３０ｐ．ｍ．～　◆本部テント張り

◆会場閉会式場づくり

・図書館２階に、会場図に従って椅子を並べてください。

◆各教室準備

・各講座が使用する教室の準備をします。各キャプテンが中心となって作業を完了させてください。

◆その他

・タイトル貼り（各教室）

・トイレ表示・案内図・矢印等

・看板設置

※終了した人は実践センター１０４で待機

５：５０ｐ．ｍ．～　◆最終打ち合わせ（Ｊ１０４）

＊マニュアル、遊学プラン等忘れずに。時間は多少ずれることもあります。

６：００ｐ．ｍ．～　◆本部役員最終打ち合わせ（Ｊ１０４）

１４日（土）

○ＹＯＵ遊サタデー当日

７：３０～	本部役員集合
８：００～	キャプテン・スタッフ集合 直前打ち合わせ（実践センター１階）
８：１５～	会場、教室準備 対外スタッフ持ち場へ移動、受付開始
９：００～	開会式（図書館２階）
９：２０～	式終了後、各講座の教室に移動（キャプテンは誘導）
９：３０～	講座開始！
１１：３０～	講座終了。終了次第閉会式場へ参加者を誘導
１１：４０～	閉会式・成果発表会（図書館２階）
１２：００～	閉会式終了、見送り ※生協食堂を利用する参加者がいれば、一緒に食事を取って最後まで見送る。
１２：３０～	午後の部受付開始
１３：００～	午後の部の講座開始
１５：００～	午後の部の講座終了。終了次第閉会式場へ誘導
１５：１０～	午後の閉会式・成果発表会（図書館２階）
１５：３０～	閉会式終了、見送り、片づけ
１６：３０～	打ち上げ（生協食堂）

渡辺　一博

《実行委員長あいさつ》

早いもので昨年の冬から温め続けてきた第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の計画のすべてが終わろうとしています。ちょっと寂しい気もしますが、万全の準備態勢を整え、今期最高の「ＹＯＵ遊サタデー」を参加者と楽しみましょう。特に４年生や院生は悔いのないよう持てる力のすべてを費やして思い出に残る一時を過ごしていただきたいと思います。「ＹＯＵ遊サタデー」で得たことは必ずや現場に立った時に役に立つものと確信しています。３年生にとっては教育実習の応用として大きな意味があるかもしれませんが、学校のシステムという枠のない「ＹＯＵ遊サタデー」のよさを子供達と満喫していただきたいと思います。２年生の皆さんは来年の教育実習に向けて子供を理解し、実習への意欲と情熱を高める機会となればと思っています。子供たちや先輩方の姿から是非多くを学んでください。さて、一年生の皆さん、私たち学部生は皆さんのスタッフ参加を心から歓迎しています。来年学部にきたら、子供たちと教育を愛する同志として共に学びましょう。

来年度の「信大ＹＯＵ遊サタデー」の継続については今の段階では何とも言えませんが在学生の皆さんの意欲次第です。是非来年に繋げるつもりで頑張りましょう。

大学本部での初めてのＹＯＵ遊サタデー

附属教育実践研究指導センター教官　土井　進

一学生の立場で、学校週５日制時代を迎えた地域の子どもたちに「遊び」や「学び」を通して貢献することを通して、自らの実践的指導力を錬磨するという「信大ＹＯＵ遊サタデー」の趣旨に賛同し、自らキャプテン・スタッフの労を買って出て下さった６０名（内１年生１０名）の学生の皆さんの熱意によって松本キャンパスで１６講座を開講し、１００名を超える市民の皆様の参加を得て、いよいよ実施する運びとなりましたことに心から感謝申し上げます。

この陰には、会場責任者として休日の大学開放にご尽力下さっている共通教育センターの吉澤文雄教授、上條厚助教授、そして、職員の皆様の温かいご理解とご協力があるのであります。厚く御礼申し上げます。

また、小川秋実学長先生にはご多用のなかご出席くださいますことは、学生諸君にとって何よりの励ましであります。衷心より御礼申し上げます。

４年一貫教育のもとに１年生から専門科目を履修するようになった本年度、ここ松本で上級生が１年生とともに教育実践に取り組むことの意義は幾重にも計り知れないものがあると思います。お互いに自己のベストを尽くして、楽しい、有意義な一日となるように頑張りましょう。

第7回ＹＯＵ遊サタデー in 松本

＜今後のスケジュール＞

１０／２４（火）

○実行委員会（12：40～1：00p. m.）
　－スタッフ・マニュアル配布
　－本部スタッフの打ち合わせ

＊当日の本部スタッフの仕事内容について説明があります

１０／２５（水）

○実行委員会（12：40～1：00p. m.）
　－キャプテン／アシスタント打ち合わせ

＊キャプテン／アシスタント間の調整をします。時間が足りないときは、みんなで相談して別の時間を設定してください。

１０／２６（木）

＊教材作りの徹底をお願いします

１０／２７（金）

－前日最終準備（４：３０ｐ．ｍ．～ ）

－最終打ち合わせ

○教材作り仕上げ・材料調達最終確認

＊翌日は教室準備だけでＯ．Ｋ．というくらいに準備を徹底させておいてください。アンケート用紙（必要な人は）や、マグネット等細かいものまで確認しておいてください。

忘れ物をしたらセンターに取りに来るなんてことはできません。念には念を！

〔チェックリスト〕

・教材（　　）

・遊学プラン

・名札

・修了証

・領収証

・アンケート（必要な人）

４：３０ｐ．ｍ．～ ◆最終打ち合わせ（Ｊ１０４）

＊マニュアル、遊学プラン等忘れずに。時間は多少ずれることもあります。

（未定） ◆本部役員最終打ち合わせ(J104)

１０／２８（土）

○ＹＯＵ遊サタデー当日

７：００	本部役員集合
８：００	キャプテン・スタッフ集合、出発準備
８：３０	松本へ出発
１０：００～	松本キャンパス到着、会場準備
	◆本部テント張り
	◆開閉会式場づくり
	◆その他
	・タイトル貼り（各教室）
	・トイレ表示・案内図・矢印等
	・看板設置
	※終了した人は本部テント前で待機
１０：３０～	◆各教室準備
	・各講座が使用する教室の準備をします。各キャプテンが中心となって作業を完了させてください。
１１：３０	直前打ち合わせ（本部テント前）
１１：４０～	昼食（空いている時間を利用して各自取ってください）
	※生協食堂を利用する参加者がいれば、食堂まで案内し利用方法を説明する。できるだけ生協をご利用下さい。
１２：１０～	対外スタッフ持ち場へ移動、受付開始
１３：００～	開会式（２Ｆ６１番教室）
１３：２０～	式終了後、各講座の教室に移動（キャプテンは誘導）
１３：３０～	講座開始！
１５：３０～	講座終了。終了次第閉会式場へ参加者を誘導
１５：４０～	閉会式・成果発表会（２Ｆ６１番教室）
１６：００～	閉会式終了、見送り、片付け
１６：５０～	打ち上げ（生協食堂）
１８：４０	打ち上げ終了、片付け
１９：００	長野へ出発
２０：３０～	長野到着、荷物の積み降ろしと整理

感謝状

様

貴方は

講座において

貴方のすばらしい活躍をされました。

今後ともいっそうのご活躍をお祈りします。

平成　年　月　日

信大YOUサタデー

キャプテン

ゆうゆうカード（入場券）

YOU遊サタデーへのお申し込みありがとうございます。
あなたが参加するのは次の講座です。
当日は忘れ物をしないように気をつけておこし下さい。
それでは、あなたと会場で会えるのを待っています。

講座名

キャプテン（　　）

持ち物

ゆうゆうカード（入場券）……このカードです
１００円（傷害保険料、教材費）

開催日時　　１０月２８日（第４土曜日）
受付　午後１２：３０～１２：５０
終了　午後１６：００（予定）（テントのあるところ）

集合場所　　信州大学松本旭町キャンパス第２体育館付近
詳しくは、同封の案内図をご覧下さい。当日は黄色の腕章をつけた学生が誘導・案内します。

※欠席の場合は、必ず前日までにご連絡ください。

＜連絡先＞
〒３８０　長野市西長野６－ロ
信州大学教育学部附属教育実践指導センター
信大ＹＯＵサタデー係
ＴＥＬ・ＦＡＸ　０２６２－３７－６１２７（留守電あり）

信大ＹＯＵ遊サタデー HomePage

信州大学教育学部が、平成６年度に全国に先駆けてスタートさせた
新しい空間をご紹介いたします。

We have a home page in ENGLISH.
(Under construction)　未完成です

[ＹＯＵ遊サタデーってなに？][信州大学ってどこ？]

新着情報

ＹＯＵ遊サタデーの手引き（電子版）

ＹＯＵ遊サタデーのバイブル「ＹＯＵ遊サタデーの手引き」がWWWに登場。
ここにＹＯＵ遊サタデーの熱い想いが記録されている！

第１期ＹＯＵ遊サタデー

『平成６年度「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実践
ー体験的学習の指導による実践的力量の形成ー』を電子版として再編集（未完）

第２期ＹＯＵ遊サタデー

ＹＯＵ遊サタデーもおかげさまで２年目。ささやかな交流がいきいきとした笑顔に包まれて、今年度も頑張っています。

第３期ＹＯＵ遊サタデー

果たして、平成８年度・第３期ＹＯＵ遊サタデーは？最新情報を公開中！

学生スタッフのコーナー

ＹＯＵ遊サタデーをつくってきた学生の顔をご紹介します。

平成７年６月１５日

土井　退　助教授
渡辺　一博　殿

南部小学校ＰＴＡ

南部小学校ＰＴＡ研究集会の講師について（依頼）

麦秋の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。
平素、南部小学校ＰＴＡ活動につきましては、格別の御協力を賜り厚くお礼申し上げます。
この度、南部小学校ＰＴＡ研究集会を別紙要領により開催することになりました。
ついては、この研究集会をより有意義なものにするため、あなたの講演を下記によりお願いしたいと思います。御多用中恐縮ですが、よろしくお願いします。

記

１　日　　時　　平成７年７月１日（土）　午後　１時３０分より
　　４時００分
　　★午後１時２０分位までに校長室へお願いいたします。

２　場　　所　　長野市　南部小学校
　　長野市大字鶴賀５５０－１　℡ 0262-27-7208

３　演　　題　　「ぼくらはみな　世界人　！」

４　そ の 他　　当日は教養部が御案内申し上げます。

分科会　２

出張「ＹＯＵ遊サタデー」依頼書

「ＹＯＵ遊サタデー」の取り組みに対しては、地域社会も大きな関心を寄せている。その結果、今年度は、地域の学校からの依頼を受ける形で、大学以外の場所で講座を開講する機会を与えられた。これを「出張ＹＯＵ遊サタデー」と呼んでいる。
今年度の「出張ＹＯＵ遊サタデー」では、上田市立第六中学校において、「ロウソク作り」「額縁作品」「はりがね工房」の三講座を、長野市立南部小学校において、「ぼくらはみな　世界人！」の一講座を開講した。

荒井　ゆみ
皆川　麻緒
佐野　徒子
坂井　雅子様

平成７年９月１日
上田市立第六中学校長　小林
上田市立第六中学校
生徒会

平成７年度　飛翔祭　自主追究

講師依頼書

朝夕の涼しさに秋の訪れを感じる今日この頃です。皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、上田第六中学校では９月２９日（金）３０日（土）の二日間にわたり第８回飛翔祭を行ないます。本年度の飛翔祭では、第一日目に「自主追究の時間」を計画しました。これは、生徒会の執行部が、文化祭の名のとおり、地域や身近な文化・先人の技術等を学び、興味をもつ機会としたいと、本年度の中心的企画に位置づけたものです。

そこで、貴殿には、「自主追究」の（ロウソク作り　オリジナルキャンドル）コーナーの講師になっていただきたくお願い申し上げます。大変ご多忙の所申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。

実施にあたり必要な用具・材料については、後日係の生徒が聞きに伺います。

自主追究の時間は、９月２９日(金)１０：０５～１１：３５と予定しています。１０：００頃までに、校長室にお越しください。

時節柄何卒ご自愛下さいますようお願い申し上げます。

あとがき

土井　進（実践センター専任教官）

1．教育実践研究への一歩

第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の取り組みを実践記録としてまとめ、昨年に引き続いて刊行することができた。これはひとえに、大学本部ならびに教育学部の温かいご理解とご協力の賜物と、心から感謝申し上げる。学生が教育実践記録をまとめるのは、教育実習に次いでこれが２回目であり、学生時代の記録としてはこれが最後のものとなる。

学生は講座を企画し、実践し、それを記録としてまとめる労作業を経ることによって、はじめて自らの実践を真に自己のものとすることができる。キャプテンがスタッフとともに「遊学プラン」を練り、教材を媒介として、子どもたちと係わったことによって、何がわかったのか、次の課題としてどのようなことが見えてきたのか等々について自己省察を行うことは、次の新たな教育実践を切り開く力量形成となるものと考える。この観点から執筆に当たっては特別な注文は付けず、学生時代の率直な思いを書き残し、教育実践研究への一歩としてもらおうと考えた。教育実践記録の執筆のあり方についてご批正を賜れば幸いである。

2．志から生まれる学生のやる気

１０月の第２土曜日は、近くの城山公園で催された大がかりなイベントとＹＯＵ遊サタデーが重なったため、善光寺から丹波島橋まで５キロにわたって交通が渋滞した。教育学部正門から入った車には、図書館前で参加者を降ろし、東門から出るように誘導した。しかし、ここで再び渋滞の列に入れてもらわなければならなかった。駐車・誘導係の学生たちは、「割り込ませるな！」「入れるな！」という罵声を浴びながらも、必死に頭を下げ１台また１台と入れていただいた。また、教育関係者の中には学生に向かって、実際の学校現場はＹＯＵ遊サタデーのような楽しいところではない、と冷や水を浴びせかける人もあった。しかし、志を抱いた学生たちは負けなかった。今、青年の情熱を傾けてできないことが、いつの日にできるのだ。いかに困難な教育問題も、人間が解決していく以外にないではないか。やる気に燃えた学生たちは昼食も忘れて歯をくいしばって頑張った。

この学生たちは間もなく長野県をはじめとする全国各地の学校で教壇に立つ。またある者は信州大学、筑波大学、上越教育大学等の大学院で教育研究を続ける。また、アメリカやイギリスに留学する者もある。さらに教員採用試験に倦土重来を期する学生もある。それぞれの道でのご健闘を心からお祈りする。

3．ご協力いただいた方々

第二期の「信大ＹＯＵ遊サタデー」も実に多くの方々のお力添えのお陰をもって、無事、無事故で終了する事ができた。とりわけ信州大学学長小川秋實先生は、第７回にご参加下さり、全講座を一つひとつ廻って学生ならびに参加者を勇気づけて下さった。教育学部長小林輝行先生は、学生たちが昼休みに実行委員会を開いているところに駆けつけて激励して下さった。評議員の滝澤貞夫先生は、（財）長野県ﾃｸﾉﾊｲﾗﾝﾄﾞ開発機構の運営委員として初めての松本開催にご尽力下さった。また、教育学部松本分室の吉澤文雄先生、上條厚先生は松本開催の責任者として全面的にご指導下さった。教育学部の先生方は学生の「遊学プラン」をご指導下さり、大学本部庶務部企画室ならびに教育学部事務部の皆様には会場や設備面で多大なご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げるものである。

平成８年２月２７日

《編集後記》

お礼の言葉

編集委員長　渡辺一博（英語専攻　4年）

今年度は昨年よりもかなり早く実践記録がまとまりました。これも早くから編集作業を始めてくれた2、3年生の編集委員の皆さんのおかげです。卒業を前に何かと忙しい4年生諸君にも多大な尽力をいただきました。本冊子を編集するに当たり、ご協力いただいた学生諸君一人一人に感謝申し上げます。特に、連日夜中まで残って作業していただいた皆さんには感謝の言葉もありません。最後に、私たちにつきっきりで毎日のように編集作業を見守り、助けてくださったセンターの土井教官に厚く御礼申し上げます。

【編集委員】

安喰和之	大谷美穂	小林理英	千葉綾子	堀内文恵
新井清規	奥原克水	斉藤かおる	土井　進（教官）○	丸山和利
泉　貴子	荻原まゆ美	嶋田裕子	○野本　聡	美斉津礼奈
市村忠寛	笠原あや	角田正和	野本　毅	宮沢　元
今井健文	加藤恭子	高橋貴子	長谷川直紀	柳沢久美
岩村　彩	○加納文香	田中清一	林　康成	◎渡辺一博　他

平成7年度
第二期「信大ＹＯＵ遊サタデー」の実践
－体験的学習の指導による実践的力量の形成－

平成8年3月31日　発行
編集者　第二期信大ＹＯＵ遊サタデー実行委員会
発行者　信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

〒380　長野市西長野6－ロ
TEL/FAX　026-237-6127
TEL/FAX　026-237-9296

HomePage:http://cert.shinshu-u.ac.jp/
E-Mail:doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp
higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp